
さいたま市

大木戸遺跡Ⅱ

大宮西部特定土地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告

(第1分冊)

2013

独立行政法人 都市再生機構
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 遺跡遠景



2 遺跡近景



1 調査区内出土旧石器時代遺物



2 第9号住居跡出土遺物



1 第1号方形周溝墓出土遺物



2 第3号方形周溝墓出土遺物

序

埼玉県は首都東京に隣接し、高次の都市機能と交通利便性を備える一方、豊かな自然環境にも恵まれています。現在、さいたま市西区では独立行政法人都市再生機構により、JR川越線の北側の地域を対象にした大宮西部特定土地地区画整理事業が進められています。平成21年3月14日には、JR川越線「西大宮」駅の開業と合わせて「Liv-Field 西大宮」として街びらきいたしました。都市と自然が調和した安心して暮らせる街づくりの推進とともに、活気に満ちた公共・商業・施設の進出が期待されています。

大宮西部特定土地地区画整理事業地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在し、今回発掘調査を実施した大木戸遺跡もその中の一つです。発掘調査は、同地区画整理事業に伴う事前調査であり、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、縄文時代後期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡のほか、袋状土坑をはじめとする多数の土坑が見つかりました。住居跡や土坑などからは異形注口土器や土偶を含む、多量の土器や石器が出土し、先人たちの生活の場であったことがわかりました。古墳時代の初めには、台地の一番見晴らしの良い場所に4基の方形周溝墓が一行に並んで造られました。死者を安置した主体部には瑠璃色のガラス小玉や鉄製の腕輪など貴重な品が納められていることから、墓はこの地を治めた有力者を葬ったものであることが考えられます。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部、さいたま市教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成25年8月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 中 村 英 樹

例言

1. 本書はさいたま市に所在する大木戸遺跡第13地点(第7、8、9次)の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
大木戸遺跡第13地点(第7次)
さいたま市西区大字指扇3883-4他
平成20年4月18日付け教生文第2-3号
大木戸遺跡第13地点(第8次)
さいたま市西区大字指扇3883-4他
平成21年5月8日付け教生文第2-10号
大木戸遺跡第13地点(第9次)
さいたま市西区大字指扇3885他
平成21年10月27日付け教生文第2-47号
3. 発掘調査は、大宮西部特定土地画整理事業に先立って埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。大木戸遺跡第13地点調査は、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。
発掘調査事業(平成20~21年度 第7~9次)
「大宮西部特定土地画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査」
整理報告書作成事業(平成23~25年度)
「大宮西部特定土地画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査(整理)」
5. 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。
大木戸遺跡第7次(第13地点)の発掘調査は、平成20年4月8日から平成20年6月30日、平成20年10月1日から平成20年11月30日、平成21年1月1日から平成21年3月31日まで実施し、新屋雅明、篠田泰輔、竹田裕子が担当した。
大木戸遺跡第8次(第13地点)の発掘調査は、平成21年4月1日から平成21年9月30日まで実施し、新屋、大屋道則が担当した。
大木戸遺跡第9次(第13地点)の発掘調査は、平成21年10月1日から平成22年1月29日まで実施し、新屋、大屋が担当した。
整理報告書作成事業は、平成23年度から25年度まで実施し、平成23年度は4月8日から平成24年3月31日まで新屋、小野美代子が、平成24年度は4月9日から平成25年3月29日まで大屋が、平成25年度は4月1日から6月30日まで大屋がそれぞれ担当した。
平成25年8月26日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第405集として印刷・刊行した。
6. 大木戸遺跡の発掘調査における基準点測量は、平成20年度は東京航業研究所、平成21年度はビッソ測量設計に委託した。
空中写真撮影は、株式会社GIS関東に委託した。
巻頭図版(口絵)の遺物写真については、小川忠博氏に委託した。
出土遺物の理化学的分析については、ガラス小玉を株式会社パレオ・ラボおよび独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所に委託し、翡翠については、当財団が実施した。
7. 発掘調査における写真撮影は調査担当者が行い、出土遺物の写真撮影は整理担当者が行った。
8. 出土品の整理・図版作成は整理担当者が行った。
9. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、IV-3-(6)の早期土器を金子直行、前期土器と中期土器の一部を細田勝、中期土器の一部を上野真由美、後期土器の一部を古谷渉、上野、V-1を奈良文化財研究所が行い、その他を主に新屋、小野、大屋が

行った。

10. 本書の編集は新屋、小野、大屋が行った。
11. 本書にかかる諸資料は平成25年9月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
12. 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の機関、

方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします(敬称略)。

さいたま市教育委員会 川越市教育委員会
岡田賢治 田代治 田村朋子 吉岡卓真

凡例

1. 大木戸遺跡第2～13次調査におけるX・Yの座標は、世界測地系、国土標準平面直角座標第IX系(原点北緯36° 00' 00"、東経139° 50' 00")に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は、全て座標北を指す。

D-8グリッド北西杭の座標は、X=-8630.000m、Y=-22930.000m、北緯35° 55' 18.9770"、東経139° 34' 45.1659"である。

2. グリッドの設定は、大宮西部特定土地区画整理事業地内全体を国土標準平面直角座標に基づく100m四方の大グリッド網で覆い、各大グリッドの中に10m×10mの基本(小)グリッドを設定した。
3. グリッドの表記は、100m方眼の大グリッド名を冒頭に記載し、ハイフンで結んで10m四方の基本(小)グリッド名を示した。各々の名称は北西隅を基点として、北から南方向にアルファベット(A・B・C…)、西から東方向に数字(1・2・3…)を付した。例えばL5-B5グリッドのように呼称した。隣接するグリッドを表記する必要がある場合、E5-B5～6あるいはC6-A～B5～6のように表した。
4. 本書の本文、挿図、表、写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。
S J…住居跡 SD…溝跡 SK…土塋
SB…掘立柱建物跡 SR…方形周溝墓
SC…集石土塋 FP…竈穴 P…ピット
5. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりで

ある。但し、一部例外もあり、それについては図中に縮尺とスケールを示した。

全体図	1 : 600	遺構図	1 : 60	
土器破片	1 : 2	1 : 3	土器実測図	1 : 4
土製品	1 : 2	1 : 3	陶磁器	1 : 4
大型石器	1 : 3	小型石器	2 : 3	
旧石器	4 : 5	ガラス小玉	1 : 1	
金属製品	1 : 2			

6. 住居跡の規模の説明について、竈跡、カマド、入り口施設などが明瞭なものは、これらを通る軸を主軸、これに直交する軸を副軸と表示し、そうではないものについては、長軸、短軸を表示した。
7. 遺物実測図の表記方法は以下のとおりである。
 - ・赤彩された土器は、その範囲に網10%をかけて示した。
 - ・器外面のススの付着範囲は網20%で示した。
 - ・器内面の炭化物の付着範囲は網30%で示した。
 - ・黒曜石製石器に含まれる斑晶は網30%で示した。
 - ・研磨範囲と方向は平行線で示した。
 - ・土器の使用痕範囲を「↑」で示した。
8. 遺構断面図に表記した水準数値は、すべて海拔標高(単位:m)で示した。
9. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。
 - ・口径、器高、底径はcm単位である。
 - ・()の数値は推定値、[]の数値は現存値、それ以外の数値は計測値を示す。

- ・胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。

A－赤色粒子 B－白色粒子 C－長石

D－角閃石 E－石英 F－雲母

G－黒色粒子 H－白色針状物質

I－砂粒子 J－片岩 K－小礫

- ・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を％で示した。
 - ・備考には出土位置、注記№、調整や整形の特徴などを記した。
10. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1/50000地形図、さいたま市都市計画図を編集・使用した。
11. 本書に掲載した遺構番号は、原則として調査時のものを採用した。ただし、遺構名称を変更したもの(例えばビットから土壇)や、新規に遺

構と判断したもの、およびその付属施設(例えば住居の新規認定)など、調査時とは異なる名称の遺構が一部に存在しているので、以下に一覧を示す。

新	旧	備考
SJ28の一部	SK103→SD6	
SD15	SD12	
SK104	L5-C6 P51	S Kに変更
SK245	L5-B6 P111	〃
SK246	L5-B6 P43	〃
SK247	L5-B6 P9	〃
SK248	L5-B6 P94	〃
SK249	L5-F5 P119	〃
L5-D8 P3	SK37	ビットに変更
L5-D8 P2	SK45	〃
L5-D8 P1	SK48	〃
L5-C8 P4	SK61	〃
L5-C8 P3	SK71	〃
SJ-29	—	新規

目 次

(第1分冊)

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1
1. 発掘調査に至る経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
(1) 発掘調査	2
(2) 整理・報告書の作成	2
3. 発掘調査・報告書作成の組織	4
II 遺跡の立地と環境	5
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	7
(1) 旧石器時代	7
(2) 縄文時代	7
(3) 弥生時代	8
(4) 古墳時代	8
(5) 奈良・平安時代	12
(6) 中・近世	12
III 遺跡の概要	16
1. 大宮西部特定土地区画整理事業地内の 遺跡とその調査	16
2. 大木戸遺跡の概要	17
3. 大木戸遺跡の基本層序	18
IV 第13地点の遺構と遺物	19
1. 概要	19
2. 旧石器時代の遺構と遺物	27
(1) トレンチの設定と内容	27
(2) 石器	28
3. 縄文時代の遺構と遺物	33
(1) 住居跡	33

(2) 掘立柱建物跡	160
(3) 土城	164
(4) 集石土城	188
(5) 炉穴	190
(6) グリッド出土土器	193
(7) グリッド出土土製品	291
(8) グリッド出土石器	297
4. 古墳時代の遺構と遺物	344
(1) 住居跡	344
(2) 方形周溝墓	365
(3) 土城	402
(4) グリッド出土遺物	404

(第2分冊)

5. 近世の遺構と遺物	405
(1) 溝跡	405
(2) 土城	415
(3) ビット	437
(4) グリッド出土陶磁器	439
(5) グリッド出土金属器	444
(6) グリッド出土土製品	445
V 自然科学分析	447
1. ガラス小玉の自然科学的調査	447
2. 翡翠原石の理化学的分析	452
VI 調査のまとめ	454
1. 調査の成果	454
2. 旧石器時代	454
3. 縄文時代	454
4. 古墳時代	456
5. 近世	456
6. 加曽利B1式、B2式土器	456
7. 古墳時代の方形周溝墓	461

写真図版

挿 図 目 次

第1図	埼玉県の地形……………	5	第33図	第2号住居跡出土遺物(5)……………	47
第2図	遺跡周辺の地形……………	6	第34図	第2号住居跡出土遺物(6)……………	48
第3図	周辺の遺跡(旧石器・縄文時代)……………	9	第35図	第2号住居跡出土遺物(7)……………	49
第4図	周辺の遺跡(弥生時代以降)……………	10	第36図	第2号住居跡出土遺物(8)……………	50
第5図	大宮西部特定土地地区画整理事業地内の遺跡分布……………	13	第37図	第2号住居跡出土遺物(9)……………	51
第6図	調査地点遺構全体図(1)……………	14	第38図	第2号住居跡遺物出土状況(1)……………	52
第7図	調査地点遺構全体図(2)……………	15	第39図	第2号住居跡遺物出土状況(2)……………	53
第8図	調査地点概念図……………	16	第40図	第2号住居跡遺物出土状況(3)……………	54
第9図	全体図……………	19	第41図	第2号住居跡遺物出土状況(4)……………	55
第10図	全体図(1)……………	20	第42図	第2号住居跡遺物出土状況(5)……………	56
第11図	全体図(2)……………	21	第43図	第3号住居跡……………	57
第12図	全体図(3)……………	22	第44図	第3号住居跡出土遺物(1)……………	58
第13図	全体図(4)……………	23	第45図	第3号住居跡出土遺物(2)……………	59
第14図	全体図(5)……………	24	第46図	第3号住居跡出土遺物(3)……………	60
第15図	全体図(6)……………	25	第47図	第3号住居跡、第1～3号住居跡出土遺物……………	60
第16図	第13地点地形等高線図……………	26	第48図	第3号住居跡遺物出土状況(1)……………	61
第17図	旧石器時代の調査を目的としたトレンチの配置……………	27	第49図	第3号住居跡遺物出土状況(2)……………	62
第18図	トレンチ土層断面図……………	28	第50図	第4号住居跡出土遺物(1)……………	63
第19図	調査区域内出土旧石器(1)……………	30	第51図	第4、5号住居跡……………	64
第20図	調査区域内出土旧石器(2)……………	31	第52図	第4、5号住居跡柱穴底面の水準……………	65
第21図	旧石器出土状況……………	32	第53図	第4号住居跡……………	66
第22図	縄文時代の住居跡……………	33	第54図	第4号住居跡出土遺物(2)……………	67
第23図	第1～3号住居跡……………	34	第55図	第4号住居跡出土遺物(3)……………	68
第24図	第1～3号住居跡柱穴底面の水準……………	35	第56図	第4号住居跡遺物出土状況……………	69
第25図	第1号住居跡……………	36	第57図	第5号住居跡出土遺物(1)……………	70
第26図	第1号住居跡出土遺物……………	37	第58図	第5号住居跡……………	71
第27図	第1号住居跡遺物出土状況……………	38	第59図	第5号住居跡出土遺物(2)……………	72
第28図	第2号住居跡……………	40	第60図	第5号住居跡遺物出土状況……………	73
第29図	第2号住居跡出土遺物(1)……………	42	第61図	第5号住居跡出土遺物(3)……………	74
第30図	第2号住居跡出土遺物(2)……………	43	第62図	第4、5号住居跡出土遺物……………	74
第31図	第2号住居跡出土遺物(3)……………	44	第63図	第6～8号住居跡……………	75
第32図	第2号住居跡出土遺物(4)……………	45	第64図	第6～8号住居跡柱穴底面の水準……………	76
			第65図	第6号住居跡……………	77

第66図	第6号住居跡出土遺物(1)……………78	第103図	第12号住居跡出土遺物(3)……………116
第67図	第6号住居跡出土遺物(2)……………79	第104図	第12号住居跡遺物出土状況……………117
第68図	第6号住居跡出土遺物(3)……………80	第105図	第13号住居跡出土遺物(1)……………118
第69図	第6号住居跡遺物出土状況(1)……………81	第106図	第13号住居跡……………119
第70図	第6号住居跡遺物出土状況(2)……………82	第107図	第13号住居跡出土遺物(2)……………120
第71図	第7号住居跡出土遺物(1)……………83	第108図	第13号住居跡遺物出土状況……………121
第72図	第7号住居跡……………84	第109図	第9～13号住居跡出土遺物(1)……………122
第73図	第7号住居跡出土遺物(2)……………85	第110図	第9～13号住居跡出土遺物(2)……………123
第74図	第7号住居跡遺物出土状況……………85	第111図	第9～13号住居跡出土遺物(3)……………124
第75図	第8号住居跡(1)……………86	第112図	第9～13号住居跡出土遺物(4)……………125
第76図	第8号住居跡(2)……………87	第113図	第9～13号住居跡出土遺物(5)……………126
第77図	第8号住居跡出土遺物……………88	第114図	第9～13号住居跡出土遺物(6)……………127
第78図	第6～8号住居跡出土遺物(1)……………89	第115図	第9～13号住居跡出土遺物(7)……………128
第79図	第6～8号住居跡出土遺物(2)……………90	第116図	第9～13号住居跡出土遺物(8)……………129
第80図	第9～13号住居跡……………91	第117図	第9～13号住居跡出土遺物(9)……………130
第81図	第9号住居跡(1)……………92	第118図	第9～13号住居跡出土遺物(10)……………131
第82図	第9号住居跡(2)……………93	第119図	第9～13号住居跡出土遺物(11)……………132
第83図	第9～13号住居跡柱穴底面の水準……………94	第120図	第9～13号住居跡出土遺物(12)……………133
第84図	第9号住居跡出土遺物(1)……………95	第121図	第14号住居跡……………135
第85図	第9号住居跡出土遺物(2)……………96	第122図	第14号住居跡出土遺物……………136
第86図	第9号住居跡出土遺物(3)……………97	第123図	第14号住居跡遺物出土状況……………137
第87図	第9号住居跡出土遺物(4)……………98	第124図	第15、26～28号住居跡……………138
第88図	第9号住居跡遺物出土状況(1)……………101	第125図	第15、26～28号住居跡柱穴底面の 水準……………139
第89図	第9号住居跡遺物出土状況(2)……………102	第126図	第15号住居跡……………141
第90図	第9号住居跡遺物出土状況(3)……………103	第127図	第15号住居跡出土遺物(1)……………142
第91図	第10号住居跡(1)……………104	第128図	第15号住居跡出土遺物(2)……………143
第92図	第10号住居跡(2)……………105	第129図	第15号住居跡出土遺物(3)……………144
第93図	第10号住居跡出土遺物……………107	第130図	第15号住居跡出土遺物(4)……………145
第94図	第10号住居跡遺物出土状況……………108	第131図	第15号住居跡出土遺物(5)……………146
第95図	第11号住居跡(1)……………110	第132図	第15号住居跡遺物出土状況(1)……………148
第96図	第11号住居跡(2)……………111	第133図	第15号住居跡遺物出土状況(2)……………149
第97図	第11号住居跡出土遺物……………111	第134図	第26号住居跡……………150
第98図	第11号住居跡遺物出土状況……………112	第135図	第27号住居跡(1)……………152
第99図	第12号住居跡(1)……………113	第136図	第27号住居跡(2)……………153
第100図	第12号住居跡(2)……………114	第137図	第28号住居跡……………154
第101図	第12号住居跡出土遺物(1)……………115	第138図	第24号住居跡……………155
第102図	第12号住居跡出土遺物(2)……………116		

第139図	第24号住居跡出土遺物(1)	156	第174図	第1号集石土城、出土遺物	189
第140図	第24号住居跡出土遺物(2)	156	第175図	炉穴(全体図)	190
第141図	第25号住居跡	157	第176図	炉穴(拡大図)	191
第142図	第25号住居跡出土遺物	158	第177図	炉穴	192
第143図	第29号住居跡	159	第178図	グリッド出土縄文早期土器(1)	195
第144図	掘立柱建物跡(全体図)	160	第179図	グリッド出土縄文早期土器(2)	196
第145図	第2号掘立柱建物跡出土遺物	161	第180図	グリッド出土縄文早期土器(3)	197
第146図	掘立柱建物跡(拡大図)	161	第181図	グリッド出土縄文早期土器(4)	198
第147図	第1号掘立柱建物跡柱穴底面の水準	162	第182図	グリッド出土縄文早期土器(5)	199
第148図	第1号掘立柱建物跡	162	第183図	グリッド出土縄文早期土器(6)	201
第149図	第2号掘立柱建物跡柱穴底面の水準	163	第184図	グリッド出土縄文早期土器(7)	202
第150図	第2号掘立柱建物跡	163	第185図	グリッド出土縄文早期土器(8)	203
第151図	縄文時代の土城(全体図)	164	第186図	グリッド出土縄文早期土器(9)	205
第152図	縄文時代の土城(拡大図)(1)	166	第187図	グリッド出土縄文早期土器(10)	206
第153図	縄文時代の土城(拡大図)(2)	167	第188図	グリッド出土縄文早期土器(11)	207
第154図	縄文時代の土城(拡大図)(3)	168	第189図	グリッド出土縄文早期土器(12)	208
第155図	縄文時代の土城(拡大図)(4)	169	第190図	グリッド出土縄文早期土器(13)	209
第156図	縄文時代の土城(拡大図)(5)	170	第191図	グリッド出土縄文早期土器(14)	210
第157図	縄文時代の土城(拡大図)(6)	171	第192図	グリッド出土縄文早期土器(15)	211
第158図	縄文時代の土城(1)	174	第193図	グリッド出土縄文早期土器(16)	212
第159図	縄文時代の土城(2)	175	第194図	グリッド出土縄文早期土器(17)	213
第160図	縄文時代の土城(3)	176	第195図	グリッド出土縄文早期土器(18)	214
第161図	縄文時代の土城(4)	177	第196図	グリッド出土縄文早期土器(19)	215
第162図	縄文時代の土城(5)	178	第197図	グリッド出土縄文早期土器(20)	216
第163図	縄文時代の土城(6)	179	第198図	グリッド出土縄文早期土器(21)	217
第164図	縄文時代の土城(7)	180	第199図	グリッド出土縄文前期土器(1)	218
第165図	縄文時代の土城出土遺物(1)	181	第200図	グリッド出土縄文前期土器(2)	219
第166図	縄文時代の土城出土遺物(2)	182	第201図	グリッド出土縄文前期土器(3)	220
第167図	縄文時代の土城出土遺物(3)	183	第202図	グリッド出土縄文前期土器(4)	221
第168図	縄文時代の土城出土遺物(4)	184	第203図	グリッド出土縄文前期土器(5)	222
第169図	縄文時代の土城出土遺物(5)	185	第204図	グリッド出土縄文前期土器(6)	223
第170図	縄文時代の土城出土遺物(6)	186	第205図	グリッド出土縄文前期土器(7)	224
第171図	縄文時代の土城出土遺物(7)	187	第206図	グリッド出土縄文前期土器(8)	226
第172図	集石土城(全体図)	188	第207図	グリッド出土縄文前期土器(9)	227
第173図	第1号集石土城位置図	189	第208図	グリッド出土縄文前期土器(10)	228
			第209図	グリッド出土縄文前期土器(11)	229
			第210図	グリッド出土縄文前期土器(12)	230

第211図	グリッド出土縄文前期土器(13) ……	231
第212図	グリッド出土縄文前期土器(14) ……	232
第213図	グリッド出土縄文前期土器(15) ……	233
第214図	グリッド出土縄文前期土器(16) ……	234
第215図	グリッド出土縄文前期土器(17) ……	235
第216図	グリッド出土縄文前期土器(18) ……	236
第217図	グリッド出土縄文前期土器(19) ……	237
第218図	グリッド出土縄文中期土器 ……	238
第219図	グリッド出土縄文後期土器(1) ……	241
第220図	グリッド出土縄文後期土器(2) ……	242
第221図	グリッド出土縄文後期土器(3) ……	243
第222図	グリッド出土縄文後期土器(4) ……	244
第223図	グリッド出土縄文後期土器(5) ……	245
第224図	グリッド出土縄文後期土器(6) ……	246
第225図	グリッド出土縄文後期土器(7) ……	247
第226図	グリッド出土縄文後期土器(8) ……	248
第227図	グリッド出土縄文後期土器(9) ……	249
第228図	グリッド出土縄文後期土器(10) ……	250
第229図	グリッド出土縄文後期土器(11) ……	251
第230図	グリッド出土縄文後期土器(12) ……	252
第231図	グリッド出土縄文後期土器(13) ……	253
第232図	グリッド出土縄文後期土器(14) ……	254
第233図	グリッド出土縄文後期土器(15) ……	255
第234図	グリッド出土縄文後期土器(16) ……	256
第235図	グリッド出土縄文後期土器(17) ……	257
第236図	グリッド出土縄文後期土器(18) ……	259
第237図	グリッド出土縄文後期土器(19) ……	260
第238図	グリッド出土縄文後期土器(20) ……	261
第239図	グリッド出土縄文後期土器(21) ……	262
第240図	グリッド出土縄文後期土器(22) ……	263
第241図	グリッド出土縄文後期土器(23) ……	264
第242図	グリッド出土縄文後期土器(24) ……	265
第243図	グリッド出土縄文後期土器(25) ……	266
第244図	グリッド出土縄文後期土器(26) ……	267
第245図	グリッド出土縄文後期土器(27) ……	268
第246図	グリッド出土縄文後期土器(28) ……	269
第247図	グリッド出土縄文後期土器(29) ……	270

第248図	グリッド出土縄文後期土器(30) ……	271
第249図	グリッド出土縄文後期土器(31) ……	272
第250図	グリッド出土縄文後期土器(32) ……	273
第251図	グリッド出土縄文後期土器(33) ……	274
第252図	グリッド出土縄文後期土器(34) ……	275
第253図	グリッド出土縄文後期土器(35) ……	276
第254図	グリッド出土縄文後期土器(36) ……	277
第255図	グリッド出土縄文後期土器(37) ……	278
第256図	グリッド出土縄文後期土器(38) ……	279
第257図	グリッド出土縄文後期土器(39) ……	280
第258図	グリッド出土縄文後期土器(40) ……	281
第259図	グリッド出土縄文後期土器(41) ……	282
第260図	グリッド出土縄文後期土器(42) ……	283
第261図	グリッド出土縄文後期土器(43) ……	284
第262図	グリッド出土縄文後期土器(44) ……	285
第263図	グリッド出土縄文後期土器(45) ……	286
第264図	グリッド出土縄文後期土器(46) ……	287
第265図	グリッド出土縄文後期土器(47) ……	288
第266図	グリッド出土縄文後期土器(48) ……	289
第267図	グリッド出土縄文後期土器(49) ……	290
第268図	グリッド出土土偶(1) ……	292
第269図	グリッド出土土偶(2) ……	293
第270図	グリッド出土土製円盤(1) ……	294
第271図	グリッド出土土製円盤(2) ……	295
第272図	グリッド出土土製品 ……	296
第273図	グリッド出土尖頭器 ……	297
第274図	グリッド出土石鏃(1) ……	297
第275図	グリッド出土石鏃(2) ……	298
第276図	グリッド出土石鏃(3) ……	299
第277図	グリッド出土石鏃 ……	301
第278図	グリッド出土スクレイパー ……	302
第279図	グリッド出土磨製石斧(1) ……	304
第280図	グリッド出土磨製石斧(2) ……	305
第281図	グリッド出土打製石斧(1) ……	307
第282図	グリッド出土打製石斧(2) ……	308
第283図	グリッド出土打製石斧(3) ……	309
第284図	グリッド出土打製石斧(4) ……	310

第285図	グリッド出土打製石斧(5) ……………	311	第322図	第18号住居跡……………	356
第286図	グリッド出土打製石斧(6) ……………	312	第323図	第18号住居跡掘り方……………	357
第287図	グリッド出土打製石斧(7) ……………	313	第324図	第18号住居跡出土遺物……………	358
第288図	グリッド出土礫器……………	314	第325図	第18号住居跡遺物出土状況……………	359
第289図	グリッド出土浮子……………	315	第326図	第19号住居跡……………	360
第290図	グリッド出土石錘……………	316	第327図	第20号住居跡、遺物出土状況……………	360
第291図	グリッド出土砥石……………	318	第328図	第20号住居跡出土遺物……………	361
第292図	グリッド出土砥石……………	319	第329図	第21号住居跡……………	361
第293図	グリッド出土磨石(1) ……………	320	第330図	第22号住居跡出土遺物……………	362
第294図	グリッド出土磨石(2) ……………	321	第331図	第22号住居跡……………	363
第295図	グリッド出土磨石(3) ……………	322	第332図	第23号住居跡出土遺物……………	364
第296図	グリッド出土凹石……………	323	第333図	第23号住居跡、遺物出土状況……………	364
第297図	グリッド出土石皿(1) ……………	325	第334図	古墳時代の方形周溝墓(全体図) ……	365
第298図	グリッド出土石皿(2) ……………	326	第335図	古墳時代の方形周溝墓(拡大図) ……	366
第299図	グリッド出土石皿(3) ……………	327	第336図	第1号方形周溝墓主体部……………	367
第300図	グリッド出土石皿(4) ……………	328	第337図	第1号方形周溝墓(1) ……………	368
第301図	グリッド出土石皿(5) ……………	329	第338図	第1号方形周溝墓(2) ……………	369
第302図	グリッド出土石皿(6) ……………	330	第339図	第1号方形周溝墓出土遺物(1) ……	370
第303図	グリッド出土石棒、石剣……………	331	第340図	第1号方形周溝墓出土遺物(2) ……	371
第304図	グリッド出土微細刻線のある剥片…	332	第341図	第1号方形周溝墓出土遺物(3) ……	372
第305図	グリッド出土翡翠剥片……………	332	第342図	第1号方形周溝墓出土遺物(4) ……	373
第306図	グリッド出土石核、原石(1) ……	332	第343図	第1号方形周溝墓遺物出土状況(1) …	374
第307図	グリッド出土石核、原石(2) ……	333	第344図	第1号方形周溝墓遺物出土状況(2) …	375
第308図	グリッド出土石核、原石(3) ……	334	第345図	第1号方形周溝墓遺物出土状況(3) …	376
第309図	グリッド出土石核、原石(4) ……	335	第346図	第1号方形周溝墓遺物出土状況(4) …	377
第310図	グリッド出土石核、原石(5) ……	336	第347図	第1号方形周溝墓遺物出土状況(5) …	378
第311図	グリッド出土その他の石器……………	337	第348図	第2号方形周溝墓……………	380
第312図	古墳時代住居跡(全体図)……………	344	第349図	第2号方形周溝墓主体部……………	381
第313図	古墳時代住居跡(拡大図)……………	345	第350図	第2号方形周溝墓出土遺物(1) ……	382
第314図	第16号住居跡……………	347	第351図	第2号方形周溝墓出土遺物(2) ……	383
第315図	第16号住居跡掘り方……………	348	第352図	第2号方形周溝墓出土遺物(3) ……	383
第316図	第16号住居跡出土遺物……………	349	第353図	第2号方形周溝墓遺物出土状況 (1) ……………	384
第317図	第16号住居跡遺物出土状況……………	350	第354図	第2号方形周溝墓遺物出土状況 (2) ……………	385
第318図	第17号住居跡……………	352	第355図	第2号方形周溝墓遺物出土状況 (3) ……………	386
第319図	第17号住居跡掘り方……………	353			
第320図	第17号住居跡出土遺物……………	354			
第321図	第17号住居跡遺物出土状況……………	355			

第356図	第3号方形周溝墓(1) ……………	388	第388図	近世土壌、ビット(拡大図)(6) ……………	421
第357図	第3号方形周溝墓(2) ……………	389	第389図	近世土壌出土遺物(1) ……………	425
第358図	第3号方形周溝墓主体部、遺物出土状況 ……………	390	第390図	近世土壌出土遺物(2) ……………	426
第359図	第3号方形周溝墓出土遺物(1) ……………	391	第391図	近世土壌(1) ……………	427
第360図	第3号方形周溝墓出土遺物(2) ……………	393	第392図	近世土壌(2) ……………	428
第361図	第3号方形周溝墓出土遺物(3) ……………	394	第393図	近世土壌(3) ……………	429
第362図	第3号方形周溝墓出土遺物(4) ……………	395	第394図	近世土壌(4) ……………	430
第363図	第3号方形周溝墓遺物出土状況(1) ……………	396	第395図	近世土壌(5) ……………	431
第364図	第3号方形周溝墓遺物出土状況(2) ……………	397	第396図	近世土壌(6) ……………	432
第365図	第3号方形周溝墓遺物出土状況(3) ……………	398	第397図	近世土壌(7) ……………	433
第366図	第4号方形周溝墓出土遺物 ……………	399	第398図	近世土壌(8) ……………	434
第367図	第4号方形周溝墓 ……………	400	第399図	近世土壌(9) ……………	435
第368図	第4号方形周溝墓遺物出土状況 ……………	401	第400図	近世土壌(10) ……………	436
第369図	方形周溝墓と第54号土壌の位置関係 ……………	402	第401図	ビット(全体図) ……………	437
第370図	第54号土壌、遺物出土状況 ……………	402	第402図	グリッド出土陶磁器(1) ……………	441
第371図	第54号土壌出土遺物 ……………	403	第403図	グリッド出土陶磁器(2) ……………	442
第372図	グリッド出土古墳時代遺物 ……………	404	第404図	グリッド出土陶磁器(3) ……………	443
第373図	近世溝跡(全体図) ……………	405	第405図	グリッド出土金属器 ……………	444
第374図	近世溝跡(拡大図) ……………	406	第406図	グリッド出土石製品 ……………	446
第375図	近世溝跡(1) ……………	408	第407図	ガラス小玉写真 ……………	448
第376図	近世溝跡(2) ……………	409	第408図	大木戸遺跡出土ガラス小玉のC R画像 ……………	450
第377図	近世溝跡(3) ……………	410	第409図	大木戸遺跡出土ガラス小玉のA R画像 ……………	450
第378図	近世溝跡(4) ……………	411	第410図	被験試料から得られたX線回折のプロファイル ……………	453
第379図	近世溝跡(5) ……………	412	第411図	区切り文関連土器 ……………	456
第380図	近世溝跡(6) ……………	413	第412図	棒状文の変遷模式図 ……………	457
第381図	近世溝跡出土遺物 ……………	414	第413図	第IV群第8類第1種の土器 ……………	457
第382図	近世土壌(全体図) ……………	415	第414図	関連性のある土器 ……………	458
第383図	近世土壌、ビット(拡大図)(1) ……………	416	第415図	第IV群第8類第2種の土器 ……………	458
第384図	近世土壌、ビット(拡大図)(2) ……………	417	第416図	雅楽谷遺跡出土の紐線文大木戸2種 ……………	458
第385図	近世土壌、ビット(拡大図)(3) ……………	418	第417図	堀之内1式の格子目文土器 ……………	460
第386図	近世土壌、ビット(拡大図)(4) ……………	419	第418図	格子目文土器の変遷 ……………	461
第387図	近世土壌、ビット(拡大図)(5) ……………	420	第419図	大木戸遺跡方形周溝墓出土土器 ……………	463
			第420図	埼玉県内の方形周溝墓主体部 ……………	464

第421図	大木戸遺跡の方形周溝墓からの土器出土状況	465
-------	----------------------	-----

目 次

第1表	遺跡一覧表	11	第31表	第15号住居跡出土石器観察表	147
第2表	大木戸遺跡の調査経過	17	第32表	第26号住居跡ビット計測表	151
第3表	調査区域内出土旧石器観察表	29	第33表	第27号住居跡ビット計測表	151
第4表	第1号住居跡ビット計測表	36	第34表	第28号住居跡ビット計測表	153
第5表	第2号住居跡ビット計測表	39	第35表	第24号住居跡ビット計測表	156
第6表	第2号住居跡出土石器観察表	51	第36表	第24号住居跡出土石器観察表	156
第7表	第3号住居跡ビット計測表	60	第37表	第25号住居跡ビット計測表	158
第8表	第3号住居跡、第1～3号住居跡出土石器観察表	61	第38表	縄文時代の土壌一覧表(1)	172
第9表	第4号住居跡ビット計測表	67	第39表	縄文時代の土壌一覧表(2)	173
第10表	第4号住居跡出土石器観察表	69	第40表	縄文時代の土壌時期一覧	186
第11表	第5号住居跡ビット計測表	72	第41表	土壌出土石器観察表	187
第12表	第5号住居跡出土石器観察表	74	第42表	炉穴一覧表	192
第13表	第6号住居跡ビット計測表	78	第43表	グリッド出土石器観察表(1)	338
第14表	第6号住居跡出土石器観察表	78	第44表	グリッド出土石器観察表(2)	339
第15表	第7号住居跡ビット計測表	83	第45表	グリッド出土石器観察表(3)	340
第16表	第8号住居跡ビット計測表	88	第46表	グリッド出土石器観察表(4)	341
第17表	第6～8号住居跡出土石器観察表	88	第47表	グリッド出土石器観察表(5)	342
第18表	第9号住居跡出土石器観察表	99	第48表	グリッド出土石器観察表(6)	343
第19表	第9号住居跡ビット計測表	100	第49表	第16号住居跡出土遺物観察表	346
第20表	第10号住居跡ビット計測表	106	第50表	第17号住居跡出土遺物観察表	351
第21表	第10号住居跡出土石器観察表	106	第51表	第18号住居跡出土遺物観察表	358
第22表	第11号住居跡ビット計測表	109	第52表	第20号住居跡出土遺物観察表	361
第23表	第11号住居跡出土石器観察表	111	第53表	第22号住居跡出土遺物観察表	362
第24表	第12号住居跡ビット計測表	115	第54表	第23号住居跡出土遺物観察表	364
第25表	第12号住居跡出土石器観察表	116	第55表	第1号方形周溝墓出土遺物観察表	373
第26表	第13号住居跡ビット計測表	120	第56表	第2号方形周溝墓出土遺物観察表	383
第27表	第13号住居跡出土石器観察表	120	第57表	第2号方形周溝墓出土ガラス小玉観察表	383
第28表	第9～13号住居跡出土石器観察表	134	第58表	第3号方形周溝墓出土遺物観察表	391
第29表	第14号住居跡出土石器観察表	136	第59表	第3号方形周溝墓出土ガラス小玉観察表	392
第30表	第15号住居跡ビット計測表	140			

第60表	第3号方形周溝墓出土鉄鉋観察表	393	第71表	近世土城出土遺物観察表	425
第61表	第4号方形周溝墓出土遺物観察表	399	第72表	ビット一覧表	438
第62表	第4号方形周溝墓出土ガラス小玉 観察表	399	第73表	グリッド出土陶磁器観察表(1)	439
第63表	第54号土城出土遺物観察表	403	第74表	グリッド出土陶磁器観察表(2)	440
第64表	グリッド出土古墳時代遺物観察表	404	第75表	グリッド出土金属器観察表	444
第65表	近世溝跡一覧表(1)	407	第76表	グリッド出土石製品観察表	445
第66表	近世溝跡一覧表(2)	407	第77表	大木戸遺跡出土ガラス小玉の蛍光 X線分析結果	451
第67表	近世溝跡出土遺物観察表	414	第78表	X線回折装置の設定	452
第68表	近世土城一覧表(1)	422	第79表	埼玉県内の埋葬施設が確認された 方形周溝墓一覧	466
第69表	近世土城一覧表(2)	423			
第70表	近世土城一覧表(3)	424			

写真図版目次

巻頭図版1	1 遺跡遠景 2 遺跡近景	図版7	1 第6～8号住居跡(南西から) 2 第4号住居跡(西から) 3 第5号住居跡(南から) 4 第6号住居跡(南西から) 5 第7、8号住居跡(南西から)
巻頭図版2	1 調査区内出土旧石器時代遺物 2 第9号住居跡出土遺物	図版8	1 第9～13号住居跡(北東から) 2 第9～13号住居跡(南西から)
巻頭図版3	1 第1号方形周溝墓出土遺物 2 第3号方形周溝墓出土遺物	図版9	1 第9～11号住居跡遺物出土状況(東から) 2 第9号住居跡石鍾出土状況(東から) 3 第9号住居跡炉跡(南西から) 4 第9号住居跡遺物出土状況(東から) 5 第9号住居跡遺物出土状況(東から) 6 第9号住居跡遺物出土状況(西から) 7 第12号住居跡P87(南から) 8 第12号住居跡P87(南東から)
図版1	1 遠景(南から) 2 遠景(北東から)	図版10	1 第14号住居跡(北東から) 2 第14号住居跡(南東から) 3 第15号住居跡(北東から) 4 第15号住居跡(北西から) 5 第15号住居跡遺物出土状況(1)
図版2	1 遠景(南東から) 2 遠景(北から)		
図版3	1 全景(南東から) 2 全景(北西から)		
図版4	1 第1～3号住居跡(北から) 2 第1～3号住居跡(北西から)		
図版5	1 第1号住居跡(南西から) 2 第1号住居跡炉跡 3 第2号住居跡(南西から) 4 第2号住居跡炉跡 5 第3号住居跡(南西から)		
図版6	1 第4～8号住居跡(北西から) 2 第4～8号住居跡(南西から)		

	6	第15号住居跡遺物出土状況(2)		(西から)
	7	第24号住居跡(北西から)	図版16	1 第1号方形周溝墓(南東から)
	8	第25号住居跡(西から)		2 第1号方形周溝墓主体部(南東から)
図版11	1	第16号住居跡(南西から)		3 第1号方形周溝墓主体部確認状況(北から)
	2	第16号住居跡(南西から)		4 第1号方形周溝墓主体部土層断面(北東から)
	3	第16号住居跡遺物出土状況(南西から)		5 第1号方形周溝墓主体部土層断面(南西から)
	4	第16号住居跡炉跡	図版17	1 第2号方形周溝墓遺物出土状況(南東から)
	5	第16号住居跡遺物出土状況(南西から)		2 第2号方形周溝墓(南東から)
図版12	1	第17号住居跡(南西から)		3 第2号方形周溝墓主体部土層断面(北から)
	2	第17号住居跡(南西から)		4 第2号方形周溝墓主体部(北東から)
	3	第17号住居跡炉跡		5 第2号方形周溝墓主体部(南東から)
	4	第17号住居跡遺物出土状況(1)	図版18	1 第3号方形周溝墓(南東から)
	5	第17号住居跡遺物出土状況(2)		2 第3号方形周溝墓遺物出土状況(南東から)
図版13	1	第18号住居跡(北東から)		3 第3号方形周溝墓南西コーナー遺物出土状況
	2	第18号住居跡(南東から)		4 第3号方形周溝墓東溝遺物出土状況(南東から)
	3	第18号住居跡P5(南東から)		5 第3号方形周溝墓北東コーナー遺物出土状況
	4	第18号住居跡土層断面(東から)	図版19	1 第3号方形周溝墓主体部(南東から)
	5	第18号住居跡炉跡(北西から)		2 第3号方形周溝墓主体部(南西から)
図版14	1	第19号住居跡(北から)		3 第3号方形周溝墓主体部(北西から)
	2	第20号住居跡(南東から)		4 第3号方形周溝墓主体部(南西から)
	3	第21号住居跡(北西から)		5 第3号方形周溝墓主体部ガラス小玉出土状況
	4	第22号住居跡(北西から)	図版20	1 第4号方形周溝墓遺物出土状況(南東から)
	5	第23号住居跡(北西から)		2 第4号方形周溝墓(南西から)
	6	第23号住居跡遺物出土状況		3 第4号方形周溝墓(西から)
	7	第1号掘立柱建物跡(東から)		4 第4号方形周溝墓D-D'土層断面
	8	第2号掘立柱建物跡(東から)		5 第4号方形周溝墓北東コーナー遺物
図版15	1	第1号方形周溝墓遺物出土状況(東から)		
	2	第1号方形周溝墓南西コーナー遺物出土状況		
	3	第1号方形周溝墓南西コーナー遺物出土状況		
	4	第1号方形周溝墓北側遺物出土状況(東から)		
	5	第1号方形周溝墓北側遺物出土状況		

	出土状況	5	第1号集石土壇
図版21	1 第1号土壇	6	第1号集石土壇
	2 第77号土壇	7	トレンチ土層断面(グリッドM、Nライン)
	3 第78号土壇	8	トレンチ土層断面
	4 第78、79号土壇	図版26	旧石器時代の遺物
	5 第118号土壇	図版27	第2～7号住居跡出土遺物
	6 第119号土壇	図版28	第9～12号住居跡出土遺物
	7 第139号土壇	図版29	第9～15号住居跡出土遺物
	8 第139号土壇遺物出土状況	図版30	第15号住居跡出土遺物
図版22	1 第142号土壇		第78、139、142号土壇出土遺物
	2 第142号土壇遺物出土状況	図版31	第1号住居跡出土遺物
	3 第153号土壇		第2号住居跡出土遺物(2)
	4 第154号土壇	図版32	第2号住居跡出土遺物(2)
	5 第155号土壇		第2号住居跡出土遺物(3)
	6 第156号土壇	図版33	第2号住居跡出土遺物(3)
	7 第158号土壇		第2号住居跡出土遺物(4)
	8 第159、160号土壇	図版34	第2号住居跡出土遺物(4)
図版23	1 第161号土壇		第2号住居跡出土遺物(5)
	2 第162号土壇	図版35	第2号住居跡出土遺物(5)
	3 第163号土壇		第2号住居跡出土遺物(6)
	4 第165号土壇	図版36	第2号住居跡出土遺物(6)
	5 第169号土壇		第2号住居跡出土遺物(7)
	6 第171号土壇	図版37	第2号住居跡出土遺物(7)、(8)
	7 第173号土壇		第3号住居跡出土遺物(1)
	8 第175号土壇	図版38	第3号住居跡出土遺物(1)
図版24	1 第177号土壇土層断面		第3号住居跡出土遺物(2)
	2 第177号土壇	図版39	第3号住居跡出土遺物(2)
	3 第194号土壇		第4号住居跡出土遺物(2)
	4 第195号土壇	図版40	第5号住居跡出土遺物(2)
	5 第201号土壇		第4、5号住居跡出土遺物
	6 第211号土壇	図版41	第6号住居跡出土遺物(2)
	7 第212号土壇		第6号住居跡出土遺物(2)
	8 第213号土壇	図版42	第7号住居跡出土遺物(2)
図版25	1 第1号炉穴		第8号住居跡出土遺物
	2 第5～10号炉穴(東から)	図版43	第6～8号住居跡出土遺物(1)
	3 第8号炉穴(北東から)		第9号住居跡出土遺物(2)
	4 第7、9、10号炉穴(東から)		

- 図版44 第9号住居跡出土遺物(2)
第10、11号住居跡出土遺物
- 図版45 第12号住居跡出土遺物(2)
第13号住居跡出土遺物(1)
- 図版46 第9～13号住居跡出土遺物(2)
第9～13号住居跡出土遺物(2)
- 図版47 第9～13号住居跡出土遺物(3)
第9～13号住居跡出土遺物(3)
- 図版48 第9～13号住居跡出土遺物(4)
第9～13号住居跡出土遺物(4)
- 図版49 第9～13号住居跡出土遺物(5)
第9～13号住居跡出土遺物(5)
- 図版50 第9～13号住居跡出土遺物(6)
第9～13号住居跡出土遺物(6)
- 図版51 第9～13号住居跡出土遺物(7)
第9～13号住居跡出土遺物(7)
- 図版52 第9～13号住居跡出土遺物(8)
第9～13号住居跡出土遺物(8)
- 図版53 第9～13号住居跡出土遺物(9)
第9～13号住居跡出土遺物(10)
第14号住居跡出土遺物
- 図版54 第15号住居跡出土遺物(3)
第15号住居跡出土遺物(4)
- 図版55 第24、25号住居跡出土遺物
第2号掘立柱建物跡、第1号集石土壌出土遺物
- 図版56 縄文時代の土壌出土遺物(1)
縄文時代の土壌出土遺物(1)
- 図版57 縄文時代の土壌出土遺物(2)
縄文時代の土壌出土遺物(2)、(3)
- 図版58 縄文時代の土壌出土遺物(3)、(4)
縄文時代の土壌出土遺物(4)
- 図版59 縄文時代の土壌出土遺物(5)
縄文時代の土壌出土遺物(5)
- 図版60 第1～4号住居跡出土遺物
- 図版61 第4～6号住居跡出土遺物
- 図版62 第6～8号住居跡出土遺物
- 図版63 第6～9号住居跡出土遺物
- 図版64 第9号住居跡出土遺物
- 図版65 第9～13号住居跡出土遺物
- 図版66 第9～13号住居跡出土遺物
- 図版67 第9～15号住居跡出土遺物
- 図版68 第15～24号住居跡出土遺物、第79～205号土壌出土遺物
- 図版69 グリッド出土縄文土器
- 図版70 グリッド出土縄文早期土器(1)
- 図版71 グリッド出土縄文早期土器(2)
- 図版72 グリッド出土縄文早期土器(3)
- 図版73 グリッド出土縄文早期土器(4)
- 図版74 グリッド出土縄文早期土器(5)
- 図版75 グリッド出土縄文早期土器(6)
- 図版76 グリッド出土縄文早期土器(7)
- 図版77 グリッド出土縄文早期土器(8)
- 図版78 グリッド出土縄文早期土器(9)、(10)
- 図版79 グリッド出土縄文早期土器(11)、(12)
- 図版80 グリッド出土縄文早期土器(13)、(14)
- 図版81 グリッド出土縄文早期土器(15)、(16)
- 図版82 グリッド出土縄文早期土器(17)
- 図版83 グリッド出土縄文前期土器(2)
- 図版84 グリッド出土縄文前期土器(3)
- 図版85 グリッド出土縄文前期土器(4)、(5)
- 図版86 グリッド出土縄文前期土器(6)
- 図版87 グリッド出土縄文前期土器(7)
- 図版88 グリッド出土縄文前期土器(8)、(9)
- 図版89 グリッド出土縄文前期土器(10)、(11)
- 図版90 グリッド出土縄文前期土器(12)、(13)
- 図版91 グリッド出土縄文前期土器(14)、(15)
- 図版92 グリッド出土縄文前期土器(16)、(17)
- 図版93 グリッド出土縄文前期土器(18)、(19)
- 図版94 グリッド出土縄文中期土器
グリッド出土縄文後期土器(1)
- 図版95 グリッド出土縄文後期土器(2)
- 図版96 グリッド出土縄文後期土器(5)
- 図版97 グリッド出土縄文後期土器(6)、(7)

- 図版98 グリッド出土縄文後期土器(8)
- 図版99 グリッド出土縄文後期土器(9)
- 図版100 グリッド出土縄文後期土器(10)
- 図版101 グリッド出土縄文後期土器(11)
- 図版102 グリッド出土縄文後期土器(12)、(13)
- 図版103 グリッド出土縄文後期土器(14)
- 図版104 グリッド出土縄文後期土器(15)
- 図版105 グリッド出土縄文後期土器(16)、(17)
- 図版106 グリッド出土縄文後期土器(20)
- 図版107 グリッド出土縄文後期土器(21)
- 図版108 グリッド出土縄文後期土器(22)
- 図版109 グリッド出土縄文後期土器(23)
- 図版110 グリッド出土縄文後期土器(24)
- 図版111 グリッド出土縄文後期土器(25)
- 図版112 グリッド出土縄文後期土器(26)
- 図版113 グリッド出土縄文後期土器(27)
- 図版114 グリッド出土縄文後期土器(28)
- 図版115 グリッド出土縄文後期土器(29)、(30)
- 図版116 グリッド出土縄文後期土器(31)
- 図版117 グリッド出土縄文後期土器(32)
- 図版118 グリッド出土縄文後期土器(33)
- 図版119 グリッド出土縄文後期土器(34)
- 図版120 グリッド出土縄文後期土器(35)、(36)
- 図版121 グリッド出土縄文後期土器(36)、(37)
- 図版122 グリッド出土縄文後期土器(38)、(39)
- 図版123 グリッド出土縄文後期土器(40)、(41)
- 図版124 グリッド出土縄文後期土器(42)、(43)
- 図版125 グリッド出土縄文後期土器(43)、(44)
- 図版126 グリッド出土縄文後期土器(44)、(45)
- 図版127 グリッド出土縄文後期土器(46)
- 図版128 グリッド出土縄文後期土器(47)、(48)
- 図版129 グリッド出土土製品
- 図版130 グリッド出土土製品
- 図版131 グリッド出土土製品
- 図版132 第2、9～13、15号住居跡、グリッド出土土偶
- 図版133 グリッド出土土偶
- 図版134 グリッド出土石器
- 図版135 グリッド出土石器
- 図版136 グリッド出土石器
- 図版137 グリッド出土石器
- 図版138 グリッド出土石器
- 図版139 グリッド出土石器
- 図版140 グリッド出土石器
- 図版141 グリッド出土石器
- 図版142 グリッド出土石器
- 図版143 グリッド出土石器
- 図版144 グリッド出土石器
- 図版145 グリッド出土石器
- 図版146 グリッド出土石器
- 図版147 グリッド出土石器
- 図版148 グリッド出土石器
- 図版149 グリッド出土石器
- 図版150 グリッド出土石器
- 図版151 グリッド出土石器
- 図版152 グリッド出土石器
- 図版153 グリッド出土石器
- 図版154 グリッド出土石器
- 図版155 グリッド出土石器
- 図版156 第16、17号住居跡出土遺物
- 図版157 第17～23号住居跡、グリッド出土遺物
- 図版158 第1、2号方形周溝墓出土遺物
- 図版159 第2～4号方形周溝墓、第54号土坑出土遺物
- 図版160 第2～4号方形周溝墓出土ガラス小玉
- 図版161 第3号方形周溝墓出土鉄銅
- 図版162 近世溝跡、土坑出土遺物
- 図版163 グリッド出土近世遺物
- 図版164 グリッド出土近世遺物
- 図版165 グリッド出土近世遺物
- 図版166 グリッド出土近世石製品

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

独立行政法人都市再生機構(旧住宅都市整備公団)のち都市基盤整備公団 以下「公団」)はさいたま市(旧大宮市)北西部で大宮西部特定土地地区画整理事業を施行している。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係機関との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

本事業の計画段階における埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、昭和63年8月17日付けし21-21号で、公団首都圏都市開発本部開発本部長(当時)より埼玉県教育委員会教育長あて照会があった。文化財保護課(当時)では、平成元年1月14日付け教文第1106号で、計画地内には埋蔵文化財包蔵地が15箇所所在することから、取扱いについて別途協議が必要な旨、回答した。

区画整理事業地内の埋蔵文化財については、公団埼玉地域支社長(当時)より平成10年7月9日付けさ25-4号で教育長あて「埋蔵文化財の所在及び取扱い」について照会があった。以後、事業の進捗に合わせ取扱いを決定するための確認調査を生涯学習文化財課が実施してきた。

大木戸遺跡のうち本報告に係る部分については、平成20年1月21日付け、および平成21年7月22日付けさ開62-11で試掘調査の依頼を受け、平成20年2月6日付け教文第2387-1号、および平成21年8月3日付け教文第883号でそれぞれ記録保存のための発掘調査が必要な旨の回答を行っている。

本事業に係る発掘調査に先立ち、平成12年9月1日付けで「大宮西部地区埋蔵文化財に関する協定書」が、公団、埼玉県教育委員会、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団(現公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 以下「事業団」)の三者

により締結され、発掘調査については、事業団が実施機関として当たることとなった。発掘調査の実施にあたっては、関係機関で調査方法、調査期間等の協議が行われ、その結果、平成20年度、21年度に発掘調査が実施された。

文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知は、平成12年9月1日付けさ24-11号、平成13年3月26日付けさ24-27号で公団埼玉地域支社地域支社長から県教育長あて提出され、それに対する保護上必要な勧告は平成12年9月26日付け教文第4-426号、及び平成13年4月9日付け教文第4-986号で行った。また、第92条の規定による発掘調査届が事業団理事長から提出された。

発掘調査の届出に対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知番号は次の通りである。

平成20年4月18日付け 教文第2-3号

平成21年5月8日付け 教文第2-10号

平成21年10月27日付け 教文第2-47号

(埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

大木戸遺跡第13地点は、平成20年度から21年度にかけて第7次、8次、9次の3次にわたって総面積6276㎡の発掘調査を行った。

第7次調査は、高木道下遺跡と並行して3回に分けて調査を行った。平成20年4月8日から6月30日まで、平成20年10月1日から11月30日まで、平成21年1月1日から3月31日までの3回で、調査面積は合計710㎡である。

調査の経過は以下の通りである。

なお平成20年度の調査は、区画整理事業の進捗状況との調整を行いながら、高木道下遺跡と大木戸遺跡を並行し、あるいは単独で随時調査を行った。

4月上旬に発掘調査事務所を設置し、4月中旬に現況で観察できた墳丘状の高まりについて、古墳の可能性を考慮して測量を行った。4月末から5月初旬にかけて重機による表土の掘削を実施し、5月上旬から人力による遺構の確認作業に入った。そして5月下旬からは遺構精査を行い、6月上旬からは記録等の作成を行った。

6月の調査は高木道下遺跡と並行して実施していたが、7～9月は大木戸遺跡の調査を一端休止して、高木道下遺跡の調査を行った。

9月末で高木道下遺跡の調査を休止し、10月から再び大木戸遺跡の調査を開始した。

10月初旬には遺構確認を行い、10月下旬から遺構精査と記録などの作成を開始し、11月末まで継続した。

12月には大木戸遺跡の調査を再び中断し、再び高木道下遺跡の調査を実施した。

12月末に高木道下遺跡の調査を終了し、1月には大木戸遺跡に戻り、3月末まで遺構精査と記録の作成を行った。

第8次調査は、平成21年4月1日から6月30日まで実施した。調査終了面積は1895㎡である。

調査の経過は以下の通りである。

4月初旬から遺構確認を開始し、中旬から遺構精査を実施した。4月下旬から記録の作成を開始し、6月末までに調査対象地の一部を残して作業を一端終了した。

第8次調査の2は、平成21年7月1日から平成21年9月30日まで実施した。調査終了面積は2000㎡である。

調査の手順は以下の通りである。

7月初旬から8次調査の残り部分について遺構確認と遺構精査を開始した。7月下旬から記録作成を行いつつ精査を継続し、9月中旬に埋め戻しを行い、9月末で8次調査の残存部分を終了した。

第9次調査は、平成21年10月1日から平成22年1月29日まで実施した。調査面積は1671㎡である。

調査の経過は以下の通りである。

10月当初から表土除去を開始し、遺構確認の後、上旬から遺構精査、中旬から記録等の作成を並行して進めた。1月下旬に遺構の精査と記録類の作成を終え、1月末に埋め戻しを行い、作業を終了した。

(2) 整理・報告書の作成

整理報告書作成作業は、平成23年4月8日から、平成25年6月30日まで実施した。

平成23年度は、竪穴住居跡21軒、炉穴12基、土壇85基を対象とした。

4月初旬から出土遺物の水洗・注記を行い、順次、接合・復元作業に着手した。接合・復元が終了した遺物は6月から順次抽出を行い、拓本・実測作業を開始した。遺物の機械実測には3スペース、オルソイメージャーなどを利用した。8月初旬からは遺物実測図のトレースを開始し、9月には遺物版下図の作成に着手した。

遺構図の整理は、遺物の作業と並行して4月当初から行った。図面照合と修正を経て第二原図を作成し、6月初旬からは画像ソフトを用いて遺構

図のトレース・土層説明等のデータを組み込んで編集作業を実施し、遺構図版の版下を作成した。

これらの作業と並行して、6月から原稿執筆を開始した。12月初旬には、遺物写真撮影、遺構写真図版作成、自然科学分析委託などを実施した。

これらの作業は、3月末まで行った。

平成24年度は、竪穴住居跡8軒、方形周溝墓4基、集石土城1基、古墳時代の土城1基、近世土城155基を対象とした。

4月初旬から出土遺物の水洗・注記を行い、順次、接合・復元作業に着手した。接合・復元が終了した遺物は5月から順次抽出を行い、拓本・実測作業を開始した。遺物の機械実測には、3スベース、オルソイメージャーなどを利用した。6月初旬からは遺物実測図のトレースを開始し、7月には遺物版下図の作成に着手した。

遺構図の整理は、遺物の作業と並行して4月当初から行った。図面照合と修正を経て第二原図を作成し、5月初旬からは画像ソフトを用いて遺構図のトレース・土層説明等のデータを組み込んで編集作業を実施し、遺構図版の版下を作成した。

1月からは原稿執筆を開始し、2月初旬には遺物写真撮影、遺構写真図版作成を実施した。

これらの作業は、3月末まで行った。

平成25年度は、柱穴列(掘立柱建物跡)2棟、溝跡16条を対象とした。

4月上旬から出土遺物の水洗・注記を行い、5月中旬まで遺物の接合作業を行った。4月中旬にこれらの中から掲載遺物を抽出し、実測や拓本作成を行った。5月から遺物実測図のトレース作業を初めるとともに、トレース図をスキャナーを使用して電子データとした。

遺構については、4月から遺物の作業と並行して、発掘調査で記録した平面図と断面図を順次整理し第二原図を作成した。5月にパソコンを使い第二原図をスキャナーでパソコンに取り込み、遺構図のデジタルトレースを行った。5月から仕上がった遺構と遺物の電子データを使用して、版下を作成した。5月中旬に遺構写真図版の版組を行い、遺物についても写真撮影と版組を行い、写真図版を作成した。

これらの作業と併行して原稿執筆、編集作業を行った。

6月末に印刷所に入稿し、3回の校正を経て、平成25年8月26日に報告書を刊行した。

なお、図面や写真などの記録類や遺物は、6月末に整理・分類の上、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成20年度（発掘調査）

理 事 長	刈 部 博
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆
総務部	
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志
総 務 課 長	松 盛 孝

調査部

調 査 部 長	村 田 健 二
調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
調 査 第 二 課 長	細 田 勝
主 査	新 屋 雅 明
主 事	篠 田 泰 輔
主 事	竹 田 裕 子

平成21年度（発掘調査）

理 事 長	刈 部 博
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆
総務部	
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志
総 務 課 長	田 中 雅 人

調査部

調 査 部 長	小 野 美代子
調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
調 査 第 二 課 長	細 田 勝
主 査	新 屋 雅 明
主 査	大 屋 道 則

平成23年度（報告書作成）

理 事 長	藤 野 龍 宏
常務理事兼総務部長	根 本 勝
総務部	
総 務 部 副 部 長	金 子 直 行
総 務 課 長	矢 島 将 和

調査部

調 査 部 長	小 野 美代子
調 査 部 副 部 長	鱈 持 和 夫
整 理 第 二 課 長	赤 熊 浩 一
主 査	新 屋 雅 明

平成24年度（報告書作成）

理 事 長	中 村 英 樹
常務理事兼総務部長	根 本 勝
総務部	
総 務 部 副 部 長	富 田 和 夫
総 務 課 長	矢 島 将 和

調査部

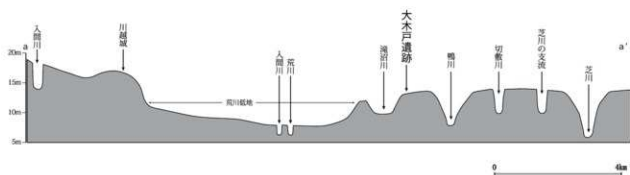
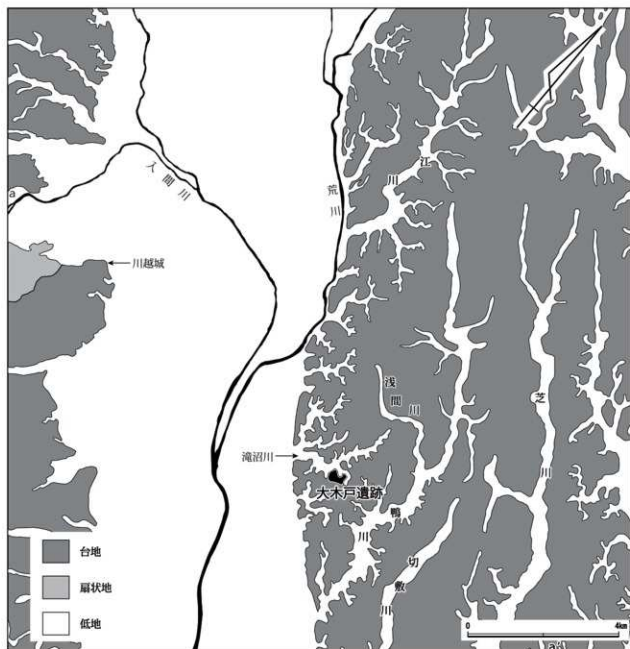
調 査 部 長	昼 間 孝 志
調 査 部 副 部 長	鱈 持 和 夫
主幹兼整理第二課長	赤 熊 浩 一
主 査	大 屋 道 則

平成25年度（報告書作成）

理 事 長	中 村 英 樹
常務理事兼総務部長	大 嶋 紳一郎
総務部	
総 務 部 副 部 長	富 田 和 夫
総 務 課 長	藤 倉 英 明

調査部

調 査 部 長	昼 間 孝 志
調 査 部 副 部 長	鱈 持 和 夫
主幹兼整理第二課長	大 谷 徹
主 査	大 屋 道 則



第2図 遺跡周辺の地形

2. 歴史的環境

大木戸遺跡は、一般国道16号バイパスの建設に伴い、1986、87、93年に西大宮バイパス№6遺跡(1)として、大宮市(現さいたま市)遺跡調査会によって初めて調査が実施された。これらの調査については、1995年に報告書が刊行されており、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡であることが明らかになった。埼玉県埋蔵文化財調査事業団でも2000年から2005年にかけて4次の調査を実施し、その一部(第2～5次調査分)は2008年に『大木戸遺跡Ⅰ』として報告している。

(1) 旧石器時代

大宮台地の旧石器時代遺跡は約250箇所を数えるが、その殆どは後期旧石器時代後半の遺跡であって、A T降灰以前の前半期のものは極端に少ない。大宮台地最古段階と考えられる遺物は、さいたま市の明花向遺跡A区第IX層(武蔵野台地標準層位で第X層に対応)の石器群であり、第2暗色帯下位から出土している。剥片類と石核の接合資料が主体で、定型的な石器はない。

現在のところ、明花向遺跡A区以外に第2暗色帯下位の石器群を出土した遺跡は無く、他は第2暗色帯中の石器群である。さいたま市西大宮バイパス№6(大木戸)遺跡第Ⅲ文化層は、ガラス質黒色安山岩の剥片類と石核の接合資料で、明花向遺跡の石器群と近似している。東側に谷を挟んで対峙する西大宮バイパス№5遺跡(2)第Ⅲ文化層では、ガラス質黒色安山岩を主体とする石器群に台形様石器を伴っている。同じく北東側に谷を挟んで隣接する清河寺前原遺跡(7)からは、黒曜石を主体的に用いた石器群が検出され、その中には台形様石器等の製品が多数含まれている。後期旧石器時代前半期の遺跡は少ないものの、大宮台地の当該地域で幾つかの検出例が見られることは注目し得る。

後期旧石器時代後半期になると、遺跡数は急激に増加する。岩宿Ⅱ期(武蔵野台地第V～IV層下

部段階)の遺跡は、上尾市殿山遺跡(44)で黒曜石製のナイフ形石器と共に玉髄製の国府型ナイフ形石器が複数出土し、県指定文化財となっている。また、天沼遺跡(28)からは国府型に類似するナイフ形石器が出土している。西大宮バイパス№4～6遺跡(4、2、1)は、資料的に最も充実している。

砂川期(武蔵野台地第IV層上部)の遺跡では、上尾市前戸崎遺跡(61)から資料数は少ないがチャートを用いたナイフ形石器、挟み入り削器等の石器群が出土している。剥片類と石核の接合が注目されている資料である。在家遺跡(38)では複数の石器集中からナイフ形石器、槍先形尖頭器、削器、彫器等多様な石器が出土した。石器の材料としては黒曜石、ガラス質黒色安山岩等が用いられていた。他にB-53号遺跡(64)からも、石器集中1箇所が検出されている。

(2) 縄文時代

縄文時代草創期の遺跡としては、西大宮バイパス№4遺跡(4)があげられる。黒曜石製の槍先形尖頭器の製品及び未成品が径1.5mの範囲に7点がまとまり、北東に約2m離れた地点でも1点が出土している。他の石器とは明確に分布域が分かれており、その出土状況からデポと考えられている。これらの材料となった黒曜石は、栃木県の高原山産と推定されている。大丸山遺跡(73)からは、燃糸文を横位に施文した草創期の土器が出土している。

縄文時代早期では、大丸山遺跡で燃糸文系土器群と押型文系土器群が、西大宮バイパス№4遺跡で燃糸文系土器群、沈線文系土器群、押型文系土器群の良好な資料が出土している。

早期末の当該地域では貝塚が形成される。1928年に大山史前学研究所によって、東京湾に注ぐ主要溪谷の貝塚調査に基づく縄文土器編年研究の一環として五味貝戸貝塚(74)が調査され、指扇式が提唱された。しかしその後、この土器型式は茅山

式の範疇に含まれるとされ使われなくなった。1970年には榎本金之丞・佐藤達夫によって縄文海進の上限の土器型式を明らかにする目的で平方貝塚(29)が調査され、出土した土器は茅山上層式と花積下層式をつなぐものとして注目された。貝層はヤマトシジミを主体とする淡水産の貝からなり、ハイガイ、カキ、ハマグリなど鹹水産の貝が共存していた。

早期末の遺跡は、他に薬師耕地前遺跡(26)で住居跡の覆土中から貝のブロックが3箇所検出され、殿山遺跡と上尾市稲荷台遺跡(27)からは住居跡、西大宮バイパス№5遺跡、B-53号遺跡、下加遺跡(68)からは炉穴がそれぞれ検出されている。

縄文時代前期では、箕輪Ⅱ遺跡(35)から花積下層式期の住居跡が検出され、比較的多量に資料が得られている。上尾市稲荷台遺跡では関山式期の住居跡7軒、宿北Ⅱ遺跡(34)では関山式期の住居跡2軒、氷川遺跡(56)では関山式期と諸磯a式期の住居跡がそれぞれ5軒検出されている。上加遺跡(65)と指扇下戸遺跡(72)から諸磯b式期の住居跡、在家遺跡からは前期終末期の住居跡が見つかっている。一方、荒川を挟んで対岸となるふじみ野市鷺森遺跡(117)では、諸磯a～b式期の集落跡が調査されている。

縄文時代中期では、下加遺跡で勝坂式から加曾利EⅢ式期の住居跡が約40軒検出されており、当地域における拠点集落であると考えられる。雨沼Ⅰ遺跡(30)からは勝坂式から加曾利EⅢ式期の住居跡が8軒検出されている。他に、西大宮バイパス№4遺跡で勝坂式期の住居跡、指扇下戸遺跡から勝坂式期の土壌、前戸崎遺跡と白銀宮腰遺跡(103)からは加曾利EⅢ式期の住居跡が検出されている。B-53号遺跡では、中期の住居跡と後期初頭の柄鏡形住居跡が検出されたほか、遺物包含層から瓢形の注口土器が出土している。

縄文時代後期では、西大宮バイパス№5遺跡で後期初頭の柄鏡形住居跡が2軒検出され、石鑑の

製作工程を復元できる資料が出土している。指扇下戸遺跡は、後期初頭の柄鏡形住居跡を含む集落が見つかっている。下加遺跡では、中期の集落域の北側から後期初頭の集落が見つかっている。加曾利E終末期から堀之内式期の柄鏡形住居跡が約10軒検出され、大型の石棒がまとまって出土した住居跡もある。小林遺跡(39)では、後期の住居跡と土壌が検出され、住居跡からは注口土器2個体がほぼ完全な形で出土している。天沼遺跡では後期の住居跡、集石土壌、土壌等が検出されている。

縄文晩期の遺跡では、在家遺跡の住居跡と土壌から晩期終末期の大洞A式、千網式土器が出土している。

(3) 弥生時代

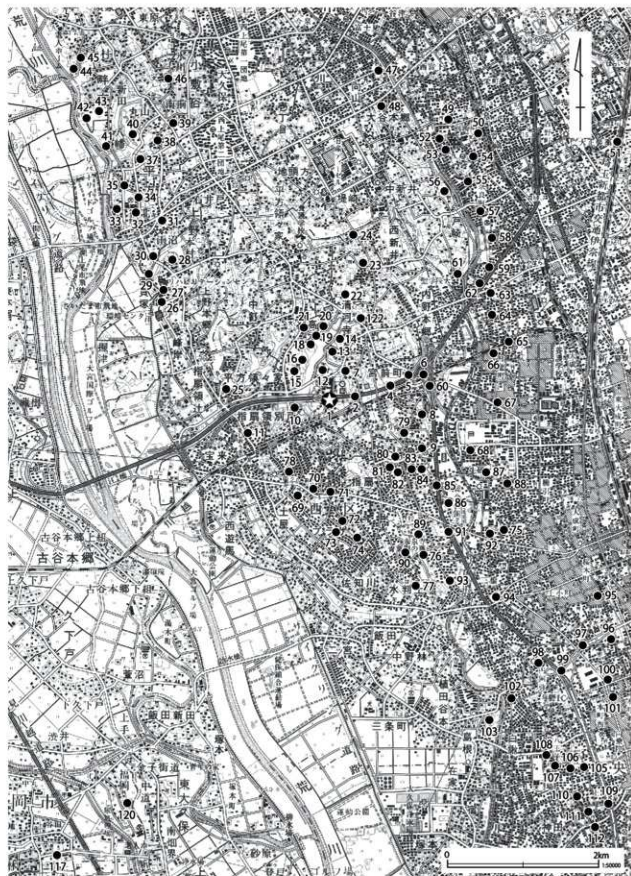
大木戸遺跡周辺では弥生時代の遺跡は少なく、雨沼Ⅰ遺跡と薬師耕地前遺跡から、後期の住居跡が検出されているにすぎない。南側に少し離れた地域では、内道西遺跡(111)から中期の住居跡が検出されている。荒川低地では大久保条里(115)に隣接する神田天神後遺跡、外東遺跡から後期の住居跡及び方形周溝墓、対岸のふじみ野市伊佐島遺跡(116)では後期の住居跡と断面「V」字状の大溝がそれぞれ検出されている。

(4) 古墳時代

大宮台地西縁、荒川低地に面する台地上に古墳及び古墳群がいくつか存在する。北から南に概観すると、上尾市殿山古墳は墳丘の3分の2を削平されているが、それでも現状で高さ2mが残存している。周溝のみの調査であるが、壺及び鉄鎌が出土し、5世紀前半頃と推定されている。古墳に隣接して方形周溝墓も4基検出された。时期的には方形周溝墓が古いと考えられる。

大木戸遺跡に隣接する古墳では、西大宮バイパス№5遺跡内に大塚古墳(3)が所在する。

さいたま市浦和区に入ると植水古墳群、側ヶ谷戸古墳群、白銀宮腰古墳群が並んでいる。白銀宮腰古墳群は権現塚古墳、白銀塚山古墳、御旗山古



第3図 周辺の遺跡(旧石器・縄文時代)



第4図 周辺の遺跡(弥生時代以降)

第1表 遺跡一覧表

番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	大木戸(西大宮BPN6)	旧、縄(早～後)、弥、古(前)、平、中、近	45	雲雀	縄(前)、古(前)、近
2	西大宮BPN5	旧、縄(早～後)	46	西通Ⅰ	縄(前～後)、中、近
3	大塚古墳	古	47	向山	縄(後)
4	西大宮BPN4	旧、縄(早～後)	48	後耕地	縄(中～後)、中、近
5	西大宮BPN2	旧、縄(早～後)	49	B-37号	縄(中、後)
6	西大宮BPN1	旧、縄(早～後)	50	B-44号	旧、縄(前、中)
7	清河寺前原	旧、縄(早、後)、古	51	三番耕地	縄、古、近
8	C-16号	縄(早)、古	52	山王	縄(早～後)
9	C-66号	縄(早、前)、平	53	奈良瀬戸	縄(早～晩)、平
10	C-39号	旧、縄(早)	54	B-43号	縄(中)
11	滝沼	縄(早～後)、弥、古、平	55	B-45号	縄(中、後)
12	C-98号	縄(早)	56	永川	縄(前、中)、奈、平
13	清河寺丸山	縄	57	B-46号	縄(中)
14	清河寺西原	縄、古	58	B-47号	縄(前)
15	C-33号	時期不明	59	西谷裏	縄(中)
16	C-31号	縄(早)	60	宮前	縄(早、前)、平
17	福田館跡	近	61	前戸崎	旧、縄(中、後)
18	高木道下	旧、縄、中、近	62	日進西谷	縄(中、後)
19	高木道下北	縄(中)、中	63	B-50号	縄(中～晩)、平
20	高木小明	縄、古(後)	64	B-53号	旧、縄(早、中、後)、古
21	高木水川	縄(中)	65	上加	縄(前、中)
22	C-23号	縄(早～後)	66	B-55号	縄(中、後)、古
23	C-92号	縄(中)、古、平	67	B-56号	縄(中、後)
24	C-93号	縄(中)、古、平	68	下加	旧、縄(早、中、後)
25	辻	縄(中)、古	69	琵琶島古墳	縄(早)、古(後)、近
26	榮師耕地前	縄(早、中)、弥(後)、古	70	琵琶島貝塚	縄(早、前)、古(後)
27	上尾市稲荷台	縄(早～中)、弥(後)、古(前、後)、奈、平	71	C-73号	縄(早)、古
28	天沼	旧、縄(早～後)、古(前、後)、中、近	72	指扇下戸	縄(早～後)、中
29	平方貝塚	縄(早、前)	73	大丸山	縄(草創期～後)
30	雨沼Ⅰ	旧、縄(早、中)、弥(後)、古(前、後)、中、近	74	五味貝戸貝塚	縄(早～中)
31	東谷	縄(後)	75	B-92号	縄(早～後)
32	宿北Ⅰ	縄、古	76	青葉園東	縄(後)
33	箕輪Ⅰ	旧、縄(早～後)、中、近	77	原	旧、縄(早～後)、弥(後)、古(前、後)、奈、平
34	宿北Ⅱ	縄(早～後)、古、中、近	78	C-45号	時期不明
35	箕輪Ⅱ	縄(前)、古(後)	79	C-67号	縄(中)、平
36	小塚	古(前)	80	C-65号	縄(中)、平
37	小塚Ⅱ	旧、縄(前)	81	C-64号	縄(中、後)、平
38	在家	旧、縄(前～後)、古(後)、中、近	82	C-63号	縄(中)
39	小林	縄(中、後)、平	83	C-62号	縄(中)、古
40	平方丸山	縄(前、中)	84	C-15号	縄(早、中)、古、平
41	畔吉貝塚	縄、古(前)	85	八幡耕地	縄(前、中)、古
42	畔吉	旧、縄(早)、古(前)	86	C-12号	縄(前、中、後)、古、平
43	八幡(石川山古墳)	縄(前、後)、古(前)	87	下加貝塚	縄、弥、古
44	殿山、殿山古墳	旧、縄(早～後)、古(前～後)	88	B-60号	縄(中、後)、古、平

番号	遺跡名	時期
89	C-59号	縄(中)
90	C-58号	縄(中)
91	下手	縄(前), 弥, 古
92	B-61号	縄(早～中), 平
93	C-7号	縄(中, 後), 弥, 平
94	並木貝塚	縄(早～晩)
95	B-70号	縄(中), 弥(後)
96	B-67号	縄(中), 弥(後), 近
97	小村田	縄(中), 近
98	山王東4号	縄, 平
99	小村田西	縄(中), 近
100	小村田東	縄(中), 古(後), 平, 中
101	与野東	縄(中), 弥(後), 古(後), 平
102	西浦1号	縄(早～後), 古(前), 後, 平
103	白銀宮腰	旧, 縄(中), 古(前), 後), 奈, 平
104	寺田	奈
105	与野西	縄(中), 古(後), 平

番号	遺跡名	時期
106	苗塚	縄(後), 古(後)
107	八王子前原	縄(早, 中), 平
108	八王子前原西	旧, 縄(早～後), 奈, 平
109	南上峰	縄(後), 古(後), 平
110	相野谷1号	旧, 縄(中)
111	内道西	旧, 縄(早～晩), 弥(中), 平
112	諏訪坂	縄(後), 弥(中), 古(前)
113	上大久保新田	弥(後), 古(前), 後), 中, 近
114	殿ノ前	古(後)
115	大久保条里	平, 中
116	伊佐島	弥(後), 平, 中, 近
117	鷲森	縄(前), 平, 中, 近
118	川袋	古, 平, 中
119	城山	中, 近
120	天神廻	縄, 古
121	根切	古, 平, 鎌
122	天王	縄(早, 前)

墳、かね山古墳等が含まれる。1996年に当事業団が実施した調査では、前期の集落跡と6世紀初頭から7世紀前半頃の古墳跡が検出された。

薬師耕地前遺跡の調査では古墳時代初頭の住居跡と方形周溝墓7基が検出された。数基の主体部には、ガラス小玉、管玉、鉄剣等が副葬されており、周溝から底部穿孔の壺形土器も出土している。

薬師耕地前遺跡の北側に近接している上尾市稲荷台遺跡は、市教育委員会及び当事業団が実施した発掘調査の結果、古墳時代前期の住居跡が多数検出され、大規模な集落跡であることが明らかになっている。これに対して雨沼Ⅰ遺跡、宿北Ⅱ遺跡、天沼遺跡では後期の住居跡が検出されているが、何れも軒数は少なく小規模である。

(5) 奈良・平安時代

根切遺跡(121)は旧入間川によって形成された自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は広いが、複数回の発掘調査によって、奈良から平安時代の密集する住居跡に掘立柱建物跡群が伴うことが明らかになった。この集落跡に接して大溝も検出されており、その性格が注意される。

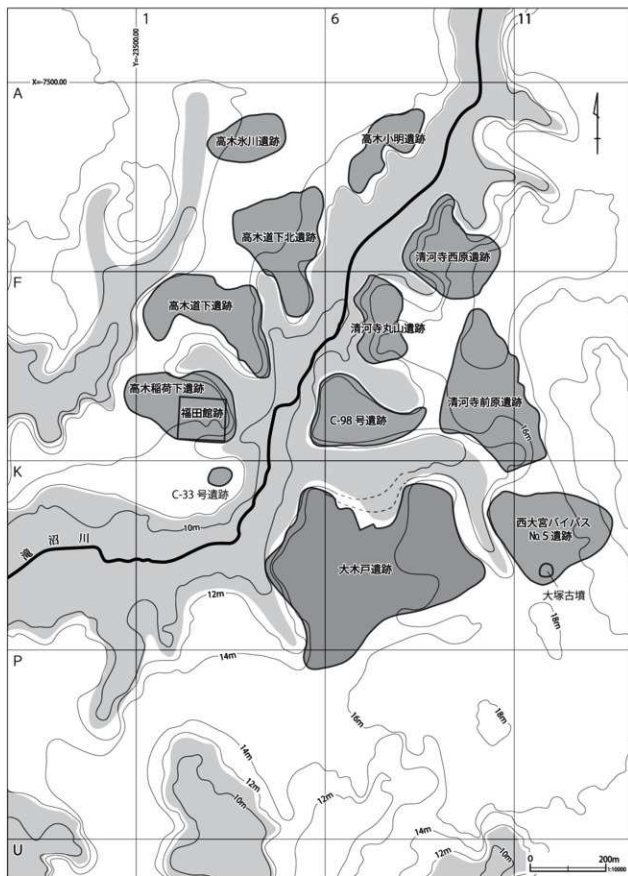
大久保条里は、根切遺跡の南西側低地に広がり、

調査では平安時代から中世にかけての地割のための溝跡が多数検出されている。

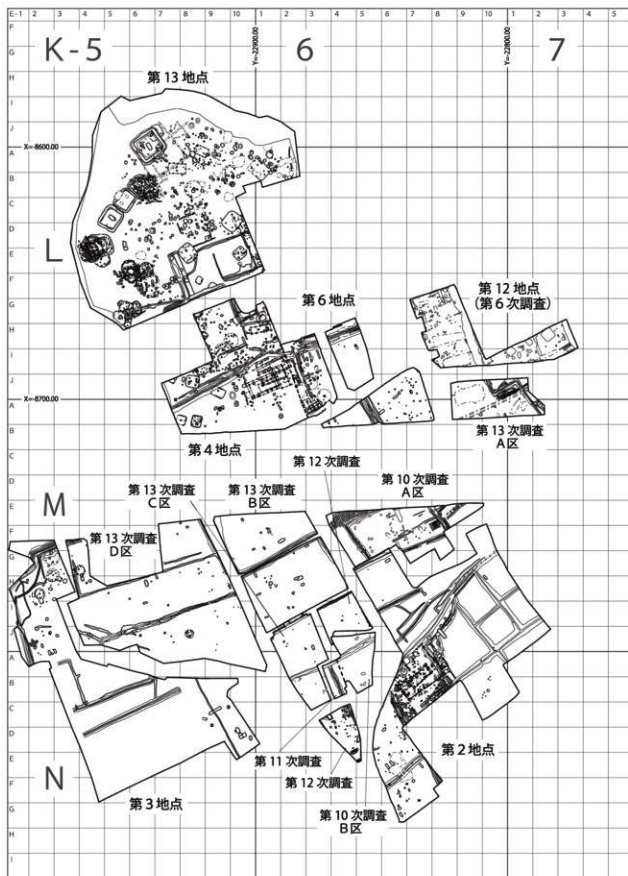
(6) 中・近世

大木戸遺跡(既報告分)からは、江戸時代の溝による区画と掘立柱建物跡が多く確認されている。現在も屋敷林を有する旧家が残り、当時の景観を髣髴とさせる。また、区画整理地内で滝沼川を挟んで対岸に福田館跡(17)があり、大木戸遺跡との関連が注目される。

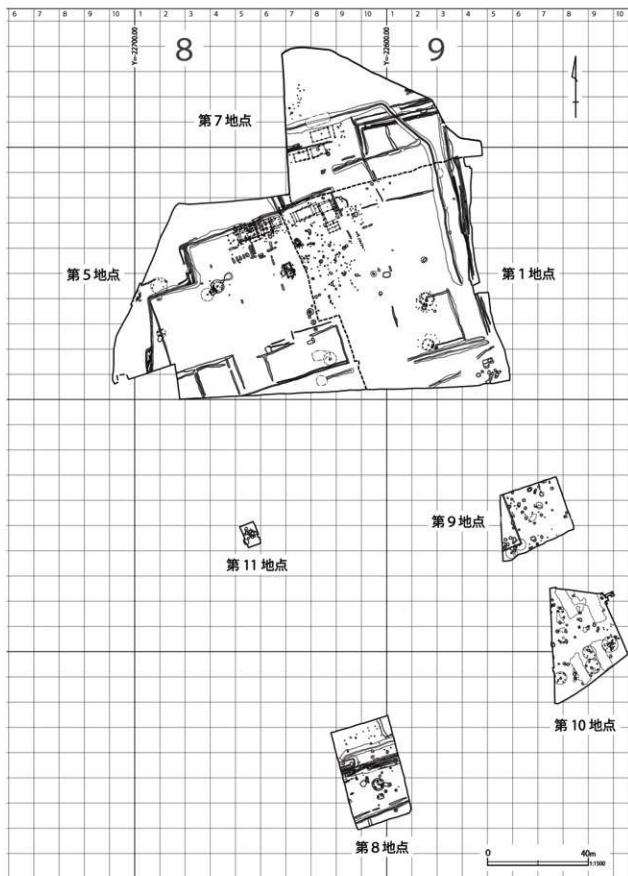
当該地域は、江戸時代の『新編武蔵風土記稿』によれば差扇(さしおうぎ)領、差扇村に含まれる。元和9年(1623)旗本山内氏の知行地となったが、山内氏の転出後は幕末まで幕府直轄領であった。指扇村は赤羽(赤羽根)、増永(升永)、大西、大木戸、下郷、五味ヶ谷戸(五味貝戸)、台の7組に分かれ、名主、組頭が置かれていた。村は滝沼川の左岸に位置し、村内を通る主要道は「川越道」と「与野道」である。「川越道」は村域の北東、清河寺村、上内野村境を通過して、「大木戸」の南側を抜けて川越に至っている。「与野道」は清河寺村、上内野村境を南下すると与野、北上すると上尾宿に至る道が通っていた。



第5図 大宮西部特定土地区画整理事業地内の遺跡分布



第6図 調査地点遺構全体図(1)



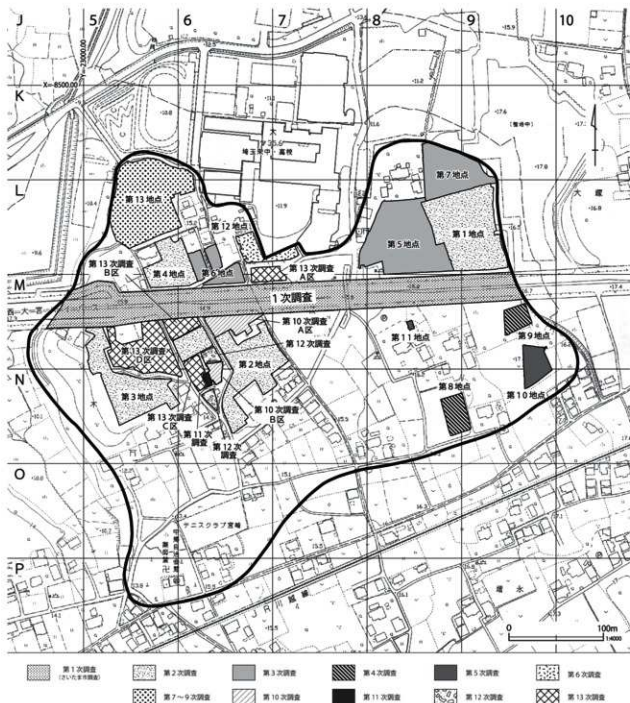
第7図 調査地点遺構全体図(2)

Ⅲ 遺跡の概要

1. 大宮西部特定土地区画整理事業地内の遺跡とその調査

大宮西部特定土地区画整理事業地内に所在する大木戸遺跡の発掘調査は、平成12年度以降、同事業に伴う事前調査として当事業団が実施している。

区画整理事業地内には、大木戸遺跡をはじめとして13箇所の遺跡が確認されている(第5図)。南西から時計回りにC-33号遺跡、福田館跡、高木



第8図 調査地点概念図

第2表 大木戸遺跡の調査経過(昭和61年度～平成25年度6月末)

調査次	地点	調査年度	原因	調査主体	報告年度	報告書
1	—	昭和61.62.平成5年度	16号B P	大宮市遺跡調査会	6年度	大宮遺跡48集
2	1～4地点	平成12年度	区画整理	埴埋文	20年度	埴埋文355集
3	5～7地点	13年度	〃	埴埋文	〃	〃
4	8、9地点	16年度	〃	埴埋文	〃	〃
5	10、11地点	17年度	〃	埴埋文	〃	〃
6	12地点	19年度	〃	埴埋文	未	未
7	13地点	20年度	〃	埴埋文	今回	埴埋文405集
8	〃	21年度	〃	埴埋文	〃	〃
9	〃	〃	〃	埴埋文	〃	〃
10	〃	22年度	〃	埴埋文	未	未
11	〃	〃	〃	埴埋文	〃	〃
12	〃	〃	〃	埴埋文	〃	〃
13	〃	23年度	〃	埴埋文	〃	〃
14	〃	25年度	〃	埴埋文	〃	〃
15	〃	〃	〃	埴埋文	〃	〃

稲荷下遺跡、高木道下遺跡、高木道下北遺跡、高木水川遺跡、高木小明遺跡、清河寺西原遺跡、清河寺丸山遺跡、C-98号遺跡、清河寺前原遺跡、西大宮バイパス№5遺跡、大木戸遺跡である。

そのうち、大木戸遺跡以外で発掘調査が実施されているのは清河寺前原遺跡、高木道下遺跡、高木道下北遺跡、西大宮バイパス№5遺跡の4遺跡である。

埼玉県埋蔵文化財調査事業団では、事業地内の遺跡を統一的な精度で効率よく調査するために、事業地内を網羅する統一グリッド表記を採用している。

グリッドは、X=-7500.000m、Y=-23500.000mを起点(A1・A1グリッド)として、100×100

mの大グリッドを設定し、北から南にA、B、C…、西から東に1、2、3…として大宮西部特定土地区画整理地内全体を覆っている。

大グリッドの中は10×10mの小グリッドとし、北から南にA～J、西から東に1～10とし、100区画に分割した。

従って、事業地内のグリッド表記は大グリッドと小グリッドを併記した形となる。具体的には、大グリッドと小グリッドをハイフンで連結した形態で表記した。例えば、L5-G3グリッドなどである。さらに隣接した複数のグリッドを表記する場合、小グリッドの隣接した記号を～で連結して表記した。例えば、L5-G3～4、あるいはL5-G～H5～6などである。

2. 大木戸遺跡の概要

大木戸遺跡は現在までに、15次にわたって調査が行われている。第2表に、現在(2013年6月)までに実施された調査の一覧を示した。

大木戸遺跡の第一次調査は、大宮市遺跡調査会による国道16号バイパス建設に伴う事前調査である。それ以降の調査は大宮西部特定土地区画整理事業に伴う事前調査として、埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

これらの調査のうち、第一次調査については大宮市遺跡調査会から調査会報告第48集として、第2～5次調査については埼玉県埋蔵文化財調査事業団から事業団報告第355集としてそれぞれ報告書が刊行されている。

今回は、第7～9次調査分の報告である。

また、平成19年に調査された第6次、平成22年度に調査された第10～12次、平成23年度に調査さ

れた第13次、平成25年度に調査された第14、15次については、今後整理報告を行う計画である。

ここでは、大木戸遺跡の既調査部分について、その概要を記す。

旧石器時代では、第一次調査で台地の東西両縁部から石器集中と礫群が検出されている。また、西縁の第3地点から後期旧石器時代前半期の石器群、東縁に当たる第10地点から後期旧石器時代後半期の石器群が検出されている。今回の調査範囲内でも、主として遺構の覆土の中に混入し、尖頭器やナイフ形石器などが出土している。

縄文時代では、早期の炉穴が第1、3、7地点から検出されている。今回の調査範囲内でも主として第1号方形周溝墓周辺から検出されている。炉穴からは、土器の出土がなかったため時期は特定できないが、周辺から早期の土器が多数出土しているため、当該時期の遺構と考えて良いであろう。

中期については、大木戸遺跡第1、5、7地点からなる東側のエリアで加曽利Ⅲ式期に集落の形成が始まり、称名寺1式期まで継続する。その一方で、今回の第13地点が含まれる西側のエリアでは称名寺2式期から集落の形成が始まり、堀之内1、2式、加曽利B1、B2式期を通じて集落が継続される。このように、本遺跡では谷を挟んで対

照的な様相を示している。

後期は広範囲から住居跡が検出されている。今回の調査地点でも主体となる時期である。時期的には、堀之内2式期から加曽利B2式期までを主体としている。今回の調査範囲から検出された最も新しい遺物は、安行2式の土器である。

弥生時代の遺構は、北西部の第4地点から住居跡11軒が見つかっている。集落の範囲は狭く、台地西縁部から北側に迫り出す径約50mの範囲に収まるようである。今回の調査範囲からは、当該時期の遺構、遺物は検出できなかった。

古墳時代の遺構は、今回の調査範囲から、住居跡と方形周溝墓が検出されている。時期は古墳時代の初頭である。

近世では、遺跡北側に迫り出す2つの台地突出部をそれぞれ奥部の平坦な部分から切り取るような溝が東西方向に掘られ、それに伴って掘立柱建物跡群が見られる。この2つのグループとは別に、台地奥の第2地点から、「コ」字状に柵列で囲まれた掘立柱建物跡が検出された。

今回の調査範囲からも区画溝が検出されているが、隣接する第4地点と一体的な用途をもった遺構であると考えられる。近世の屋敷に関わる区画溝であろう。

3. 大木戸遺跡の基本層序

当該地域は南関東系の降下火山灰と北関東系の降下火山灰の交差点にあたり、どちらの供給源からも遠距離である。そのため、立川ローム層の堆積は1.5m程度と薄く層位区分を難しくしているが、基本的には武蔵野台地の標準層に対比される。加えて、当該地域はソフトロームが厚い地域でもあり、地点によっては第2暗色帯の直上までソフト化している地点もある。

大木戸遺跡は範囲が広いので、地点により層厚及び堆積状況が異なり、どこまでソフトローム化しているのかによって第1暗色帯と第2暗色帯の

間の層位（第Ⅵ層）が明確な地点と分層不能な地点がある。また、第2暗色帯の上下分層ができる地点と、不明確な地点も認められる。

今回の調査範囲では、立川ローム第Ⅵ層に相当すると考えられる層が検出され、黒色帯はその上下に第1と第2が観察でき、さらに第2黒色帯も上下に分離することができた。

なお、調査に際してはピットなど狭く暗い遺構の底面など、確認が困難な遺構が幾つか存在しており、これらについては黒色帯まで掘り抜いてしまった可能性がある。

IV 第13地点の遺構と遺物

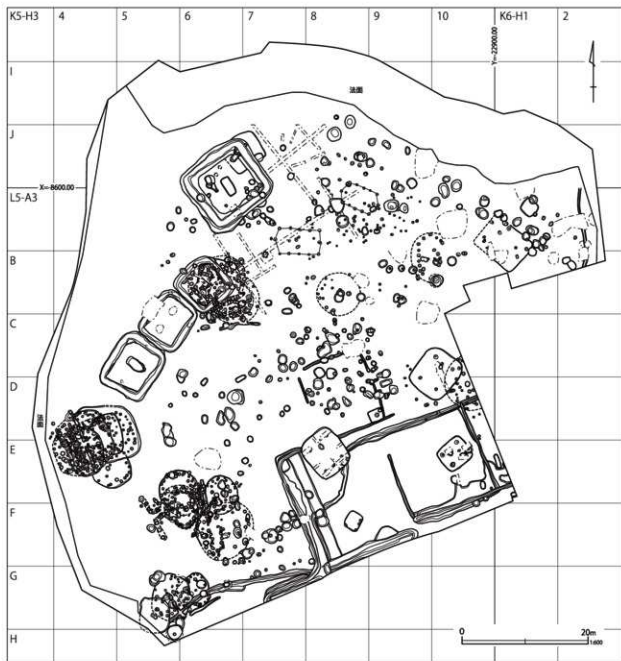
1. 概要

大木戸遺跡第13地点は遺跡の北西部、滝沼川の作った低地を望む台地の末端に位置している。第13地点の調査は平成20年から21年にかけて3回にわたって行い、旧石器時代から近世に至る幅広い時代の遺構と遺物を検出した。以下にその概要を

示す。

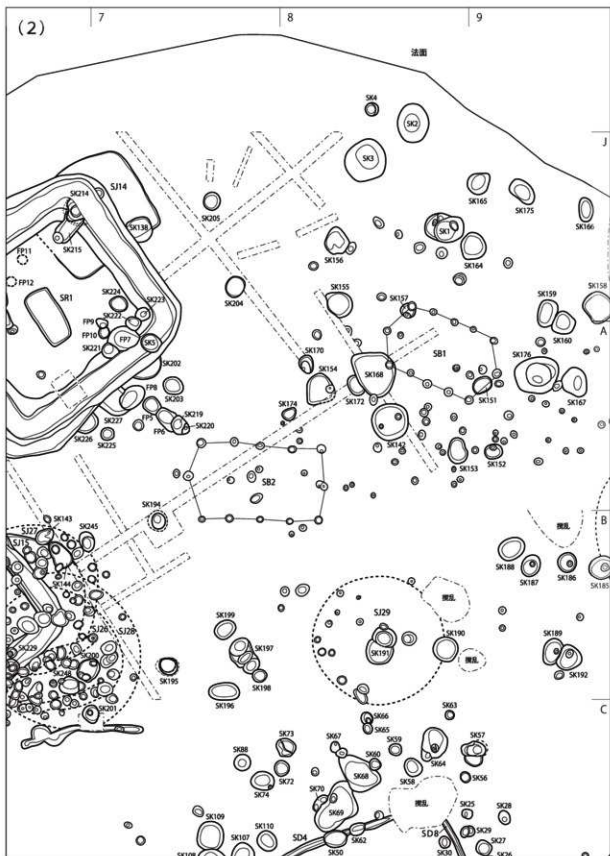
旧石器時代については、表土や他時期の遺構覆土中から石器が14点出土したものの、明確な形でのローム層中からの出土は確認できなかった。

縄文時代については早期、前期、後期の遺構と

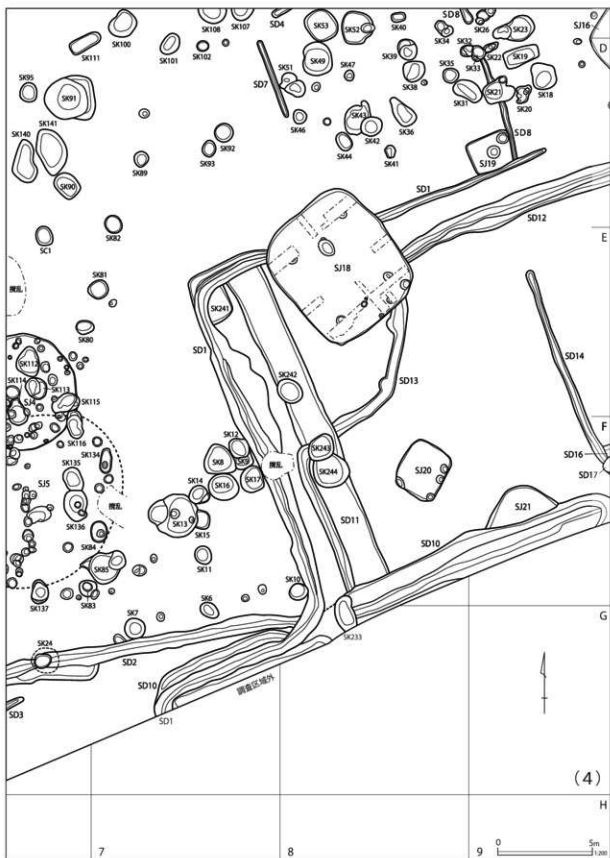


第9図 全体図

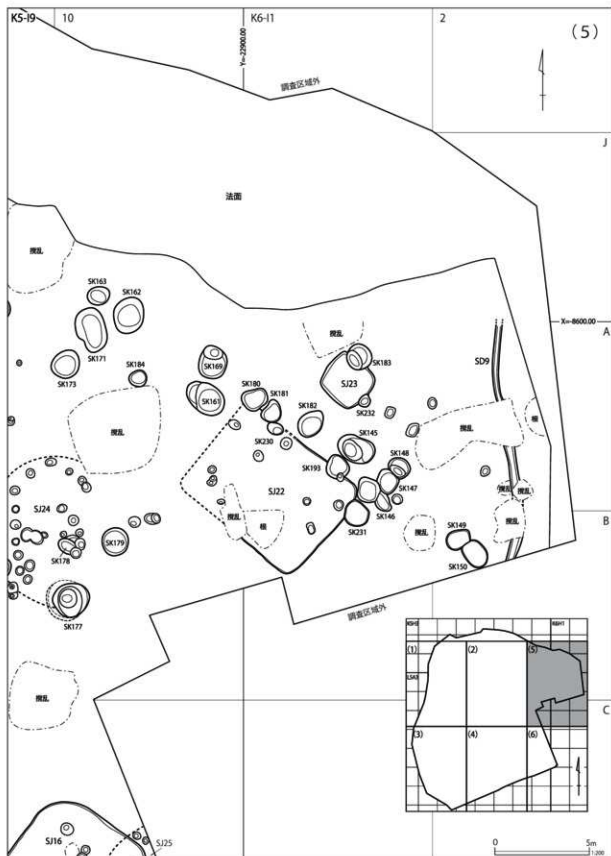


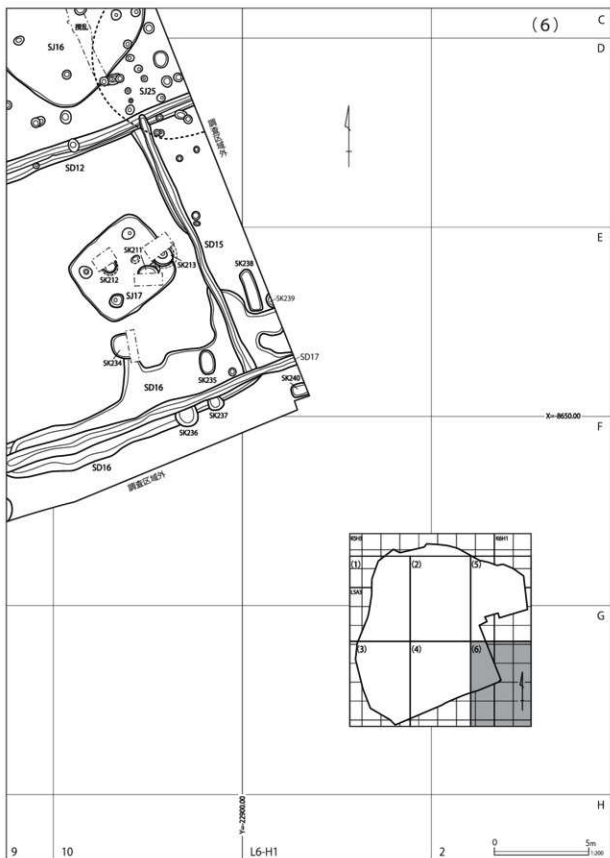


第11图 全体图(2)



第13図 全体図(4)





第15図 全体図(6)

遺物を検出し、中期については遺構が検出されなかったものの、遺物のみが出土した。

早期の遺構は、炉穴で12基検出した。弥生前期の土器では井草式が少量、夏島式が比較的多く出土した。沈線文系の土器は田戸下層式、田戸上層式が多少出土した。条痕文系の土器は野島式、鶴ガ島台式、茅山下層式、茅山上層式が多少出土した。前期の土器は花積下層式が多少、黒浜式が少量、諸磯a、b、c式が比較的多く出土した。十三菩提式もまとまった資料が出土した。前期の遺構は諸磯b式期の第14号住居跡、諸磯c式の第203号土壇があげられる。中期では遺構の検出はなく、

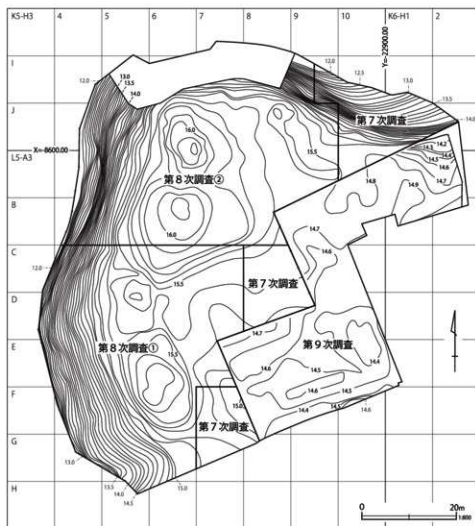
五領ヶ台式や加曾利EⅢ、Ⅳ式の土器片が少量見つかったのみである。中期の集落の主体は、谷を挟んで反対側に立地する北東側の台地上にあったと考えられる。後期では称名寺式1式、2式の土器破片を少量検出した。主体を占める堀之内2式と加曾利B1式、B2式の遺物は多量に出土した。遺構では堀之内1式期の住居跡が1軒、堀之内2式期の住居跡が9軒、加曾利B1式期の住居跡が3軒、加曾利B2式期の住居跡が3軒をそれぞれ検出した。土器以外の出土遺物としては石鍾、土偶、土製円盤などがあげられる。加曾利B3式期以降では、安行2式の土器破片を2片検出したのみである。

みである。

弥生時代の遺構、遺物は共に検出できなかった。

古墳時代の遺構は初頭の住居跡8軒と方形周溝墓4基を検出した。方形周溝墓では主体部が残存しているものも見られ第3号方形周溝墓からはガラス小玉や鉄剣などが出土した。奈良平安時代の遺構遺物は検出されなかった。

中世から近世にかけての遺物は火打石、砥石、古銭、陶磁器類などが各グリッドから出土している。近世の遺構は屋敷の区画溝を検出した。



第16図 第13地点地形等高線図

2. 旧石器時代の遺構と遺物

(1) トレンチの設定と内容

大木戸遺跡第13地点の調査では、方形周溝墓の溝覆土や調査区域内の表土など、後世の擾乱を受けたことが明らかな土層の中から旧石器時代の尖頭器やブレードが出土した。

一方、調査区域内には縄文時代の土壌や古墳時代の方形周溝墓などローム層を深く掘り込んでいる遺構が多数あり、それらの壁面にはローム層が露出していたが、そこからはいわゆる原位置に近い状況での旧石器や礫は、全く検出することができなかった。

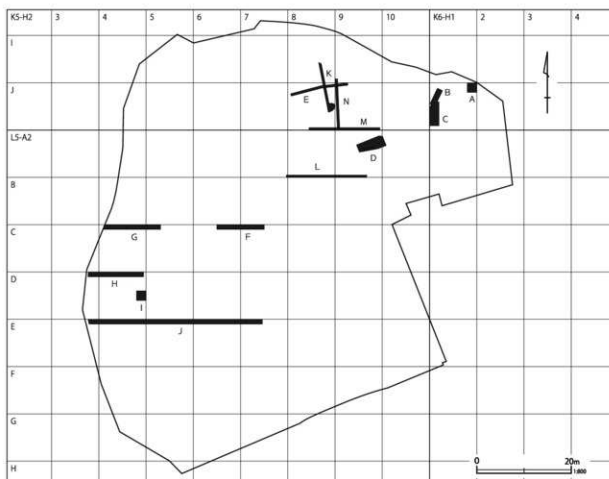
周辺には清河寺前原遺跡や大木戸遺跡第一次調査の地点など、良好な旧石器時代の遺跡が多数存

在しているため、調査区域内の各種遺構覆土中からの複数の旧石器出土を考慮して、調査区域内に旧石器時代の遺物分布を確認するためのトレンチを設定し、人力で掘削を行った。

第17図にトレンチの位置を、第18図に代表的なトレンチの壁面土層を示した。

土層注記に示したように、表土層、漸移層以下で確認されたローム層の基本層序は、立川Ⅲ～Ⅹ相当層である。

調査の結果、大木戸遺跡のトレンチからは、旧石器時代の遺構や遺物は検出できなかったため、調査区域内に石器集中はないと判断した。



第17図 旧石器時代の調査を目的としたトレンチの配置

(2) 石器

前述したように、旧石器調査のためのトレンチからは、旧石器時代の遺構や遺物は検出できなかったが、今回報告する大木戸遺跡の調査区の中からは、表土から出土したものも含めて、14点の旧石器時代の遺物を検出した。

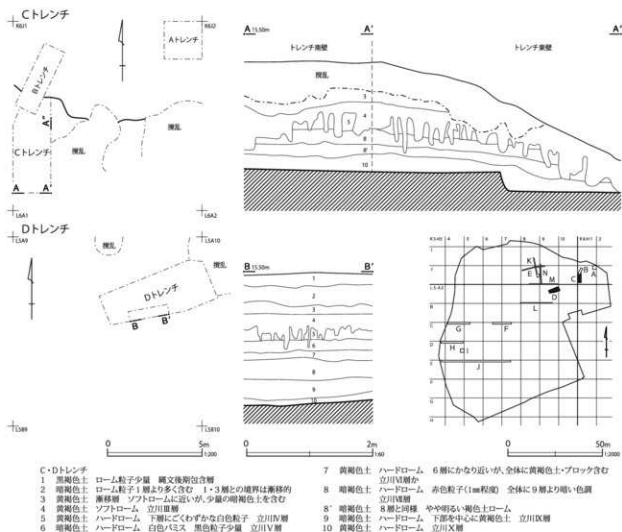
第19図1はチャート製のナイフ形石器である。基部のみが残存している。剥片を素材とし、打面を下位に用いて左側縁に急角度な調整が施されている。打面は残存している。

2は黒曜石製のナイフ形石器である。先端は欠損している。剥片を素材とし、打面を下位に用いて右側縁に背面側から急角度な調整が施されている。

打面が残存していることからナイフ形石器と判断した。

3は黒曜石製のナイフ形石器である。小型の幅広剥片を素材として打面を上位に用い、縁辺の二側縁に急角度な調整が施されている。上半部は欠損しているが、基部の形状から小型幾何形に近いと考えられる。

4は黒曜石製の槌状剥離を有する槍先形尖頭器である。僅かに先端が欠損している。平面形態はほぼ左右対称で、最大幅が基部の中央に位置した木葉形である。横断面形はレンズ状を呈する。いわゆる両面調整加工の槍先形尖頭器である。調整



第18図 トレンチ土層断面図

第3表 調査区域内出土旧石器観察表(第19、20図)

番号	出土位置	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
1	L5-E6	ナイフ形石器	チャート	[1.2]	[1.4]	0.5	0.7		26-1
2	SR1 2区 南溝	ナイフ形石器	黒曜石	[2.5]	1.5	1.3	0.9		26-2
3	K5-J7	ナイフ形石器	黒曜石	[2.5]	1.7	0.6	0.6		26-3
4	K5-J6 №1	槍先形尖頭器	黒曜石	[4.9]	2.2	1.9	6.6	極状剥離	26-9
5	表土	槍先形尖頭器	黒曜石	[4.9]	2.2	1.9	8.0		26-10
6	K5-J6 №2	槍先形尖頭器	頁岩	[6.3]	2.4	1.1	13.5		26-11
7	L5-B7	剥片	黒曜石	4.2	1.9	1.2	5.2		26-4
8	表採	掻・削器	黒色頁岩	5.5	4.5	1.1	74.7		26-5
9	K5-J8	剥片	黒曜石	[4.4]	2.1	0.9	3.4		26-6
10	L5-A8	剥片	黒曜石	[2.9]	3.1	1.0	7.2		26-7
11	SJ17	剥片	ガラス質黒色安山岩	7.1	3.0	1.8	23.4		26-12
12	K5-J8	剥片	黒曜石	5.3	2.5	1.3	7.3		26-8
13	L5-D4 №141 SJ11	剥片	黒曜石	[7.5]	3.0	0.9	23.0		26-13
14	L5-E6	剥片	黒色頁岩	8.1	2.9	1.9	23.2		26-14

加工は先端方向から極状剥離が行われた後、表面→裏面の順に平坦剥離によって丁寧に整形されている。最終的に細部調整で仕上げている。

5は黒曜石製の槍先形尖頭器である。先端が欠損している。平面形態はほぼ左右対称で、最大幅が基部の中央に位置する木葉形である。横断面形は半レンズ状を呈する。いわゆる半両面調整加工の槍先形尖頭器である。素材となる縦長剥片が剥離された後、平坦剥離によって表面が調整され、細部調整で仕上げられている。裏面は基部中心に平坦剥離で丸く整形されている。

6は頁岩製の槍先形尖頭器である。先端が欠損している。平面形態はほぼ左右対称で、最大幅が基部の下半部に位置した柳葉形に近い形状である。横断面形態はレンズ状を呈する。いわゆる両面調整加工である。調整加工の個々の剥離面自体が大きく、外形が鋸歯縁状に見えるため、全体的に粗い印象を受ける。素材は剥片と推定されるが、調整加工が全面に及ぶため不明瞭である。

8は黒色頁岩製の掻・削器である。やや厚手の剥片を素材とし、両側縁から末端にかけて刃部調整が施されている。左側縁の調整加工は比較的細かい剥離面で構成されるのに対し、右側縁と末端は大きな剥離面からなっている。さらに素材剥片

と刃部調整での風化の度合いが違うため、刃部再生した可能性がある。

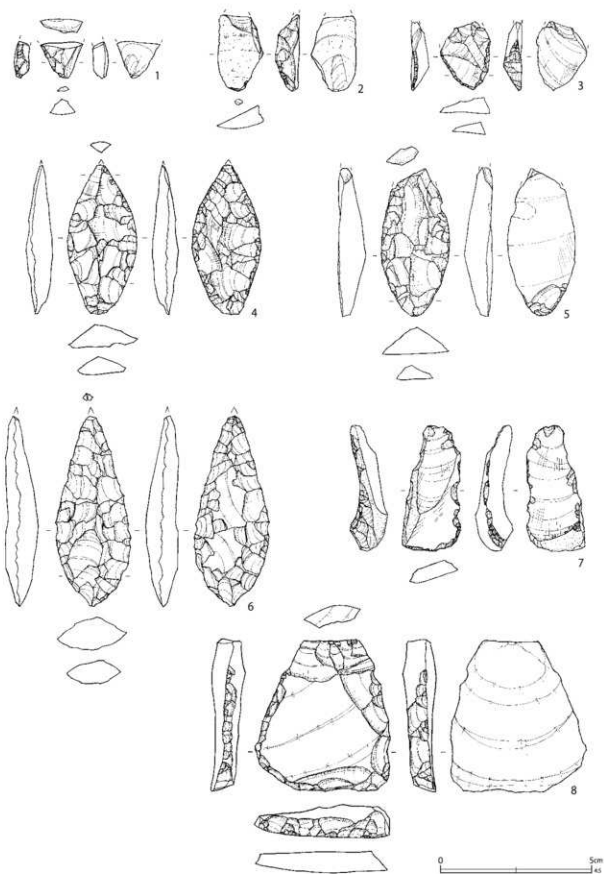
第19図7、第20図9～14は剥片である。いずれもグリッドや遺構覆土中より出土したものであるが、製作工程や剥片の形状から、旧石器時代の遺物と判断した。7は黒曜石の剥片である。点状打面から剥片自体が湾曲し以前の剥離面を大幅に巻き込んでいる。両側縁に調整加工が部分的に施されている。全体的に風化が進んでいる。

第20図9も黒曜石の剥片で点状打面から剥離され、下端部は欠損している。剥片がやや湾曲し、下端部に向かって先鋭になる。左側縁にノッチ状の調整加工が施されている。両側縁に微細剥離痕も観察される。

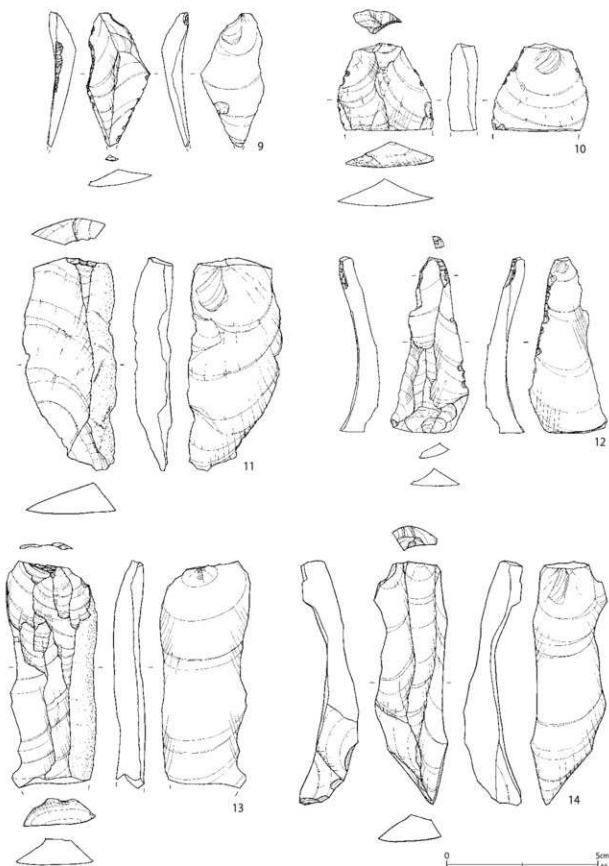
10も黒曜石の剥片で入念に打面調整されている。下半部が欠損し、両側縁に微細剥離痕が観察される。

11はガラス質黒色安山岩の縦長剥片である。背面構成から、180度反対方向からの剥離面が観察される。自然面が一部残存する。

12は黒曜石の縦長剥片で入念に打面調整されている。打面の両側縁に急角度な調整が施されている。剥片自体が湾曲し、以前の剥離面を大幅に巻き込んでいる。背面構成から末端に以前形成され



第19图 調査区域内出土旧石器(1)



第20图 調査区域内出土旧石器(2)

た打面が残されている。右側縁に裏面側からの調整加工と微細剥離痕が観察される。

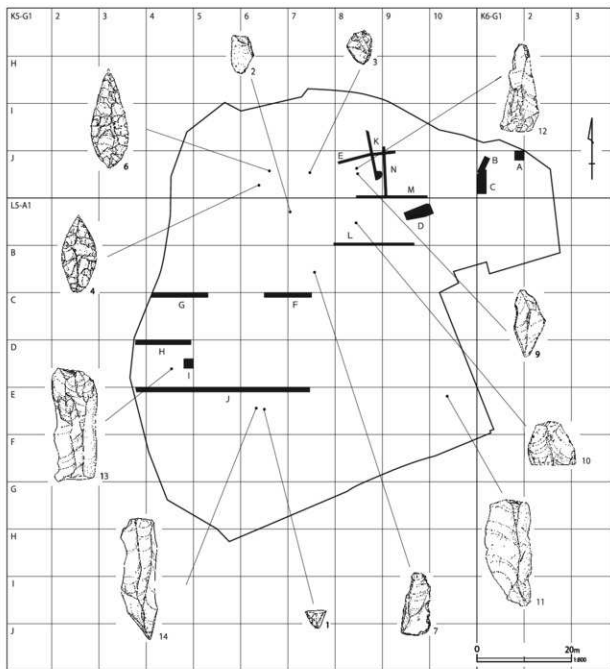
13も黒曜石の剥片で、下端部は欠損する。打面は非常に薄い、2面以上で構成されているようである。自然面が一部残存する。

14は黒色頁岩のいわゆる稜付石刃である。打面と背面の構成から打面調整を入念に行い、同一打面から石刃が連続して作出されている。剥片自体

は大きく湾曲し、末端が先鋭である。

旧石器の出土位置を第21図に示した。なお、遺構の覆土に混入して検出したものは、遺構の中心付近の位置にプロットし、グリッドで取り上げたものは、グリッドの中心にプロットした。

図を見ると、K5-J6～8グリッド周辺に尖頭器やナイフ類が集中する傾向が見られるが、いずれも方形周溝墓の溝覆土中からの出土である。



第21図 旧石器出土状況

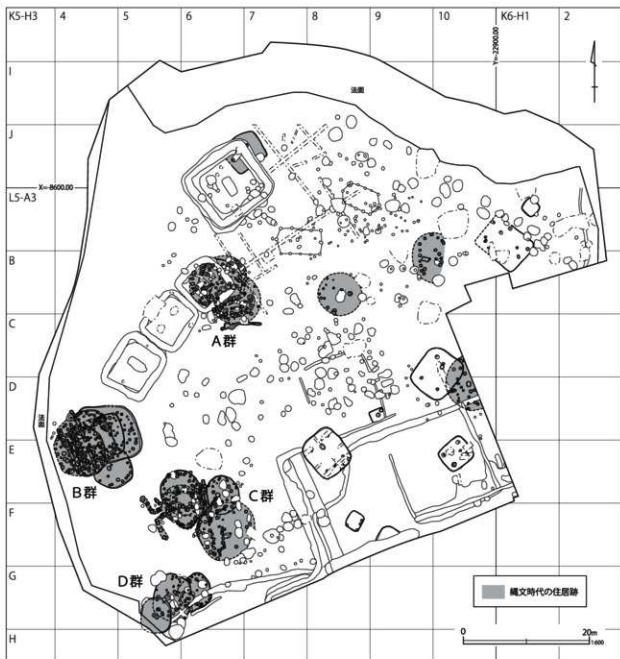
3. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

大木戸遺跡第13地点で検出した縄文時代の住居跡は21軒である。遺構の分布から見ると、重複した四つのブロックと、単独で検出した4軒に分けられる。時期別に見てみると、縄文前期諸磯b式期が1軒、縄文後期堀之内1式期が1軒、同2式期が9軒、縄文後期加曾利B 1式期が3軒、同B

2式期が3軒、不明4軒である。

以下に個別記載をしたが、重複した住居跡の出土遺物については、必ずしも完全に分離できていない。また、柱穴の帰属については、原則として調査時に覆土の特徴から判断したものを基本としたが、平面的な位置も加味して最終的に決定した。



第22図 縄文時代の住居跡

第1～3号住居跡 (第23、24図)

第1～3号住居跡は調査区の南端にあたるL5-G5～6グリッドで検出した。

覆土の断面観察から、第1号住居跡→第2号住居跡→第3号住居跡の順に構築されたことがわかった。時期はいずれも堀之内2式期である。

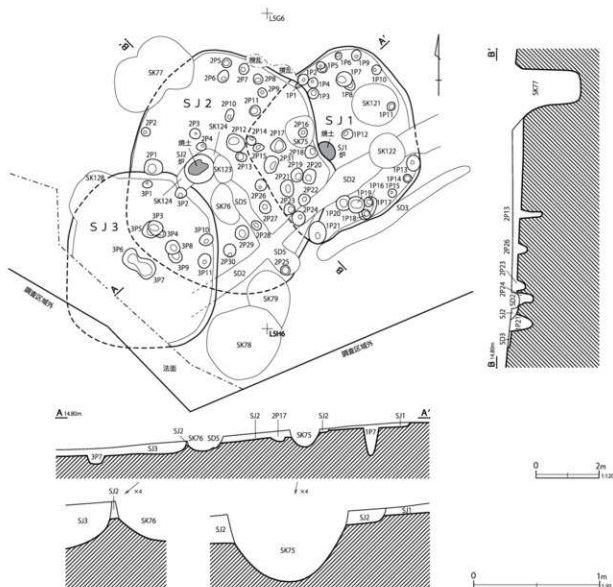
個別住居単位での事実記載では、柱穴と遺物の分離が完全にはできなかった。

柱穴名(番号)については、例えば第1号住居跡の3番目に付した柱穴名は、1P3のように調査時に記録した。ただし、調査時には重複関係を勘案

した上で、各柱穴がどの住居跡に帰属するかについて決定することが困難であるため、残された床面上で検出した各柱穴に対して、既述した方式でそれぞれの住居番号を付して表した。

今回の報告にあたっては、改めて柱穴を各住居跡に振り分けた。この時に一つの柱穴に対して、時期差のある二つ以上の柱穴の重複と見なし、複数の住居跡に振り分けた場合もある(重複振り分け)。

なお、遺物注記との齟齬を防ぐため、調査時に付した柱穴の番号は変更していないので、整理作



第23図 第1～3号住居跡

業時に第1号住居跡の柱穴と判断したものであったが、本書では現場段階での2P23などの名称をそのまま使用した。

第1～3号住居跡および周辺の柱穴について、深さを網濃度で表したものを第24図に示した。深さは柱穴底面最深部の絶対高で示し、浅いものを薄い色の網で示し、深いものをより濃い網で示した。

調査時の柱穴の底面認定は、覆土の固さなどを参照して行っている。これは、ある程度以上の深さを持った柱穴では、覆土と地山の色調の差を視認することが困難であったことによる。従って、調査時に底面と考えた位置が地山の土層境界であった可能性も否定しきれないため、柱穴の深さについては確実性を欠いている。

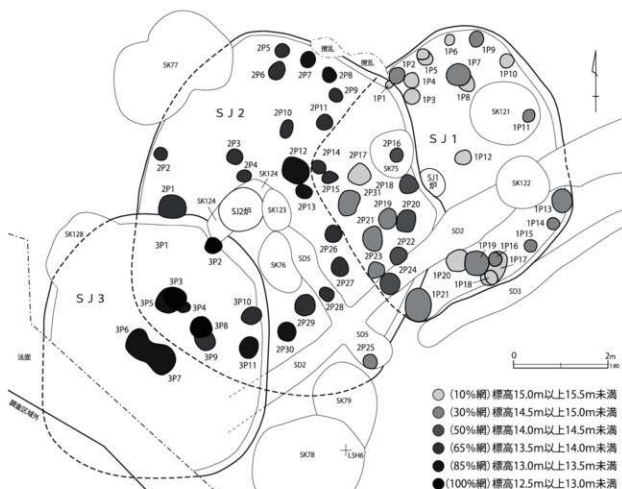
第1号住居跡(第25～27図)

第1号住居跡は、L5-G5～6グリッドで検出した。

他住居跡との関係は、第2号住居跡と重複し、第2号住居跡に壊されていた。他遺構との関係は、第2、3号溝跡、第75、121、122号土城と重複し、第2、3号溝跡、第75号土城によって壊されていた。覆土の遺存状態が悪く第121、122号土城との時間差は捉えられなかった。北西の一部が擾乱を受け、南西の1/3が第2号住居跡によって削平されていた。

住居跡の平面形態は隅丸方形で、規模は主軸5.4m、副軸5.3m、深さ0.2m、主軸方位はN-57°-Eである。

東側と北側の壁際で、柱穴の確認数が少なかつ



第24図 第1～3号住居跡柱穴底面の水準

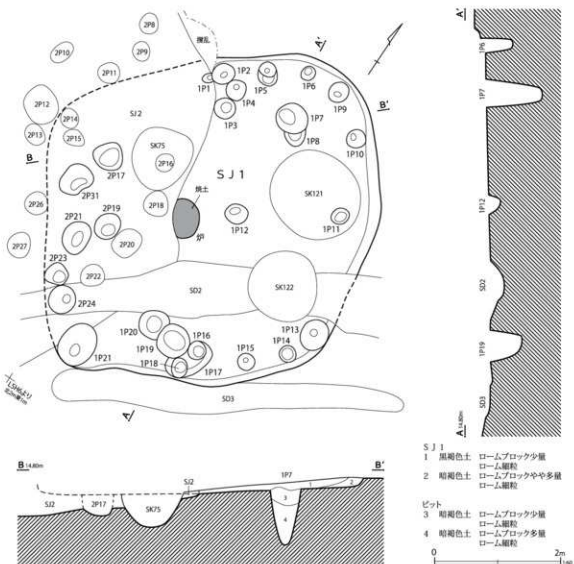
た。住居跡の中央付近から焼土を検出したので炉跡と考えた。焼土範囲は0.6m×0.4mである。

第1号住居跡と考えられる柱穴底面の水準は、

標高14.5～15.5m程度である。重複する第2号住居跡の柱穴底面標高は14.0～14.5mと深いので、概ね両者の識別は可能と考えられる。

第4表 第1号住居跡 ビット計測表(第25図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
1P1	15	22	1P10	30	50	1P19	50	53
1P2	37	53	1P11	28	51	1P20	50	33
1P3	35	22	1P12	34	17	1P21	72	84
1P4	33	24	1P13	50	65	2P17	50	31
1P5	38	31	1P14	26	63	2P19	52	63
1P6	23	7	1P15	26	48	2P21	44	52
1P7	52	91	1P16	29	58	2P23	36	47
1P8	33	36	1P17	77	16	2P24	44	100
1P9	34	71	1P18	30	30	2P31	55	60



柱穴の中で深いものは壁の周辺にやや大きい径で分布する傾向が認められた。2P14、2P15はやや深く、第2号住居跡に帰属する可能性がある。各柱穴の床面からの相対的な深さは第4表に示した。

住居跡の時期は、堀之内2式期である。

第1号住居跡の出土遺物を第26図に示した。

1～11、13、15～17は深鉢形土器の口縁部、12は注口土器の口縁部、14、20～32は胴部、33は底部、18、19は浅鉢形土器の口縁部破片である。

1～5は口縁部に沈線が巡る深鉢形土器の口縁部破片で、1、3は沈線下に単節L Rの縄文が施されていた。2、5には縄文が認められなかった。4は沈線下に単節R Lの縄文が施されている。

6～11は口縁部に刺突を有する隆帯を設け、その下位に沈線と縄文が施された堀之内2式の深鉢形土器である。8は一条の隆帯の下に横線と単節L Rの縄文が施されている。9は二条の隆帯下に

一条の横線が施されている。10は口唇部に一条、口唇部内面に一条の沈線が巡り、隆帯下に横線と単節L Rの縄文が施されている。11は突起を有し、非対称で「8」字状の貼付文が施されている。

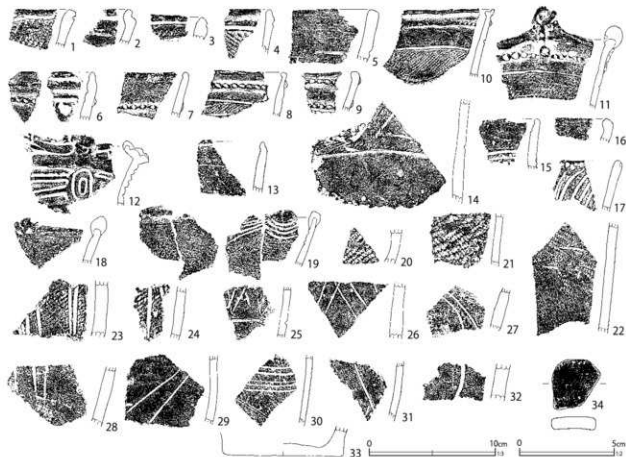
12は注口土器の破片で、口縁部は横線、貼付文が施され、体部の横線下には刺突が巡らされている。

13は沈線のみで文様が施されている。

14は胴部下位の破片で、横線と斜沈線が施され、沈線内には単節L Rの縄文が施されている。15、17は各種の沈線により文様が施されている。

浅鉢形土器の18、19は突起を施し、口縁部内面に沈線が巡っている。18は一条、19は四条巡り、外面は無文である。

20、21は器面に単節L Rの縄文が施されている。22は縄文施文後にミガキが施されている。23は単節L Rの縄文が横位に、沈線が縦位に施されている。24は単節R Lの縄文が施されている。25、26は



第26図 第1号住居跡出土遺物

斜沈線、27は曲線的な沈線が施されている。28～31は直線的な、32は曲線的な沈線が施されている。

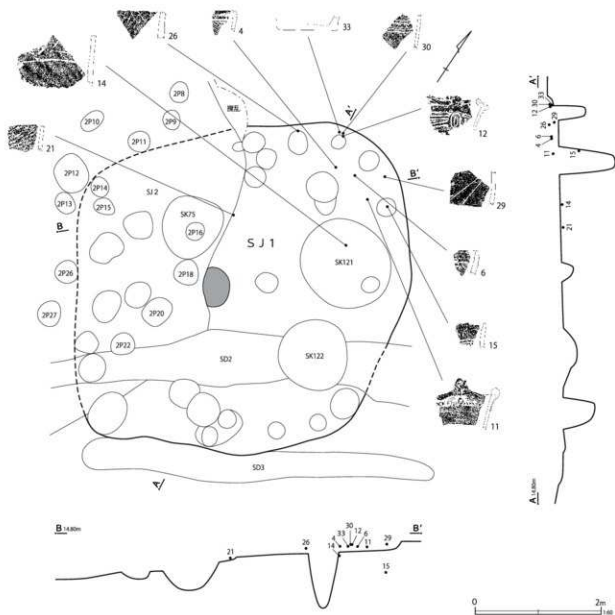
図示可能な石器は検出できなかった。

遺物出土状況を第27図に示した。

第1号住居跡は、覆土が20cm程度しか残存しておらず、なおかつ西側の広い範囲を第2号住居跡によって壊されていたため、出土遺物はいずれも小さな破片である。出土した破片の中で、位置が確認できたものは11点であり、残りの23点は覆土

で取り上げたものである。

破片の出土位置は、住居跡の北側コーナー付近に集中しており、垂直分布から層位を想定すると、エレベーションのA-A'、B-B'いずれの断面でも、遺物は第一次埋没土の上面から第1層にかけて分布していた。このことから、出土遺物の中で大部分のものは、第一次埋没土の堆積後に破片の状態で流入あるいは投棄されたものであることが想定できた。



第27図 第1号住居跡遺物出土状況(第26図対応)

第2号住居跡(第28～42図)

第2号住居跡は、L 5-G 5～6 グリッドで検出した。

他住居跡との関係は第1、3号住居跡と重複し、第1号住居跡を壊し、第3号住居跡によって壊されていた。他遺構との関係は、第2、5号溝跡、第75～77、79、123、124号土壌と重複し、第2、5号溝跡、第75～77号土壌によって壊されていた。

第77号土壌は大型の袋状土壌であり、B-B'の土層断面では、本来的な立ち上がりと考えられる曲線を越えて、第2号住居跡の覆土を大きく削っている。

北壁の一部が撓乱を受けていた。

住居跡の平面形態は隅丸長方形で、規模は主軸7.4m、副軸6.4m、深さ0.4m、主軸方向N-17°-Eである。

柱穴は床面全体に分布するが、北西側と南東側のコーナー付近では少なかった。住居跡の中央やや西よりから炉跡を検出した。規模は1.0m×0.9mである。

重複した住居跡の中から、第2号住居跡に帰属する柱穴の識別について、底面の水準から検討した(第24図)。

第2号住居跡に帰属すると推定される柱穴の底面水準は、概ね標高13.0～14.5mの範囲である。第1号住居跡との重複部分については、標高14.5～15.0mの底面水準のものが第1号住居跡に帰属

すると考えられるので、標高13.5～14.5mの底面水準のものが第2号住居跡に帰属すると判断できた。第3号住居跡と重複する部分の柱穴については、第3号住居跡固有の柱穴の深さが不明瞭なため、判断が困難である。

遺構確認面は北東から南西に向けて緩やかな斜面となっており、柱穴の深さの傾向も概ねこの傾斜に一致している。

住居跡の時期は、堀之内2式期である。

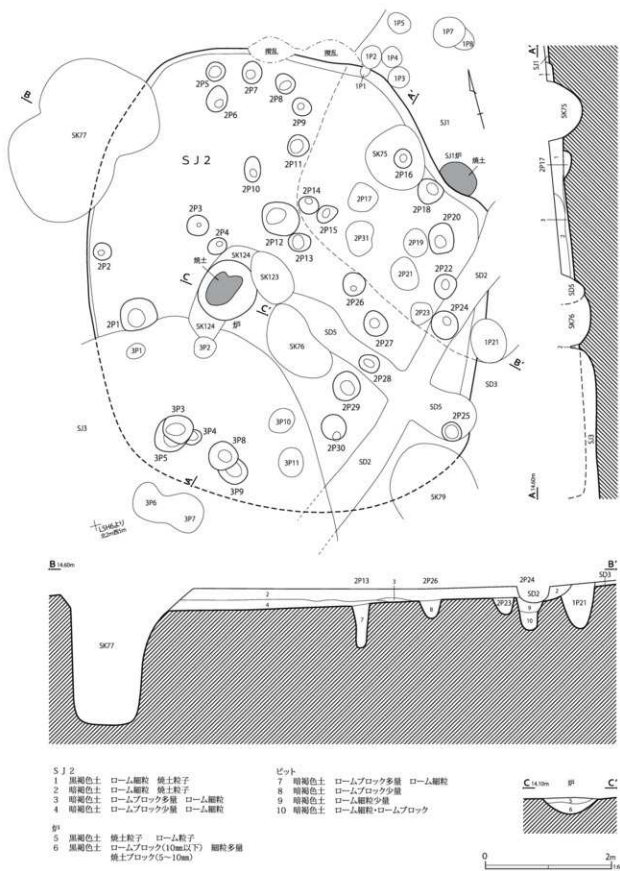
第2号住居跡の出土遺物を第29～37図に示した。第29図1は、深鉢形土器である。推定口径22cmで口縁部は最上段がわずかに内折する。時期は堀之内2式である。

2は、平口縁の深鉢形土器である。推定口径約30cmで口縁部の全周に対し約1/3が残存している。胴部から底部にかけて欠損している。文様はスベード文などの糸譜をひくもので、曲線文(「S」字等)、直線文が横位に連続して施されている。口縁部には横位の稜線が認められる。内外面は横位、縦位にミガキ調整が施されている。堀之内2式である。

3は、平口縁の深鉢形土器である。推定口径約33cmで全体の1/6以下の残存度である。胴部から底部にかけて欠損している。口縁部から胴部へ緩やかな曲線で推移し、胴部はわずかに張っている。文様は二～四本の直線が施され、全周が六～八に分割されているようである。直線に接してその内

第5表 第2号住居跡 ビット計測表(第28図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
2P1	55	13	2P12	63	88	2P27	41	52
2P2	28	27	2P13	35	73	2P28	33	49
2P3	34	38	2P14	33	41	2P29	47	28
2P4	30	30	2P15	33	15	2P30	43	52
2P5	31	66	2P16	32	96	3P3	47	111
2P6	42	45	2P18	44	86	3P4	28	49
2P7	34	71	2P20	47	75	3P5	47	66
2P8	33	80	2P22	37	74	3P8	45	99
2P9	31	45	2P24	45	77	3P9	39	42
2P10	38	31	2P25	30	32			
2P11	35	43	2P26	35	34			



第28図 第2号住居跡

部に弧線文が施されている。縄文時代後期前葉の堀之内2式である。

4は、胴部が緩く張る形態の深鉢形土器である。推定口径約30cmで口縁部や胴部下半を欠損し、全形を知りえない。文様の上端は横線で区切られ、その下に文様が施されている。地文は単節L Rの横位で、この上に斜沈線が施されている。全体の1/6以下の残存度である。

5は、浅鉢形土器である。口径14.2cm、器高5.8cmで口縁部はごく緩い波状となっている。外面はよく研磨され、無文である。内面には二条の沈線による渦巻文が四単位に配されている。二条の沈線により口縁部に沿って渦巻文と渦巻文を繋いでいる。底部はごく一部が残存し、「1本越え1本潜り1本送り」の網代痕が僅かに残されている。加曽利B1式である。

6は、底部である。底部から7cm程度の残存部位があり、文様の下端部の様子がわかる。三角形区画文内に単節L Rを充填している。底部は完存しているが、無文である。堀之内2式である。

7は、平口縁の浅鉢形土器である。口径25cmで突起はおそらく四単位に施される。底部から胴部へ丸みをもって立ち上がり、くびれて大きく口縁部が外傾する形態である。縄文は単節L Rである。内面は口縁部近くに二条の沈線が施され、沈線間に円形の刺突が施されている。堀之内2式である。

第30～36図に破片を示した。

第30図は、器面のほぼ全面に縄文を施した深鉢形土器の破片である。8～31は口縁部、32～72は胴部の破片である。8～12、14、20、21は、口縁部外面に沈線が見られ、口唇内面が肥厚し、その下端に沈線あるいはくぼみが認められる。13には縦位の沈線が見られる。15、17～19は二～三本一単位の沈線で、二次区画文に付着するような三角形を描き出している。16、24、25は半截竹管で施文され、16、24は三角形の幾何学模様、25、26は一次区画文に付着する紡錘状の模様が施されている。27

は懸垂文が見られる。30、31、33、34には、磨消しをもつ横帯が見られる。35は、連続王痕を持つ隆帯が縦位に貼付されている。

8、13、20、27、30、31は無節L、9～12、15、16、21～26、29、33～35は単節L R、14、17～19、28、32は無節Rである。

36～72は、縦位および斜位の沈線が施されたものである。40は、単沈線による蕨手状の模様が認められる。41は地文縄文の上に二本一對の沈線で描かれている。42は、半截竹管による曲線が三重に施されている。45、56、62も半截竹管が用いられ、いずれも三角形の幾何学模様が描かれていると考えられる。65、68、70は、三～四本一単位の沈線により渦文と斜線が描かれている。71、72は縄文地文の上に沈線で模様が描かれている。

第31図は横位の区画文と各種の単位文が見られ、それらに縄文を充填するものである。

73～83は、三角形の幾何学文が描かれている口縁部破片である。84～87は口縁の無文部で、割れ口以下に幾何学文が描かれていると考えられる。

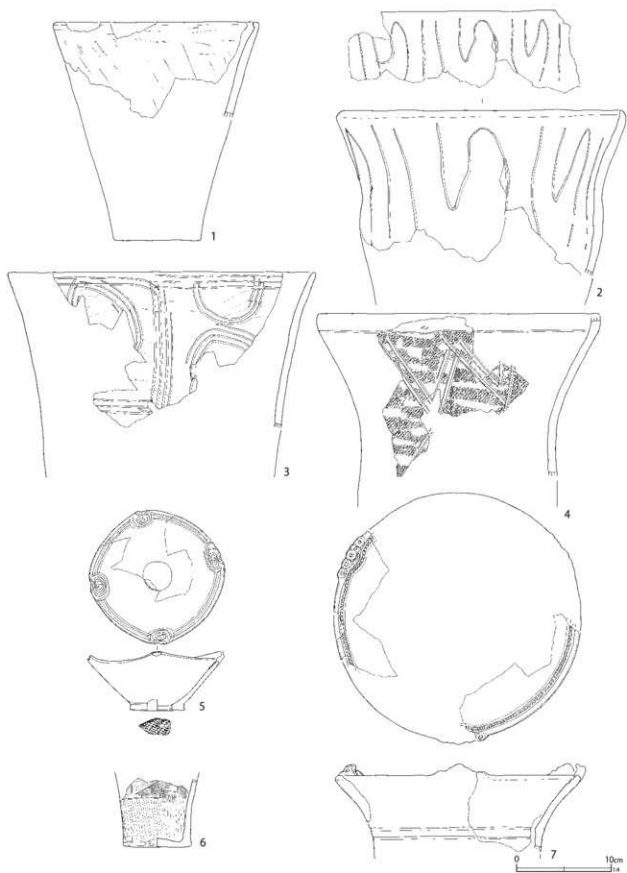
73、74は、口縁内面に痕跡程度のくぼみが認められる。75は口縁内面が大きく肥厚し沈線が一条施されている。76～78は、口縁内面が「く」字に屈曲している。

83は口唇部外面の細い隆帯に刻みが見られる。

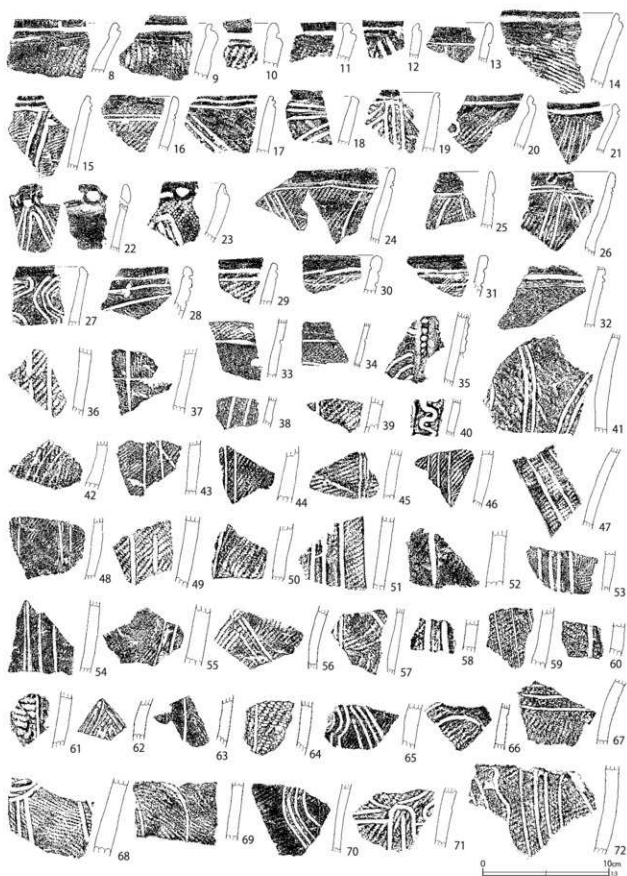
88～103は、刻みを施した細い隆帯が口縁を巡るものである。隆帯下には、磨消しで描かれた幾何学文が存在していると考えられる。88、89、91、94、96、98、100、102、103は、口唇部内面が「く」字状に屈曲しており、92、93、95は口唇部内面が多少屈曲し、99は口縁部内面に一条の、101は口縁部内面に二条の沈線が巡っている。また、89、91、97、101、103には、「8」字状の貼付が施されていた。

104～126は、幾何学文が描かれている。116、121、122は同一個体と考えられる。

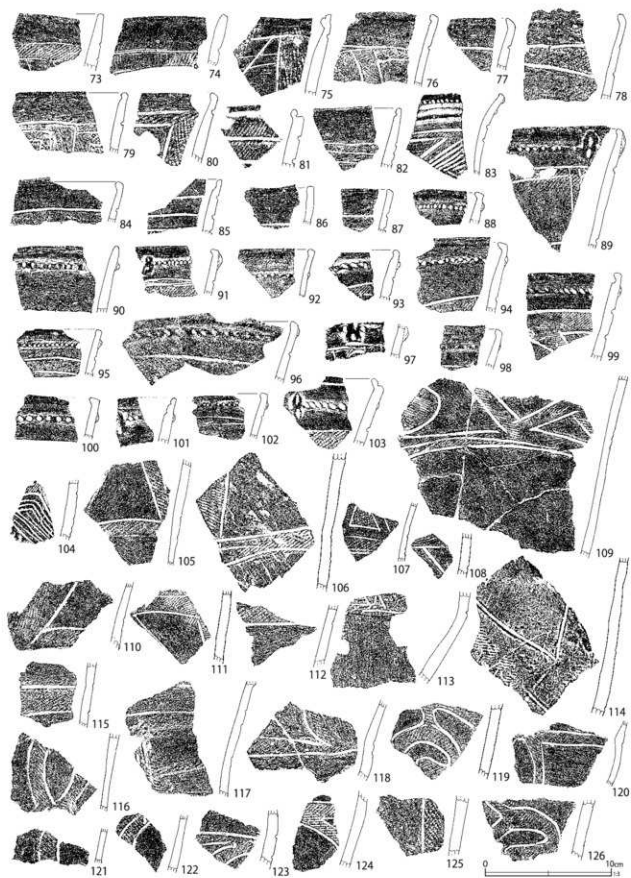
第32図は、原則として縄文を施文しない深鉢形土器である。127、128は同一個体と考えられる。



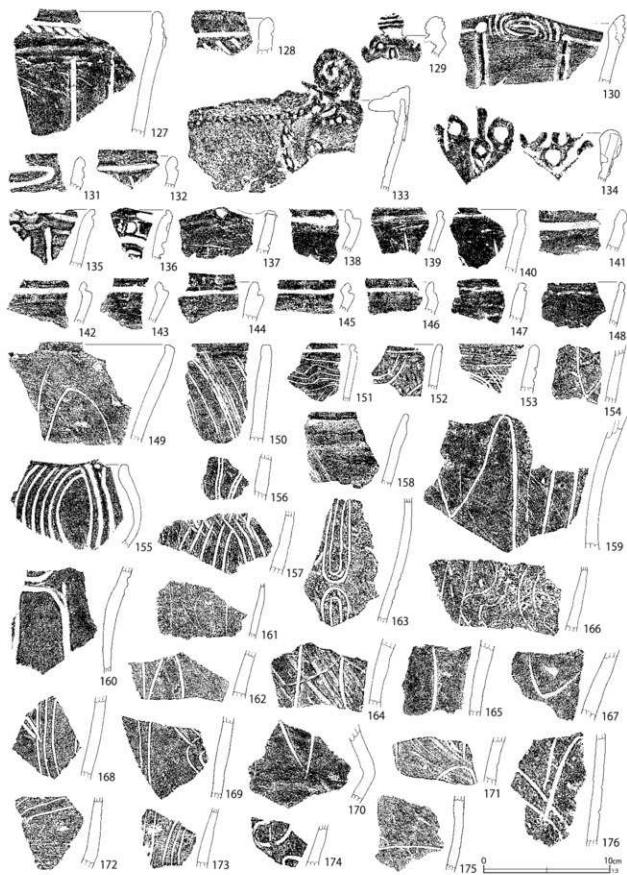
第29图 第2号住居跡出土遺物(1)



第30图 第2号住居跡出土遺物(2)



第31图 第2号住居跡出土遺物(3)



第32图 第2号住居跡出土遺物(4)

129には円形の刺突、円形の突起とその直下に「8」字状の貼付文が施され、130には波頂部に同心円状の模様を描かれ、両端には円形の刺突が施されている。134には左右対称の耳状突起とその直下に丸い貼付文と刻みの入った紐が施されている。138～148には、口縁部外面に太い沈線が一条巡っている。

149には単沈線で曲線状の模様が、150には斜位の集合沈線が、151には細い不安定な沈線で三角形と波状の模様が、152には二本一対の沈線で円形の模様が、153には三本一対の沈線で三角形と円形を組み合わせた模様が描かれている。152には無節Rの縄文が施文されている。155は浅銭で、沈線により紡錘状の文様が描かれている。157は地文に単節L Rの縄文が施文され、沈線により紡錘状の文様が描かれている。158は口縁直下に幅広い横位のくぼみが見られ胴部には斜位の沈線で施文されている。159、164、165は太い沈線で緩やかな曲線状の文様が描かれている。160、161は縦位の沈線とともに縦長の隅丸長方形または楕円形の模様が描かれている。163は地文に無節Rの縄文が施され、二重の沈線による縦長楕円形の模様が描かれている。167は太い沈線による「J」字状の模様が描かれ、点が施されている。168は三本一対の沈線により紡錘状および斜線が、169は二重の沈線により円形を連結した文様と斜線が、170～176でも曲線を中心とした模様が施されている。

第33図も縄文を施文しない深鉢で胴部が緩く張る器形のものが多い。190は胴部が膨らむ深鉢で、216と同一個体と考えられる。

206は、太い斜位の沈線に同方向緩傾斜で交差する細くて浅い沈線が見られる。220は、斜位の変形楕円形文が見られる。222、223は横位の沈線で文様が描かれ、225～227は、口縁部に二本一対の沈線が描かれ、これに付着する三本一対の沈線で胴部に三角形の幾何学文様が施文されている。

第34図も縄文を施文しない深鉢形土器で、232

～250は沈線、251～275は櫛歯状工具、276～279は太沈線で文様が描かれている。

第35図280～293は、縄文のみが施文された破片である。307～311、314、315、317～319は、内面に模様が見られる口縁部の破片である。312、316、320は口縁部の突起である。第35図321～324、第36図325は注口土器の破片である。325～331は底部破片、332～336は土製円盤である。334は、表面からの補修孔が見られる。

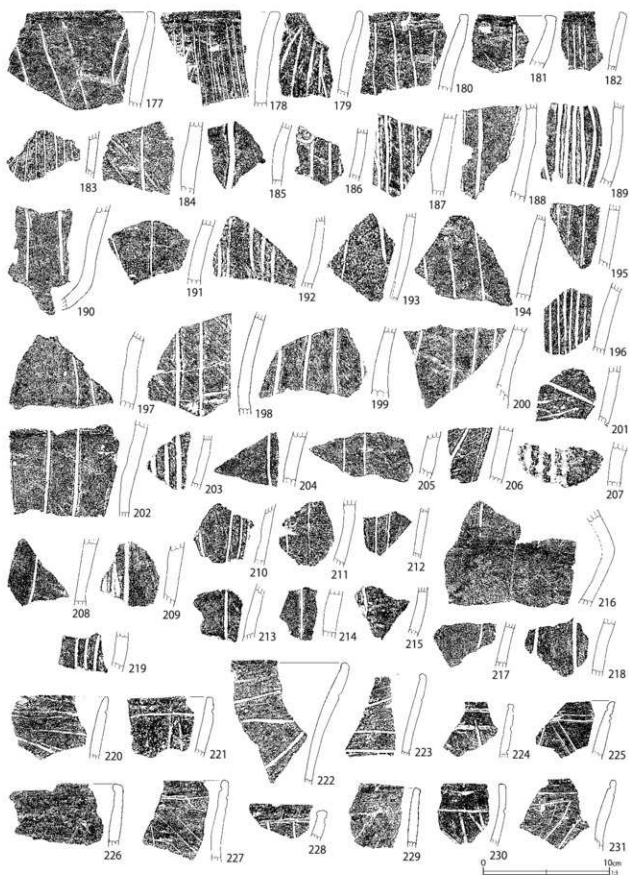
337は筒形土器の胴下半部の破片で、底部が約半分残っている。おそらく左側面の破片で、底部の推定径は6.0cm、現存高は4.8cmである。完形であれば、20cm弱の中型土器になると考えられる。底部の中央部は、ほとんど欠けているが、中央に円形の開口部を持つ土器であろう。土器の内面には植物の茎状のものでナデられた痕が残っている。割れ口の観察から、土器の外形を成形後、内面に粘土を補強し、整形したと考えられる。胴部の中央と下部を分かつ部分には三条の併行する沈線が横位に施され、底部との境には一条の沈線が横行する。この三条の沈線と底部を区画する沈線の間は、斜め方向の細く浅い数条の沈線で充填される。斜めの沈線は右上からの沈線が施された後、左上からの沈線が施されている。色調は茶色味があった褐色、胎土は細密で焼成も良好である。後期前葉末の土器である。

第2号住居跡出土の石器を第37図に示した。

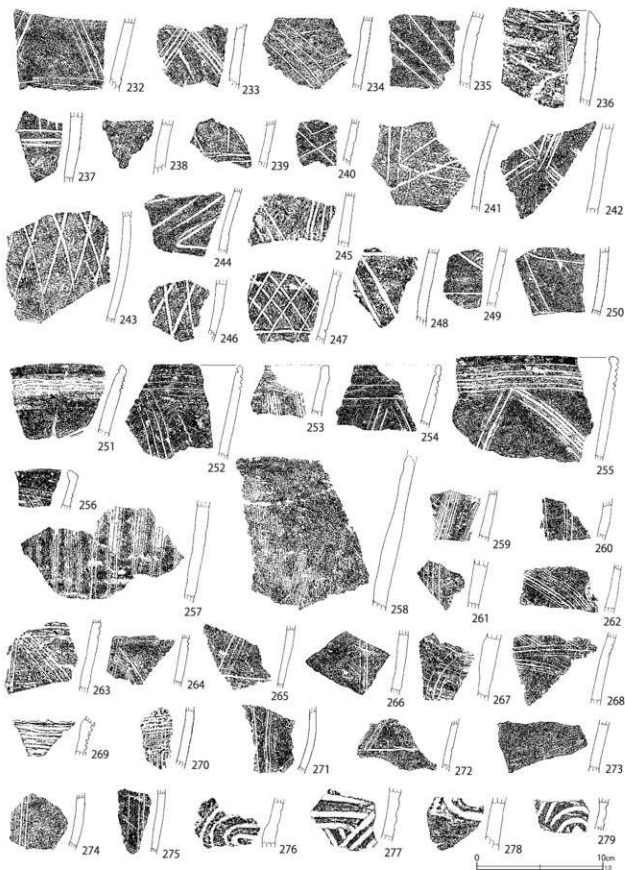
338は砂岩製のスクレイパーである。剥片の右側縁は裏面調整されている。上端に敲打痕が観察され、敲石を転用したものである。

339、341は分銅形の打製石斧である。全体的に風化が進んでいる。339は砂岩製であり、下半部が欠損するが、両側縁にわずかながら挟りがみられる。341も砂岩製であり、分割した礫を素材とし、括れ部に敲打痕がみられる。括れ部から刃部にかけて部分的に摩耗している。

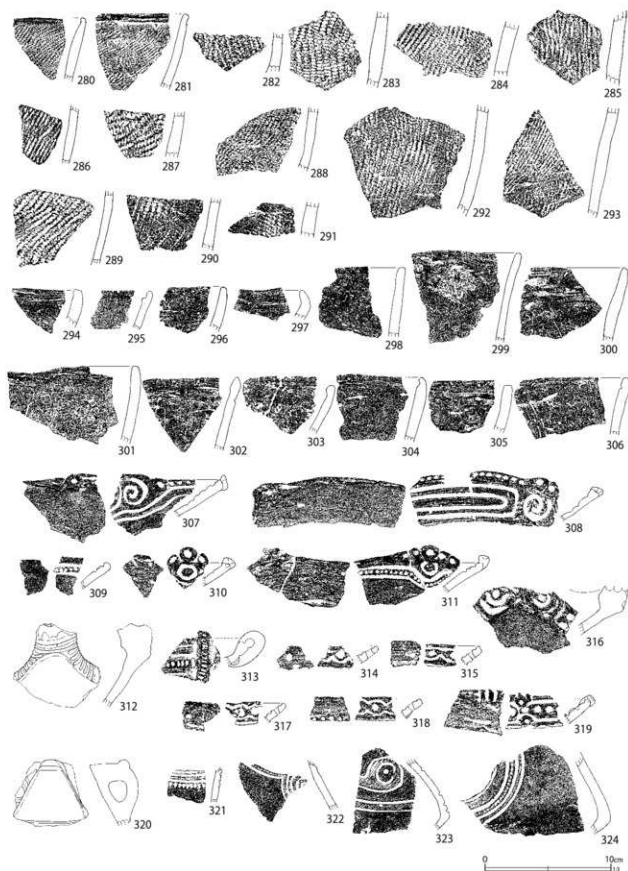
340、342は磨石である。340は砂岩製で、扁平な



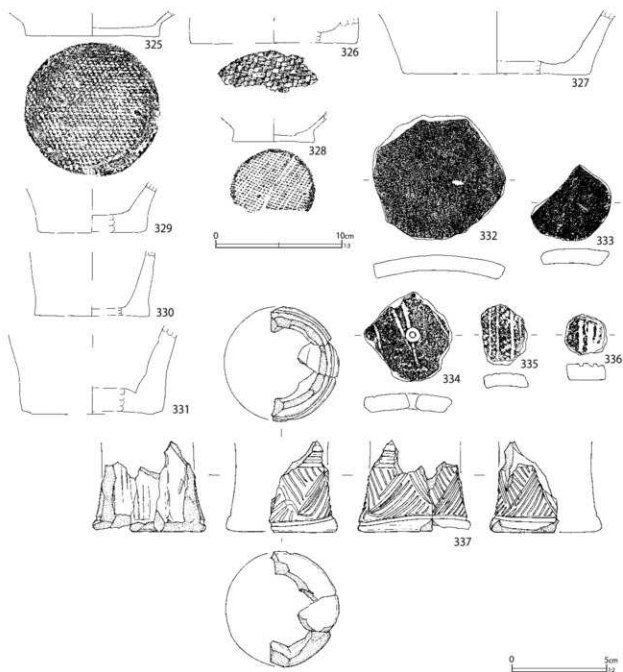
第33图 第2号住居跡出土遺物(5)



第34图 第2号住居跡出土遺物(6)



第35图 第2号住居跡出土遺物(7)



第36図 第2号住居跡出土遺物(8)

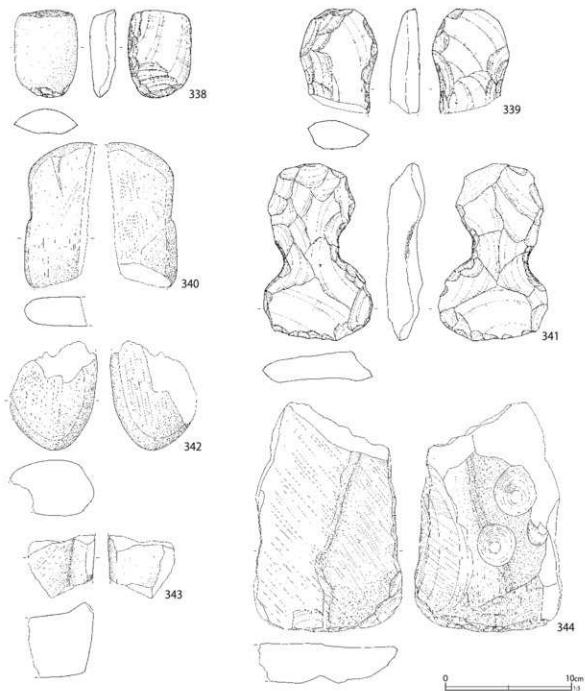
礫を利用し、光沢が見られるほど摩耗している。一部が黒色化している。342は安山岩製で、上端部が欠損する。楕円礫を利用し、平坦面はかなり摩耗している。

343、344は石皿である。343は安山岩製で、右側面以外が欠損する。側面が直角で縁部と皿部が明

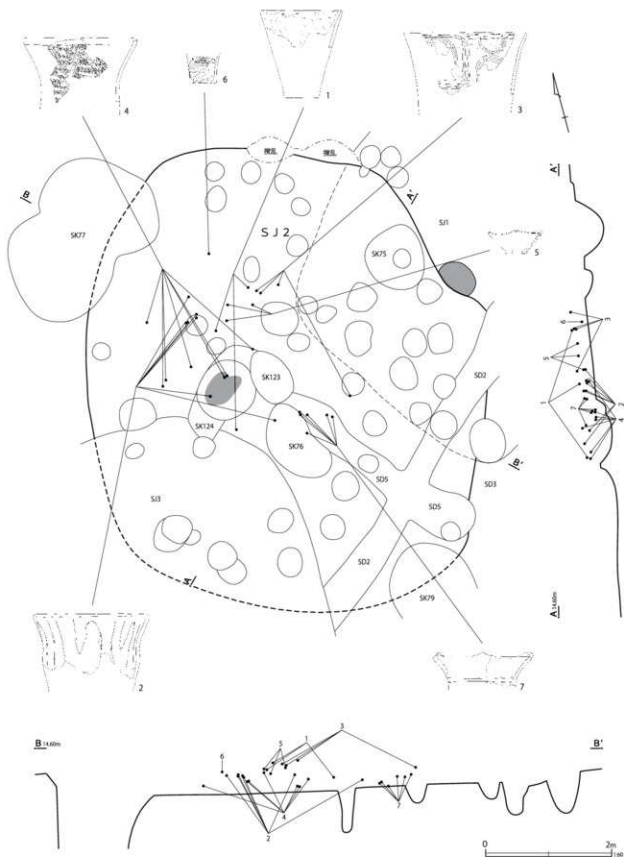
確に作り出されている。定形的な石皿の破片である。344は緑泥片岩製である。周辺が欠損し、全体の大きさ、形状は不明である。表面の皿部と想定される部分に僅かに段差と磨面が、縁部には剥落が見られる。裏面には、複数の漏斗状の凹穴が見られる。

第6表 第2号住居跡出土石器観察表(第37図)

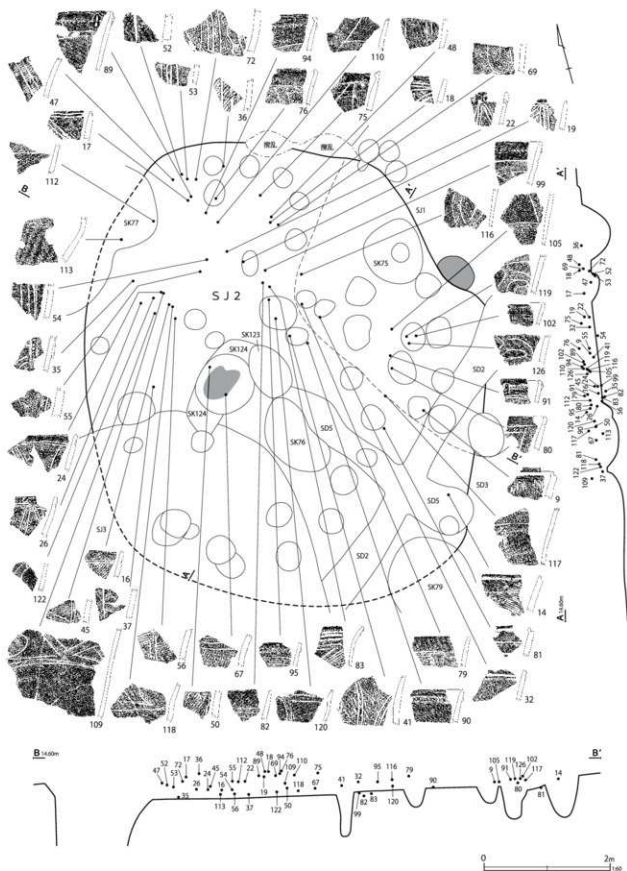
番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
338	スクレイパー	砂岩	7.0	4.95	2.0	112.4	SJ2 P8	60-1
339	打製石斧	砂岩	[8.4]	6.05	2.3	140.8	L5-G5 №496	60-2
340	磨石	砂岩	[11.6]	[5.6]	2.4	249.6	L5-G5 №324	60-3
341	打製石斧	砂岩	14.1	8.6	3.1	325.3	L5-G5 №99	60-4
342	磨石	安山岩	[8.8]	[7.0]	4.5	259.3	L5-G6 №245	60-5
343	石皿	安山岩	[5.0]	[5.4]	6.0	142.5	SJ2 P22	60-6
344	石皿	緑泥片岩	[18.3]	[11.2]	3.2	1035.1	SJ2 P13	60-7



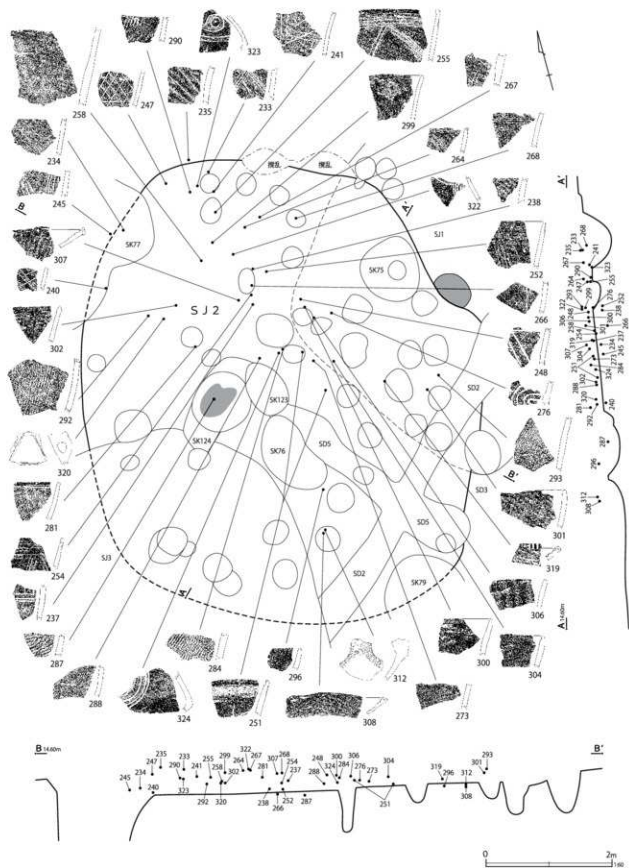
第37図 第2号住居跡出土遺物(9)



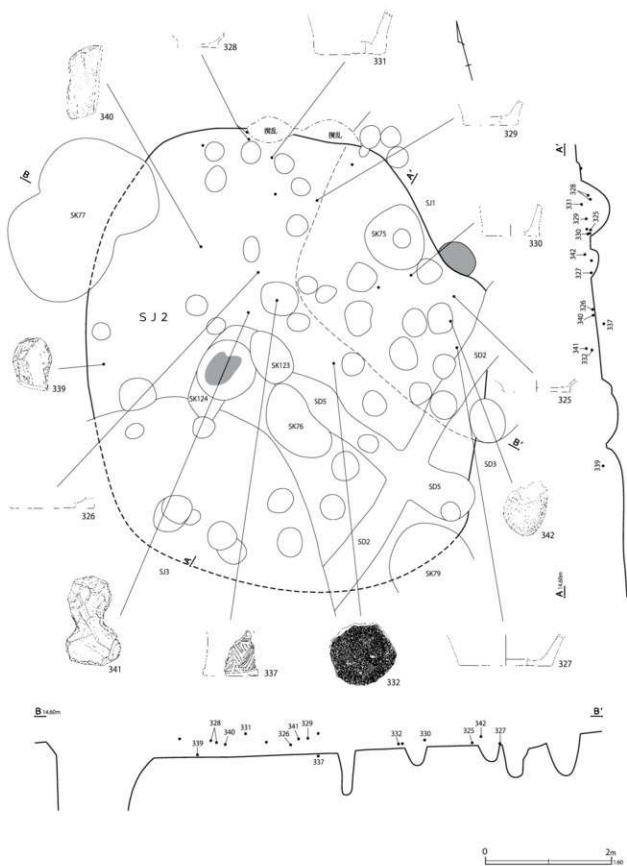
第38图 第2号住居跡遺物出土状況(1) (第29图対応)



第39图 第2号住居跡遺物出土状況(2)(第30、31图対応)



第41图 第2号住居跡遺物出土状況(4)(第34、35図対応)



第3号住居跡(第43~49図)

第3号住居跡は、L5-G5グリッドで検出した。

他住居跡との関係は、第2号住居跡と重複し、第2号住居跡を壊していた。

他遺構との関係は、第2号溝跡、第124、128号土壌と重複し、第2号溝跡と第128号土壌によって壊されていた。住居跡の南西側1/3は、調査区域外で生活道路のため、著しい削平を受けていた。

住居跡の平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸推定5.6m、短軸4.9m、深さは0.4m、長軸方位N-3°-Eである。

炉跡は検出できなかった。

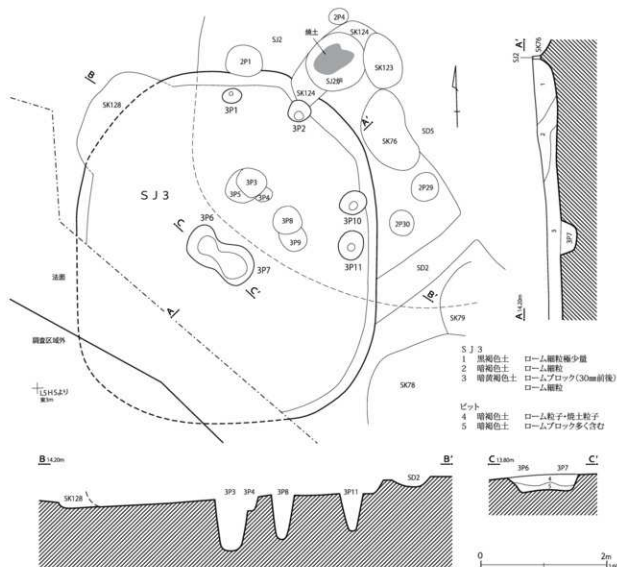
住居跡の時期は、堀之内2式期である。

第3号住居跡に帰属する柱穴について、底面水準から検討した(第24図)が、第2号住居跡との重複部分については、分別が困難である。

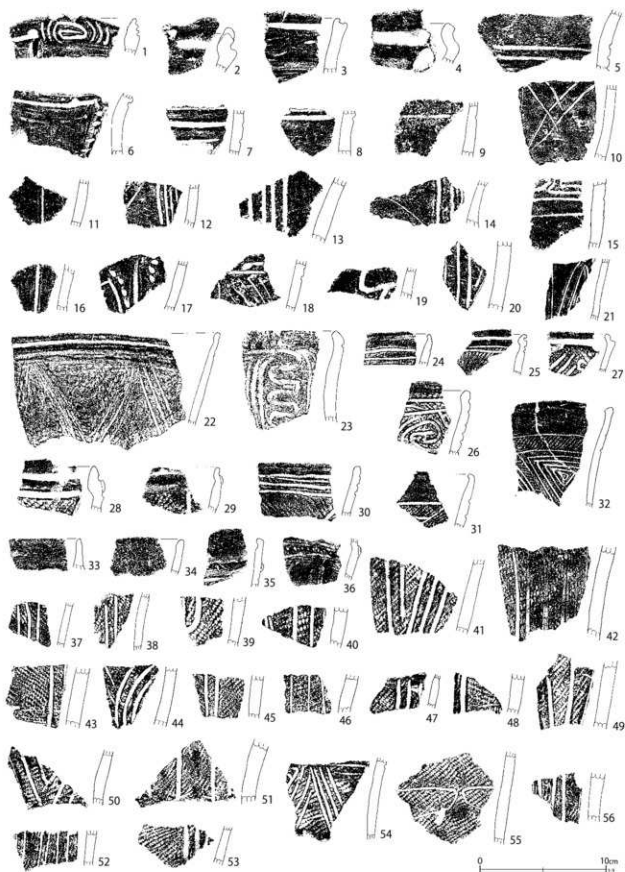
第3号住居跡の出土遺物を第44～46図に示した。

第44図 1～21は沈線のみが施された一群である。

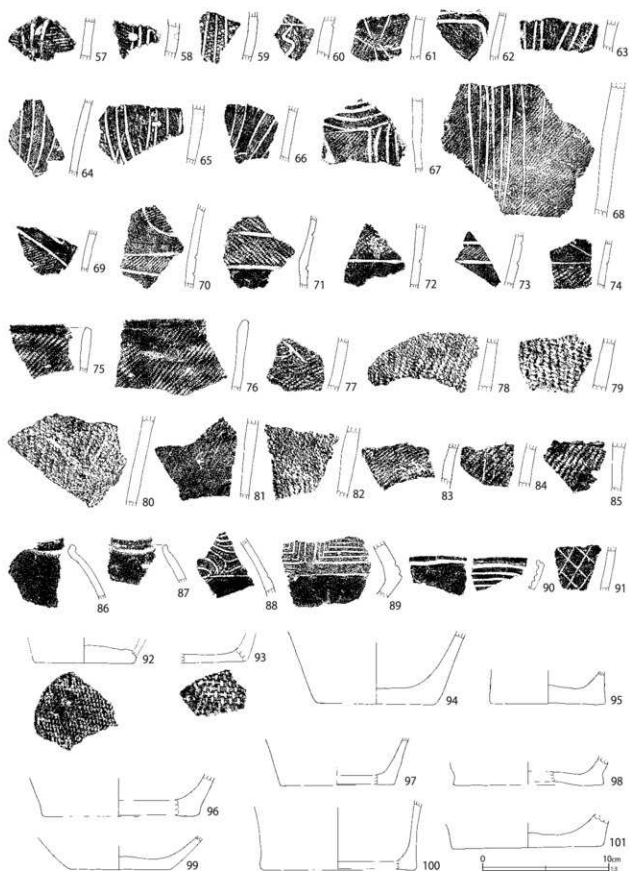
1～4は口縁部の破片で外反が見られる。5～21は括れ部及び胴部の破片である。22～30は、縄文の地文に各種の沈線が施された口縁である。1～30は堀之内1式である。31、32はいわゆる朝顔形の形態の深鉢形土器の口縁である。堀之内2式で



第43图 第3号住居跡



第44图 第3号住居跡出土遺物(1)



第45图 第3号住居跡出土遺物(2)

第7表 第3号住居跡ビット計測表(第43図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
3P1	38	30	3P6	60	28	3P10	46	34
3P2	35	75	3P7	60	27	3P11	47	61

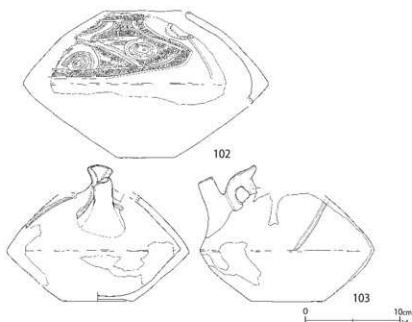
ある。

37～56、第45図57～61、68は縄文の地文に、各種の沈線が施された深鉢形土器の胴部破片である。62～67も縄文の地文上に文様が施され、一部に磨消部が見られる土器である。堀之内1式である。

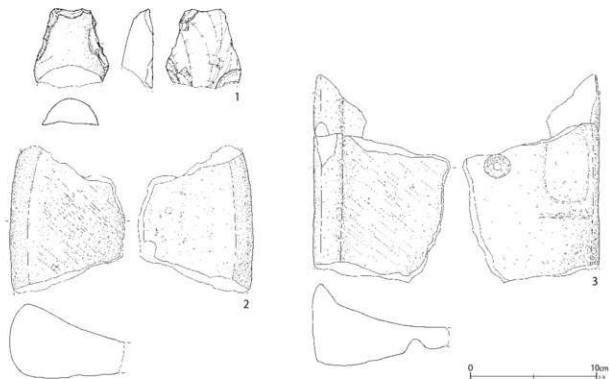
69～74は横線もしくは曲線文が施された深鉢形土器である。堀之内2式である。

75～85は器面全体に縄文のみが施された深鉢形土器である。堀之内2式が主体と思われる。

86～89は注口土器の破片で、86、87は内傾気味に立ち上がる口縁部、



第46図 第3号住居跡出土遺物(3)



第47図 第3号住居跡、第1～3号住居跡出土遺物

第8表 第3号住居跡、第1～3号住居跡出土石器観察表(第47図)

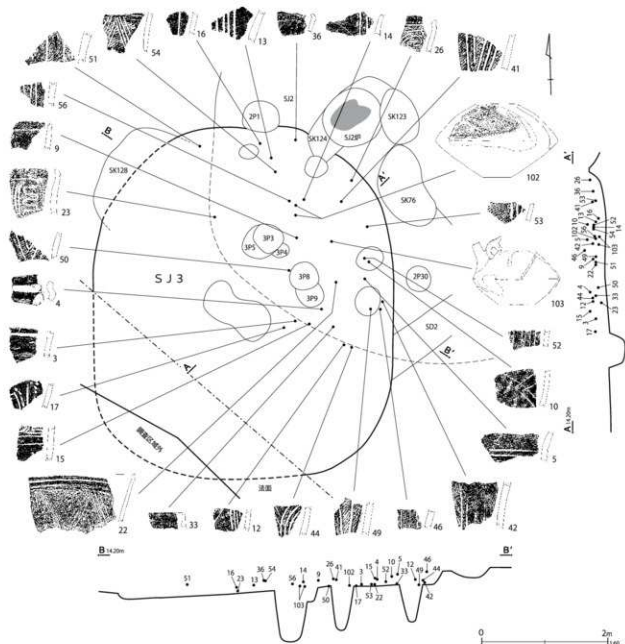
番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
1	打製石斧	ホルンフェルス	[6.2]	5.8	2.4	82.9	L5-G5 №107(SJ1～3)	60-8
2	石皿	安山岩	[11.6]	[9.2]	5.8	674.8	L5-G5 №579(SJ3)	60-10
3	石皿	安山岩	[16.4]	[10.8]	6.4	622.9	L5-G5 L5-E4 J1シンテ(SJ3) №637, 842	60-9

88, 89は算盤玉形に屈曲する胴部の破片である。
全て堀之内2式である。

90は内文が見られる浅鉢形土器である。91は器

面全体に格子目状の沈線が施された深鉢形土器である。90, 91は加曾利B 1式である。

92～101は底部の破片である。



第48図 第3号住居跡遺物出土状況(1)(第44, 46図対応)

第46図102は堀之内2式の注口土器で、体部上半の破片である。体部には単節LRの磨消縄文と沈線で渦巻文が施される。103も堀之内式の注口土器で、注口部から底部にかけての破片である。体部に微隆起帯が貼り付けられている。

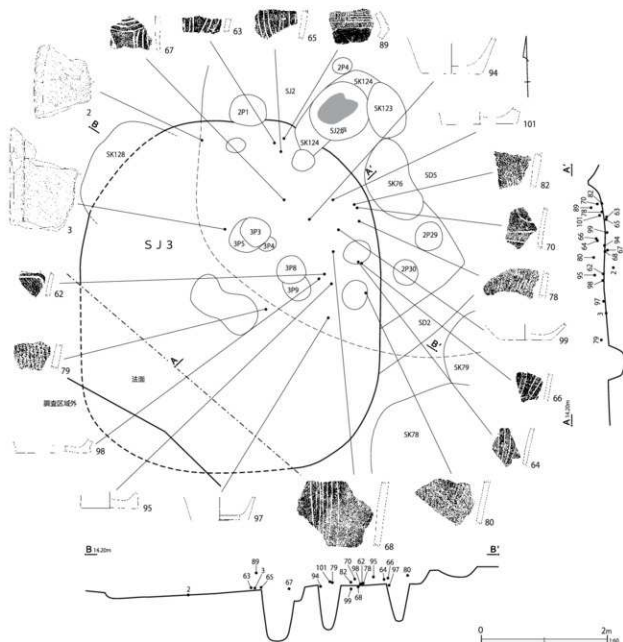
第3号住居跡出土の石器を第47図に示した。

2、3は安山岩製の石皿である。いずれも左側面以外欠損している。

第1～3号住居跡出土石器（第47図）

第1～3号住居跡の覆土で検出したもののうち、各住居跡への帰属を判定できなかった石器を第47図1に示した。

1は、ホルンフェルス製の打製石斧である。分割した礫を素材とし、その周縁に主に側面から調整がなされている。下半部が欠損するが、形状は撚形を呈すると考えられる。



第49図 第3号住居跡遺物出土状況(2) (第45、47図対応)

第4、5号住居跡(第51、52、62図)

第4、5号住居跡は、調査区の南側にあたるL5-E~F6~7グリッドで検出した。

覆土はほとんど残っており、平面形態も完全には把握できなかったが、残された僅かな覆土と柱穴および出入り口の位置から、2軒の住居跡の範囲を確定した。

覆土の断面観察から、構築は第4号住居跡→第5号住居跡の順と推定した。

住居跡の時期はいずれも加曽利B2式期である。

第5号住居跡は第4号住居跡に比べてかなり大きかった。両住居跡ともに横方向に比較的連続したピットと、これをつなぐ溝によって構成された出入り口と考えられる施設が検出できた。第4号住居跡は出入り口と考えられる施設の溝は明瞭であるがピットは少なく、第5号住居跡では南西側の溝が不明瞭である。

第4、5号住居跡の範囲には、比較的土壌が多く見られた。跡跡は2軒ともに中央付近で検出できた。柱穴は第4号住居跡では比較的均等に検出できたが、第5号住居跡では西側に多く見られ、東側ではあまり検出できなかった。

西側には第6~8号住居跡が近接しており、僅かに重複も認められた。

第4、5号住居跡については、調査時に各柱穴がどちらの住居跡に帰属するかについて確定することが困難であったため、一括して連続した番号を付した。今回の報告にあたっては、平面位置による柱穴の振り分けを行ったが、その際に重複振り分けも生じている。

以下の事実記載中では、遺物注記との齟齬を防ぐため、調査時に付した柱穴の番号は変更していない。

遺物の所属は、出土位置から検討して各住居跡に分けたが、振り分けられなかったものについては、第4、5号住居跡出土遺物として掲載した(第62図)。

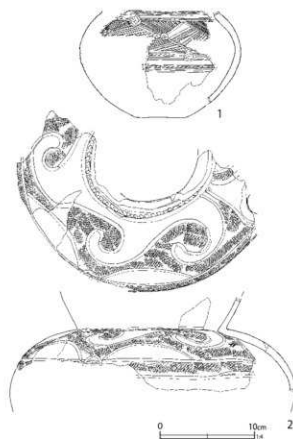
第4号住居跡(第50~56図)

第4号住居跡は、L5-E~F6グリッドで検出した。

他住居跡との関係は、第5号住居跡と重複し、第5号住居跡によって壊されていた。また、第6~8号住居跡とも僅かな重複が認められた。

他遺構との関係は、第112~116号土壌と重複し、第114号土壌に壊されていた。住居跡の覆土が殆ど残っていなかったため、住居跡と他の土壌との重複関係は明らかにできなかった。なお、出入り口施設と考えられるピット覆土の堆積時期が住居跡覆土よりも相対的に新しかったため、調査時に住居跡覆土としたものは掘り方の充填土であると考えられる。南側の1/4が第5号住居跡によって削平されていた。

住居跡の規模は主軸5.6m、副軸6.1m、深さは0.1mで、主軸方位はN-81°-Eである。

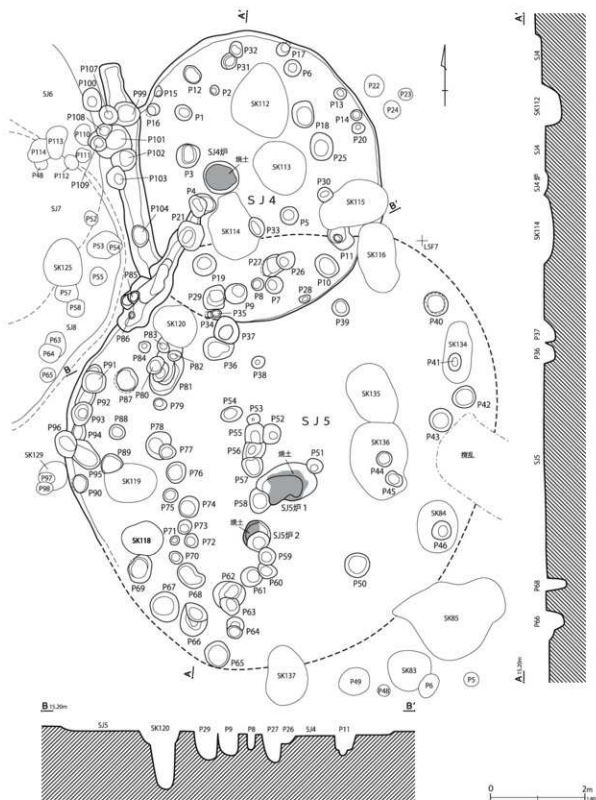


第50図 第4号住居跡出土遺物(1)

西側には出入り口と考えられる施設が認められた。住居跡の中央やや西よりから焼土を検出した

ので、炉跡と考えた。

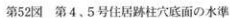
第4、5号住居跡および周辺の柱穴について、そ



第51図 第4、5号住居跡

第50図1は加曾利B1式の注口土器で、体部に集合沈線による格子目状の文様が施され、変換点に「の」字状の単位文が加えられている。2は加曾

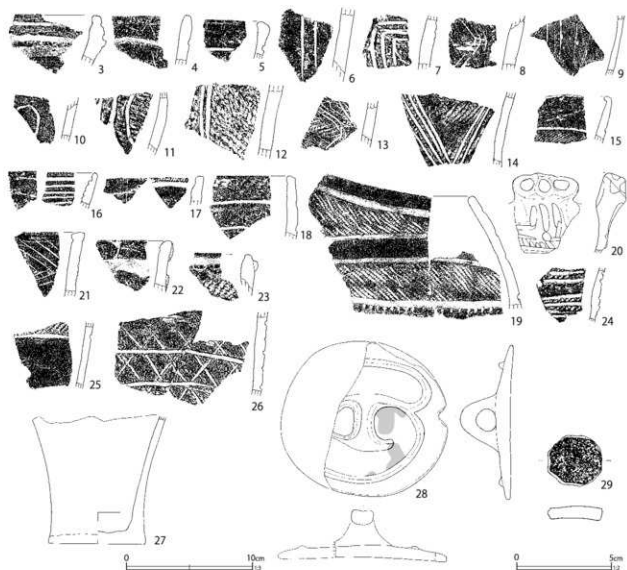
第54図3は内折する口縁部に二条の沈線が施されていた。チャート礫を含む。4、5は口縁部に一条の沈線が巡らされていた。6～14は各種の沈線文を施した深鉢形土器の胴部破片である。おお



第53图 第4号住居跡

第9表 第4号住居跡ビット計測表(第53図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P1	36	43	P14	24	27	P33	45	26
P2	21	23	P15	23	18	P99	53	51
P3	50	35	P16	27	51	P100	50	59
P4	55	49	P17	30	45	P101	72	49
P5	49	40	P18	55	17	P102	43	50
P6	36	37	P19	48	10	P103	50	30
P7	37	53	P20	27	18	P104	35	55
P9	49	43	P25	60	20	P107	42	—
P10	52	94	P28	21	29	P108	34	63
P11	50	40	P30	30	26	P109	34	43
P12	42	51	P31	(34)	68			
P13	27	15	P32	37	34			



第54図 第4号住居跡出土遺物(2)

むね堀之内1式と思われる。6～10は沈線のみを施した土器である。6は、縦方向に並行した三本の沈線が施されていた。7は、個別に描いた二本の沈線が直行し「L」字状を呈する模様が、三重に描かれていた。直行部分には細くて短い沈線が斜位に描かれていた。外側的一本では直行する二本の沈線が繋がらず、内側の二本では直行する二本の沈線は接続していた。「L」字状の沈線の内側には、やや弱い曲線が描かれていた。8は、細くてやや深い沈線が三本、「L」字状に屈曲する模様が描かれていた。7と異なり、模様は分かち書きされていなかった。9は、細い沈線が四本垂下し、下方末端では、沈線がやや集束する傾向が見られた。地文は縄文ではなく、擦痕であった。やや新しく加曽利B1式であろう。10は、単独の沈線で楕円形を描くものである。

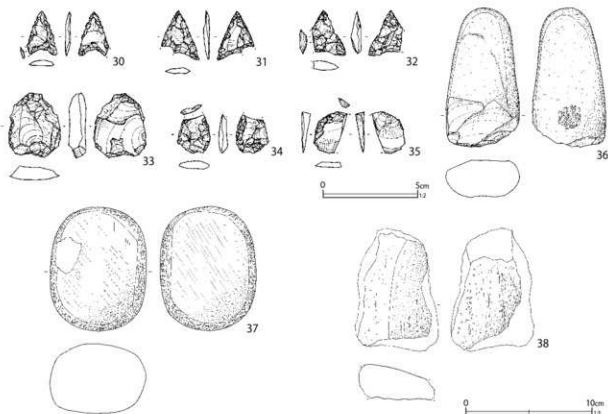
11～14は地文縄文上に沈線文が施されていた。11は、三本の並行した沈線で曲線が描かれ、曲線

の間の縄文は磨消されていた。縄文は無節Rか。12は、地文は複節のR L Rで二本の並行した沈線が描かれている。13は、単節L Rの地文の上に半截竹管で曲線状のモチーフを描く。14は無節Lの地文の上に三本程度を一組とした沈線で、三角形の幾何学模様を連接させて描く。

17は口縁部が内折し、外面に平行沈線による磨消縄文が施されていた。縄文は単節L Rである。堀之内2式である。

16は浅鉢の口縁部破片で、口辺部に多条の沈線が施されている。17も浅鉢の口縁部破片で、外面に簡歯状工具による沈線が施されている。内面には単節L Rの縄文と沈線文が施されている。16は単節L Rの縄文と平行沈線文が施されている。口縁部内面には浅くて緩やかな沈線が一条認められる。16～18は加曽利B1式である。

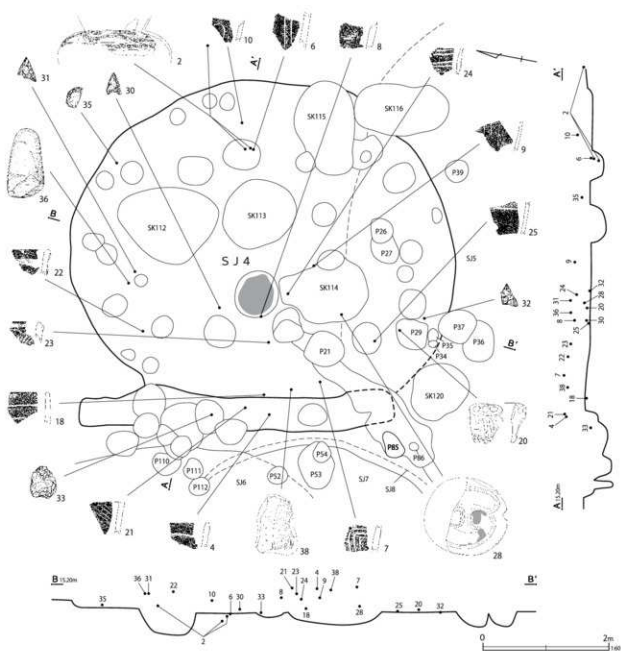
19は口縁部が内傾して立ち上がる形態の浅鉢形土器である。20は三単位の把手を有する深鉢形土



第55図 第4号住居跡出土遺物(3)

第10表 第4号住居跡出土石器観察表(第55図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
30	石鏃	黒曜石	1.8	[1.2]	0.2	0.4	SJ4 №173	60-11
31	石鏃	黒曜石	1.9	[1.5]	0.3	0.4	L5-E6 №104	60-12
32	石鏃	黒曜石	1.8	[1.4]	0.5	0.6	L5-F6 №135	60-13
33	石鏃未製品	黒曜石	2.6	2.1	0.7	3.8	L5-E6 №168 製作剥片?	60-14
34	石鏃未製品	黒曜石	[16.0]	1.3	0.4	0.7	SJ4 P18	61-1
35	U剥片	黒曜石	1.7	[1.4]	0.4	0.5	L5-E6 №171	61-2
36	敲石	砂岩	11.0	5.8	3.0	312.4	L5-E6 №102	61-3
37	磨石	安山岩	9.8	7.8	5.5	673.7	L5-E6 №99	61-4
38	石皿	緑泥片岩	[9.7]	[6.6]	2.3	231.8	L5-E6 №113	61-5



第56図 第4号住居跡遺物出土状況(第50、54、55図対応)

器の把手の部分である。21は口縁部が外傾して立ち上がる深鉢形土器である。22、23は紐線文土器である。沈線間に縄文または刻みを施した平行沈線文系の深鉢形土器の胴部破片である。26は格子目文系の深鉢形土器の胴部破片である。やや鋭利な工具で左上がりの沈線を施した後に、右上がりの沈線を施して格子目を描き、さらにその後にやや太い工具で水平方向に三〜四条の沈線を描く。27は深鉢形土器の底部である。底部外面は網代圧痕が痕跡程度認められた。17〜21は加曾利B 2式、22〜25は加曾利B 1式である。

28は土製の蓋である。把手は橋状の作りをしており、把手の端部から伸びる曲線的な隆帯により文様を区画している。この隆帯で囲まれた部位の内部は赤色の顔料塗彩部分となっている。

29は土製円盤である。短径2.5cm、長径2.8cm、厚さ0.6cmの楕円形で、無文である。

第4号住居跡の出土土器を第55図に示した。

30〜32は、黒曜石製の石鏃である。いずれも左脚部が欠損する。無茎で基部に丸みを帯びた挟りが施されている。30と31は素材剥片の形状を利用し、調整は縁辺部に最低限施されている。

33、34は黒曜石製の石鏃未製品である。33は分厚く縁辺のみ調整されている。34は先端部が欠損する。一次剥離面が残されている。

35は、黒曜石のユーズド・フレイクで、右側面が欠損する。左側縁に押圧剥離が調整されている。

36は砂岩製の敲石である。扁平な楕円磔を利用し、下端部が敲打によって潰されている。平坦面は使用による摩耗と敲打による窪みが見られ、磨石、凹石としても利用されている。

37は安山岩製の磨石である。縁辺が敲打と研磨により隅丸長方形になっている。表裏面は磨面として利用されており、滑らかで光沢が見られる。

38は緑泥片岩製の石皿片である。全面が欠損しており、全体の形状、大きさは不明である。皿部は使用により僅かに凹んでおり、磨面も見られる。

第5号住居跡(第57〜61図)

第5号住居跡は、L5ーF6グリッドで検出した。

他住居跡との関係は、第4号住居跡と重複し、第4号住居跡を壊していた。

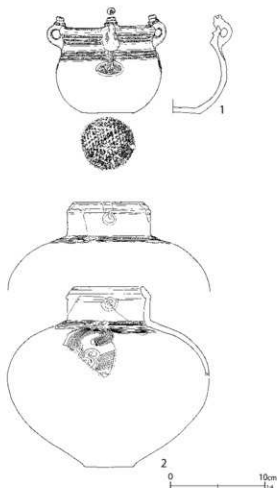
他遺構との関係は、第84、85、114、116、118〜120、134〜137号土壌と重複していた。第84、114、118、119号土壌に壊されていた。

住居跡の規模は主軸6.3m、副軸7.3m、深さは0.1mで、主軸方位はN-117° -Eである。

北西側には出入り口施設と考えられるビット列と、これをつなぐ溝状の掘り込みが認められた。

住居跡の中央やや南側の2箇所から焼土を検出したので、炉跡と考えた。

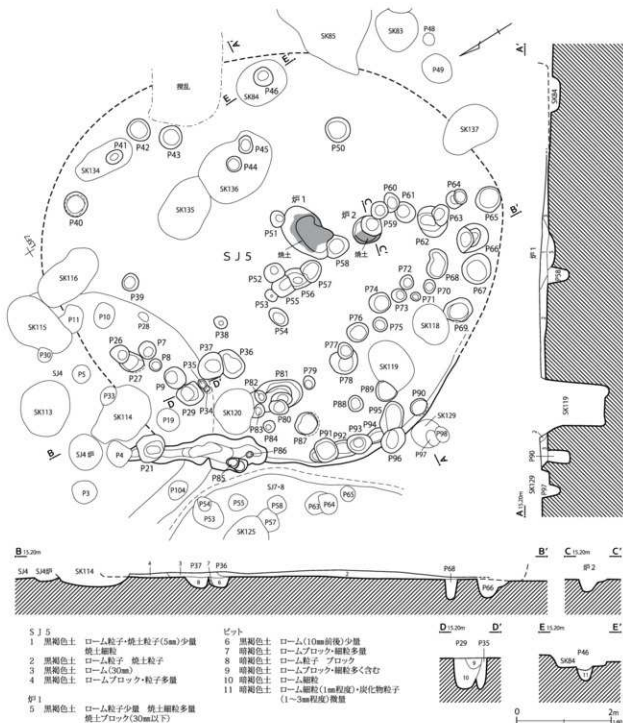
住居跡の時期は、加曾利B 2式期である。



第57図 第5号住居跡出土遺物(1)

第5号住居跡出土遺物を第57～59、61図に示した。1は加曽利B1式の壺で、四単位の把手をもつ。L Rの磨消縄文による横帯文と四単位の「の」字状の単位文が施されている。2は加曽利B1式の注口土器で、体部に集合沈線による渦巻状の文様が施され、「の」字状単位文が加えられている。

第59図3～22は、後期前葉～中葉の土器である。3は口縁部に円文と沈線を施した深鉢形土器の口縁把手部の破片である。外反する無文の口縁部を有する。4は沈線文、刻みを施した深鉢形土器の口縁部破片である。5は無文の深鉢形土器の口縁部破片である。3、4は堀ノ内1式である。



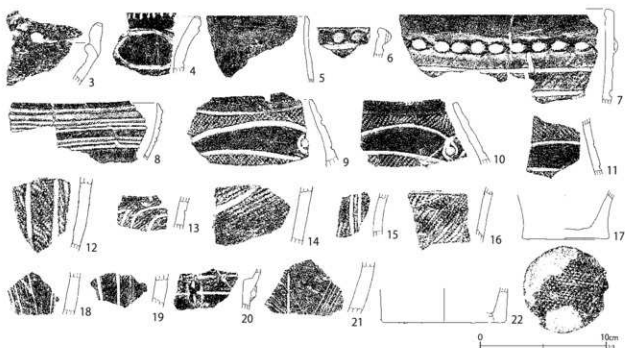
第58図 第5号住居跡

6、7は後期中葉の組線文土器である。8は口縁部に沿って刻みと沈線が施されていた。体部も

同様に沈線と刻みが施されていた。6～8は加曽利B1式である。

第11表 第5号住居跡ピット計測表(第58図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P7	37	53	P53	27	5	P76	46	52
P8	26	34	P54	47	16	P77	35	42
P9	49	43	P55	(42)	41	P78	59	33
P21	65	56	P56	(36)	43	P79	30	32
P26	40	29	P57	(43)	41	P80	40	33
P27	(32)	51	P58	52	44	P81	(110)	28
P29	60	63	P59	38	47	P82	28	32
P34	18	42	P60	42	39	P83	28	15
P35	(25)	70	P61	42	40	P84	26	9
P36	64	24	P62	65	51	P85	44	72
P37	64	22	P63	45	48	P86	16	75
P38	26	5	P64	44	62	P87	48	86
P39	37	8	P65	56	94	P88	35	42
P40	50	100	P66	70	40	P89	(43)	65
P41	36	29	P67	64	95	P90	40	48
P42	50	12	P68	62	48	P91	48	33
P43	48	38	P69	60	62	P92	(28)	44
P44	34	49	P70	28	12	P93	30	44
P45	37	44	P71	18	29	P94	(29)	7
P46	40	51	P72	30	41	P95	(59)	76
P50	52	94	P73	31	43	P96	50	81
P51	36	39	P74	44	32			
P52	43	31	P75	30	31			



第59図 第5号住居跡出土遺物(2)

9～11は算盤玉形の鉢形土器で、9、10は口縁部の破片である。加曽利B 2式である。

12～16は地文に縄文が施された深鉢形土器の胴部破片である。

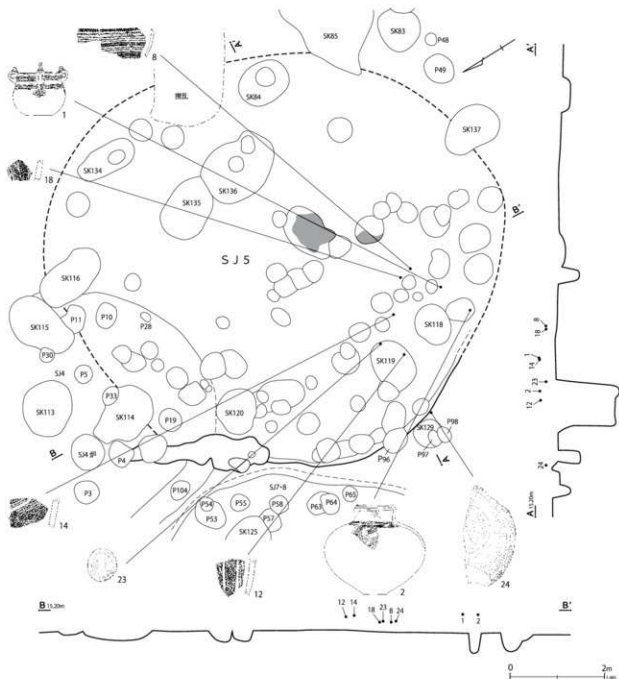
18～21は沈線文が施された深鉢形土器の胴部破片である。18、19は縦位の沈線、20は横位の沈線に「8」字状貼付文、21は縦位、斜位の沈線文が施

されていた。

17、22は底部である。17の底部には1本越え2本潜り1本送りの網代痕を残す。

第5号住居跡出土の石器を第61図に示した。

23は閃緑岩製の磨石で、表裏面は僅かに磨面として使用されている。24は安山岩製の石皿で、皿部は僅かに凹んでいる。



第60図 第5号住居跡遺物出土状況(第59.61図対応)

第12表 第5号住居跡出土石器観察表(第61図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
23	磨石	閃緑岩	7.0	6.2	4.8	308.0	L5-F6 №84	61-6
24	石皿	安山岩	[21.2]	[11.3]	5.2	1752.6	L5-F6 №77	61-7

第4、5号住居跡出土遺物(第62図)

第4、5号住居跡出土遺物の中で、各住居跡に分離できなかったものを第62図に一括して示した。

1～3は口縁部が内折する作りの口縁部破片である。1は口縁部に一条の沈線が巡る。体部は単節LRの縄文と沈線を施す。2、3は内折する口縁部に浅い沈線文が巡る。

4、5は口縁部内面に沈線文を施す。5は刻みの入った隆帯を口縁部に、その下に沈線を施し、沈線間に単節LRの縄文を施す。内面の沈線は二条である。

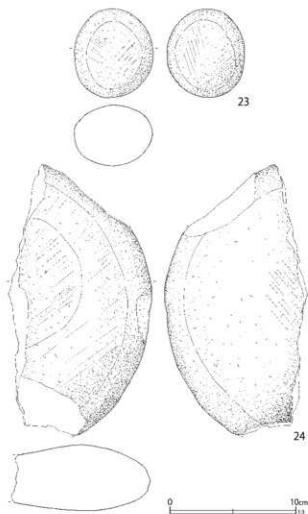
6は深鉢形土器の口縁部の破片である。

7～9は地文縄文上に沈線を施す。10～14は沈線のみを施す。

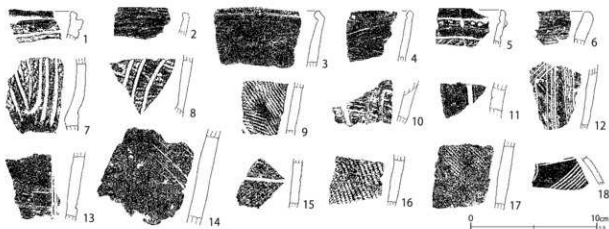
15は器面に縄文と沈線、16、17は縄文のみを施した深鉢形土器の胴部破片である。

18は注口土器の体部破片である。よく研磨され黒褐色を呈している。集合細線を曲線的に施し、「S」字状のモチーフが描かれている。

1～3は堀之内1式、4、5は堀之内2式、18は加曾利B1式、6～17は後期前葉、中葉の土器である。



第61図 第5号住居跡出土遺物(3)



第62図 第4、5号住居跡出土遺物

第6～8号住居跡(第63、64、78、79図)

第6～8号住居跡は、L5-E～F5～6グリッドで検出した。

覆土の断面観察から、第8号住居跡→第7号住居跡→第6号住居跡の順に構築されたことがわかった。住居跡の時期は第6、7号住居跡が堀之内2式期、第8号住居跡が堀之内1式期である。

覆土が薄く、遺物はあまり検出できなかった。

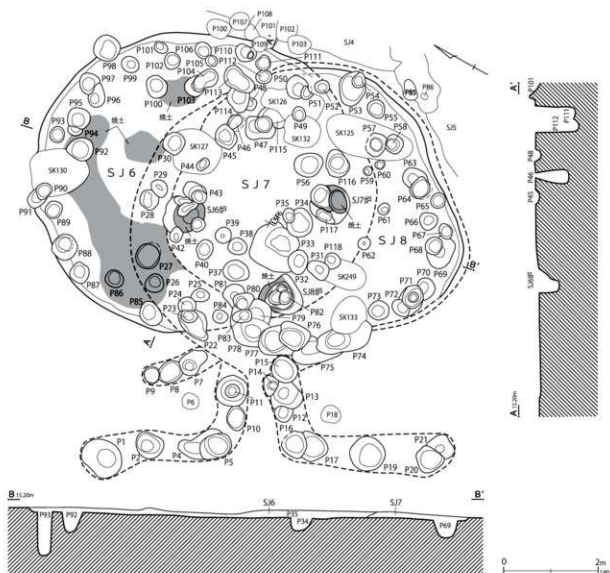
調査時に各柱穴がどの住居跡に帰属するかについて確定することが困難であるため、一括して連続した番号を付した。

今回の報告にあたっては、平面位置による柱穴の振り分けを行ったが、その際に重複振り分けも生じている。

以下の事実記載中では、遺物注記との齟齬を防ぐため、調査時に付した柱穴の番号は変更していない。

遺物の所属は、出土位置から各住居跡に分けたが、分けられなかったものについては、第6～8号住居跡出土遺物として掲載した(第78、79図)。

第64図に、第6～8号住居跡の柱穴の深さを示した。



第63図 第6～8号住居跡

第6号住居跡(第65~70図)

第6号住居跡は、L5-E~F5~6グリッドで検出した。

他住居跡との関係は、第4、7、8号住居跡と重複し、第7、8号住居跡を壊していた。

他遺構との関係は、第125~127、130、132、133、249号土壌と重複し、第125~127号土壌に壊され、第132号土壌を壊していた。

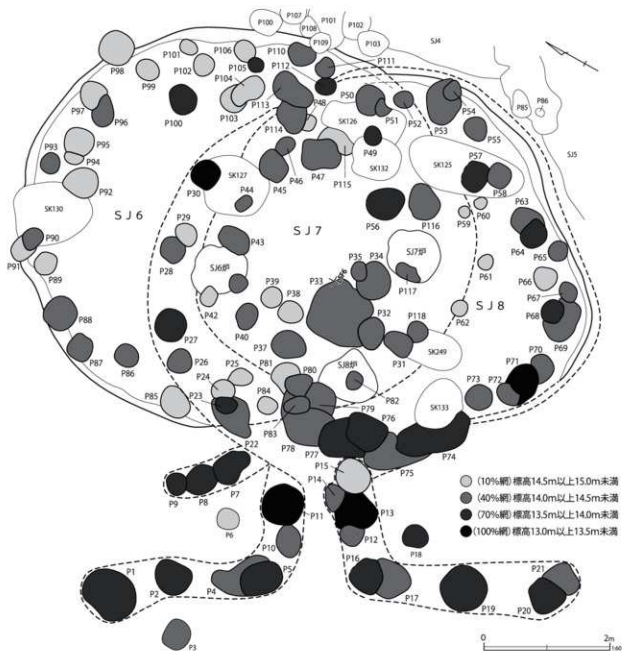
東寄りの一部が攪乱を受けていた。

住居跡の規模は主軸7.4m、副軸7.2m、深さは0.3mで、主軸方位はN-49°-Eである。

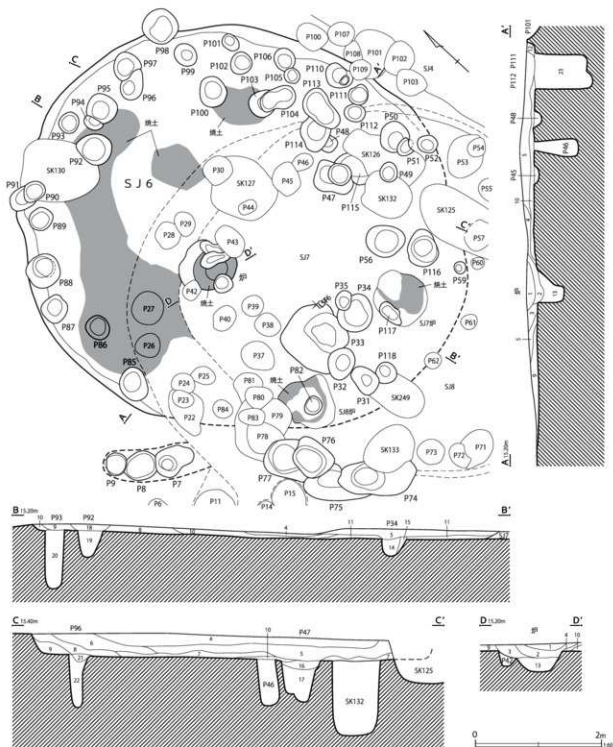
壁寄りに柱穴を多く検出したが南側の壁際は少なかった。南西側には出入り口施設と考えられるピット列と、これをつなぐ溝状の掘り込みが認められた。住居跡の中央西寄りから焼土を検出したので、灰跡と考えた。

住居跡の時期は、堀之内2式期である。

第6号住居跡の出土遺物を第66~68図に示した。



第64図 第6~8号住居跡柱穴底面の水準



SJ6

- 1 黒褐色土 ローム(10mm以下) ローム細粒 焼土粒子少量
- 2 黒褐色土 ローム細粒 焼土ブロック(10mm以下) 焼土粒子
- 3 暗褐色土 焼土・ローム細粒多量
- 4 暗褐色土 ローム細粒少量 焼土粒子極少量
- 5 黒褐色土 ローム 焼土細粒
- 6 黒褐色土 ローム 焼土細粒 ロームブロック(10mm以下)
- 7 黒褐色土 ローム・焼土細粒層状に多量
- 8 暗褐色土 ローム(20mm以下)・ローム細粒や中多量
- 9 暗褐色土 ローム(30mm以下)・ローム細粒極めて多量
- 10 黒褐色土 ロームブロック極めて多量 焼土粒子少量 粘土か?

- 11 暗褐色土 ローム(30mm以下) 焼土細粒少量
- 12 暗褐色土 ローム細粒・ロームブロック多量
- 91 暗褐色土 ローム細粒 焼土ブロック(20mm以下) 焼土粒子多量
- ビット34
- 14 暗褐色土 焼土 ローム細粒
- 15 黒褐色土 焼土 ローム細粒
- ビット47
- 16 暗褐色土 ローム 焼土細粒
- 17 暗褐色土 ローム(30mm以下)・ローム細粒多量

- ビット92
- 18 黒褐色土 焼土・ローム細粒少量
- 19 黒褐色土 ローム(20mm以下) ローム粒子 焼土細粒少量
- ビット93
- 20 暗褐色土 ローム細粒 ローム(20mm前後)
- ビット96
- 21 黒褐色土 ローム粒子・ブロック少量
- 22 黒褐色土 ローム粒子・ブロック多量
- ビット111-112
- 23 暗褐色土 ローム細粒 ローム(20mm以下)

第65図 第6号住居跡

第13表 第6号住居跡ビット計測表(第65図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P7	61	72	P76	65	90	P100	48	97
P8	53	89	P77	46	71	P101	28	33
P9	36	77	P82	29	71	P102	35	25
P31	46	36	P85	51	21	P103	(20)	(10)
P32	52	31	P86	40	36	P104	56	34
P33	95	34	P87	39	40	P105	25	94
P34	62	34	P88	52	81	P106	36	37
P35	32	38	P89	34	29	P110	46	53
P47	58	63	P90	36	76	P111	33	83
P48	(18)	116	P91	(22)	20	P112	38	91
P49	(26)	94	P92	54	37	P113	68	72
P50	48	48	P93	32	89	P114	(42)	41
P51	30	78	P94	(18)	17	P115	(54)	16
P52	32	41	P95	48	39	P116	58	37
P56	63	92	P96	38	81	P117	33	68
P59	20	16	P97	42	35	P118	33	30
P74	98	84	P98	55	46			
P75	(64)	32	P99	38	13			

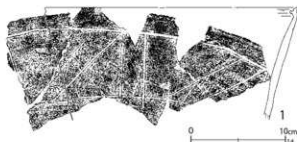
第14表 第6号住居跡出土石器観察表(第68図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
50	石鏃	黒曜石	1.4	1.3	0.3	0.5		61-8
51	石鏃未製品	黒曜石	1.9	1.4	0.5	1.0	L5-E6 №163 未製品	61-9
52	剥片	頁岩	[3.7]	0.9	0.8	1.1	SJ6 A 稜状調整有	61-11
53	石核	チャート	2.9	4.6	1.1	44.4	L5-E5 №10	61-10
54	石皿	緑泥片岩	[14.5]	[15.1]	2.7	571.2	L5-E5 №28	61-12
55	石鏃	砂岩	10.5	8.3	2.3	249.0	L5-E6 №159	61-13
56	石棒	緑泥片岩	[24.0]	[13.9]	[6.9]	3750.0	L5-E5 №29	62-2
57	石棒	緑泥片岩	[30.3]	[14.7]	[10.0]	3095.2	L5-E5 №31, 32, 36, 38	62-1

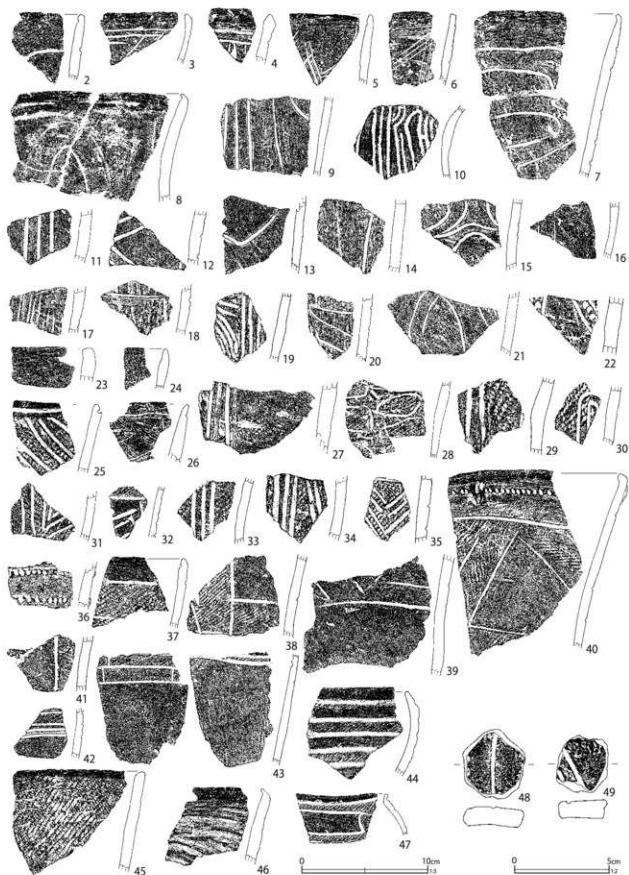
第6号住居跡は、堀之内2式から加曾利B1式の土器を含む。典型的な堀之内2式は第67図36～41、同様に典型的な加曾利B1式は42～44、粗製土器が46であり、1～35はおおむね36～41の堀之内2式に伴うものと思われる。

1～21は沈線のための施文による土器である。各種の構成を含む。25～35は各種の沈線文を施す土器であり、縄文施文を伴うものである。沈線施文後に縄文を施文しているが、磨消し部の作出は徹底していない。36, 40は堀之内2式の隆帯文を伴っており、40はやはり堀之内2式に典型的な三角形区画文を施している。37は口縁部内面に沈線文を施す。38, 40は第一次区画文をつなぐ斜沈線等が施されている。41, 42は加曾利B1式の鉢形土

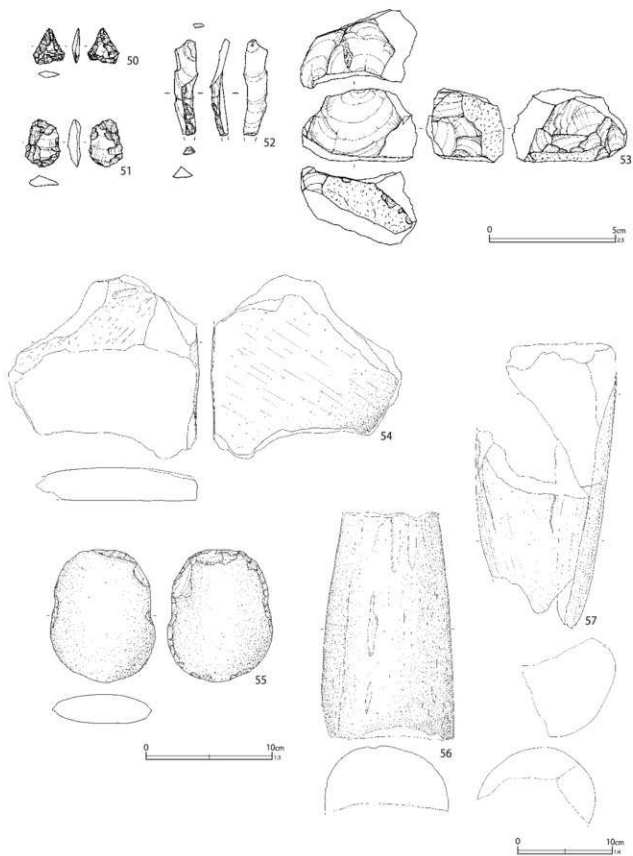
器である。44は体部で丸みを帯びた鉢形土器で、加曾利B1式に典型的な平行沈線文を伴うものである。45は器面全面に縄文を施文する土器である。46は器面全体に条痕を施し、無文の土器である。堀之内2式から加曾利B1式に伴う粗製土器である。48, 49は土製円盤である。



第66図 第6号住居跡出土遺物(1)



第67图 第6号住居跡出土遺物(2)



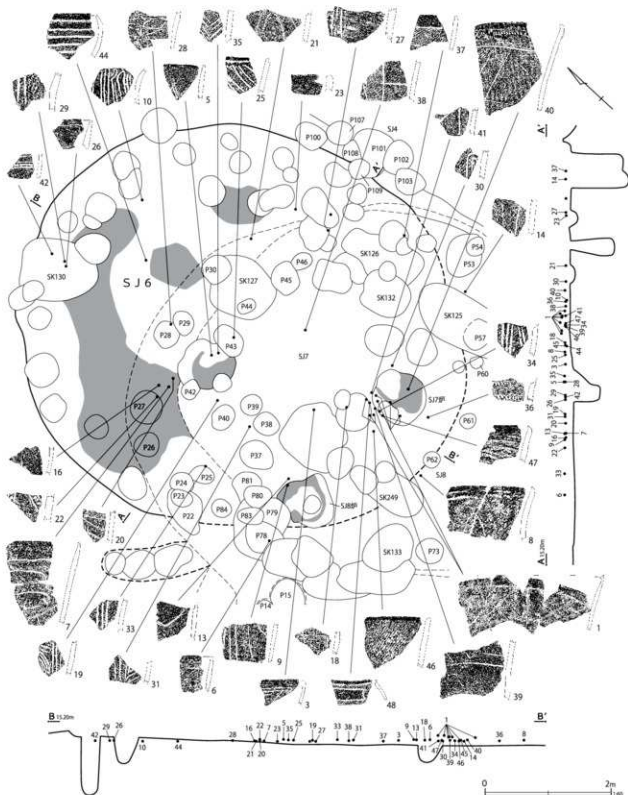
第68图 第6号住居跡出土遺物(3)

第6号住居跡出土石器を第68図に示した。

50は黒曜石製の石鏃である。無茎で基部は平坦であるが、両端部が欠損後再加工されている。

51は、黒曜石製の石鏃未製品で、廃棄されたと考えられる。

52は縦長の剥片である。単打面から剥離されて



第69図 第6号住居跡遺物出土状況(1)(第66,67図対応)

おり、末端は欠損している。主要剥離面は若干内湾する。末端に稜状調整がみられる。

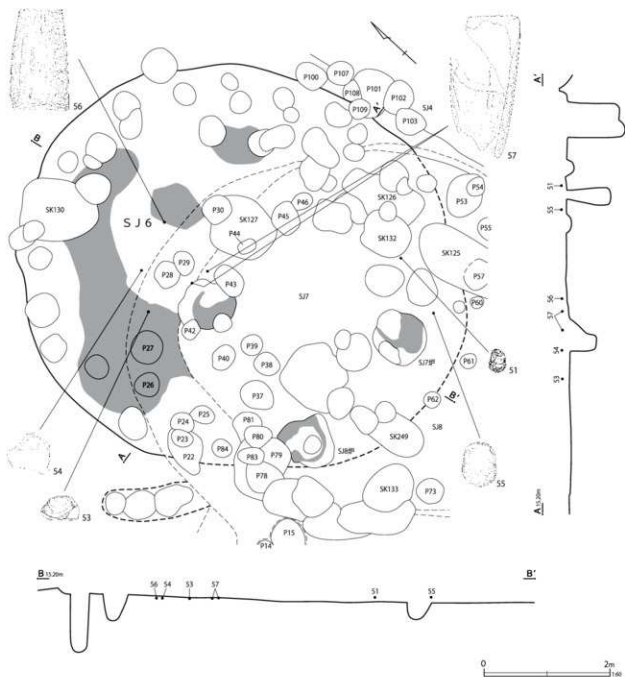
53はチャートの石核である。拳大よりも小さい自然礫を素材としている。最終作業面は単打面から剥離されている。自然面は赤化しており、被熱の痕跡と考えられる。

54は緑泥片岩製の石皿である。右側縁を除いて

欠損する。

55は砂岩製の石錘である。扁平な円礫を使用し、周縁部はわずかに調整されている。

56、57は緑泥片岩製の石棒片である。56、57は同一個体と考えられるが、接合しなかった。全て上下端が欠損している。全体に被熱により赤化している。



第70図 第6号住居跡遺物出土状況(2) (第68図対応)

第15表 第7号住居跡ビット計測表(第72図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P37	53	55	P53	75	60	P71	(50)	137
P38	40	19	P54	34	75	P72	40	40
P39	34	8	P55	40	47	P73	42	51
P40	43	41	P57	(34)	103	P74	124	80
P41	31	38	P58	(35)	48	P75	(57)	17
P42	32	23	P60	22	7	P76	66	87
P43	54	61	P61	26	7	P77	(45)	67
P44	30	21	P62	26	10	P78	(52)	22
P45	47	62	P63	(31)	60	P79	100	31
P46	(35)	71	P64	49	127	P80	(39)	33
P47	65	63	P65	34	46	P81	(24)	9
P48	(17)	10	P66	37	22	P83	42	11
P49	32	49	P67	33	39	P114	(44)	41
P50	48	48	P68	39	91	P115	(56)	16
P51	31	40	P69	69	47			
P52	33	42	P70	(29)	40			

第7号住居跡(第71～74図)

第7号住居跡は、L 5-E 5～6、F 5～6グリッドで検出した。

他住居跡との関係は、第6、8号住居跡と重複し、第6号住居跡によって壊され、第8号住居跡を壊していた。

他遺構との関係は、第125～127、132、133、249号土壌と重複し、第125～127号土壌に壊され、第132号土壌を壊していた。

東壁の一部が攪乱を受けていた。また覆土の2/3が、第6号住居跡によって削平されていた。

住居跡の規模は主軸6.4m、副軸6.3m、深さは0.2mで、主軸方位はN-48°-Eである。西側には、出入り口施設と考えられるビット列が認められた。

住居跡の中央付近から焼土を検出したので、炉跡と考えた。

第15表に、ビット計測値を示した。住居跡の時期は、堀之内2式期である。

第7号住居跡の出土遺物を第71、73図に、遺物出土状況を第74図に示した。

第71図1は矢羽根状沈線文の深鉢で、七単位の波状口縁を呈する。加曽利B 2式である。

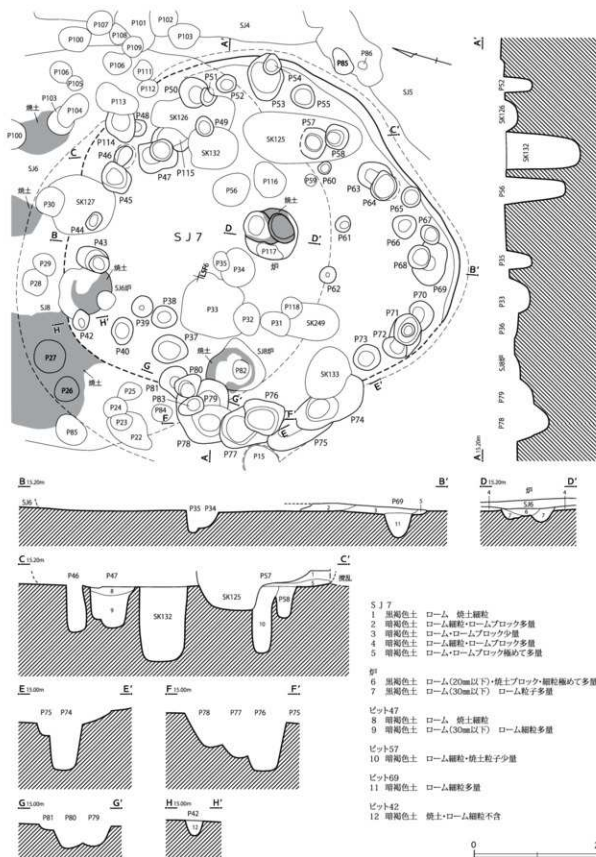
第73図2は内傾して立ち上がる口縁部の破片で、

口縁部は肥厚している。沈線文を施す。3、4は口縁部が直立気味に立ち上がる形態の深鉢形土器で、口縁部内面に一条沈線を巡らす。4は櫛歯状工具による斜沈線によって格子目文を施す。5は緩い括れ部付近に竹管文を施す。

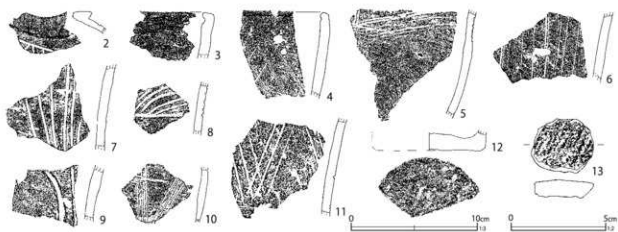
6～11は体部に沈線文を施す各種の土器である。6は直線的に垂下する。7はおおむね縦方向に垂下する。8は横位の区画文中に弧線文を施す。9は直線文、曲線文を施す。10は櫛歯状工具による沈線を直線方向、斜方向に施す。11は斜沈線である。12は底部で、13は土製円盤である。



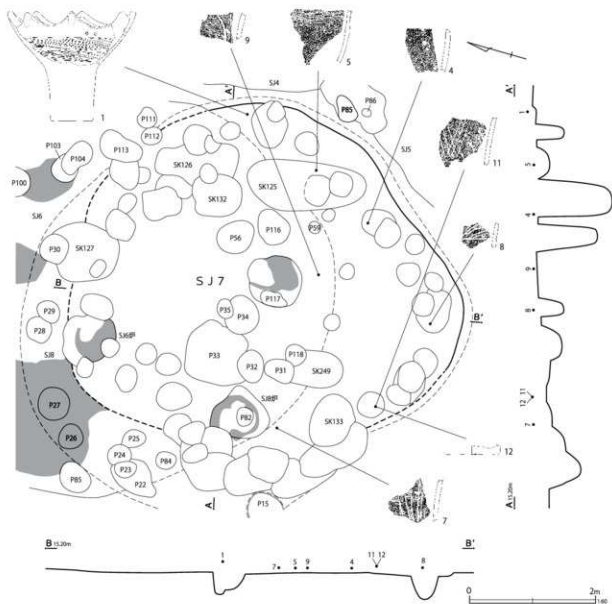
第71図 第7号住居跡出土遺物(1)



第72図 第7号住居跡



第73图 第7号住居跡出土遺物(2)



第74图 第7号住居跡遺物出土状況(第71、73图対応)

第8号住居跡(第75～77図)

第8号住居跡は、L5-E-F5～6グリッドで検出した。

他住居跡との関係は、第6、7号住居跡と重複し、第6、7号住居跡によって壊されていた。

他遺構との関係は、第125～127、132、133、249号土壌と重複し、第125～127号土壌に壊されていた。

東壁の一部は攪乱を受け、覆土は第6、7号住居跡によって削平されていた。

住居跡の規模は主軸8.9m、副軸7.2mで、主軸方位はN-69°-Eである。

壁に沿って柱穴を多く検出したが、北西側の壁際は少なかった。

南西側には、出入り口施設と考えられるピット列が認められた。

住居跡の出入り口近くから焼土を検出したので、炉跡と考えた。

住居跡の時期は、堀之内1式期である。

第8号住居跡は他の住居跡に壊されていたため、覆土が殆ど残存しておらず、遺物の出土はごく僅かである。出土遺物は第77図に示した。

1、2は縄文時代中期後葉の所産である。1は円筒型の器型と考えられ、沈線と縄文を施す。2

は体部の破片で全体に縄文を施す。

3、4は縄文時代後期前葉の称名寺2式である。沈線文を施す。

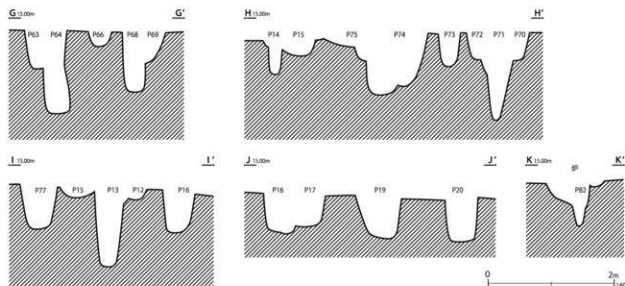
5～15も縄文時代後期前葉の堀之内1式である。5～7は深鉢形土器の口縁部の破片である。5は無文の口縁部に一条の沈線のみを施す。6は口縁部に巡る沈線下に縄文を施し、三角形の区画文を配し、沈線文を施す。8～15も深鉢形土器の破片で、各種のモチーフを施す。

16～18は無文の磨消し部を有する。後期前葉の堀之内2式に属すると考えられる。

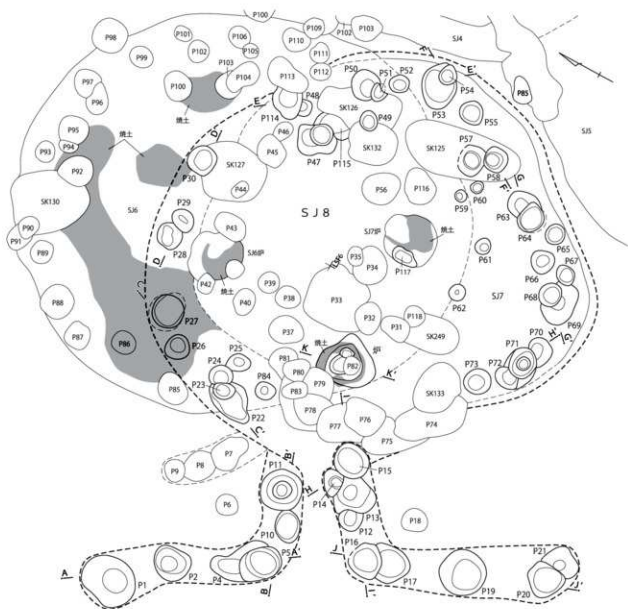
19は鉢形土器、20～22は底部である。

第16表に、ピット計測値を示した。

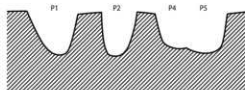
先に触れたが、第7号住居跡と第8号住居跡の南東側の柱穴は混在しており、平面的な位置関係からは識別が困難である。第7号住居跡の柱穴は入り口部分がやや深いものの、全体的には柱穴底面が標高14.0～14.5m程度のものが多く見られる。一方、第8号住居跡ではやや深く、柱穴底面の標高が13.0～14.0m程度のものが規則的に並んでいるように見える。特に、入り口の住居側に近い二本の柱穴は、直径も大きく深さも他の柱穴に比べて深い。



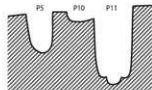
第75図 第8号住居跡(1)



A 1:100m



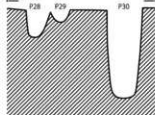
A' B 1:100m



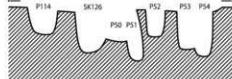
B' C 1:100m



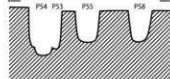
D 1:100m



E 1:100m



E' F 1:100m



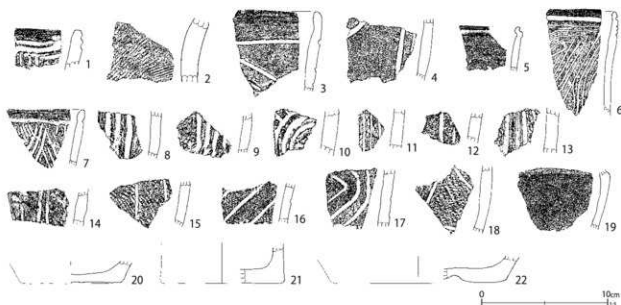
第76图 第8号住居跡(2)

第16表 第8号住居跡ビット計測表(第76図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P1	91	67	P25	38	8	P60	21	7
P2	60	65	P26	42	30	P61	26	7
P4	(46)	54	P27	62	107	P62	27	11
P5	67	61	P28	44	44	P63	(30)	60
P10	51	15	P29	40	18	P64	48	128
P11	67	123	P30	27	141	P65	32	48
P12	(31)	19	P47	61	63	P66	37	22
P13	(58)	124	P48	(19)	11	P67	33	39
P14	(32)	41	P49	31	93	P68	36	92
P15	76	16	P50	48	48	P69	70	49
P16	56	66	P51	32	79	P70	(28)	40
P17	(64)	54	P52	32	42	P71	72	138
P19	77	68	P53	76	61	P72	40	46
P20	61	70	P54	32	69	P73	42	52
P21	(61)	34	P55	39	48	P84	32	23
P22	(76)	61	P57	(34)	104	P115	(58)	15
P23	34	77	P58	42	47	P117	44	69
P24	37	12	P59	20	19			

第17表 第6～8号住居跡出土石器観察表(第79図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
30	石鏃	黒曜石	1.6	1.1	0.4	0.6	SJ6～8 P85	62-3
31	石鏃未製品	黒曜石	1.7	1.4	0.5	0.9	L5-E6 №40	62-4
32	石鏃未製品	黒曜石	1.9	1.7	0.6	1.0	SJ6～8 P102	62-5
33	石核	黒曜石	1.4	[2.9]	1.1	3.1	L5-F6 №27	62-6
34	石核	黒曜石	1.7	1.8	1.1	2.6	L5-F6 №22	62-7
35	磨製石斧	緑色岩	11.1	4.3	4.0	288.5	L5-F6 №8	62-8
36	石皿	角閃石安山岩	[10.9]	[9.9]	6.8	787.7	L5-F6 №60	62-9
37	石皿	角閃石安山岩	[8.7]	[9.7]	5.0	570.6	L5-E6 №147	63-1



第79図 第8号住居跡出土遺物

第6～8号住居跡出土遺物(第78、79図)

第6～8号住居跡出土遺物の中で、各住居跡に分離できなかったものを第78、79図に一括して示した。第6～8号住居跡は覆土が少なく重複が著しかったために、遺物を完全に分離することは困難である。ここで報告した遺物には、プラン確認時に出土したものも含まれている。

第6～8号住居跡出土とした土器類は、縄文時代後期前葉から後期中葉の所産である。

第78図1～8は縄文時代後期前葉の称名寺式である。1～3は沈線間に縄文を施文する。4～6は沈線間に列点文を施す。7は貼付文、8は四角い区画文を施し、縄文を施文する。

9、10は堀之内式の深鉢形土器である。口縁部に一条の沈線を巡らす。9は縄文、10は沈線以外

を無文とする。

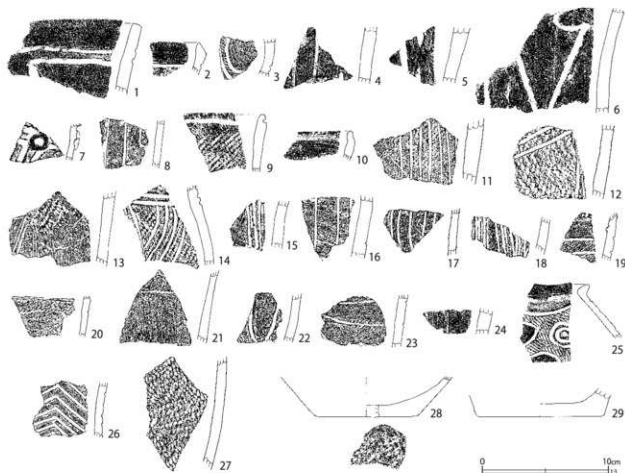
11～18は縄文時代後期前葉の堀之内1式である。11～14は縄文に沈線文を施す。15～17は沈線文、18は沈線間に縄文を施す。

19～24は縄文時代後期前葉の堀之内2式である。いずれも底部から口縁部へ直線的に推移する形態の深鉢型土器である。沈線間の充填縄文は単節L、Rの縄文を施す。

25～27は後期中葉の加曾利B 2式である。25は内傾する口縁部が外反する形態。曲線文、同心円文を施す。26は沈線を山形に施す。

28、29は底部破片である。28には網代痕が認められる。

第6～8号住居跡出土の石器を第79図に示した。30は黒曜石製の石鏃である。無茎で基部に浅く



第78図 第6～8号住居跡出土遺物(1)

丸みを帯びた挟りが見られる。正面背面共に、剥離は中央まで及んでいない。

31、32は黒曜石製の石鏃末製品である。

33、34は黒曜石製の石核である。

33は板状礫から剥離された小型剥片を素材とし、数度剥離された後に、折れたことにより作業を終了している。最終作業面の長さが非常に小さいが、グリッド出土として報告したものの中にも同様のものが存在しているため石核とした。

34はかなり小型の円礫を素材とし、打面調整等はせずに風化面からそのまま剥離し、1回のみで終了している。

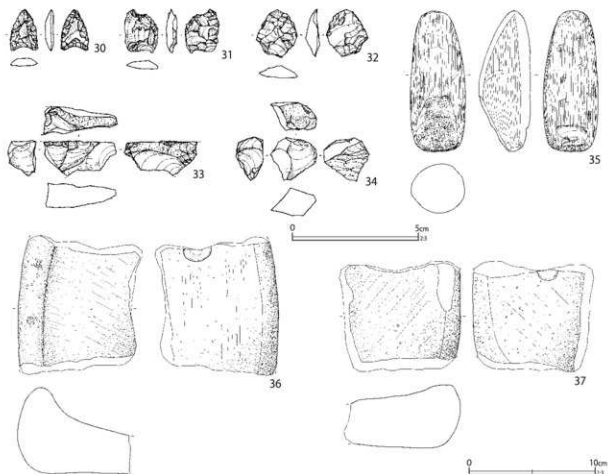
35は緑色岩製の磨製石斧である。乳棒状を呈し、横断面形は楕円形である。やや左右非対称である。

刃部の再生面に摩擦が認められることから、刃部の欠損後に再生を試み、ある程度使い込まれたものであると考えられる。

36、37は石皿である。

36は角閃石安山岩製で、縁部を深く明確に作り出している。背面には凹穴が認められる。外面と断面に僅かに黒変が認められることから、弱い被熱の可能性が考えられる。

37も角閃石安山岩製で、皿部は使用により僅かに凹んでいる。背面には凹穴が認められる。割れ口の中央背面側が緩やかな曲面状を呈していることから、石皿の破損後直ちに廃棄せず、破断面が摩擦するような磨石のような使用をある程度の期間行っていたと考えられる。



第79図 第6～8号住居跡出土遺物(2)

第9～13号住居跡 (第80、83、109～120図)

第9～13号住居跡は、調査区の南西にあたるL5-D4～5、E3～5グリッドで検出した。

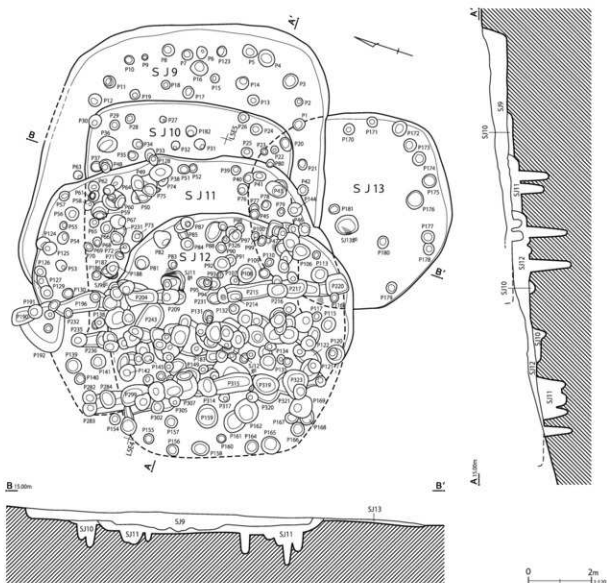
覆土の断面観察から、第13号住居跡→第10号住居跡→第11号住居跡→第12号住居跡→第9号住居跡の順に構築されたことがわかった。

住居跡の時期は第10、11、13号住居跡が堀之内2式期、第9、12号住居跡が加曽利B1式期であると考えられる。

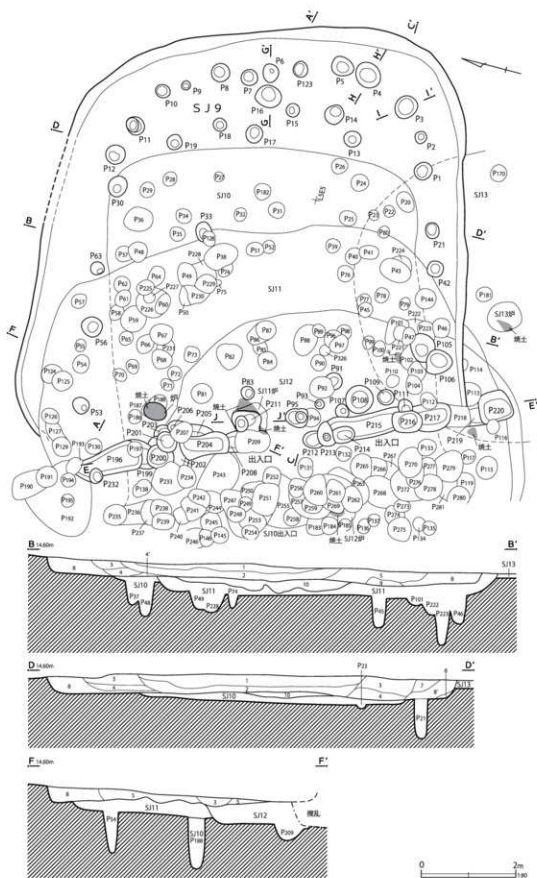
第9～13号住居跡については、調査時に柱穴を住居単位に分けることが困難であるため、通し番

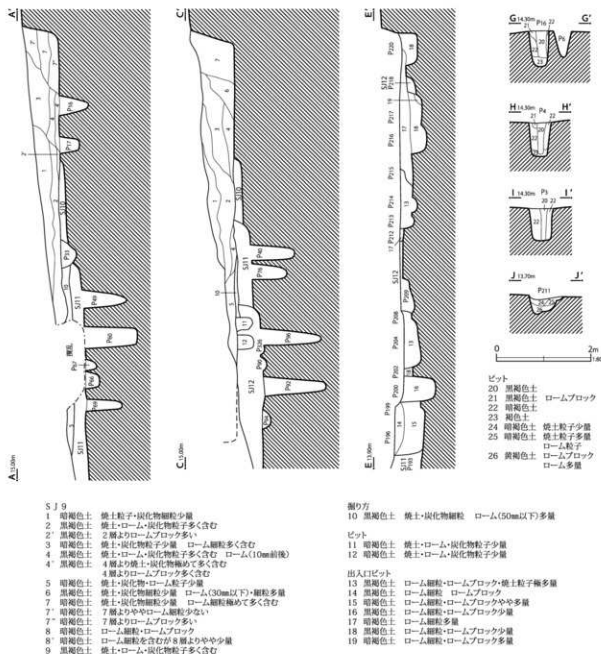
号を付した。以下の事実記載でも、この名称は変更していない。ただし、この番号は検出された柱穴の全てに対して付したのではなく、調査時に付さなかった柱穴も多数存在している。今回の報告にあたって推定される各住居跡の平面形態と、土層断面から判断した重複関係を勘案した上で、各柱穴がどの住居跡に帰属するかについて判断するとともに、無番号の柱穴に対しては、その全てに番号を付した。

出土遺物については、想定される各住居跡の平面形態と重複関係に基づいて、その平面位置と垂



第80図 第9～13号住居跡





第82図 第9号住居跡(2)

直位置から各住居跡に帰属を分けたが、分けきれなかったもの、および調査時に一括して取り上げたものなどについては、第9～13号住居跡出土遺物として掲載した(第109～120図)。

第9～13号住居跡および周辺の柱穴について、その深さを網濃度で表したものを第83図に示した。深さは柱穴底面最深部の絶対高で示し、深いものをより濃い網で表した。

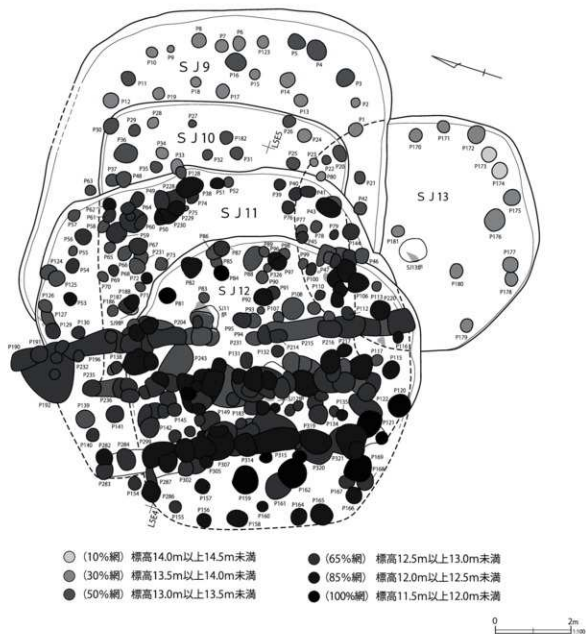
第9号住居跡(第81～90図)

第9号住居跡は、L5-D～E4～5グリッドで検出した。

他住居跡との関係は、第10～13号住居跡と重複し、第10～13号住居跡を壊していた。

西側は、他の住居跡によって擾乱を受けていた。

住居跡の形態は隅丸長方形で、規模は主軸10.0m、副軸9.5m、深さ0.2～0.7mで主軸方位はN-



第83図 第9～13号住居跡柱穴底面の水準

75°-Eである。

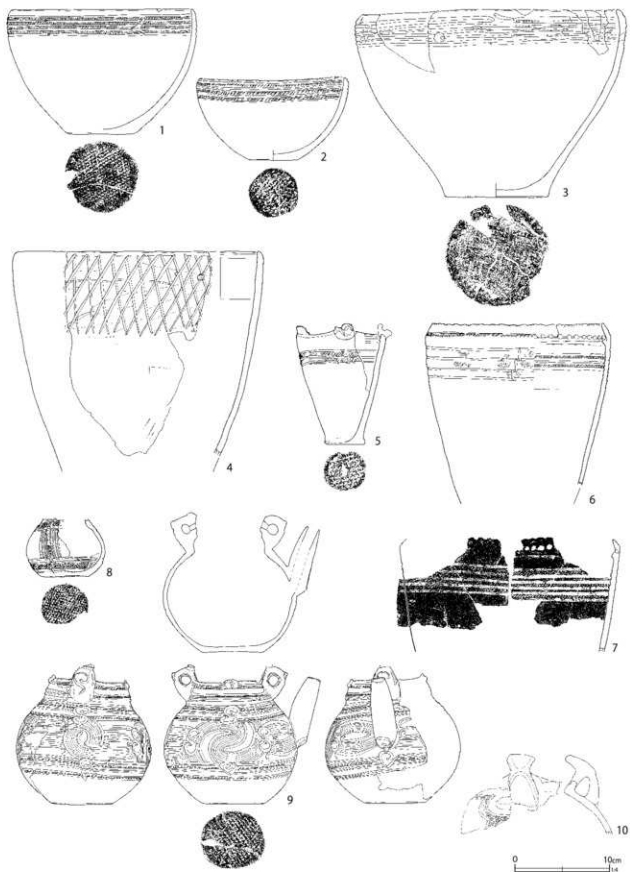
柱穴は壁の内側を巡っており、東側では二重になっていた。柱穴の中でP3、P4、P16の覆土第20層は柱痕と判断した。また西側にはピットが連続し、出入り口と考えられる施設が作られていた。やや不整形で南壁が短い。

住居跡の北西コーナー付近から焼土を検出したので炉跡と考えた。焼土範囲は0.4×0.3mである。

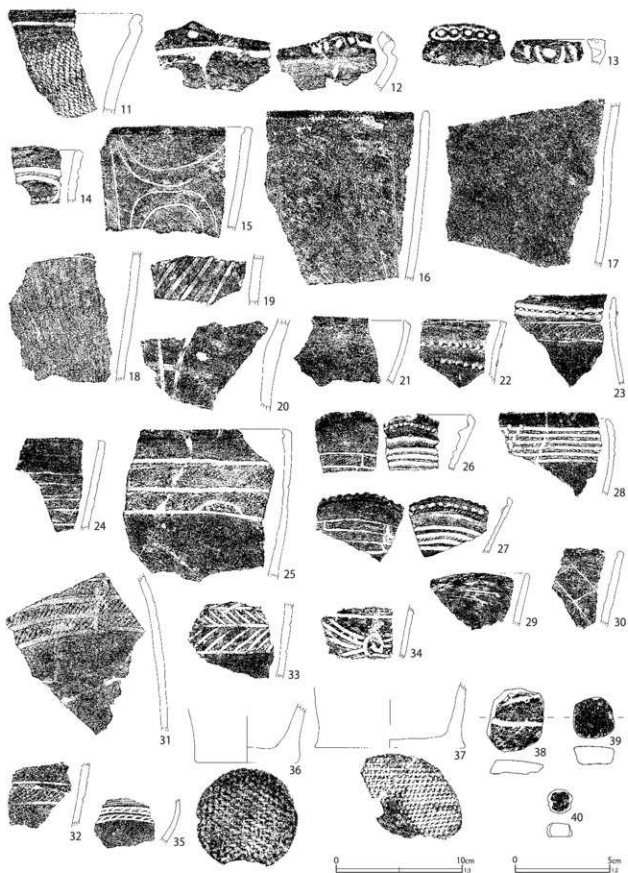
住居跡の時期は、加曽利B 1式期である。

出土遺物は第84～87図に示した。

第84図1～3は鉢で、口縁部に数条の沈線と縄文または刻みが見られる。内文は見られない。4はやや新しい段階の格子目土器で、一次区画文と無文帯を持たず、格子が口縁部に接している。内面の沈線は浅い。補修孔が見られる。5～7は深鉢で、5は緩やかな波状口縁と三単位突起、区画のない横帯文が見られる。6、7は横帯文と内文が見られる。6は区画文が見られ、7には見られ



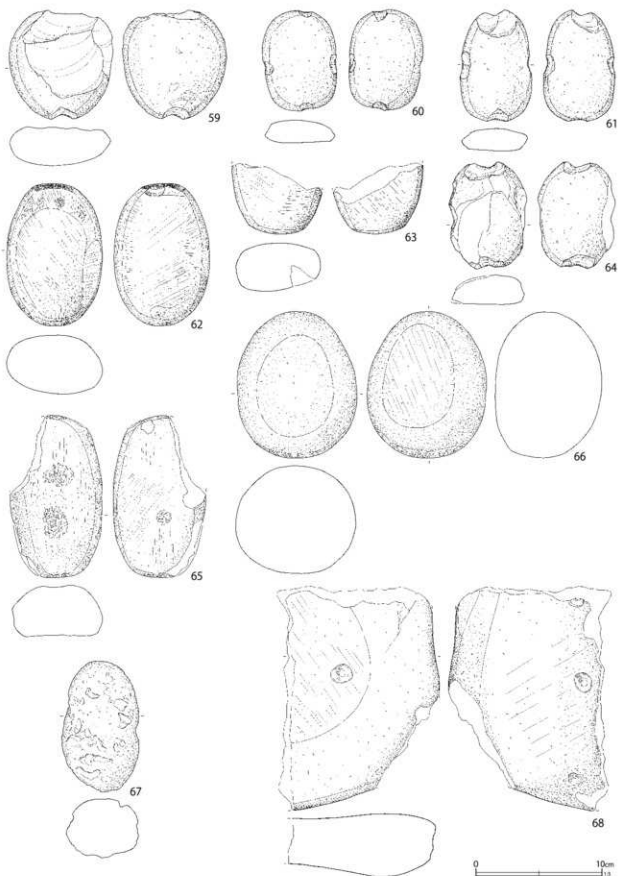
第84图 第9号住居跡出土遺物(1)



第85图 第9号住居跡出土遺物(2)



第86图 第9号住居跡出土遺物(3)



第87图 第9号住居跡出土遺物(4)

第18表 第9号住居跡出土石器観察表(第86、87図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
41	石鏃	チャート	2.1	1.7	0.3	0.7	L5-E5 №91	63-2
42	石鏃	チャート	1.9	1.7	0.3	0.7	L5-D5 №30	63-3
43	石鏃	頁岩	3.2	1.8	0.4	1.4	L5-D4 №26	63-5
44	石核	チャート	[1.4]	4.2	1.9	10.6		63-4
45	磨製石斧	トレモウ閃石岩	[10.9]	7.6	3.1	467.1	L5-D4 №139	63-6
46	石錘	砂岩	4.6	3.4	1.2	25.5		63-7
47	打製石斧	頁岩	8.0	5.8	2.2	107.6	L5-D5 №81	63-8
48	石錘	砂岩	8.6	6.2	2.0	162.4	L5-D5 №74	63-9
49	石錘	砂岩	[7.3]	[4.8]	2.1	90.4	L5-D5 №62	63-10
50	石錘	頁岩	6.5	4.7	2.2	102.2	L5-D5 №61	63-11
51	石錘	緑泥片岩	7.3	5.4	1.5	109.5	L5-D5 №59	63-12
52	石錘	頁岩	7.6	5.2	2.3	114.4	L5-D5 №67	63-13
53	石錘	片岩	9.5	5.6	1.9	176.8	L5-D5 №60	64-1
54	石錘	砂岩	7.0	5.4	2.0	118.3	L5-D5 №57	64-2
55	石錘	砂岩	7.6	5.0	2.3	144.1	L5-D5 №47	64-3
56	石錘	砂岩	7.1	6.8	2.2	134.1	L5-D5 №70	64-4
57	石錘	頁岩	7.5	5.9	3.0	154.9	L5-D5 №58	64-5
58	石錘	頁岩	6.4	5.7	2.2	105.8	L5-D5 №64	64-6
59	石錘	砂岩	8.6	8.3	3.1	250.3	L5-D5 №55	64-7
60	石錘	砂岩	7.5	5.9	1.8	139.2	L5-D5 №48	64-8
61	石錘	砂岩	8.8	5.7	1.8	143.0	L5-D5 №63	64-9
62	磨石	安山岩	11.2	7.6	4.7	668.0		64-10
63	磨石	安山岩	[5.6]	[7.1]	3.8	190.1	L5-D5 №32	64-11
64	石錘	片岩	8.4	6.1	2.3	143.9	L5-D5 №49	64-12
65	凹石	閃緑岩	12.9	7.3	4.1	601.0	L5-D4 №120	64-13
66	磨石	砂岩	11.5	9.5	8.5	1348.2	L5-D5 №72	64-14
67	浮子	軽石	10.3	6.2	4.7	84.6		64-15
68	石皿	閃緑岩	[18.9]	[12.8]	5.0	1660.5	L5-E5 №86	65-1

ない。いずれも加曽利B1式である。

9は二単位の把手と四単位の文様構成を持つ加曽利B1式の注口土器である。体部には集合細線で文様が描かれ、文様の変換点に「S」字状の単位文が配置されている。

8、10も注口土器である。

第85図11、12は口縁直下に沈線が見られる。13は突起の頂部である。いずれも堀之内1式である。

14～18は沈線により楕円形もしくは半円形の模様を描かれている。19、20は斜位の沈線が見られる。いずれも堀之内2式である。

21は無文である。

22、23は紐線文が見られる。堀之内2式である。

24～28、31、32は、口縁部に横帯が廻る。26～28

には内文が見られる。26、27は口唇内面に連続的な円孔が見られ、外面の横帯には縦方向の区画が見られる。

29は無文、30は格子目文土器である。

33、34は沈線で模様が描かれ、33は矢羽根状を呈している。

35は注口土器の胴部破片である。

24以降はいずれも加曽利B1式である。

36、37は底部破片である。いずれも網代痕が見られる。38、39は土製円盤、40は土器片錘である。

第86、87図に第9号住居跡出土石器を示した。

41～43は石鏃である。無茎で基部は浅く丸みを帯びた挟りが見られる。41、42はチャート製で形状は側縁部が緩やかに外湾した二等辺三角形であ

第19表 第9号住居跡ビット計測表(第81図)

名称	長さ/cm	深さ/cm	名称	長さ/cm	深さ/cm	名称	長さ/cm	深さ/cm
P1	39	68	P21	33	83	P199	70	75
P2	25	55	P30	45	65	P200	55	109
P3	51	68	P33	43	17	P201	45	124
P4	55	72	P42	33	61	P202	(40)	113
P5	48	67	P53	35	132	P204	104	83
P6	40	55	P56	45	125	P206	30	78
P7	35	63	P63	27	55	P207	(45)	—
P8	38	60	P83	28	57	P208	43	86
P9	19	26	P91	35	93	P211	62	91
P10	30	64	P93	20	65	P212	34	62
P11	39	64	P95	50	105	P213	50	95
P12	42	60	P105	60	143	P214	(45)	90
P13	36	28	P106	55	186	P215	130	80
P14	42	46	P107	30	76	P216	62	109
P15	28	24	P108	57	76	P217	(65)	99
P16	55	70	P109	35	67	P219	(43)	65
P17	40	42	P111	30	79	P220	69	89
P18	27	24	P123	34	54	P232	40	95
P19	31	37	P196	145	85			

る。42は部分的に被熱赤化している。43は頁岩製である。平面形状は周縁を鋸歯状に加工した先細りの二等辺三角形を呈する。

44はチャート製の石核である。剥片を素材としている。最終作業面がネガ面であるため、石核としたが、作業面の長さが小さいことから石核ではない可能性もある。

45は、トレモラ閃石製の磨製石斧である。基部と刃部の一部が欠損するが、両側縁が面を持ちほぼ直角である。そのため横断面形が長方形を呈し、いわゆる定角式といわれるものである。丁寧に研磨されており、平刃に近い刃部は丁寧に作り出されている。

47は、頁岩製の分銅形打製石斧である。扁平な礫の縁辺を加工し上下両端に刃部が作り出されている。挟り部に敲打の痕跡がみられる。

46、48～61、64は石錘である。全て扁平な小型の円礫、楕円礫を使用し、その端部を打ち欠いて挟りを入れた打欠石錘である。礫の長軸に挟りをもっているものが大部分であるが、46、60、61、64は長短両軸に挟りが見られる。46は長さが4.6cmと

小さい。64は風化が進んでおり脆弱である。

62、63、66は磨石である。62は安山岩製で上下端両側縁を敲打によって整形している。全体的によく磨かれ光沢が見られる。63は安山岩製で上半部を欠損する。66は砂岩製で円形礫をそのまま利用し、下端部に敲打痕がみられる。裏面は磨面として使用されている。

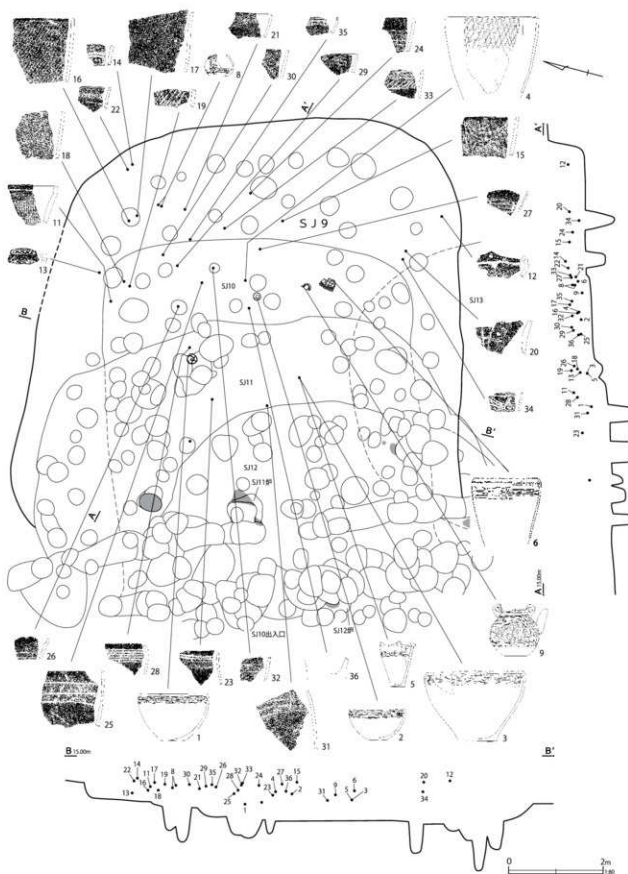
65は、閃緑岩製の凹石である。一部が欠損するが、楕円形を呈する。表裏面は磨面として使用されており、表面には凹みが残る。また裏面はかなり平らで、断面形は半円形を呈する。

67は軽石製の浮子である。平面形は楕円形を呈するが、僅かに加工や使用の痕跡は残されている。

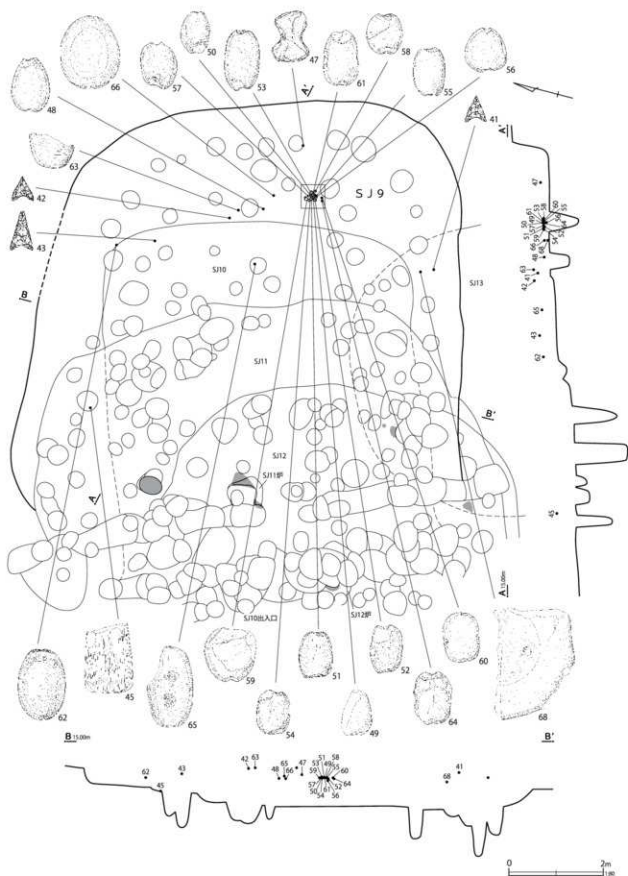
68は閃緑岩製の石皿である。扁平な礫をそのまま使用している。中央の皿部が使用により僅かに凹んでいる。表裏面に数箇所の凹穴がある。

第88～90図に第9号住居跡の遺物出土状況を示した。

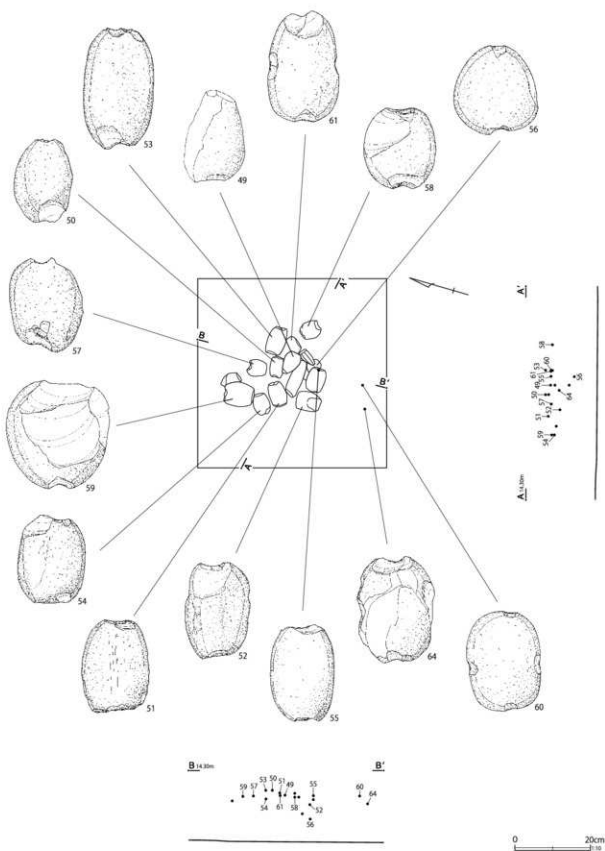
住居跡の北東側に石錘が14個体まとまり、床面から15cm程度で検出されたことが注目され、使用状況をとどめたままの廃棄の可能性が高い。



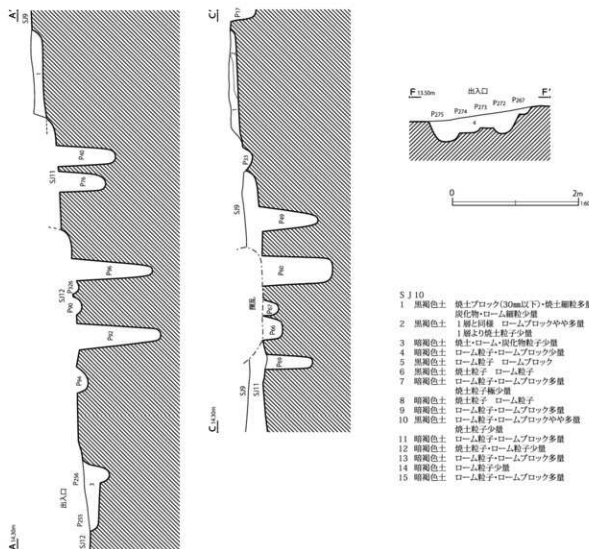
第88图 第9号住居跡遺物出土状況(1)(第84、85图対応)



第89図 第9号住居跡遺物出土状況(2)(第86、87図対応)



第90图 第9号住居跡遺物出土状況(3)(第86、87图対応)



第92図 第10号住居跡(2)

第10号住居跡(第91～94図)

第10号住居跡は、L 5～D～F 4～5 グリッドで検出した。

他住居跡との関係は、第9～13号住居跡と重複し、第9、11、12号住居跡によって壊され、第13号住居跡を壊していた。西側2/3は第9、11、12号住居跡によって壊されていた。

住居跡の形態は隅丸長方形で、規模は長軸8.4m、短軸6.7m、深さは0.1mで、長軸方位はN-71°-Eである。

柱穴は壁の内側を巡っており、東側では二重になっていた。西側にはピットが連続し、出入口口

と考えられる施設が作られていた。やや不整形で南壁が短い。

が跡は検出できなかった。

住居跡の時期は、堀之内2式期である。

第10号住居跡の出土遺物を第93図に示した。

1は口縁部に横帯、その下に楕円形のモチーフが沈線と縄文により描かれている。

2は沈線により緩やかな横位の曲線状の模様が描かれている。

3は胴部上半に縄文施文をした深鉢である。

4は沈線区画で弧状に縄文が施文されている。

5は沈線による縦位模様の末端が見られる。

第20表 第10号住居跡ビット計測表(第91図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P20	44	68	P94	40	64	P244	(25)	100
P22	25	51	P102	(34)	146	P245	(40)	102
P23	24	8	P103	42	150	P246	(18)	117
P24	38	14	P104	43	173	P247	120	153
P25	36	65	P112	37	137	P248	43	200
P26	34	62	P117	30	68	P249	30	170
P27	20	59	P131	43	132	P250	(38)	166
P28	30	34	P134	30	—	P251	70	191
P29	33	66	P135	30	175	P252	(33)	143
P31	35	75	P136	31	101	P253	57	139
P32	30	67	P137	28	125	P254	35	150
P34	36	30	P138	44	109	P255	(78)	90
P35	33	58	P145	38	129	P256	38	168
P36	63	60	P146	38	124	P257	(98)	115
P37	28	53	P182	35	50	P258	35	99
P43	70	150	P183	(31)	100	P259	44	135
P45	31	93	P184	37	148	P260	67	172
P47	38	125	P185	25	148	P261	47	172
P48	43	73	P186	30	82	P262	55	140
P58	37	61	P187	40	76	P263	(101)	115
P59	52	91	P188	45	59	P264	34	97
P61	40	101	P197	32	117	P265	53	85
P62	35	159	P210	39	146	P266	(42)	82
P65	30	69	P221	33	171	P267	(32)	70
P66	42	59	P224	(13)	80	P268	(82)	141
P67	50	140	P231	(38)	56	P269	(22)	129
P68	45	66	P233	73	161	P270	64	150
P69	30	106	P235	50	130	P272	(76)	111
P70	30	76	P236	(30)	79	P273	34	120
P71	28	55	P237	55	94	P274	43	97
P72	30	145	P238	45	99	P275	50	109
P73	37	57	P239	50	121	P276	(24)	113
P77	30	42	P240	35	113	P277	(40)	79
P78	32	53	P241	52	127	P278	60	113
P79	27	89	P242	47	145	P279	(71)	171
P80	25	9	P243	(85)	80			

第21表 第10号住居跡出土石器観察表(第93図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
8	磨製石斧	蛇紋岩	[2.4]	1.8	0.7	3.5	L5-D4 №153	65-2
9	浮子	軽石	[12.7]	8.0	2.3	77.1	L5-D4 №130	65-3

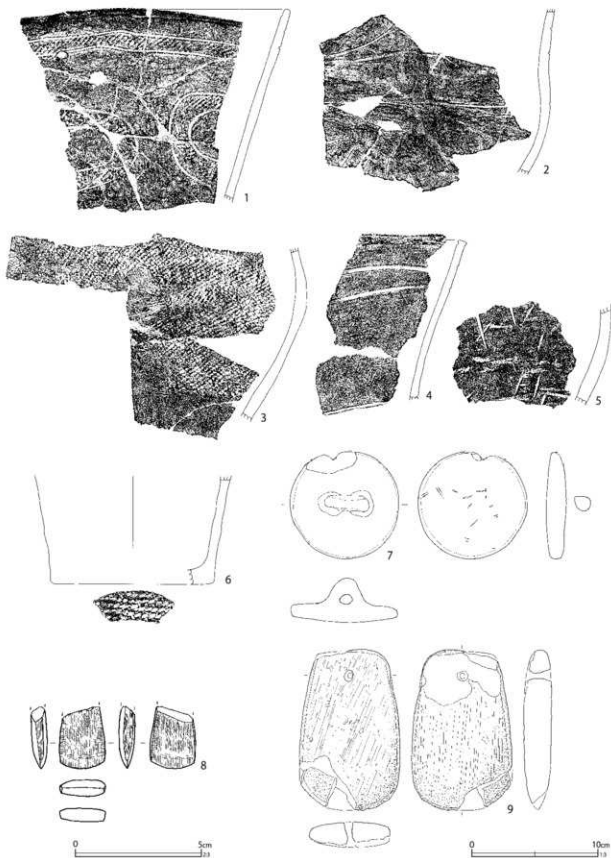
6は網代痕が見られる底部である。

7は蓋である。

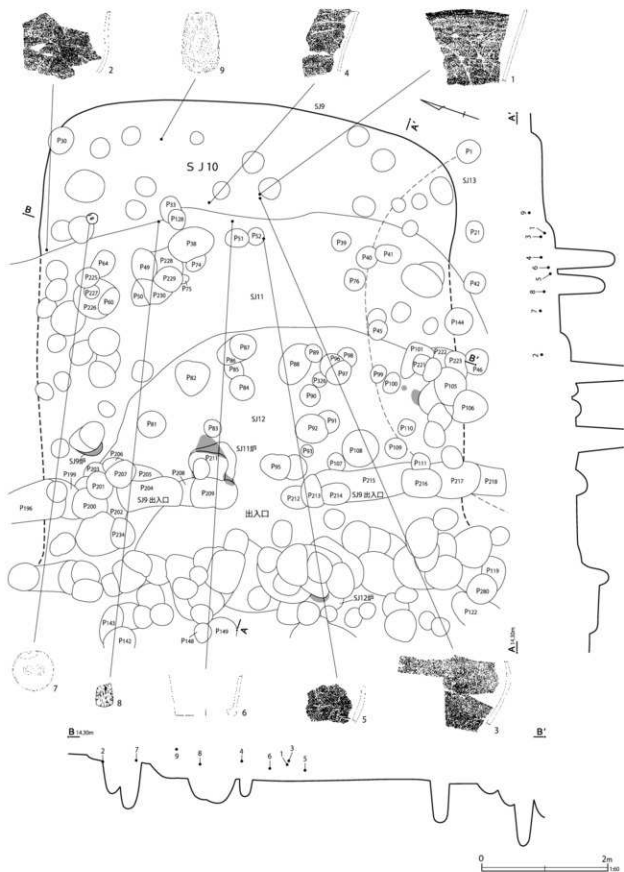
8は蛇紋岩製の磨製石斧である。残存部分の長さが2.4cmと小型のもので上半部は欠損する。両側縁に面を持ち、ほぼ直角である。そのため横断面は長方形を呈する。定角式といわれるもので

ある。丁寧に研磨されており、平刃に近い刃部は丁寧に作り出されている。蛇紋岩製の磨製石斧は極めて少ないが、無いわけではない。

9は軽石製の浮子である。平面形を隅丸長方形にし、横断面を扁平な隅丸長方形に加工している。上端の中央に約0.8cmの孔を穿孔している。



第93图 第10号住居跡出土遺物



第94图 第10号住居跡遺物出土状況(第93图对应)

第22表 第11号住居跡ピット計測表(第95図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P38	74	123	P127	(33)	50	P282	43	113
P39	31	117	P128	32	49	P283	48	108
P40	(33)	89	P129	(40)	63	P284	60	105
P41	41	115	P130	37	75	P285	—	85
P43	68	120	P139	48	66	P299	92	124
P46	42	53	P140	34	65	P300	57	164
P49	(44)	103	P141	48	88	P301	62	138
P50	42	102	P144	45	98	P302	42	94
P51	38	122	P147	29	73	P303	(130)	(81)
P52	28	32	P148	28	88	P304	(60)	139
P54	40	98	P149	57	64	P305	22	146
P55	26	40	P154	35	100	P306	(18)	(66)
P57	37	47	P190	(58)	79	P307	(88)	125
P60	46	107	P191	44	88	P308	42	135
P64	(39)	77	P192	156	52	P309	(88)	(83)
P74	35	71	P193	40	80	P310	—	89
P75	(16)	33	P194	30	88	P311	33	64
P76	36	72	P195	28	76	P312	—	(72)
P101	66	56	P221	33	38	P313	(26)	97
P113	54	157	P222	(30)	65	P314	62	125
P114	27	28	P223	48	128	P315	(118)	114
P115	49	151	P224	(47)	(53)	P316	(120)	100
P116	31	119	P225	37	93	P318	(21)	109
P119	(53)	66	P226	70	66	P319	86	117
P120	62	171	P227	24	83	P320	(83)	71
P121	(54)	168	P228	—	(81)	P321	(72)	(66)
P122	98	82	P229	36	116	P322	49	147
P124	44	54	P230	52	113	P323	(95)	116
P125	42	51	P271	33	71	P325	35	163
P126	40	52	P280	48	92			

第11号住居跡(第95～98図)

第11号住居跡は、L5-D-E4グリッドで検出した。

他住居跡との関係は、第9、10、12、13号住居跡と重複し、第9、12号住居跡によって壊され、第10、13号住居跡を壊していた。

南西側2/3は第12号住居跡によって壊され、西側は床面が削平を受けていた。

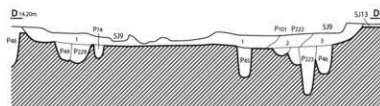
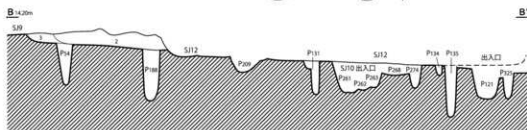
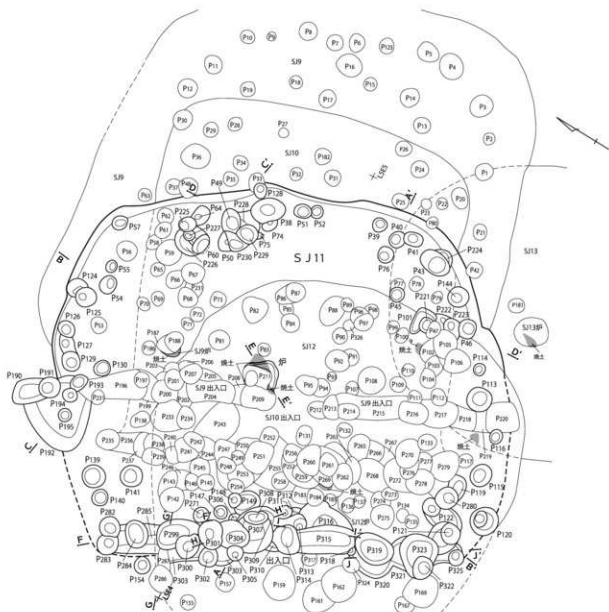
住居跡の形態は隅丸長方形で、規模は主軸8.4m、副軸9.7m、深さは0.5m。主軸方位はN-58°-Eである。

柱穴は壁の内側を巡っており、東側では二重になっていた。西側にはピットが連続し、出入口と考えられる施設が作られていた。やや不整形で

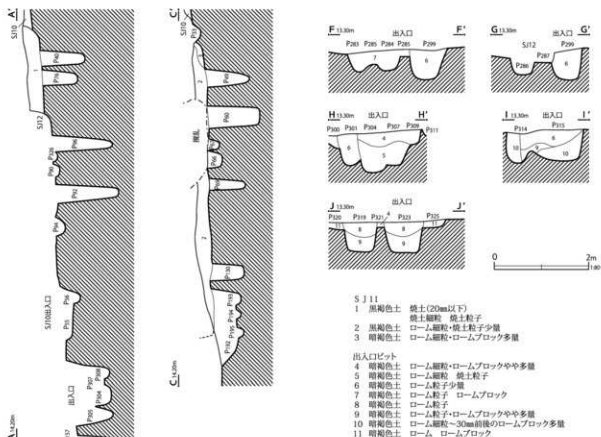
南壁が短い。

住居跡の中央付近から焼土を検出したので、炉跡と考えた。焼土範囲は径0.5×0.5mである。

覆土は比較的厚く残存していたが、出土した遺物量は多くなかった。覆土は壁際の第3層が暗褐色土でロームブロックが多量に含まれていたが、これはより古い第13号住居跡の覆土に由来すると考えられるものである。それ以外の層は風化したローム粒子が主体を占め、焼土粒子も含まれる黒褐色土であり、自然堆積と考えられる様相を呈していた。出入口と考えられるピット覆土は、ローム風化物を含む自然堆積と考えられるものと、ロームブロックを主体とするものの両者が見られた。住居跡の時期は、堀之内2式期である。



第95图 第11号住居跡(1)



第96図 第11号住居跡(2)

第23表 第11号住居跡出土石器観察表(第97図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
4	石錘	ホルンフェルス	6.3	5.4	2.3	94.4	L5-D4 №138	65-4
5	石錘	砂岩	[5.8]	[4.1]	1.3	41.3		65-5

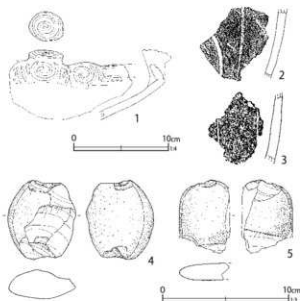
第11号住居跡の出土遺物は第97図に示した。

1は堀之内1式の浅鉢で、突起と口縁側部に渦巻文が施されている。「く」字状口縁を呈している。

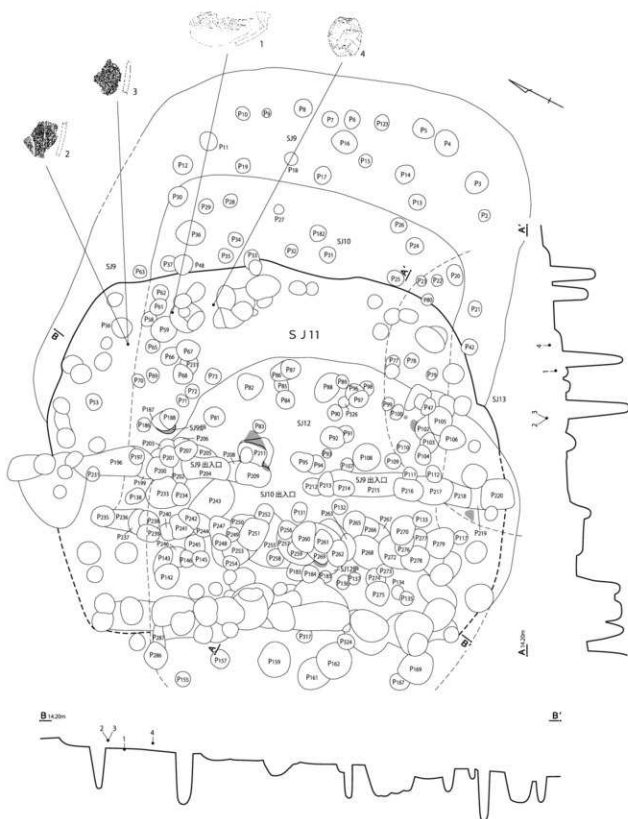
2は後期前半の深鉢の胴部破片で、外面への炭化物の付着が著しい。粗い調整である。胎土には、石英、長石が多く見られる。

4, 5は石錘である。扁平礫の長軸を打ち欠いた打欠石錘である。4はホルンフェルス製、5は砂岩製で下半部と右側面が欠損する。

遺物は主に住居跡の北側から出土している。1の浅鉢は床面直上から、2, 3の土器片と4の石錘は床面の20cm程度深いた覆土中から出土している。



第97図 第11号住居跡出土遺物



第98图 第11号住居跡遺物出土状況(第97图对应)

第12号住居跡 (第99～104図)

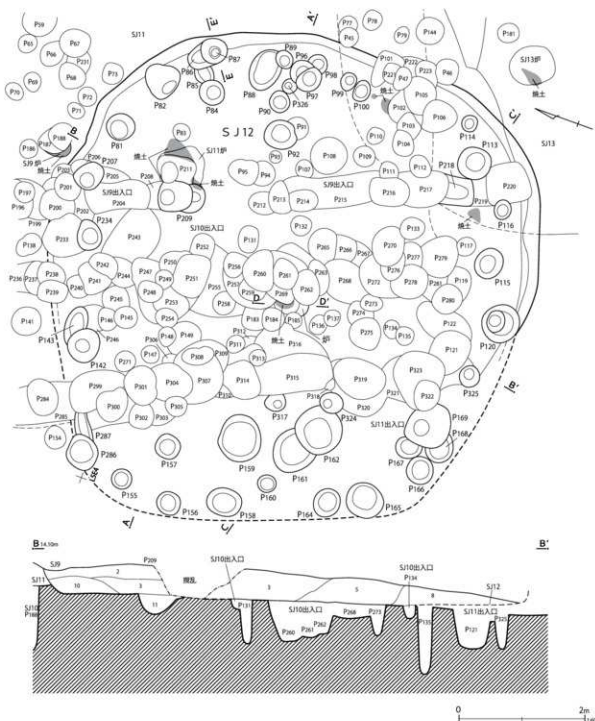
第12号住居跡は、L 5-D 5、L 5-E 3～4 グリッドで検出した。

他住居跡との関係は、第9～11、13号住居跡と重複し、第9号住居跡によって壊され、第10、11、

13号住居跡を壊していた。

北東側1/3は、第9号住居跡によって壊されていた。

住居跡の形態は隅丸方形で、規模は主軸7.8m、副軸7.8m、深さは0.4m、主軸方位はN-69°-E



第99図 第12号住居跡 (1)

である。

柱穴は壁の内側を巡っており、東側では二重となっていた。

住居跡の中央から焼土を検出したので、炉跡と考えた。焼土範囲は径0.6×0.2mである。

住居跡の時期は、加曾利B1式期である。

第12号住居跡出土遺物を第101～103図に示した。

第101図1は堀之内2式の浅鉢で、口縁部内面に沈線による文様が施されている。

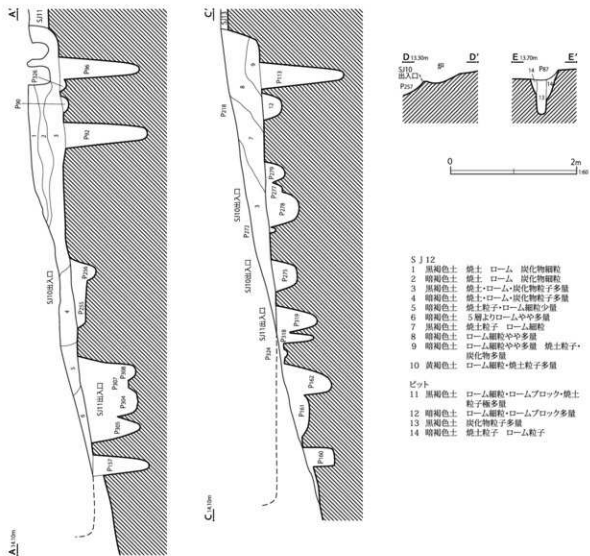
2は加曾利B1式の浅鉢で、口縁部内面に沈線と刻み列による文様が施されている。

3は加曾利B1式の注口土器で、体部にL Rの磨消縄文と渦巻文、刺突列が施される。把手をもち、底部には網代痕が残されている。

第102図4～10は堀之内2式の深鉢破片である。

4～6は同一個体と考えられ、口唇部は外傾する端面を持ち、ほぼ併走する二本の沈線で曲線状の文様を描いている。7、8は集合沈線で紡錘状と三角形の文様を描いている。

9は堀之内2式の波状口縁の深鉢で、口縁部に刻みを持った隆帯を廻らせ、「8」字状貼付文を貼付している。その下に単位文を持った横帯が見ら



第100図 第12号住居跡(2)

第24表 第12号住居跡ビット計測表(第99図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P81	45	142	P114	26	10	P166	46	125
P82	54	131	P115	49	122	P167	41	65
P84	40	145	P116	30	90	P168	(47)	70
P85	(28)	13	P120	61	141	P169	78	151
P86	(37)	29	P142	33	130	P207	49	99
P87	(40)	58	P143	(40)	73	P209	73	81
P88	69	18	P155	30	76	P218	42	89
P89	30	23	P156	36	97	P234	49	117
P90	33	11	P157	38	128	P286	52	81
P92	52	180	P158	56	108	P287	(34)	56
P96	(41)	126	P159	73	142	P306	23	9
P97	43	129	P160	28	83	P317	32	140
P98	(31)	16	P161	(54)	73	P324	38	141
P99	28	33	P162	74	143	P325	34	143
P100	36	67	P164	43	95			
P113	35	137	P165	58	97			

れる。L R縄文による磨消縄文である。

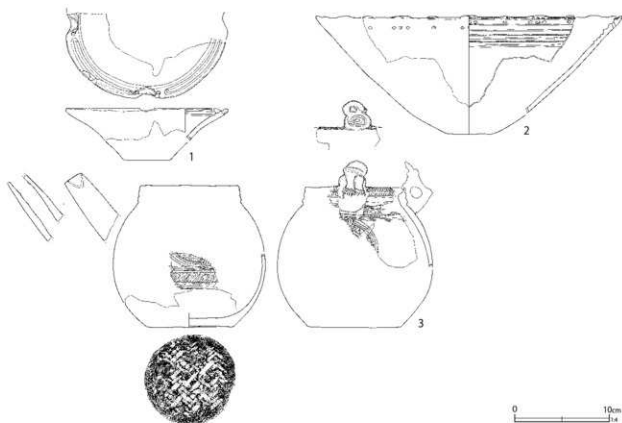
10も口縁部に刻みを持った隆帯を廻らせ、その下に横帯文を持つ堀之内2式の深鉢である。

11は口縁部に四条の細い横帯文を持つ加曽利B

1式の鉢である。

12も口縁部に細い横帯文を持ち、区切り文を持つ加曽利B 1式の深鉢である。

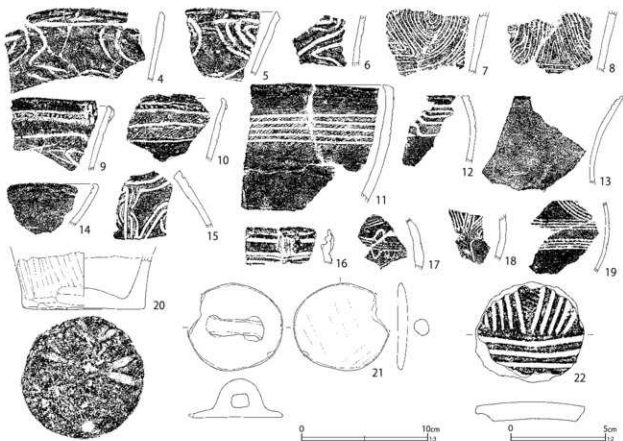
13、14はいずれも外面無文の鉢形土器で、口縁



第101図 第12号住居跡出土遺物(1)

第25表 第12号住居跡出土石器観察表(第103図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
23	石錘	頁岩	6.8	3.8	2.0	81.2		65-6
24	石錘	頁岩	6.4	4.8	1.5	65.5		65-7
25	石錘	頁岩	6.4	4.0	1.6	57.3		65-8
26	石錘	ホルンフェルス	6.0	5.1	1.2	52.2		65-9



第102図 第12号住居跡出土遺物(2)

内面に二～三本の沈線が見られる。

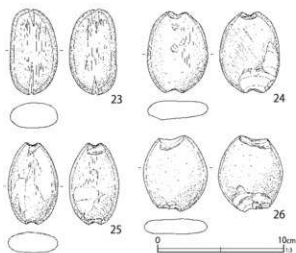
15～19は注口土器である。15は堀之内式、16～19は加曾利B 2式である。

20は土器の底部で網代圧痕が見られる。

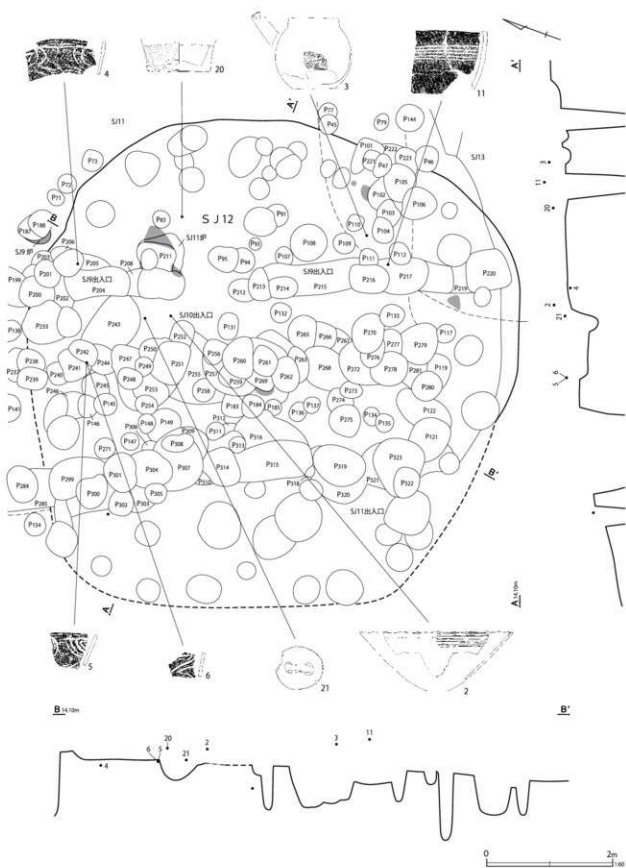
21は堀之内式の蓋である。

22は土製円盤である。堀之内1式の深鉢胴部破片を加工したものである。

第103図23～26は石錘である。23～25は頁岩製、26はホルンフェルス製である。23は円礫の長軸に切り込みを入れた切目石錘である。24～26は扁平礫の長軸を打ち欠いた打欠石錘である。



第103図 第12号住居跡出土遺物(3)



第104图 第12号住居跡遺物出土状況(第101、102図対応)

第13号住居跡 (第105～108図)

第13号住居跡は、L 5-E 4～5 グリッドで検出した。

他住居跡との関係は、第9～12号住居跡と重複し、第9～12号住居跡によって壊されていた。

北側1/3は、第11号住居跡によって壊されていた。

住居跡の形態は円形で、規模は、主軸6.5m、副軸6.4m、深さは0.3mで、主軸方位はN-145°-Eである。

住居跡の中央西寄りから焼土を検出したので、炉跡と考えた。焼土範囲は、径0.7×0.6mである。

住居跡の時期は、堀之内2式期である。

第13号住居跡出土遺物を第105、107図に示した。

第105図1は堀之内2式の鉢で、体部にL Rの磨消縄文が施され、底部には網代痕が残されている。底部の断面形態は深鉢と共通しており、成形時に「L」字形の張り出し部分を付け足している。胴部と底部に黒斑が見られる。

2は後期前半の深鉢胴部である。

3は堀之内1式の深鉢口縁部である。口唇部直下に沈線で刺突が施されている。

4は堀之内1式の深鉢口縁部である。口唇部に刺突列が施されている。

5は堀之内2式の深鉢口縁部である。隆帯上に刻み列、口縁部にL Rの磨消縄文による横帯文を施している。内文を持つ。

6は堀之内2式の深鉢胴部である。L Rの磨消縄文による文様を施している。

7は無文の鉢である。

8は堀之内式の深鉢胴部破片である。縄文地文の上に縦方向の沈線が見られる。

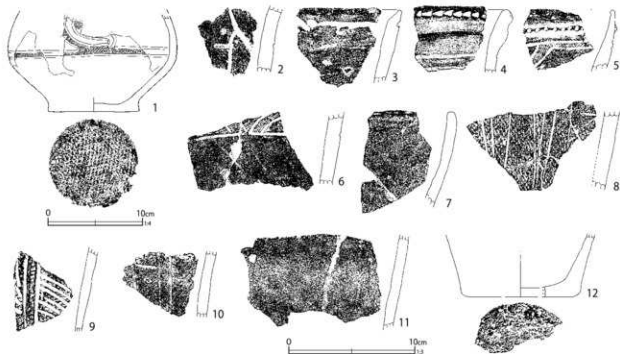
9も堀之内式の胴部破片である。縄文地文と沈線から構成される。

10は沈線が施される。

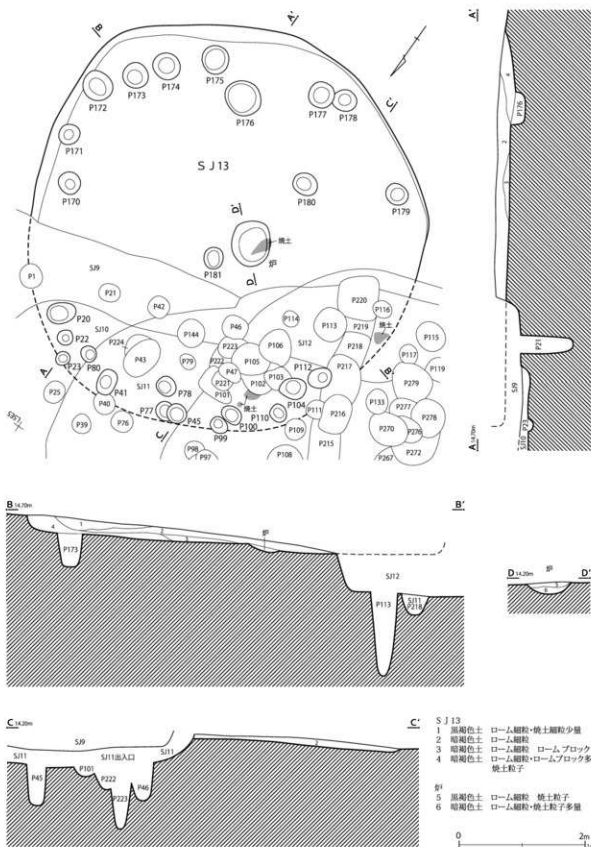
11は深鉢の底部付近の破片で無文である。

12は底部破片である。

第107図13はホルンフェルス製の打製石斧である。分割した礫の片側のみに加工を施している。上半部の一部が欠損しているが、おそらく短冊形



第105図 第13号住居跡出土遺物(1)



第106図 第13号住居跡

第26表 第13号住居跡ビット計測表(第106図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P20	44	100	P100	36	121	P175	45	17
P22	25	91	P104	44	184	P176	56	27
P23	24	48	P110	30	126	P177	40	13
P41	42	158	P112	38	50	P178	36	15
P45	31	113	P170	37	67	P179	36	15
P77	31	62	P171	33	57	P180	40	15
P78	32	73	P172	49	59	P181	35	54
P80	25	30	P173	40	48			
P99	28	86	P174	44	13			

第27表 第13号住居跡出土石器観察表(第107図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
13	打製石斧	ホルンフェルス	[11.4]	5.9	2.8	190.8		65-10

であると思われる。

第108図に第13号住居跡の遺物出土状況を示した。遺物の多くは、覆土が比較的残されている東側から出土しているが、基本的には床面から20～30cm程度は浮いており、床面直上より出土したものは2、5のみである。

第9～13号住居跡出土遺物(第109～120図)

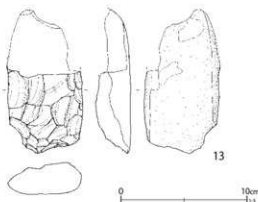
第9～13号住居跡の出土遺物で、各住居跡に分離できなかったものについて、第109～120図に一括して示した。

第109図1は堀之内2～加曽利B1式の深鉢で地文は無節Lの縄文が施されている。2は深鉢底部で、網代痕が残されている。3は加曽利B1式の鉢で口縁部に沈線で刻み列による細い横帯文が

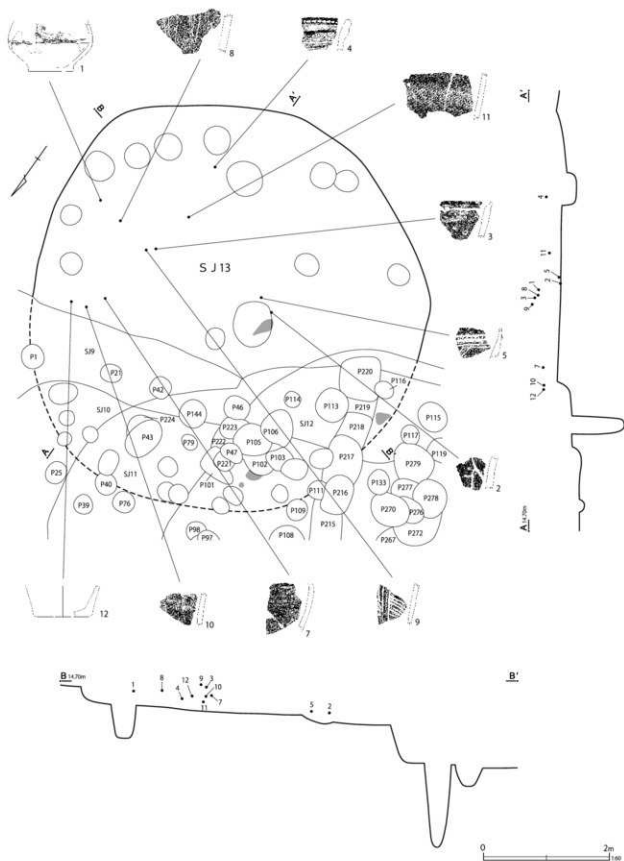
施文されている。刻み列は部分的に位置を変えて施されている。七単位の単位文を伴う。4は加曽利B1式の注口土器で、胴部に沈線と刻み列による細い横帯文が施されている。L Rの磨消縄文による「の」字状の単位文が施されている。5は堀之内2式から加曽利B1式の鉢で、底部に網代痕が残されている。底部形態は深鉢と共通している。6は堀之内2から加曽利B1式の壺で、口唇部に沈線による模様を施している。

第110図7～53は堀之内1式の深鉢である。7～22は口唇直下に、23～25は口縁部に沈線が見られる。26～34は波状口縁である。35は無文、36は沈線、37は口唇直下に円形刺突列が見られる。38～53は縄文と沈線が見られる。

第110～112図54～194は堀之内2式の深鉢である。第110～111図54～113は口縁部に刻みをもつ隆帯が貼り付けられている。54は横長の楕円形の刻みが施されている。55は刻みの中程が多少突出しており特徴的である。61は相互に接合しない同一個体の2片から構成されており、体部の施文に用いられているものと同一原体と考えられる縄文原体で、刻みが加えられている。62は内文を持つ。79は刻みの中に縦方向の段が認められ、隆帯の直下に弱い斜線が認められる。57、62、77、78、81、88、



第107図 第13号住居跡出土遺物(2)



93、99、103、105、106は「8」字状貼付文が施されている。116～139は横帯文が見られる。118、119は内文を持つ。

第112図140～174は縄文が施された三角形の幾何学文が見られる。140には内文が見られる。175～182は縄文を持たない三角形の幾何学文が見られる。183～194は沈線と縄文により円形、楕円形、半円形などのモチーフが描かれている。

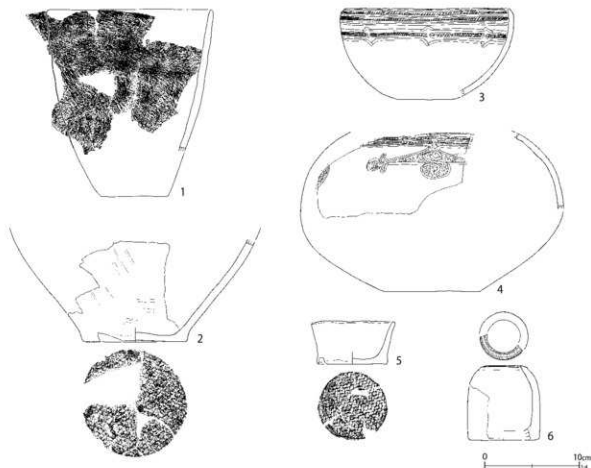
第113図195～221は沈線が見られる。222～242はその他の模様である。243～255は櫛歯、256～261は縄文、262～271は無文の土器群である。

第114図272～277は把手及び突起である。278～295は注口土器である。296～305はいわゆる下北原式である。

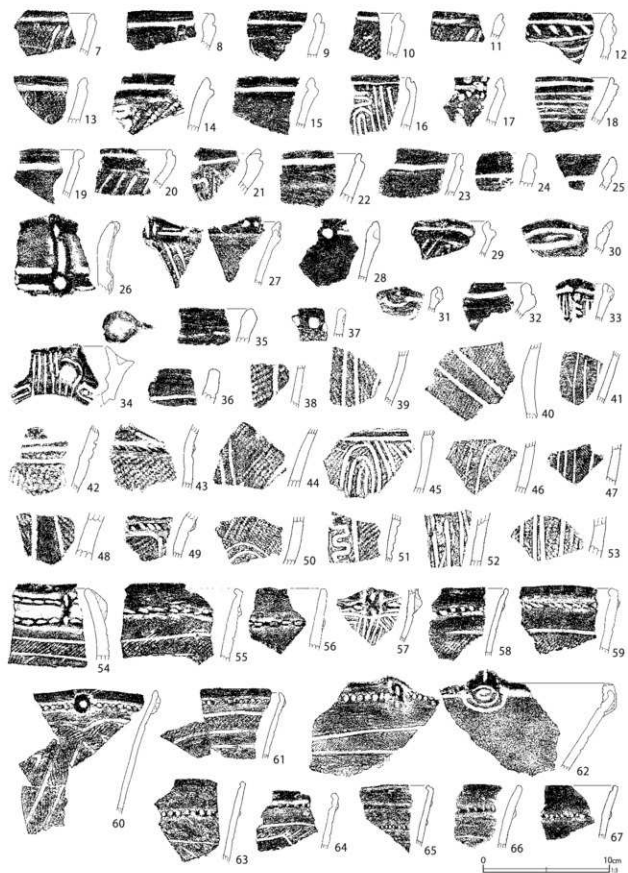
第114図306～317、第115図318～321は太い疎らかな沈線で主として曲線的な模様を描く。322～329

は沈線で曲線的な模様を描く。331～340は、沈線で直線的な模様を描く。340～360は集合沈線あるいは櫛歯状工具で曲線を描く。362～372、第116図373～385は、縄文の地文と沈線が見られる。386～390は、縄文のみの土器片である。391～402は、無文の土器片である。

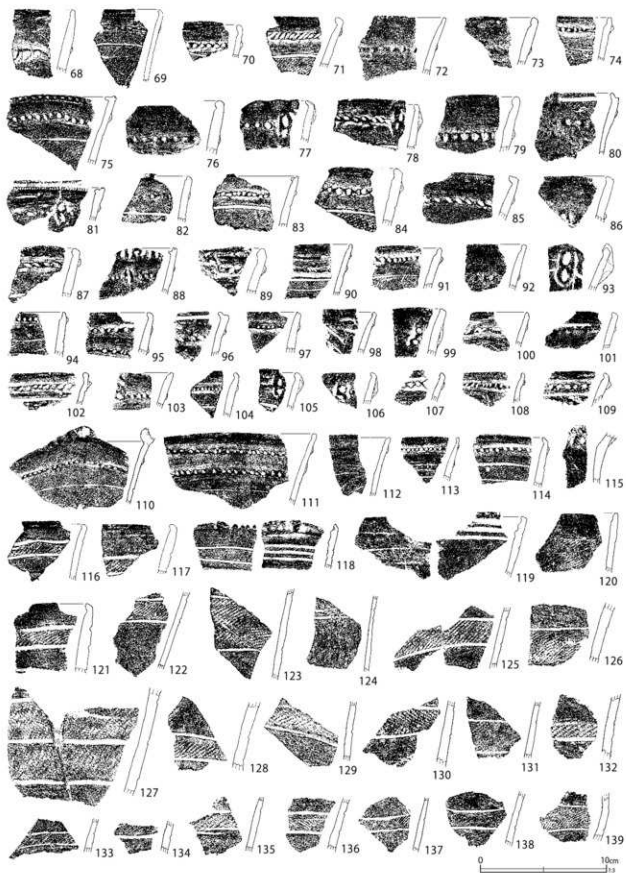
403～442は、加曾利B 1式の鉢類である。405、406、414～417、419、424は区切り文を持つ。429は「の」字状の単位文を持つ。405は横位の沈線を施した後に、縦位の区切り文で上下の沈線を連結している。その際に縦位の区切り文は上下段で左下がりにずらしている。その後に区切り文間の横位の沈線はナデ消され、さらに上から全体に縄文が施文されている。この縄文施文により、区切り文は不鮮明になっている。沈線のナデ返しは行われていない。406は口縁部下に二本、少し帯状に間



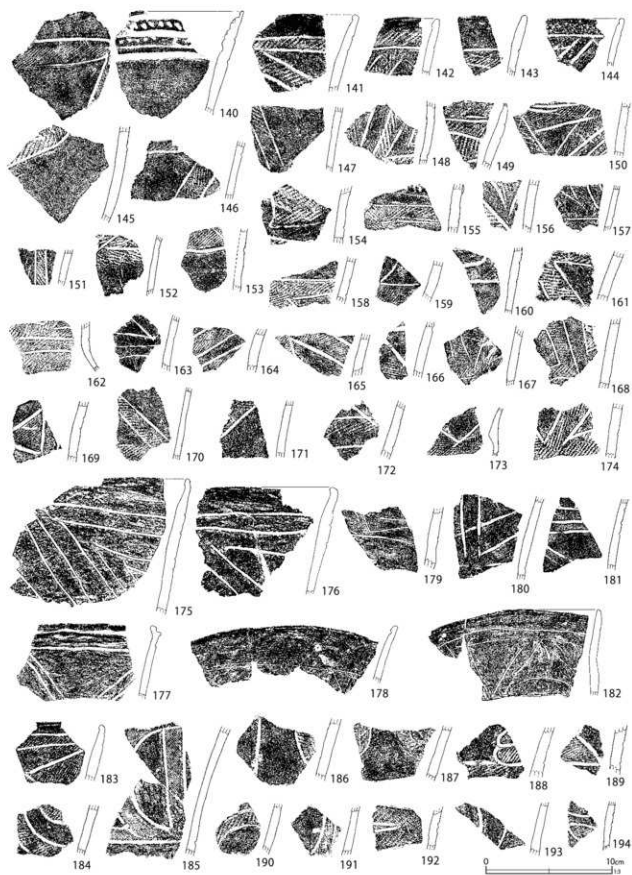
第109図 第9～13号住居跡出土遺物(1)



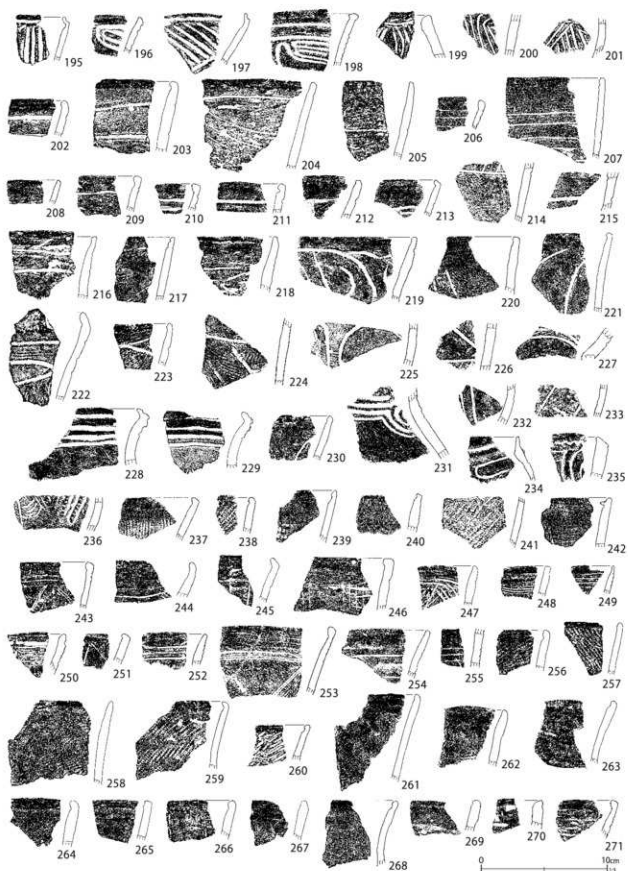
第110图 第9~13号住居跡出土遺物(2)



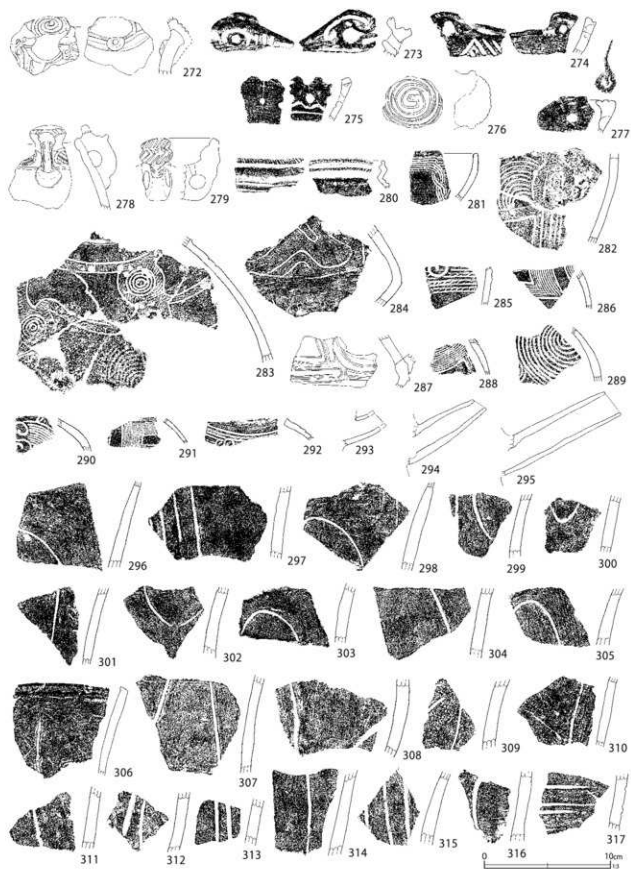
第111图 第9~13号住居跡出土遺物(3)



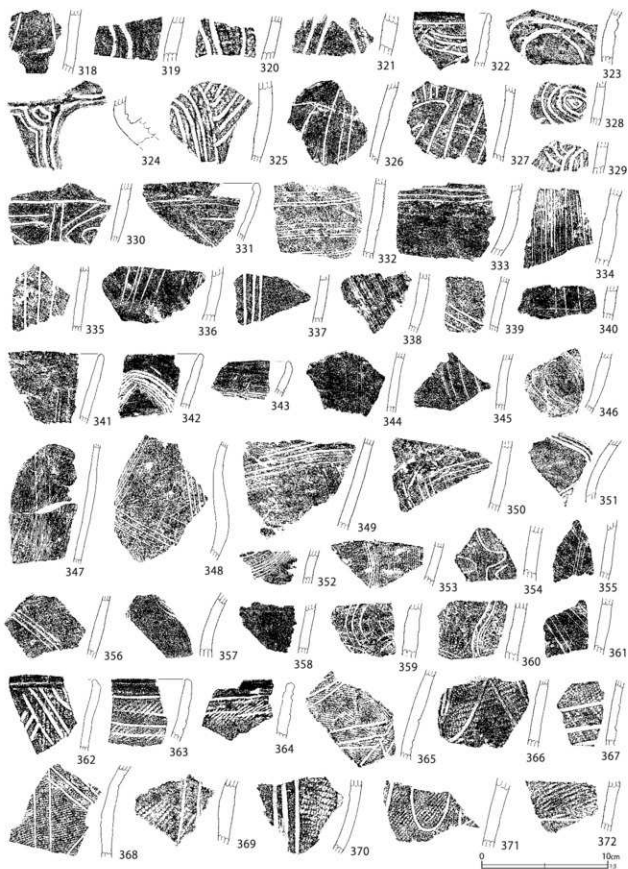
第112图 第9~13号住居跡出土遺物(4)



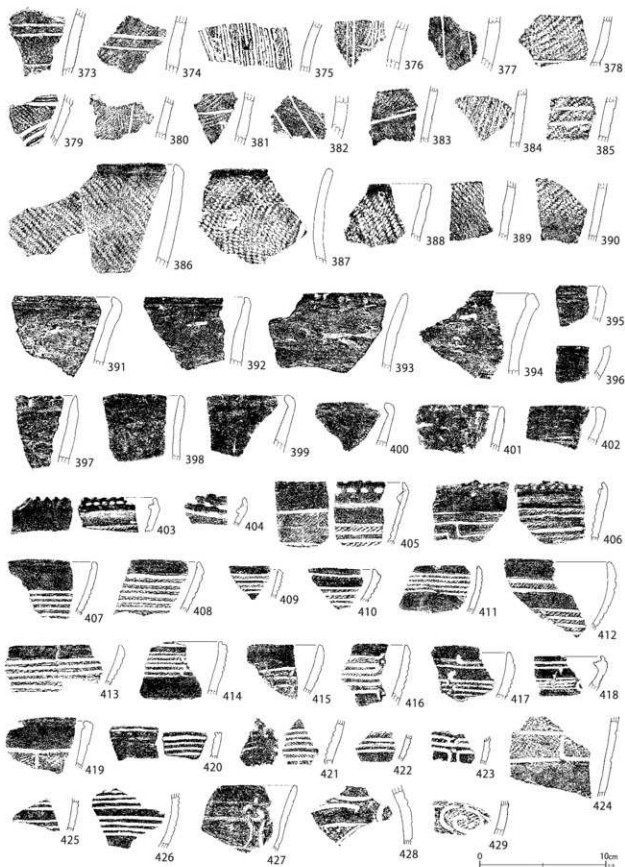
第113图 第9~13号住居跡出土遺物(5)



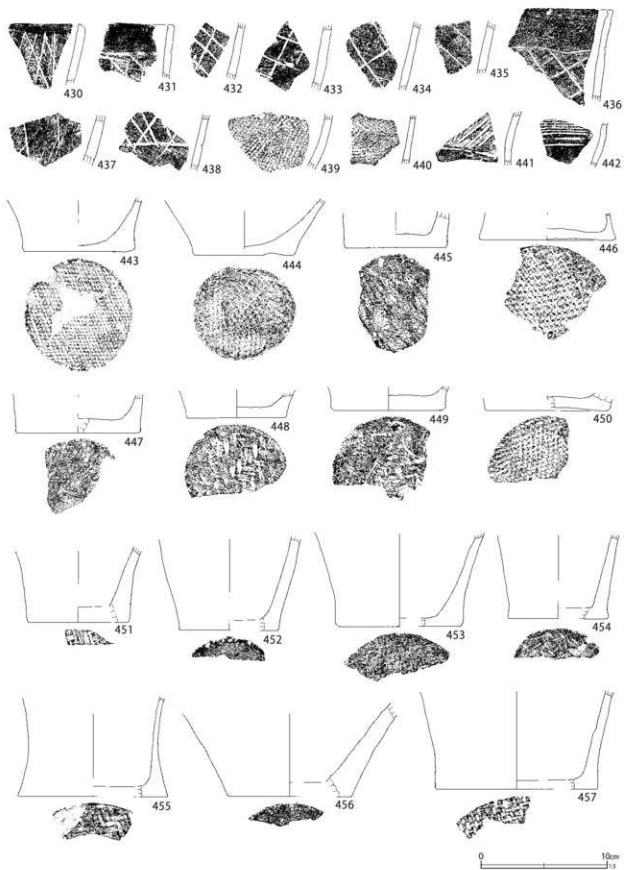
第114图 第9~13号住居跡出土遺物(6)



第115图 第9~13号住居跡出土遺物(7)



第116图 第9~13号住居跡出土遺物(8)



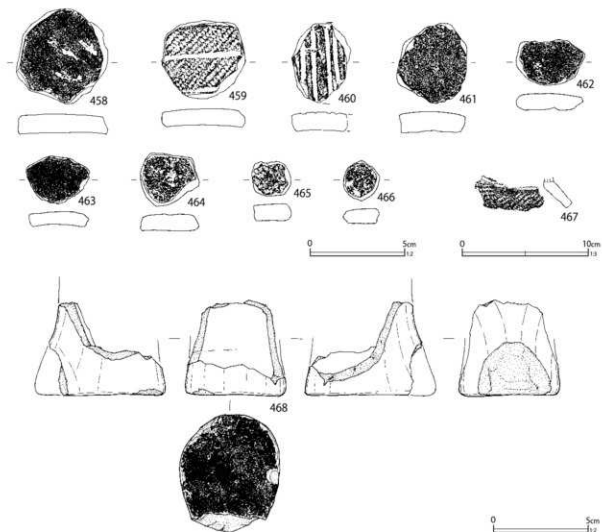
第117图 第9~13号住居跡出土遺物(9)

隔をあけてさらに下に一本以上の横位の沈線を施して一次区画文とし、間隔のあいた帯状の部分に単位文を施している。この単位文は、上下の一次区画文を連結したクランク文であると思われる。クランク文の横線は、単位間で位置が異なっているため、予め横線を施した後に縦線で横線を切断したものではなく、単位毎に個別に施文されている。403、404、407～429は、外面にミガキ、縄文、刻みなど各種の調整が施されている。特徴的な間隔の狭い横線が外面に施されているものの中で、408、411、413は縄文が施文され、409、416、418は刻みが施されている。また、410、412、414、417は最上段に刻みが、下段には縄文が施されている。

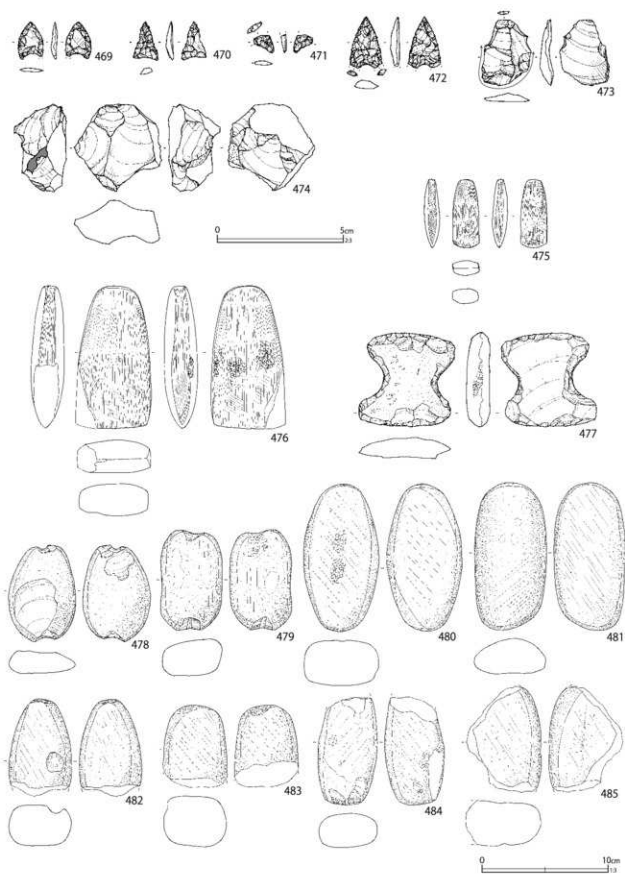
第117図430～438は格子目文土器である。430は口唇部に接して格子が見られ、一次区画文と無文帯がないことや格子に縦位の傾向が強いことから新しい様相を示す。431は口唇にミガキが見られ、一次区画文を切つて格子が施されていることから古い様相を示す。436は擦痕が見られ格子を切つて一次区画文が施されていることから、中位の様相を示す。

439、440は縄文のみの破片である。441、442は注口土器の破片である。443～457は底部破片である。458～466は土製円盤である。467は断面に研磨痕があり砥石と考えられる土器片である。

第118図468は中空土偶の右脚である。現存高は



第118図 第9～13号住居跡出土遺物(10)

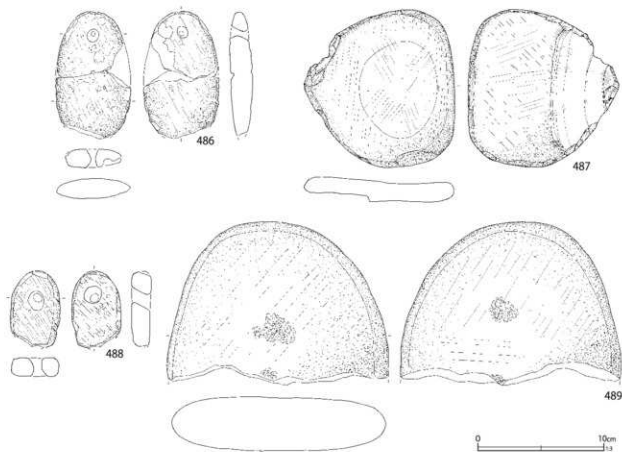


第119図 第9～13号住居跡出土遺物(11)

4.9cm、底部の最大幅は5.2cm、推定の最大長は6.9cmになる。完形ならば、約30cmの土偶になると思われる。踵の部分を欠いている。残存部位には文様等が残っていないが、縦方向にヘラ状工具で磨いた痕跡がかすかに残る。内面には輪積の痕をナデたような痕跡が観察できる。底部は開口せず、比較的粗い網代痕が残る。色調は茶色味の強い褐色で、焼成は良好である。胎土は粗く、径1~3mmの小石が目立つ。後期中葉の土偶であろう。

第119図469~472は黒曜石製の石鏃である。469、471、472は無茎で基部は丸みを帯びた挟りが施されている。469、472の形状は側縁部を緩やかに外湾した二等辺三角形を呈する。469は薄い剥片の縁辺に調整を施している。470は無茎で基部は僅かに挟りが入っている。平面形は二等辺三角形を呈するが、調整が粗い。471は右脚部のみ残されて

いる。472は両脚部が欠損する。丁寧に押圧剥離で調整されている。473は黒曜石の微細剥離痕を持つ剥片である。打面は欠損する。剥片の両側縁から末端にかけて微細剥離痕が観察される。474はチャートの石核である。小型の礫を素材としている。打面調整等は行っていない。最終作業面は平坦な剥離面を打面として剥離している。タール状の付着物がある。475、476は磨製石斧である。両側縁に面を持ち直角で、横断面形は長方形を呈する。定角式といわれるものである。全面が丁寧に研磨されており、特に平刃に近い刃部は丁寧に作り出されている。475はトレモラ閃石岩製で完形である。長さが5.4cmと小さく刃部には刃こぼれも見られない。476もトレモラ閃石岩である。左側縁から刃部の一部が欠損する。若干刃こぼれも観察された。477は砂岩製の打製石斧である。



第120図 第9~13号住居跡出土遺物(12)

第28表 第9～13号住居跡出土石器観察表(第119, 120図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
469	石鏃	黒曜石	1.5	1.1	0.3	0.3	L5-D4 №78	65-11
470	石鏃	黒曜石	2.0	1.0	0.3	0.3	L5-D5 №41	65-12
471	石鏃	黒曜石	[0.7]	[0.8]	0.2	0.1	L5-D4 №176	65-13
472	石鏃	黒曜石	[2.1]	[1.3]	0.4	0.8	SJ9～13 H-H'	65-14
473	U剥片	黒曜石	2.6	2.0	0.6	1.9	L5-D4 №176	65-15
474	石核	チャート	3.5	3.4	2.2	20.4		66-1
475	磨製石斧	トレモラ閃石岩	5.4	2.1	1.2	20.6	L5-D4 №22	66-2
476	磨製石斧	トレモラ閃石岩	7.5	7.5	1.9	126.0	SJ9～12	66-3
477	打製石斧	砂岩	11.5	[5.3]	2.6	287.1	L5-D4 №145	66-4
478	石錘	ホルンフェルス	7.6	5.4	1.8	106.2	SJ9～13 P35	66-5
479	石錘	砂岩	7.9	4.9	2.9	187.8	SJ9～13 P35	66-6
480	磨石	安山岩	11.6	6.1	3.6	370.6	SJ9～13 P49	66-7
481	磨石	閃緑岩	11.6	5.7	2.8	303.0		66-8
482	凹石	安山岩	[7.7]	5.0	3.2	203.4		66-9
483	敲石	閃緑岩	[6.5]	5.1	4.1	216.5		66-10
484	磨石	砂岩	[8.5]	4.8	2.8	203.6		66-11
485	磨石	安山岩	[8.4]	[6.0]	3.6	234.7	SJ9～13 P35	66-12
486	浮子	軽石	[10.0]	[6.0]	1.8	41.5		66-13
487	石皿	緑色岩	[12.4]	[12.0]	2.0	430.3	L5-D4 №114	67-1
488	浮子	軽石	[6.0]	4.0	1.6	14.1		67-2
489	石皿	閃緑岩	[13.0]	17.4	4.3	1495.1	L5-D4 №148	67-3

分銅形を呈する。挟り部は深く敲打痕が見られる。

478, 479は石錘である。478はホルンフェルス製で、扁平鏢の長軸を打ち欠いた打欠石錘である。479は砂岩製である。やや分厚い鏢の長軸に敲打を加えている。どちらかといえば切目石錘に近いようである。480～485は磨石、敲石、凹石である。その全てに磨面が認められるが、端部に敲打の痕跡を持つものを敲石、平坦部に明確な凹みを持つものを凹石、磨面のみ認められるものを磨石として記載した。480, 481, 484, 485は磨石である。480は安山岩製である。中央に敲打の痕跡が見られるが、あまり凹んでいない。481は閃緑岩製である。側面を敲打で整形している。484は砂岩製である。上端部が欠損し、形状は棒状に近いようである。下端部に敲打痕跡が見られる。485は破片で、安山岩製である。右側面以外が欠損しているが、楕円形を呈すると思われる。483は閃緑岩製の敲石である。表裏面はよく磨かれている。下

半部が欠損し、形状は棒状に近いようである。上端部に敲打痕が見られる。482は安山岩製の凹石である。下半部が欠損する。表裏面は平坦で磨り痕が見られる。1箇所凹穴が見られる。

第120図486, 488は軽石製の浮子である。486は下半部が欠損している。平面形状は楕円形を呈し、上半部中央に0.9cmほどの穿孔を施している。両側縁はあまり整形せず、横断面形はレンズ状を呈する。488は下半部が欠損する。平面形状は楕円形を呈するが、486と比べると小型である。穿孔は上半部中央に1.3cmと486よりも一回り大きく開けられている。また、両側縁を整形し、横断面形は隅丸長方形を呈する。

487, 489は石皿である。487は緑色岩製である。石皿としては小さく扁平で、皿部は使用によって僅かに凹んでいる。489は閃緑岩製である。下半部が欠損する。平面形状は楕円形を呈する。表裏面ともに平坦で明確な皿部は作りだされていない。

第14号住居跡(第121～123図)

第14号住居跡は、K 5-J 6～7グリッドで検出した。

他遺構との関係は、第1号方形周溝墓、第138、214、215号土塼と重複し、これら全ての遺構に壊されていた。

覆土の一部は攪乱を受け、西側の1/5は削平されていた。

住居跡の形態は長方形で、規模は主軸6.2m、副軸5.4m、深さ0.6m、主軸方位はN-55°-Eである。柱穴は検出できなかった。

床面の北西側で炉跡を検出した。焼土範囲は推

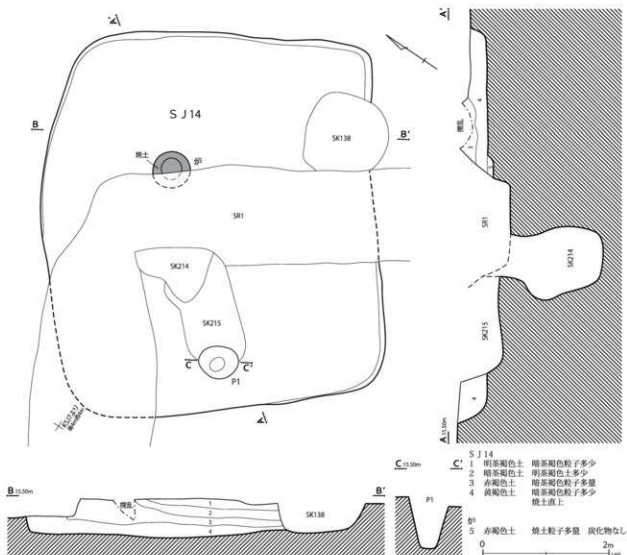
定径0.3×0.7mである。

住居跡の覆土は地山ローム層と酷似しており、識別が困難であるが、第1号方形周溝墓の周溝壁際から縄文前期の土器や石器が出土したことから精査を行ったところ、全体形を確認するに至った。

遺物の出土量は極めて少なかったが、住居跡の時期は諸磯b式期と判断した。覆土中には早期や前期末の土器も混在していた。

第122図に出土遺物を示した。

1、3は胴部破片である。2、4、5は口縁部の破片である。1は半截竹管による平行沈線で、横位の一次区画文とそれに付着した弧線が描かれて



第121図 第14号住居跡

いる。2も半截竹管により口縁に平行した平行沈線が、四本描かれている。3は胴部上位の括れ部分の破片で、縄文地文の上に、斜位の刻みが入った浮線文が二条施されている。4、5は爪形文が口縁部に四条程度施されている。4は波状口縁である。

いずれも諸磯b式期のものであり、4、5は浮島系のものである。3～5はやや後出的である。

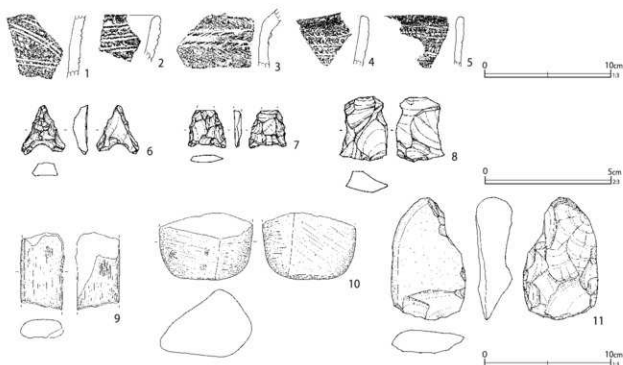
第122図6～11に石器の図を示し、第29表に観察表を示した。6、7は石鏃である。6は黒曜石製で、無茎で基部が浅く丸みを帯びた挟りが入る。

加工は粗く周縁のみ調整されている。7はチャート製で、先端が欠損する。無茎で浅い挟りが基部に見られる。8はチャート製で、小型剥片の両端部に剥離を加えている。二次加工剥片と考えられる。9は緑泥片岩製の石剣である。上下両端が欠損する。横断面形は扁平な楕円形を呈し、表裏面に若干の敲打痕と磨り痕が見られる。10は砂岩製の磨石である。上半部は欠損する。自然礫をそのまま利用し、表裏面を磨面として使用している。下端部に敲打痕が観察されている。

11は砂岩製の打製石斧である。扁平な礫を分割

第29表 第14号住居跡出土石器観察表(第122図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
6	石鏃	黒曜石	2.0	1.7	0.6	1.1	K5-J7 №2	67-4
7	石鏃	チャート	[2.0]	1.5	0.3	0.9		67-5
8	剥片	チャート	2.6	1.9	1.0	4.1		67-6
9	石剣	緑泥片岩	[6.2]	[3.5]	1.5	51.9	K5-J7 №12	67-7
10	磨石	砂岩	[5.3]	[7.4]	5.3	233.6	K5-J7 №20	67-8
11	打製石斧	砂岩	9.7	5.8	2.8	157.2	K5-J7 №18	67-9



第122図 第14号住居跡出土遺物

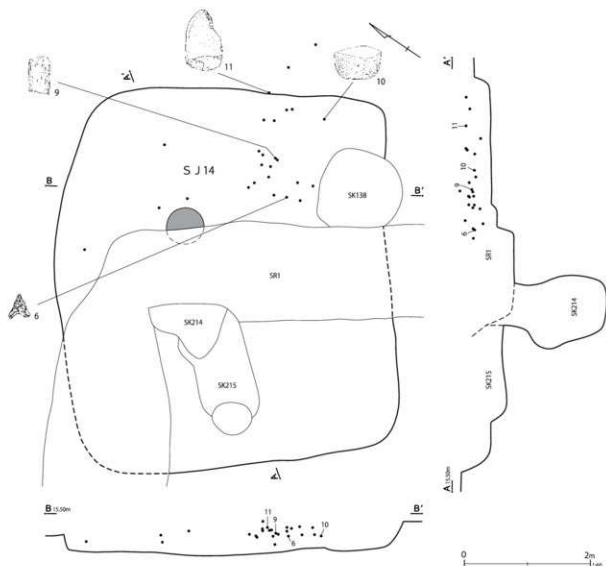
して、主に分割面に調整が行われている。上端部には敲打痕が、下端部の一部に摩耗痕が見られる。

第123図に遺物出土状況を示した。

第122図に示した土器類はいずれもプラン確認時に出土したもので、出土位置を図示できなかった。住居跡の下層から出土した土器類は、その多くが混入と考えられる条痕文系のものである。石器類は、一部について出土位置を図示することができた。

冒頭でも記したが、本住居跡は第1号方形周溝墓の周溝断面で前期土器のまとまりが確認され、

断面を精査した結果確認したものである。覆土は地山ローム層とかなり類似していたため、識別が困難である。遺物の出土状況を見ても、ほとんど全ての遺物が床面から20cm程度浮いて検出されているため、調査時に床面の認定を誤った可能性がある。本来の床面はこれらの遺物が検出された面(報告した床面よりも20cm程度上)である可能性が高い。方台部側の平面形態と深さについても同様であるため、図示した完掘時の形態は、本来の遺構の形態と比べると多少異なっている可能性が高い。



第123図 第14号住居跡遺物出土状況(第122図対応)

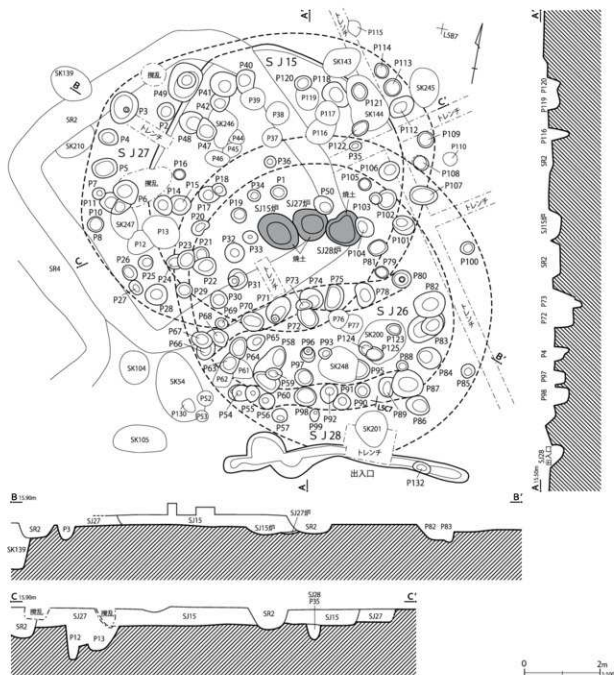
第15、26～28号住居跡(第124、125図)

第15、26～28号住居跡は、調査区の中央西寄りにあたるL 5-B～C 6～7グリッドで検出した。

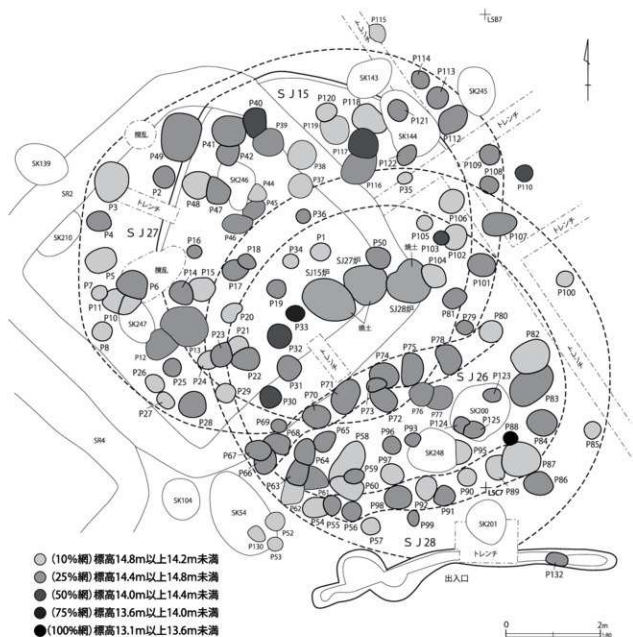
覆土の断面観察等から、第26、27号住居跡→第28号住居跡→第15号住居跡(加曽利B 2式)の順に構築されたことがわかった。住居跡の時期は堀之内2式期から加曽利B 2式期である。

第15号住居跡はやや深く出土遺物も豊富であるが、他の住居跡はさほど深くない。加えて重複も著しかったことから、4軒を厳密に掘り分けることは困難であった。

出土遺物についても、覆土量が少なかった第26～28号住居跡のものを厳密に分けることはできなかった。



第124図 第15、26～28号住居跡



また第15、26～28号住居跡については、調査時に柱穴を住居単位に分けることが困難であるため、通し番号を付した。以下の事実記載でも、この名称は変更していない。ただし、この番号は検出された柱穴の全てに対して付したのではなく、調査中に付していない柱穴も存在する。

今回の報告にあたり、平面的な重複関係を勘案した上で、各柱穴がどの住居跡に帰属するかにつ

いて判断するとともに、無番号の柱穴に対しては、新たにこれを付した。

出土遺物については、その平面位置と垂直位置から各住居跡に分類した。調査時に帰属する住居跡を特定できなかった遺物については、第15、26～28号住居跡出土遺物として一括して取り扱ったが、いずれも微細な破片であり、図示可能なものはなかった。

第15号住居跡(第130～133図)

第15号住居跡は、L5-B6グリッドで検出した。

他住居跡との関係は、第26～28号住居跡と重複し、第26～28号住居跡を壊していた。

他遺構との関係は、第2号方形周溝墓、第143、144、246号土坑と重複していた。第2号方形周溝墓に壊され、第144号土坑を壊していた。第143、246号土坑との関係は明らかにできなかった。

西側1/3は、第26、27号住居跡によって壊されていた。

住居跡の形態は隅丸長方形で、規模は主軸7.1m、副軸6.6m、深さ0.3m、主軸方位はN-161°-Wである。柱穴は壁の内側を巡っており、西側では二重となっていた。

住居跡の中央南東寄りから焼土を検出したので、炉跡と考えた。焼土範囲は、径0.9×1.2mである。

住居跡の時期は、加曽利B2式期である。

第15号住居跡の出土遺物を、第127、131図に示した。

第127図1は加曽利B2式の三単位把手の深鉢で、把手の中央に穿孔が見られる。把手との間には円形の貼り付けが見られる。把手の下端を連結するように二本横位の沈線間に刺突を持った文様が見られ、横位の弧線はかなり雑で右上端はしばしば上位の一次区画文に連結している。体部上半にはRLの磨消縄文によるレンズ状の文様と六単位の「〇」状の単位文が施されている。弧線の連結部に見られる対弧は、上下が一部連結しており新しい様相と考えられる。2は加曽利B2式の深鉢

で、体部上半にはLRの磨消縄文によるレンズ状の文様と四単位の「〇」状の単位文が施されている。体部に黒色の斑文がある。3は加曽利B2式の深鉢で、体部上半にはLRの磨消縄文による横帯文と「〇」状の単位文が施されている。4は加曽利B2式の深鉢で、口縁部内面に沈線が加えられている。口縁部には矢羽状沈線が施され、頸部には刻み列が施されている。5は胴部に沈線を持つ深鉢である。6は加曽利B2式の深鉢で、四単位の突起をもつ。体部上半にはレンズ状の文様と八単位の「〇」状の単位文が施されている。7は波状口縁の浅鉢で、口縁部に沈線が廻る。8は加曽利B2式の浅鉢で、四単位の突起をもつ。体部にはLRの磨消縄文による四単位の「の」字状の単位文が施されている。成形時に単位文の内側を押し込んで、外側に飛び出させている。9は加曽利B2式の鉢で、四単位の突起をもつ。口縁部には刺突による四単位のレンズ状の文様が施されている。体部には矢羽状沈線が施されている。10は加曽利B1式の鉢である。口縁外面には刻みが見られ、口縁には四本の沈線が廻り、短い縦沈線の区画文が認められる。

第128図11～17は注口土器である。11は加曽利B2式の注口土器で、三単位の小波状口縁をもち、口縁部内面に沈線を施す。体部にはLRの磨消縄文による文様と「ハ」字状の単位文が施されている。頸部には刻み列が加えられている。12は加曽利B2式の注口土器で、彫刻的な手法で無文部を削り取り、「の」字状の文様を浮かび上がらせている。13は加曽利B2式の注口土器で、彫刻的な手法で

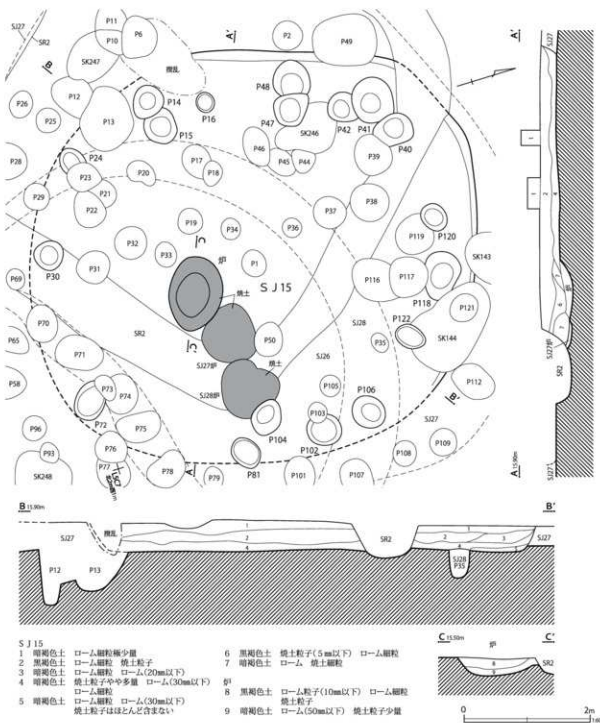
第30表 第15号住居跡ピット計測表(第125図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P14	55	52	P41	74	53	P102	55	44
P15	(50)	43	P42	52	77	P104	58	32
P16	33	67	P47	55	63	P106	56	31
P24	(29)	29	P48	(53)	42	P118	78	48
P30	46	62	P72	(52)	50	P120	45	33
P40	(55)	85	P81	52	72	P122	48	72

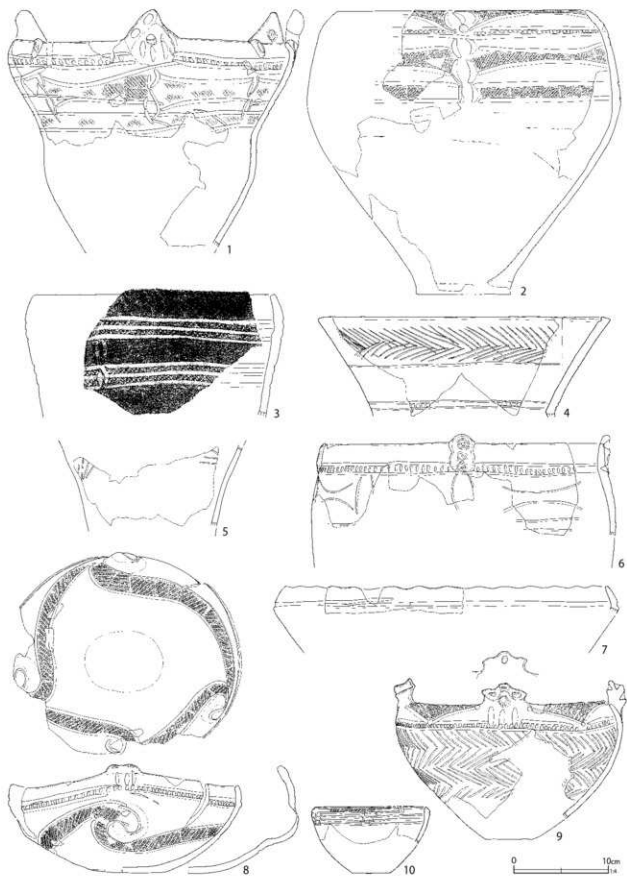
無文部を削り取り、「」字状の文様を浮かび上がらせている。底部が磨り減っている。12と類似しており、東北地方の手法で作られた土器である。14は加曽利B 1式の注口土器で、口縁部に突起をもつ。15、17は注口土器の注口部分である。16は

後期の浅鉢である。形態から加曽利B 2式と考えられるが、摩耗が激しいため判別できない。

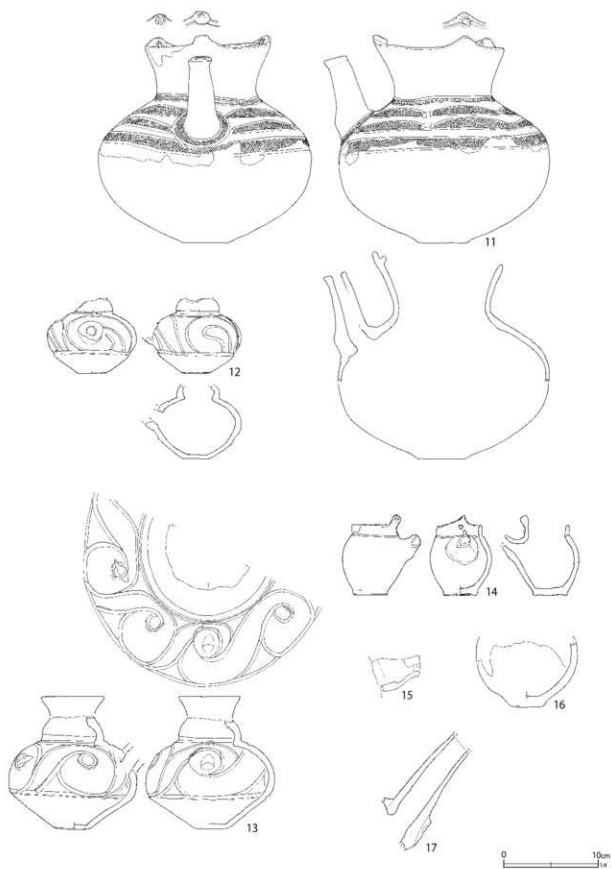
第129図18～29は加曽利B 1式の鉢類で横帯文や内文が見られる。30～46は加曽利B 2式を中心とした鉢類である。第130図47～55は格子目文土



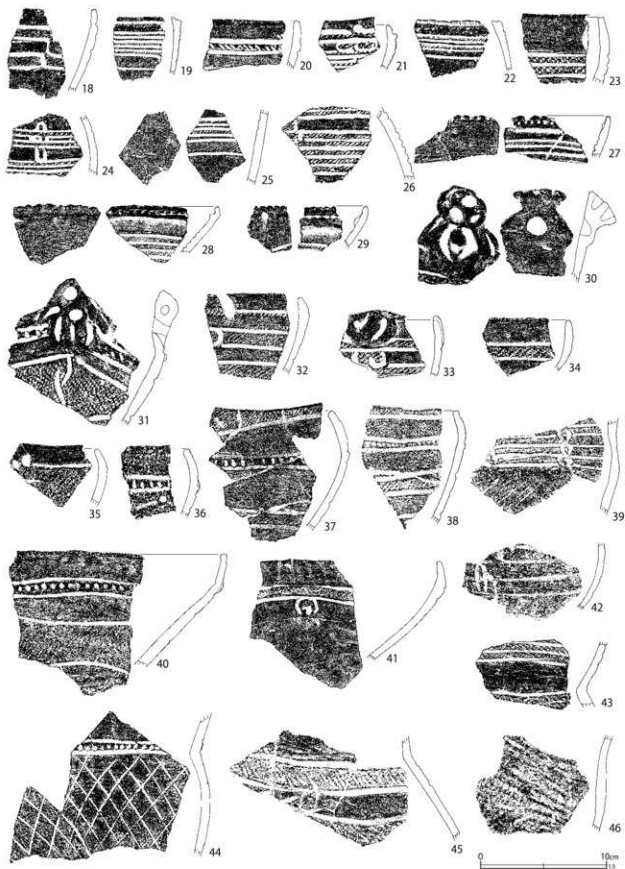
第126図 第15号住居跡



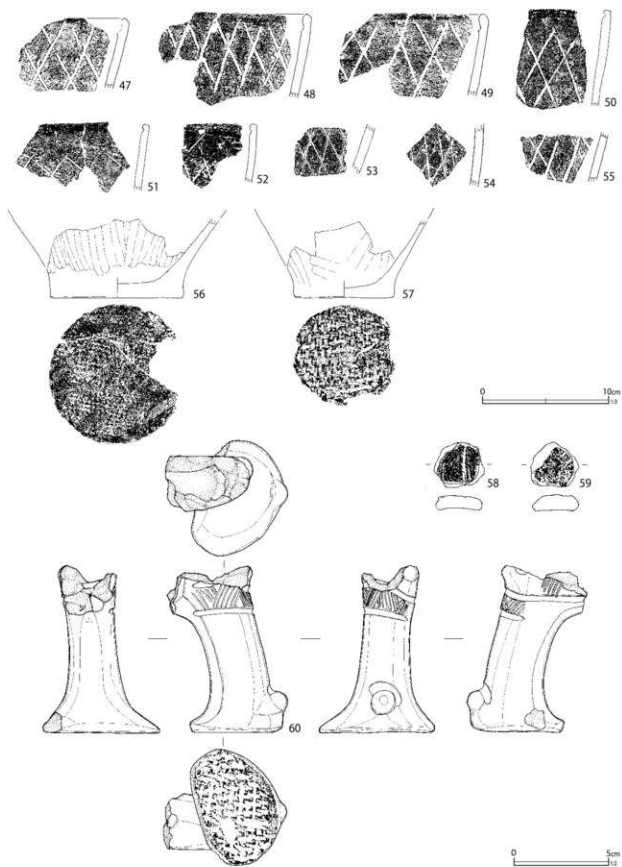
第127图 第15号住居跡出土遺物(1)



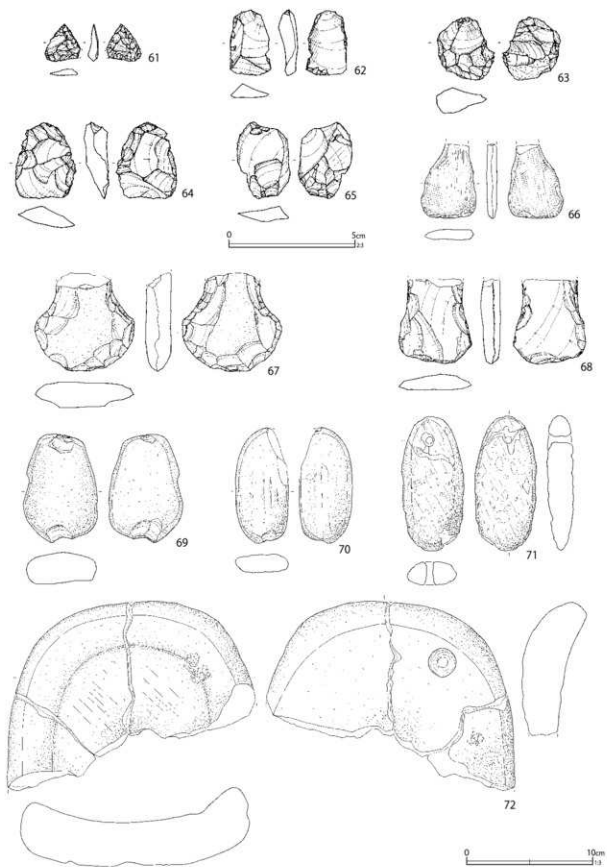
第128图 第15号住居跡出土遺物(2)



第129图 第15号住居跡出土遺物(3)



第130图 第15号住居跡出土遺物(4)



第131图 第15号住居跡出土遺物(5)

第31表 第15号住居跡出土石器観察表(第131図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
61	石鏃	黒曜石	1.5	1.4	0.5	0.6	P111	67-10
62	U剥片	黒曜石	2.6	1.7	0.8	2.2	L5-B6	67-11
63	石核	黒曜石	2.5	1.7	1.2	2.6		67-12
64	石鏃未製品	チャート	3.0	2.4	1.0	6.4	P6	67-13
65	楔型石器	チャート	3.0	2.1	0.6	3.9		68-1
66	砥石	砂岩	[5.9]	4.4	0.8	24.8		68-2
67	打製石斧	砂岩	[7.7]	7.7	2.0	147.1	L5-B6 No44	68-3
68	打製石斧	頁岩	[6.2]	5.7	1.5	70.3	L5-B6 No11	68-4
69	石錘	ホルンフェルス	8.5	[5.9]	2.5	192.7	L5-B6	68-5
70	石錘	片岩	9.1	4.2	1.5	84.8		68-6
71	浮子	軽石	10.6	4.9	2.1	29.8		68-7
72	石皿	安山岩	[15.0]	[19.6]	6.1	1298.2	K ~ L5-J9, B6	68-8

器である。56, 57は底部、58, 59は土製円盤である。

60は大型土偶の左脚である。現存高は8.9cmで、完形ならば30cm弱の土偶になると考えられる。底部は6.1cm×4.8cmの楕円形を呈し、脚部の厚さは約2.6cmになる。中実土偶で脚部上面の破損部には、胴部との剥離痕が観察できる。腰部の突端は瘤状に張出し、これと対応するように足首にも踝状の突起が表現される。また、脚部中央の股間には、円形の刺突痕が施されている。

腰部の直下は横行する約1cm間隔の沈線で区画され、区画内は数条の斜め方向の沈線で施文される。斜めの沈線は、左上から先行し、右上の順で施されている。腰部の背面にはL Rの縄文と側面から続く沈線が観察できるが、文様構成は不明である。なお、縄文は腰部直下の沈線が施された後に付けられている。また、足底には網代痕が残る。色調は赤味がかった褐色、胎土には石英等の細かな砂粒を含んでいる。焼成は不良で脆い。後期中葉の土偶である。

第131図61は黒曜石製の石鏃である。右脚部が欠損する。無茎で基部が平坦であり、脚部が丸みを帯びている。

62は、黒曜石製の微細剥離痕を持つ剥片である。剥片の両側縁、末端部に微細剥離痕が観察される。

63は黒曜石製の石核である。長さが2.5cmほど

の小さな円盤を素材とする。打面調整等は行われていない。最終作業面は1回のみである。

64は、チャート製の石鏃未製品である。やや厚い剥片の縁辺に調整されている。石鏃の製作剥片の可能性が高い。

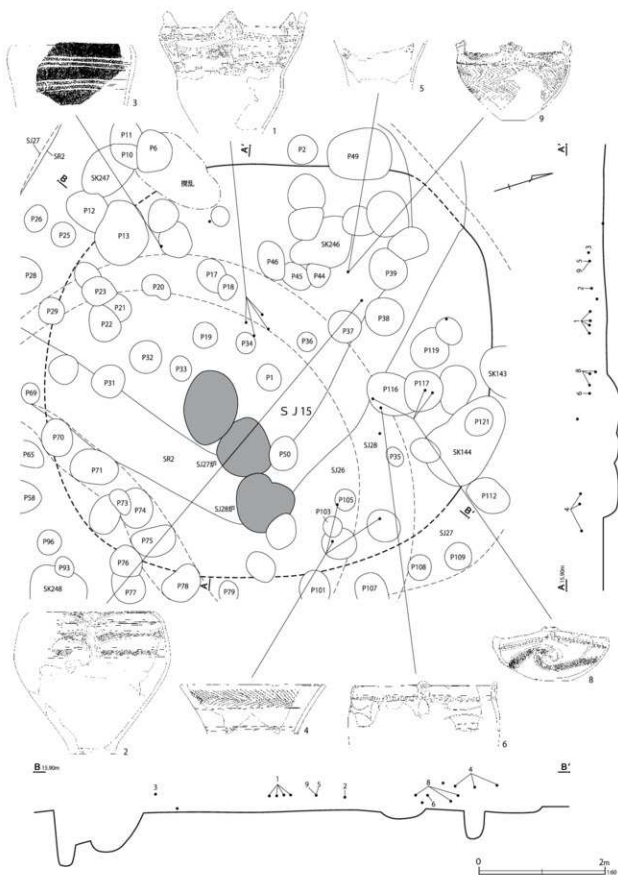
65はチャートの楔型石器である。剥片を素材として両端部の縁辺は潰れている。

67, 68は打製石斧である。67は砂岩製で、自然礫を使用し縁辺部に加工されている。上半部が欠損するが、挟りの入り方から分銅形と推定される。68は頁岩製で、扁平な剥片の縁辺部に加工されている。上半部が欠損する。短冊形を呈する。

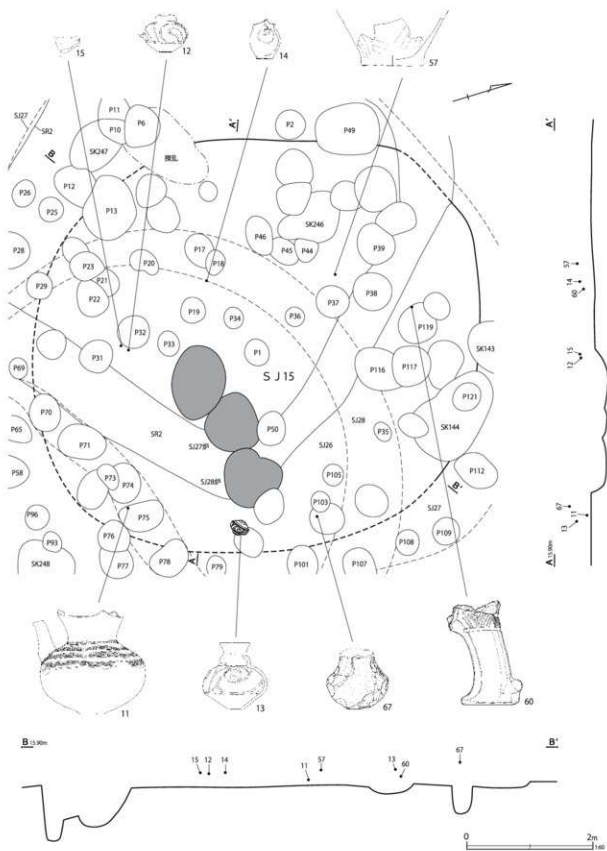
66は砂岩製である。平面形は打製石斧に類似するが、小型で刃部の厚さが薄く、表裏面に非常に平滑な磨痕が観察されることから砥石と判断した。上半部が欠損する。

69, 70は石錘である。扁平礫の長軸を打ち欠いた打欠石錘である。69はホルンフェルス製である。70は片岩製である。71は軽石製の浮子である。平面形は長楕円形を呈し、その上半部中央に約0.7cmの穿孔が施されている。周縁に明確な整形はされておらず、断面形状は半円形を呈する。

72は安山岩製の石皿である。平面形状は円形または楕円形を呈する。縁部と皿部は明確に作り出されている。裏面に1箇所凹穴が見られる。



第132图 第15号住居跡遺物出土状況(1) (第127图对应)

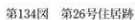


第133图 第15号住居跡遺物出土状況(2)(第128、130、131图対応)

出土遺物は、いずれも床面から20cm程度浮いて検出されている。プラン確認時に出土位置を記録してグリッドで取り上げたものについて、その位置を根拠として、改めて住居跡に帰属させたものである。

住居跡の北半からは、主として鉢類を検出した。また、土偶片も検出した。一方、住居跡の南半からは、11~15の注口土器などを検出した。

図示した遺物の中で、11の注口土器のみは床面に近い状況で検出した。



第32表 第26号住居跡ビット計測表(第134図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P1	42	7	P59	43	43	P91	44	43
P19	40	62	P60	70	19	P92	49	14
P21	(30)	39	P63	(50)	47	P93	34	39
P22	60	63	P64	54	43	P95	(32)	15
P31	56	75	P65	54	41	P96	38	39
P32	52	89	P82	82	30	P97	50	25
P33	40	143	P83	107	31	P98	59	35
P34	34	35	P84	61	38	P103	32	106
P50	54	69	P87	80	35	P105	35	33
P55	42	17	P88	30	17	P123	36	44
P56	42	50	P89	53	29	P124	(26)	52
P58	(76)	31	P90	29	21	P125	(40)	59

第33表 第27号住居跡ビット計測表(第135図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P2	46	72	P27	40	16	P78	66	60
P3	87	40	P28	60	60	P79	36	63
P4	52	49	P49	104	63	P80	50	32
P5	66	38	P66	(57)	62	P101	58	80
P6	68	50	P68	57	37	P108	38	61
P7	34	34	P69	34	43	P109	44	57
P8	42	42	P70	59	43	P112	70	58
P10	(34)	43	P71	78	46	P113	48	45
P11	(40)	41	P73	44	72	P114	42	52
P25	40	66	P74	63	56	P121	48	72
P26	43	40	P75	74	49			

第26号住居跡(第134図)

第26号住居跡は、L 5-B ~ C 6 ~ 7 グリッドで検出した。

他住居跡との関係は、第15、27、28号住居跡と重複し、第15、28号住居跡によって壊されていた。

他遺構との関係は、第2号方形周溝墓、第200、248号土壇と重複し、第200号土壇を壊していた。第248号土壇との新旧関係は不明である。

重複した周溝墓との関係は、第2号方形周溝墓によって壊され、住居跡の床面が削平されていた。

住居跡の形態は楕円形で、規模は長軸6.9m、短軸6.6mで、長軸方位はN-15° -Wである。

住居跡の時期は明らかにできなかったが、周辺に分布する住居跡から推定して概ね縄文時代後期加曽利B式期であると考えられる。

第26号住居跡から遺物は出土しなかった。

第27号住居跡(第135、136図)

第27号住居跡は、L 5-B 6 ~ 7 グリッドで検出した。

他住居跡との関係は、第15、26、28号住居跡と重複し、第15、28号住居跡によって壊されていた。

他遺構との関係は、第2号方形周溝墓、第143、144、245、246、247号土壇と重複していた。第144号土壇を壊し、第2号方形周溝墓、第229号土壇に壊されていた。それ以外の遺構との重複に伴う新旧関係は明らかにできなかった。

住居跡の形態は楕円形で、規模は主軸7.9m、副軸9.6m、深さ0.3m、主軸方位はN-28° -Wである。

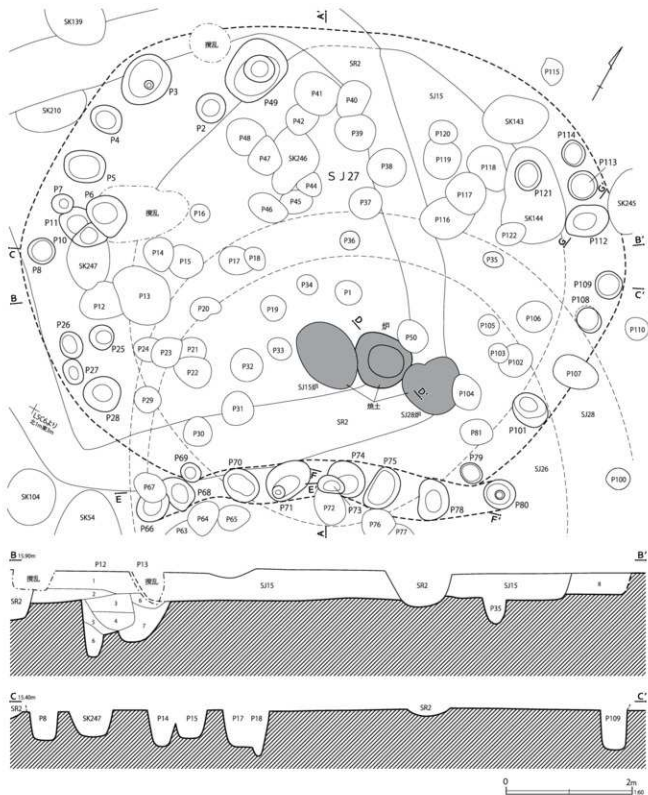
住居跡の入口北側付近から焼土を検出したので、炉跡と考えた。焼土範囲は径0.9×0.9mである。

住居跡の時期は明らかにできなかったが、周辺

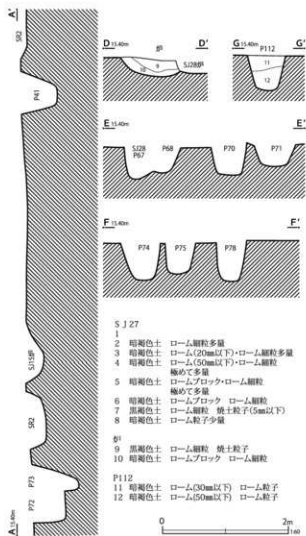
に分布する住居跡から推定して、概ね縄文時代後期であると考えられる。

第27号住居跡からは遺物は検出できなかった。

第115図によって本住居跡の柱穴の深さを見ると、南西側でやや浅く、北東側でやや深い傾向が認められる。本住居跡と重複関係にある第15号住



第135図 第27号住居跡(1)



第136図 第27号住居跡(2)

居跡について同様に柱穴の深さを見てみると、南西側がやや深く、北東側がやや浅い傾向が見られる。つまり第27号住居跡の南西壁と第15号住居跡の北西壁、第27号住居跡の北西壁と第15号住居跡の南西壁が、それぞれ同一遺構の可能性はある。

第34表 第28号住居跡ピット計測表(第137図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P17	(42)	55	P35	32	24	P85	38	13
P18	36	72	P36	32	47	P86	60	57
P20	50	30	P54	(44)	27	P99	35	57
P23	57	54	P57	40	16	P100	34	12
P29	43	34	P67	56	49	P107	69	63

第28号住居跡(第137図)

第28号住居跡は、L 5-B～C 6～7 グリッドで検出した。

他住居跡との関係は、第15、26、27号住居跡と重複し、第15号住居跡によって壊され、第26、27号住居跡を壊していた。なお、住居跡相互の新旧関係は、各住居跡に該当すると考えられる柱穴覆土の重複関係から想定した。

他遺構との関係は、第200、201、248号土塼と重複し、第200号土塼を壊していた。他の重複に関わる新旧関係は明らかにできなかった。

住居跡の形態は隅丸長方形で、規模は主軸9.1m、副軸8.4mで、主軸方位はN-8°-Wである。

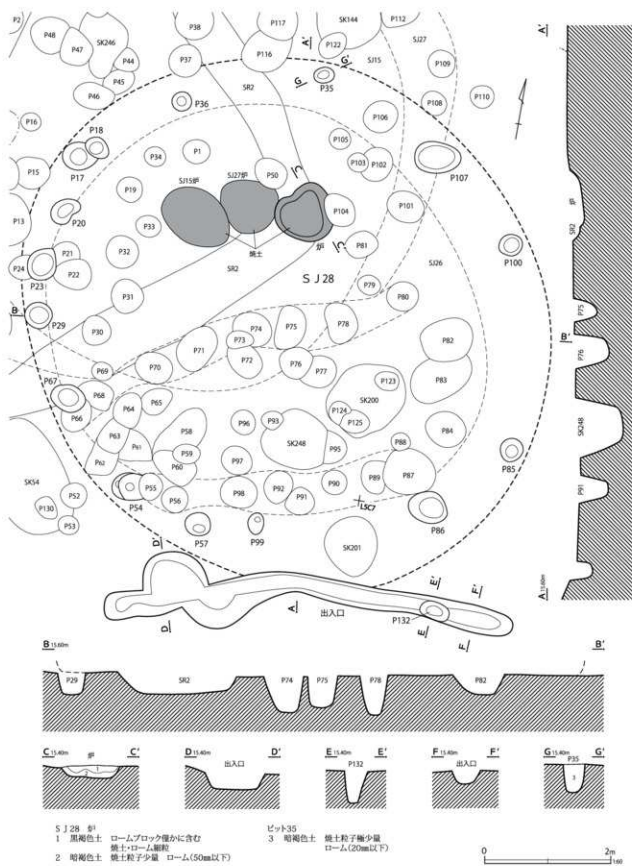
柱穴と想定したピットは、壁の内側を巡って散漫に分布していた。住居跡の西側では比較的多く見られ、東側、南側、北側等では、あまり見られなかった。覆土がローム質であったために検出が困難であったが、あるいは、掘り込みが浅かったために、表面の削平によって消失してしまった可能性が考えられる。

住居跡の南側で住居跡の円形の推定プランに接して東西方向の溝を検出した。溝の中にはピットが見られた。その形状と溝の位置から、第28号住居跡の入り口施設であると推定した。

住居跡の北側付近から焼土を検出したので、炉跡と考えた。焼土範囲は0.9×1.0mである。

遺物は検出できなかった。

住居跡の時期は明らかにできなかったが、周辺に分布する住居跡から推して、概ね縄文時代後期であると考えられる。



第24号住居跡 (第138～140図)

第24号住居跡は、L 5-A～B 9～10グリッドで検出した。

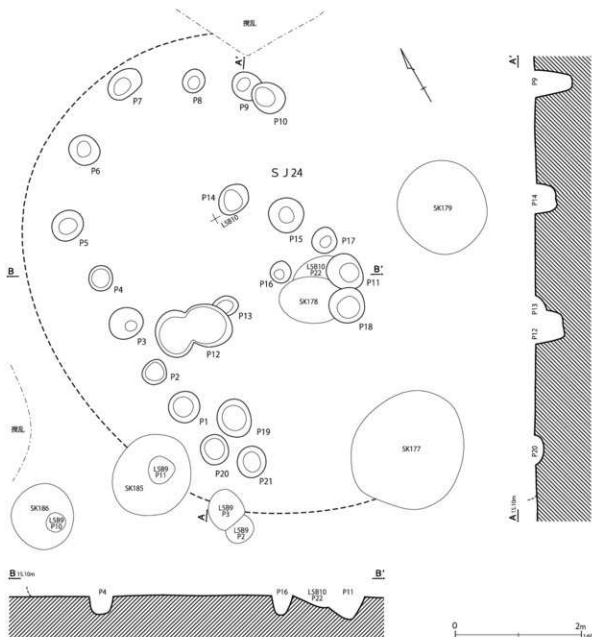
他住居跡との重複は見られなかった。

他遺構との重複関係は、第177～179、185号土壌とに見られたが、重複に伴う新旧関係は明らかにできなかった。

東側1/3は削平を受けており、柱穴などは検出できなかった。

住居跡の形態は楕円形と推定した。規模は長軸8.0m、短軸推定7.0mで、長軸方位はN-9°-Wである。

柱穴は壁の内側を巡っているが、西側では明確なものの、東側では確認できなかった。また、南側にはピットの僅かな集中がみられ、出入口口の可能性が考えられる。柱穴と考えられるピットの配置は楕円形を帯びており、南北方向に長く東西方向に短い。



第138図 第24号住居跡

第35表 第24号住居跡ビット計測表(第138図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P1	50	42	P8	37	17	P15	54	33
P2	40	41	P9	(35)	57	P16	34	29
P3	53	39	P10	55	75	P17	41	32
P4	40	—	P11	62	35	P18	57	55
P5	52	—	P12	102	41	P19	61	29
P6	50	—	P13	(32)	16	P20	46	13
P7	60	—	P14	53	31	P21	49	19

第36表 第24号住居跡出土石器観察表(第139図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
1	スクレイパー	チャート	2.9	2.8	1.0	7.7	P12	68-9

住居跡の時期は、加曽利B 1式期である。

第24号住居跡からの出土遺物を第139、140図に示した。

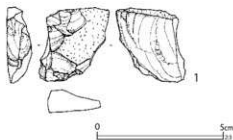
第139図1は、チャート製のスクレイパーである。剥片の末端を一定の角度に調整加工している。

第140図2は、内文を持つ鉢の口縁部である。3も内文を持つ深鉢の口縁部付近の破片であり、横帯文に縄文が充填され、区切文が見られる。4、5は格子目文が見られ、4は口縁部の5は胴部の破片である。6は沈線文が見られる深鉢の胴部破片である。7は格子目文の末端と考えられる沈線が見られる。8は縄文施文の深鉢胴部破片である。9は斜位の平行した沈線とその外側に縄文が見られ、幾何学文が描かれた深鉢である。10は注口土器の注口部破片である。11は底部の破片である。2～5、7は加曽利B 1式、他は堀之内2式の破片である。

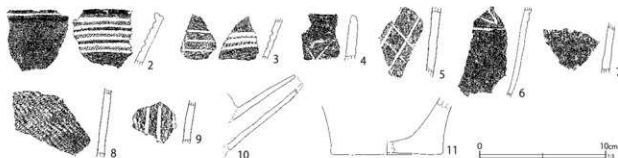
本住居跡は、削平を受けた状態で検出されたため、床面上に覆土が残存していなかった。床面上の柱穴には、かろうじて覆土が見られ、ほとんどの遺物はここから検出した。

第139図1は、住居跡のP12から検出した。

第140図2、7、9はP7から、3はP5から、4～6、10、11はP10から、8は覆土からそれぞれ検出した。



第139図 第24号住居跡出土遺物(1)



第140図 第24号住居跡出土遺物(2)

第25号住居跡 (第141、142図)

第25号住居跡は、L 5-C〜D10グリッドで検出した。

他住居跡との関係は、第16号住居跡と重複し、第16号住居跡によって壊されていた。

他遺構との関係は、第12、15号溝跡と重複していたが、近世の遺構である第12、15号溝跡に壊されていた。

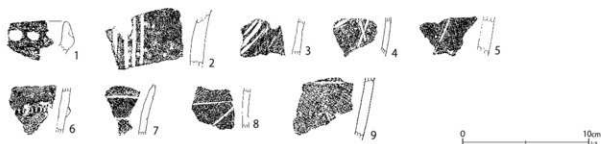
残存している西側の1/4は、第16号住居跡によって壊されていた。



第141図 第25号住居跡

第37表 第25号住居跡ビット計測表(第141図)

名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm	名称	長径/cm	深さ/cm
P6	43	30	P14	48	38	P22	45	57
P7	38	45	P15	(40)	66	P23	37	31
P8	46	48	P16	43	33	P24	(54)	24
P9	56	49	P17	31	26	P25	46	38
P10	45	45	P18	23	36	P26	34	45
P11	41	44	P19	50	75	P27	(21)	32
P12	43	74	P20	59	21			
P13	34	66	P21	50	47			



第142図 第25号住居跡出土遺物

住居跡の形態は円形と推定され、推定規模は主軸9.0m、副軸残存長4.4m、深さは床面まで削平されていたため不明である。主軸方位はN-22°-Wである。

柱穴は壁の内側を巡っており、南西側では二重となっていた。

住居跡の中央付近から焼土を検出したので、炉跡と考えた。炉跡の径は0.9m×0.8mである。

住居跡の時期は、堀之内2式期である。

第25号住居跡の出土遺物を第142図に示した。遺物は比較的少なく、2はP15から、4はP6から、5はP16から、7はP14から、8はP17から、9はP4から、それ以外のものは覆土中からそれぞれ検出した。

1は、円形刺突列をもった口縁部破片である。2、3は平行した沈線、4、5は格子状の沈線がそれぞれ描かれている。6は刻みの入った細い紐が貼付され、7～9は縄文の横帯が見られる。堀之内2式から加曽利B1式にかけてのものである。

第29号住居跡(第143図)

第29号住居跡は、L5-B～C8グリッドで検出した。

他遺構との関係は、第190、191号土壌と重複し、第190、191号土壌を壊していた。

本住居跡は、現地での調査中にはその存在を確認することができなかったが、整理作業の過程で炉跡の存在と柱穴の配列から認定した。

覆土はほぼ全てが削平によって失われており、中央も土壌で攪乱を受け、東側1/2については柱穴も確認できなかった。西側についても柱穴と考えられるビットは検出したものの、入り口などの施設と考えられるビットは確認できなかった。

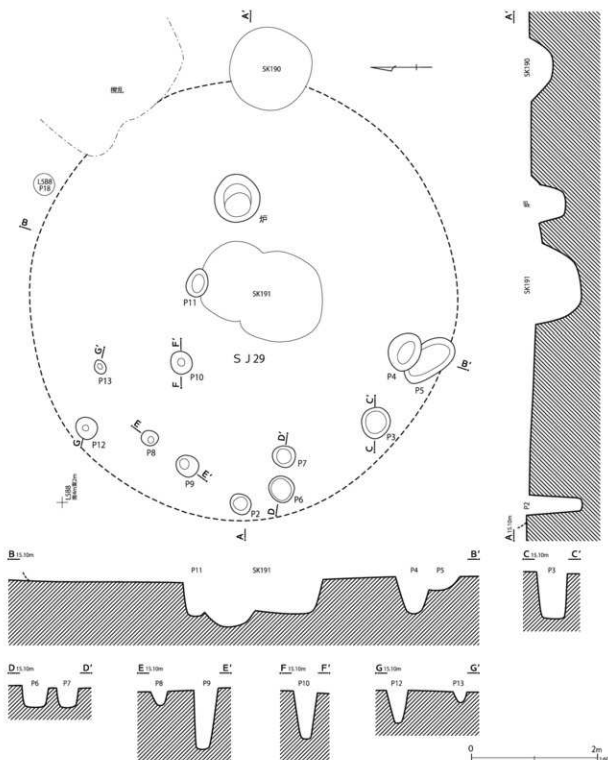
住居跡の形態は円形と推定され、規模は推定で主軸7.0m、副軸6.8mであり、床面まで削平されていたため深さは明らかにできなかった。主軸方位はN-90°-Eである。

柱穴は壁の内側を巡っていた。

炉跡は径0.8m×0.7mである。

既に述べたように、本住居跡は広範囲に削平を受けていたため、覆土は痕跡程度しか残存しておらず、遺物や施設などの詳細は明らかにできなかった。

したがって、これから本住居跡の時期を決定することができず不明瞭であったが、調査区域内での他の住居のあり方などから考えて、縄文時代後期の所産であると推定した。



第143図 第29号住居跡

(2) 掘立柱建物跡

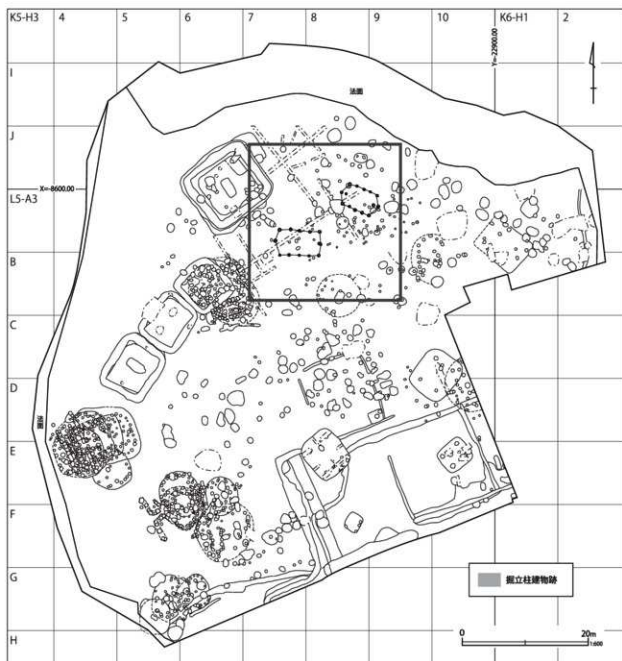
大木戸遺跡からは、縄文時代のもと考えられる掘立柱建物跡を2棟検出した。

第144図に全体図、第146図に拡大図を示した。

2棟の掘立柱建物跡は、軸の向きがやや異なりながらも近接して作られており、住居跡とは重複していなかった。

平面形態は細長い六角形であり、帰属時期は、類例と出土遺物から縄文時代後期と推定したが、古墳時代初頭の可能性もある。

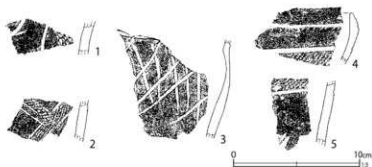
柱穴の覆土は、概ね上下の二層に分層可能である。上層はやや大きなロームブロックが含まれ、下層はやや小さなロームブロックが含まれる傾向



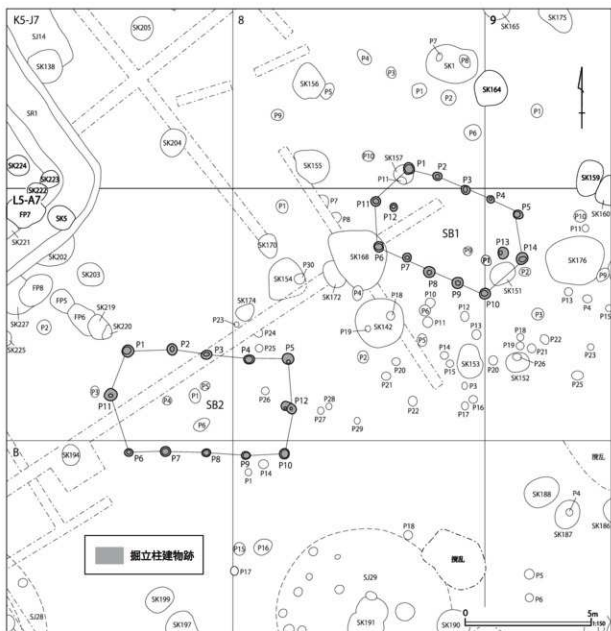
第144図 掘立柱建物跡(全体図)

が見られた。

個別の遺構についての事実記載の中でも示しているが、掘立柱建物跡の柱穴深さを底面の標高と比較すると、長軸方向の端と中央の柱穴がやや深い傾向が見られ、他の柱穴が比較的浅い傾向が認められた。



第145図 第2号掘立柱建物跡出土遺物



第146図 掘立柱建物跡(拡大図)

第1号掘立柱建物跡(第147、148図)

第1号掘立柱建物跡は、K5-J8~L5-A8~9グリッドで検出した。

他遺構との関係は、第157、168号土壇と遺構覆土が重複し、第151号土壇、K5-J8 P11、L5-A8 P9、L5-A9 P1と重複していた。

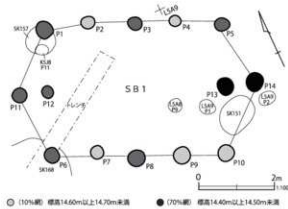
掘立柱建物跡の形態は細長い六角形で、規模は長軸6.2m、短軸3.6m、深さは0.2~0.4m、長軸方向はN-68°-Wである。

柱穴配列の平面的な特徴として、北側の柱穴であるP1、P2がやや内側に存在する傾向と、長軸方向の柱穴が、それぞれ2本見られることがあげられる。

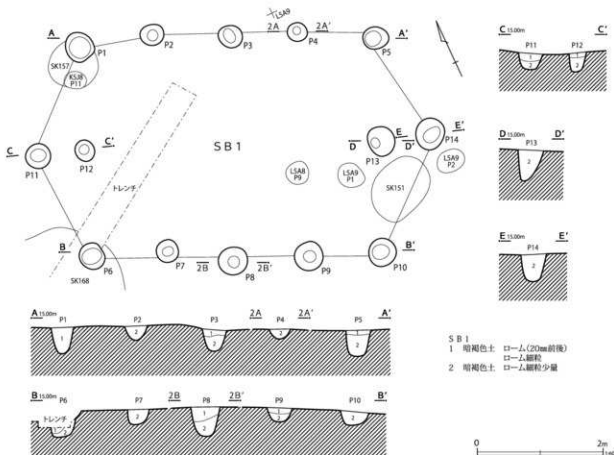
柱穴底面の深さ(標高)を第147図に示した。長軸方向の柱穴は深く、短軸方向の柱穴では両端の2本と中央の1本に深い傾向が見られ、その間に

存在する柱穴はやや浅い傾向が認められる。

遺構の時期は、柱穴から出土した遺物では判定が困難であるが、集落の継続期間である後期前葉(堀之内1式期)から中葉(加曾利B2式期)に収まるものであると考えられる。



第147図 第1号掘立柱建物跡柱穴底面の水準



第148図 第1号掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡 (第145、149、150図)

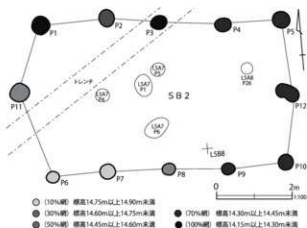
第2号掘立柱建物跡は、L5-A~B7~8グリッドで検出した。

他遺構との関係は、L5-A7 P1、4~6、L5-A8 P26との重複が見られた。

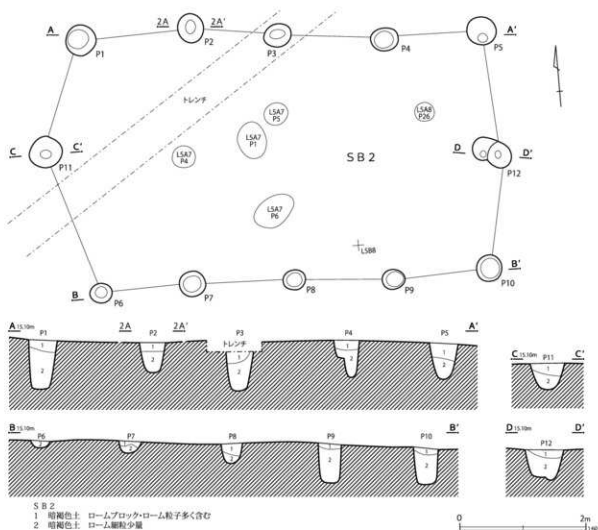
掘立柱建物跡の形態は細長い六角形で、規模は長軸7.1m、短軸4.0m、深さは0.1~0.6m、長軸方位はN-85°-Wである。

柱穴底面の深さ(標高)を第149図に示した。第1号掘立柱建物跡と同様の傾向が認められるが、長軸方向よりも短軸方向の柱穴の一部が深く、さらにP6が浅く、P9が深いなど異なった傾向も見られる。

柱穴出土遺物を第145図に示した。時期は第1号掘立柱建物跡と同様である。



第149図 第2号掘立柱建物跡柱穴底面の水準



第150図 第2号掘立柱建物跡

(3) 土壌

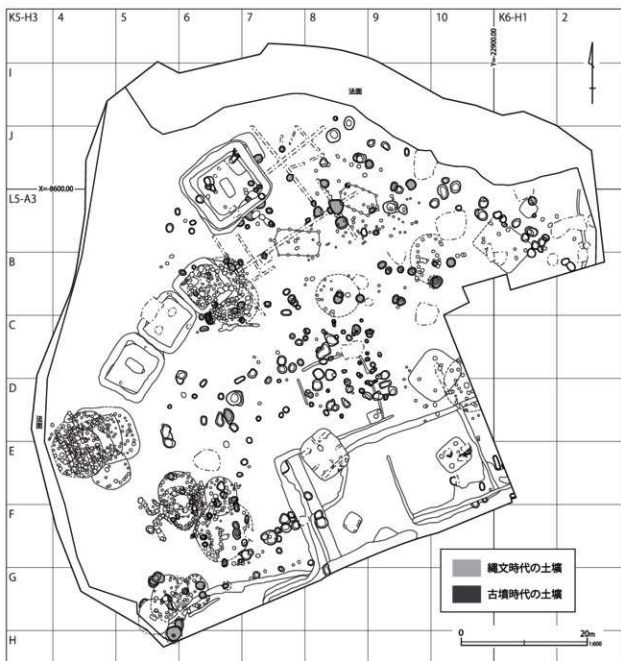
大木戸遺跡からは土壌が241基検出されており、このうち縄文時代の土壌は85基である。

第151図に全体図、第152～157図に拡大図、第158～164図に個別図、第165～171図に出土遺物、第38、39表に一覧をそれぞれ示した。

土壌の多くは遺物の出土が見られなかったが、

遺物が出土した土壌との覆土の対比によって、帰属時期の判定を行った。

遺物が出土している土壌の時期については、後期前葉の堀之内式期のものが多く、一部に称名寺式期や加曽利B1式期のものが含まれていた。また第203号土壌は、諸磯c式期のものである。



第151図 縄文時代の土壌 (全体図)

土壌の出土遺物について以下に記す。

第25号土壌出土遺物(1)

1は縄文のみの破片である。

第35号土壌出土遺物(2、3)

2は区画の中に縄文を充填している。堀之内式の口縁部破片。3は深い沈線を縦位と斜め縦位に施している。後期前葉。

第64号土壌出土遺物(4、5)

4は浅い沈線を施す。後期前葉。5は口縁に二段の紐線文その下に磨消しによる杵状文が見られる。第25号土壌出土破片と接合した。堀之内2式。

第72号土壌出土遺物(6～8)

6は口縁部無文帯の下に一次区画文と橢圓状工具による斜格子、7は沈線による「J」字文、8は縦位の沈線が見られる。後期前葉。

第75号土壌出土遺物(9～14)

9は浅鉢の突起、10～12は紐線文、13は三角文、14は三角文の崩れた文様がそれぞれ施されている。堀之内2式。

第77号土壌出土遺物(15～32)

15、16は沈線による「J」字文が施され、15は地文を持たずに刺突が、16は縄文の地文が見られる。称名寺2式。17、18、23～28、31、32は沈線と縄文、19～22は沈線、29、30は縄文のみが見られる。いずれも堀之内1式。

第78号土壌出土遺物(33～56)

33、34は沈線を主体とした深鉢の大型破片であり堀之内1式。

35は沈線による横位の一次区画文の間を縦位の単沈線で充填する。36は口縁に隆帯を廻らせる。中期から後期初葉。37～54は縄文地文と沈線の組合せを主体とする。堀之内1式。55は口縁直下に沈線が見られ縄文を充填、56は縄文を施した横帯と紐線文が見られる。いずれも堀之内2式。

第79号土壌出土遺物(57～63)

57は縦位の沈線と刺突、58、59は縦位の沈線と縄文が見られる。いずれも堀之内1式。60は磨消

しによる三角文、61は沈線による横位の一次区画文と斜位の沈線、62は縦位の沈線、63は杵縄文が見られる。堀之内2式。

第115号土壌出土遺物(64)

64は緩やかな波状口縁で、口縁部に刺突が廻り、その下に低い隆帯と沈線が見られる。堀之内1式。

第116号土壌出土遺物(65～67)

65は緩やかな波状口縁、66は稲妻状の沈線が見られる。67は底部。いずれも堀之内1式。

第119号土壌出土遺物(68～70)

68は刺突を伴った「J」字文が見られる。称名寺式。69は口縁部の横位沈線とそこを起点とする浅く幅広い対弧状の沈線が見られる。堀之内1式。70は沈線による三角文が見られる。堀之内2式。

第133号土壌出土遺物(71～74)

71は横位の沈線と充填縄文が見られる。称名寺式。72、73は沈線と縄文地文、74は並行沈線が見られる。いずれも堀之内1式。

第136号土壌出土遺物(75、76)

75、76は横帯文で「U」字状の連結が見られる。加曾利B1式。

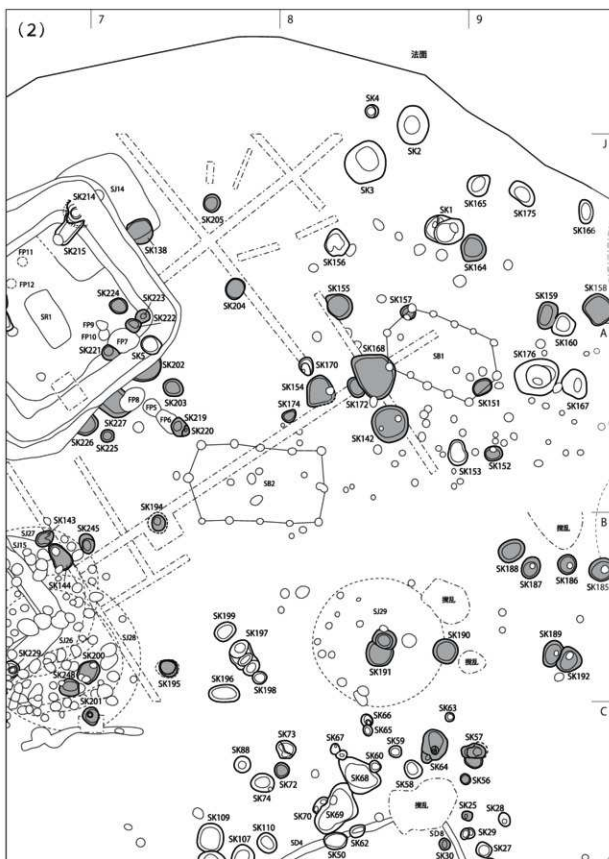
第139号土壌出土遺物(77～81)

77は堀之内2式の注口土器である。体部には沈線による菱形の区画や、渦巻文が施されている。通常の注口土器より小型で、粗い作りであるものの、体部文様や橋状把手を持つ点から堀之内2式の注口土器と判断した。横長に伸びる形態や中実の台部をもつ点から、異形台付土器との関連性が考えられる。

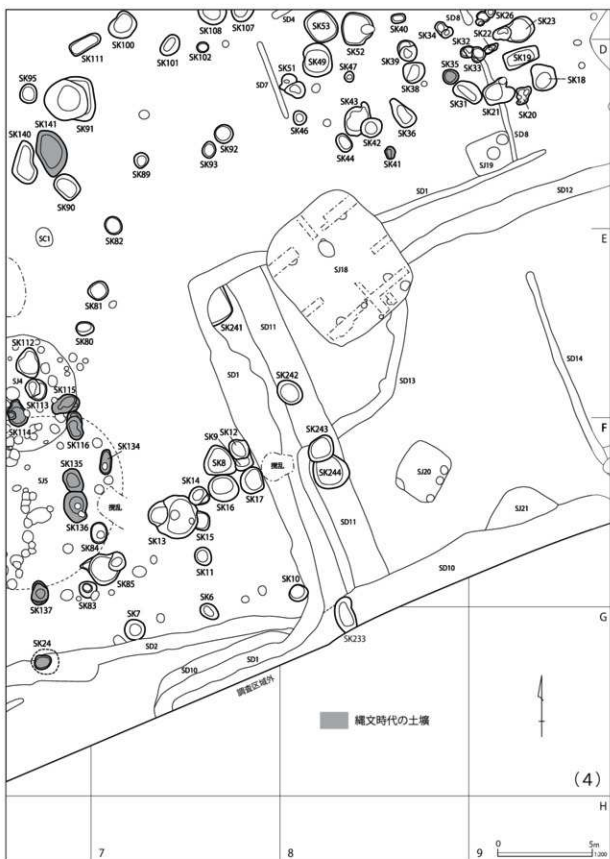
ただし、堀之内2式の注口土器としては、異質な点が三つある。一つ目はナデ、ミガキ調整が不十分な点である。二つ目の点は、胎土に石英や長石などの大型の砂粒を比較的多く含み、大型深鉢の胎土と類似している点である。三つ目は焼成が良好であるものの、注口付近に黒斑が見られる点である。

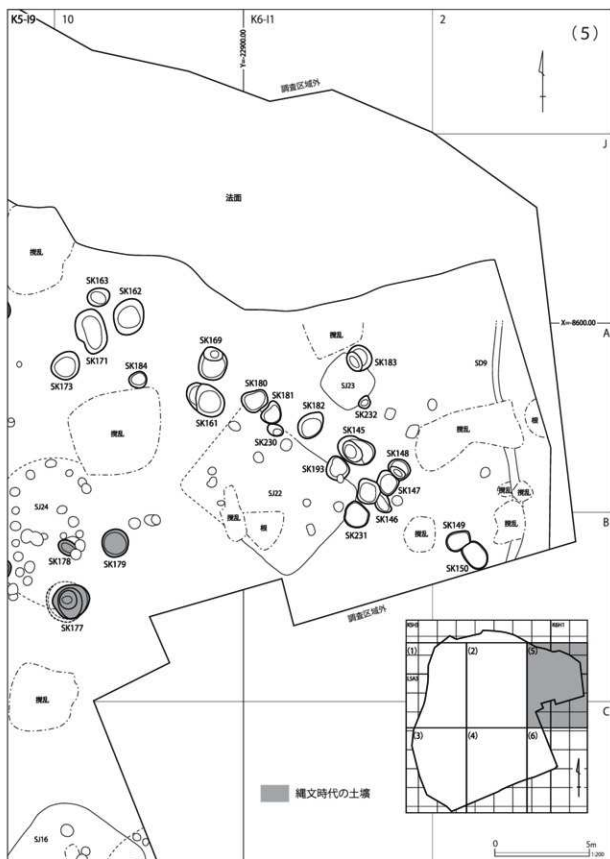
78～80は口縁部破片で細い横帯文が見られ、78、



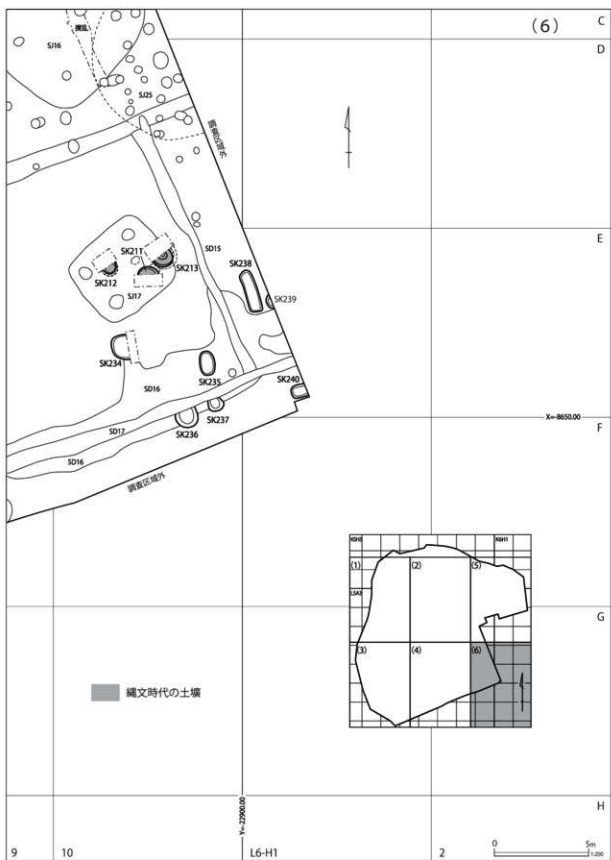








第156図 縄文時代の土壌(拡大図) (5)



第157図 縄文時代の土壌(拡大図) (6)

第38表 縄文時代の土壇一覧表(1)(第152～157図)

番号	グリッド	平面形	長軸方位	長径 /cm	短径 /cm	深さ /cm	重複遺構		
							土壇より古	土壇より新	不明
24	L5-G6	楕円形	N-73° -E	92	75	207		SD2	
25	L5-C8～9	楕円形	N-90° -E	54	50	45			
30	L5-C8	楕円形	N-39° -W	62	56	48			
35	L5-D8	円形	N-69° -E	82	79	51			
41	L5-D8	不整形	N-74° -E	52	(44)	57			
56	L5-C8～9	円形	—	57	51	21			
57	L5-C9	不整形	N-14° -W	128	(94)	132			
64	L5-C8	不整形	N-25° -E	182	136	249			
72	L5-C7～8	円形	—	82	79	30			
75	L5-G6	楕円形	N-26° -E	101	96	54	SJ1 SJ2 SJ2P16		
77	L5-G5	不整形	N-46° -E	268	190	186	SJ2		
78	L5-G～H5～6	不整形	N-30° -E	242	226	270	SK79		
79	L5-G～H5～6	楕円形	N-16° -W	(146)	130	12	SJ2	SK78	
114	L5-E～F6	不整形	N-76° -E	136	114	33	SJ4 SJ4P33 SJ5		
115	L5-E6	楕円形	N-22° -W	148	98	81	SJ4 SJ4P11 33		
116	L5-E～F6	楕円形	N-11° -W	149	80	114	SJ4 SJ5		
118	L5-F6	楕円形	N-80° -W	88	72	138	SJ5 SJ5P69		
119	L5-F6	楕円形	N-64° -E	108	83	144	SJ5 SJ5P89		
120	L5-F6	楕円形	N-37° -W	96	80	123		SJ5 SJ5P80 82 83	
121	L5-G6	円形	—	147	130	33		SJ1 SJ1P11	
122	L5-G6	円形	—	66	60	36	SD2		SJ1
123	L5-G5	楕円形	N-17° -W	89	58	33		SD5	SJ2 SK124
124	L5-G5	楕円形	N-49° -E	156	(46)	33			SJ2 SJ3 SJ3P2 SK123
128	L5-G5	不明	N-41° -E	174	(28)	12			SJ3
129	L5-F6	円形	—	60	60	15		L5-F6 P97 98	
130	L5-E5	楕円形	N-37° -W	120	99	72		SJ6 SJ6P90 91 92	
132	L5-E～F6	楕円形	N-19° -W	76	(52)	120		SJ6 SK126	SJ7 SJ7P49 115 SJ8
133	L5-F5	楕円形	N-73° -W	84	(62)	123			SJ7 SJ8 SJ6.7 P74
134	L5-F7	楕円形	N-0° -E	130	61	30			SJ5 SJ5P41
135	L5-F6	楕円形	N-34° -W	136	92	30			SJ5 SK136
136	L5-F6	楕円形	N-29° -W	162	126	45			SJ5 SJ5P44 45 SK135
137	L5-F6	楕円形	N-6° -W	124	87	108			SJ5
138	K5-J7	楕円形	N-55° -E	(122)	109	48	SJ14	SR1	
139	L5-B6	楕円形	N-20° -E	115	83	90		SR2	
141	L5-D6	楕円形	N-23° -W	243	150	60			
142	L5-A8	円形	—	196	190	60		L5-A8 P18 19	
143	L5-B6	楕円形	N-57° -E	106	76	120			SJ15 SJ27
144	L5-B6	楕円形	N-36° -W	152	102	75		SJ15 P118 121 122 SJ27	
151	L5-A9	楕円形	N-31° -W	104	78	12			SB1
152	L5-A9	楕円形	N-73° -E	93	77	21		L5-A9 P26	
154	L5-A8	楕円形	N-0° -E	160	148	42		L5-A8 P30	
155	K5-J8	楕円形	N-49° -W	153	124	39			
157	K5-J8	円形	—	88	79	39	SB1 SB1P1	K5-J8 P11	
158	K～L5-J9, A9	隅丸方形	N-38° -W	159	142	9			
159	K～L5-J9, A9	楕円形	N-15° -E	142	84	30		SK160	
164	K5-J8～9	楕円形	N-24° -E	145	132	51			
168	L5-A8	楕円形	N-37° -W	263	110	42		L5-A8 P4	SB1 SB1P6 SK172
172	L5-A8	不整形	N-32° -W	111	(62)	18			SK168

第39表 縄文時代の土壌一覧表(2) (第152～157図)

番号	グリッド	平面形	長軸方位	長径 /cm	短径 /cm	深さ /cm	重複遺構		
							土壌より古	土壌より新	不明
174	L5-A8	楕円形	N-55° -E	75	62	15			
177	L5-B9～10	楕円形	N-70° -E	170	164	258			SJ24
178	L5-B10	楕円形	N-62° -W	(78)	104	45		L5-B10 P22	SJ24 SJ24P11 18
179	L5-B10	円形	—	146	138	69			
185	L5-B9	楕円形	N-43° -E	130	120	33		L5-B9 P11	SJ24
186	L5-B9	円形	—	100	100	36		L5-B9 P10	
187	L5-B9	楕円形	N-0° -E	116	94	39		L5-B9 P4	
188	L5-B9	楕円形	N-41° -E	143	108	36			
189	L5-B9	楕円形	N-22° -E	144	(95)	51		L5-B9 P8	SK192
190	L5-B8	円形	—	130	128	27			SJ29
191	L5-B8	不整形	N-23° -E	200	140	51			SJ29 SJ29P11
192	L5-B9	楕円形	N-25° -E	130	120	66		L5-B9 P9	SK189
194	L5-B7	円形	N-30° -W	(90)	88	118			
195	L5-B7	楕円形	N-90° -E	(96)	85	160			
200	L5-B6～7	楕円形	N-37° -E	128	106	24		SJ26 SJ26P123 124 125	SJ28
201	L5-C6～7	円形	N-22° -W	94	82	162			SJ28
202	L5-A7	不明	—	(174)	(72)	(15)	SR1		
203	L5-A7	楕円形	N-77° -W	106	90	19			
204	K5-J7	楕円形	N-36° -E	110	96	47			
205	K5-J7	円形	—	94	86	21			
211	L5-E10	楕円形	N-85° -E	111	(40)	177		SJ17	
212	L5-E10	円形	—	70	(40)	165		SJ17	
213	L5-E10	楕円形	N-52° -E	103	(68)	177		SJ17	
219	L5-A7	楕円形	N-56° -W	102	83	51	FP6	SK220	
220	L5-A7	楕円形	N-29° -E	53	34	66	SK219		
221	L5-A7	不明	N-50° -E	74	(69)	15	FP7	SR1	
222	L5-A7	楕円形	N-50° -W	75	68	21	FP7	SR2	SK223
223	K～L5-J7, A7	楕円形	N-50° -E	(68)	67	27		SR3	SK222
224	K5-J7	楕円形	N-34° -E	93	84	27		SR4	
225	L5-A7	円形	—	70	65	24			
226	L5-A7	不明	N-48° -E	125	(71)	15		SR1	
227	L5-A7	不明	N-44° -W	(130)	150	33	FP8	SR1	
245	L5-B6～7	楕円形	N-5° -W	106	77	64			SJ27
246	L5-B6	—	N-21° -E	(95)	68	90		L5-B6 P44 45 SR2	SJ15 SJ15P42 47
247	L5-B6	楕円形	N-33° -W	(70)	68	38		SR2 L5-B6 P12	SJ27 SJ27 P10
248	L5-B6	楕円形	N-6° -W	(102)	94	70			SJ26 SJ26P93 95 SJ28
249	L5-F5	楕円形	N-10° -W	124	55	17			SJ6 SJ6P31 118 SJ7 SJ8

79は細い刻みで施文されている。80の外面には刻みや縄文は見られない。加曽利B 1式。

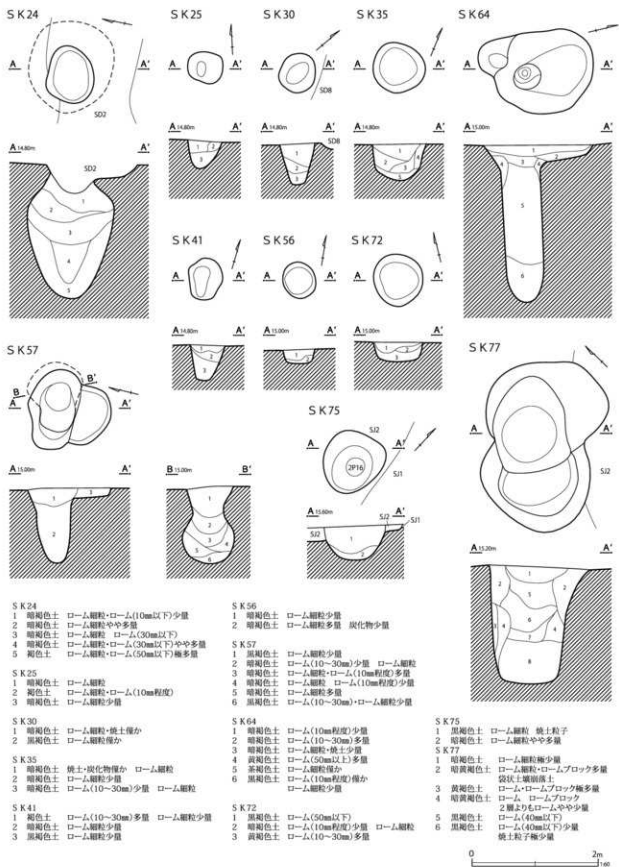
第141号土壌出土遺物(82～91)

82, 83は接合しない同一個体で、沈線による縦横の区画の中に矢羽根状の集合沈線が見られる。84は小突起と円孔を持った口縁部破片、86は紐線文状の横位の刺突列、87は集合沈線が見られる。

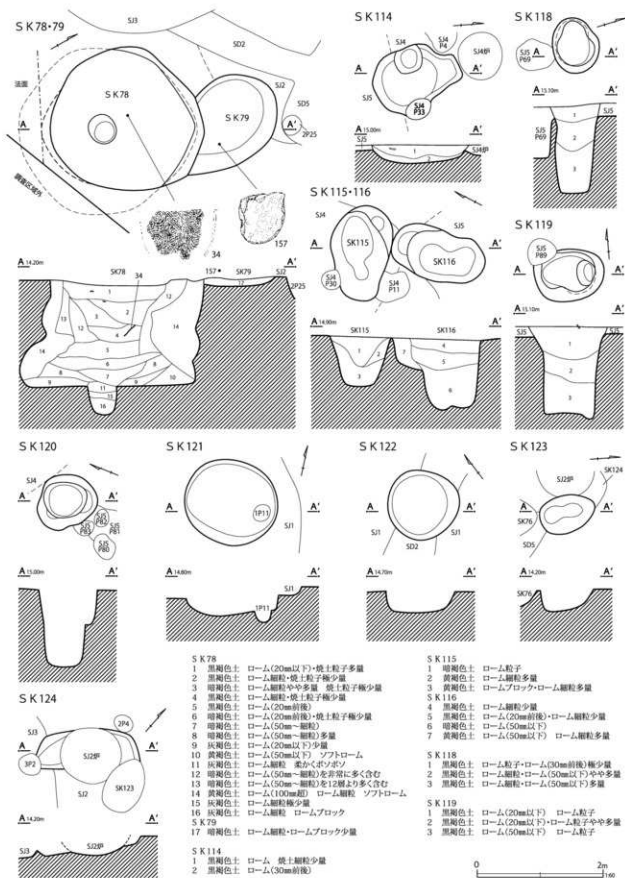
いずれも堀之内2式。85は紐線文と粗大な縄文、88は小突起を持った口縁部破片、89は格子目文、90は緩やかな波状口縁と連結された横帯文が見られる。加曽利B 1式。91は紐線文の上部に縦位の沈線と弧状の沈線が見られる。加曽利B 2式。

第142号土壌出土遺物(92～94)

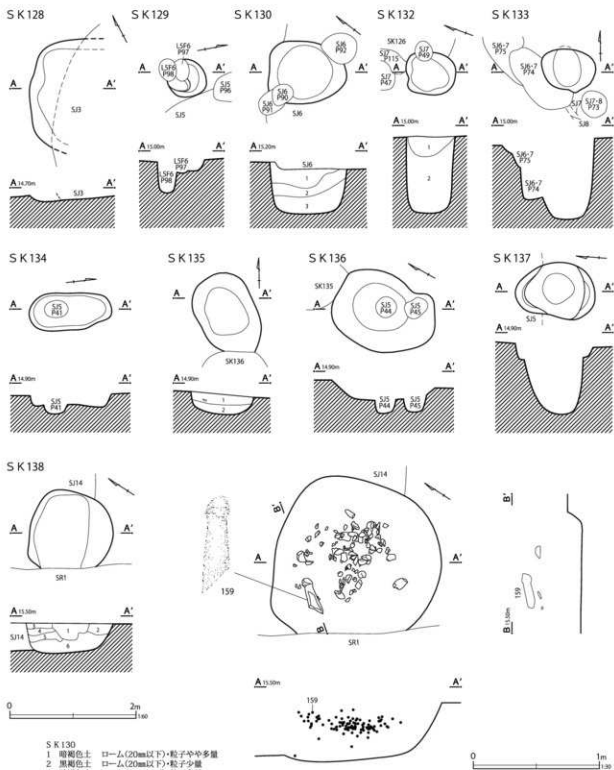
92は横位の沈線と単純化された渦巻きの連結が



第158図 縄文時代の土坑(1)



第159図 縄文時代の土坑(2)



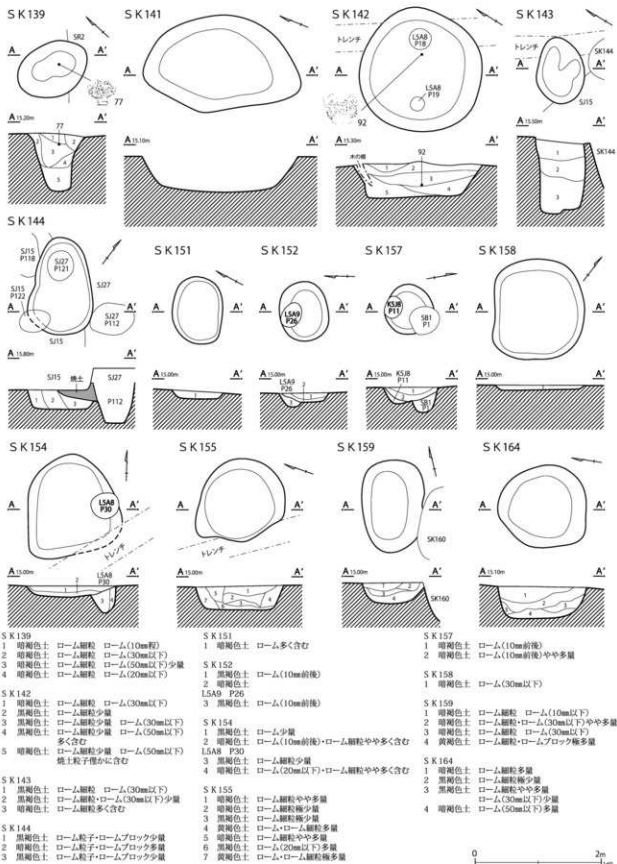
SK 130
1 暗褐色土 ローム(20mm以下)・粒子やや多量
2 黒褐色土 ローム(20mm以下)・粒子少量
3 暗褐色土 ローム(20mm以下)・粒子多量

SK 132
1 暗褐色土 ローム・粘土細粒多量
2 暗褐色土 ローム(30mm以下)・ローム細粒多量

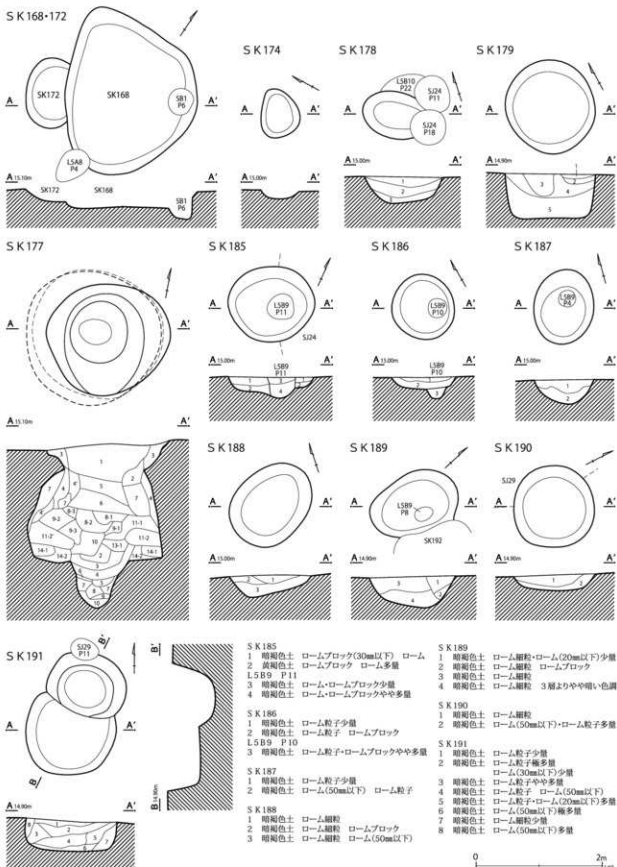
SK 135
1 暗褐色土 ローム細粒
2 黒褐色土 ローム細粒・ローム(30mm前後)

SK 138
1 黒色土 粒子やや大きめ 暗茶褐色粒子
2 暗茶褐色土 赤褐色粒子・ロームやや含む
3 暗茶褐色土 均一 ローム含む
4 暗茶褐色土 暗茶褐色粒子多少 粘土微量
5 暗茶褐色土 暗茶褐色粒子多量
6 黄褐色土 暗茶褐色粒子多少 ロームやや含む

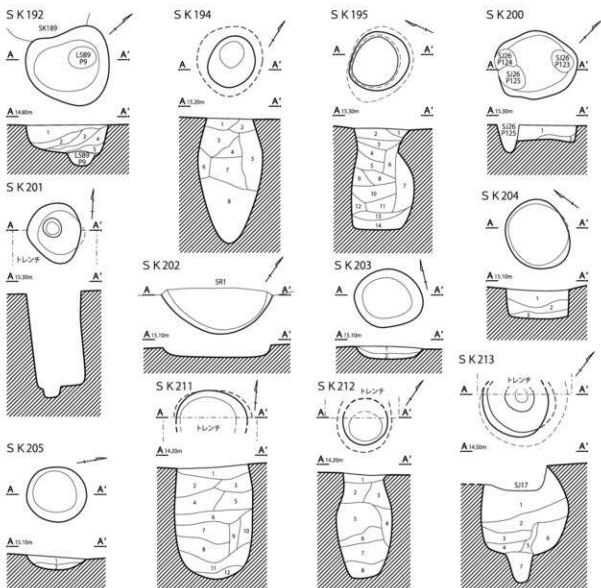
第160図 縄文時代の土壌(3)



第161図 縄文時代の土壌(4)



第162図 縄文時代の土壌(5)



- S K 194
1 暗褐色土 ローム細粒極少量
2 暗褐色土 ローム細粒やや多量
3 暗褐色土 ローム細粒少量
4 暗褐色土 ローム細粒・ロームブロック少量
5 暗褐色土 ローム細粒・ロームブロック多量
6 黒褐色土 ローム細粒・ロームブロックやや多量
7 黒褐色土 ローム細粒・ロームブロック
8 暗褐色土 ローム細粒・ロームブロック極多量

- S K 195
1 暗褐色土 ローム細粒多量
2 暗褐色土 ローム細粒少量
3 黒褐色土 ローム細粒やや多く含む
4 黒褐色土 ローム細粒・ロームブロック(20mm以下)少量
5 暗褐色土 ローム細粒・ロームブロック(50mm以下)やや多量
6 黒褐色土 ローム細粒・ロームブロック(50mm以下)多量
7 暗褐色土 ロームブロック極多量
8 黒褐色土 ローム細粒・ロームブロック少量
9 暗褐色土 ローム細粒・ロームブロック極多量
10 暗褐色土 ローム細粒・ロームブロック極少量
11 暗褐色土 黄褐色ロームブロック 灰白色粘土
12 暗褐色土 灰白色粘土極多量
13 黒褐色土 灰白色粘土・ローム少量
14 黒褐色土 白色粘土・ローム極少量

- S K 200
1 暗褐色土 ローム細粒
2 暗褐色土 ローム細粒 ロームブロック

- S K 203
1 暗褐色土 ローム細粒
2 暗褐色土 ローム細粒 ロームブロック

- S K 204
1 黒褐色土 ローム細粒
2 暗褐色土 ローム細粒 ロームブロック
3 暗褐色土 ローム細粒・ロームブロックやや多量

- S K 205
1 暗褐色土 ローム細粒
2 暗褐色土 ローム細粒 ロームブロック

- S K 211
1 暗褐色土 ローム細粒多く含む
2 暗褐色土 ローム細粒少量
3 暗褐色土 ローム細粒極めて多く含む
4 暗褐色土 ローム細粒・ローム(20mm前後)少量
5 黒褐色土 ローム細粒・ローム(20mm前後)多く含む
7 黒褐色土 ローム細粒
8 暗褐色土 ローム細粒・ロームブロックやや多く含む

- 9 暗褐色土 ローム細粒・ロームブロック少量
10 暗褐色土 ローム(10mm以下)
11 黒褐色土 暗褐色土・灰色粘土
12 黒褐色土 ローム細粒・灰色粘土やや多く含む

- S K 212
1 暗褐色土 ローム細粒やや多く含む
2 黒褐色土 ローム細粒少量
3 暗褐色土 ローム細粒やや多く含む
4 暗褐色土 ローム細粒少量
5 黒褐色土 ローム細粒・ローム(100mm前後)
6 黒褐色土 ローム細粒・ロームブロック少量
7 黒褐色土 ローム細粒・ロームブロック
やや多く含む
8 黒褐色土 ローム細粒・ロームブロック少量

- S K 213
1 暗褐色土 ローム細粒やや多く含む
2 暗褐色土 ローム細粒多く含む
3 暗褐色土 ローム細粒多く含む ローム(20mm前後)
4 暗褐色土 ローム細粒
5 暗褐色土 ローム細粒
6 暗褐色土 ローム細粒・ローム(20mm前後)
7 暗褐色土 ローム細粒・ローム(30mm前後)

0 2m 160

第163図 縄文時代の土壌(6)

見られる。堀之内1式。93は「J」字文を持った波状口縁。称名寺1式。94は緩やかな弧状の沈線が見られる。

第155号土壙出土遺物(95~104)

95は「J」字文を持った波状口縁。称名寺1式。96~98は刺突を持つ「J」字文。称名寺2式。99は施文後にミガキが施された不規則な横位の沈線をもつ口縁。100は斜位と縦位の集合単沈線が見られる。堀之内式。101は沈線を持つ口縁。102、103は沈線が見られる。称名寺2式か。

第157号土壙出土遺物(105~108)

105~108は「J」字文。称名寺1式。

第158号土壙出土遺物(109、110)

109、110は細い横帯文。加曾利B1式。

第164号土壙出土遺物(111、112)

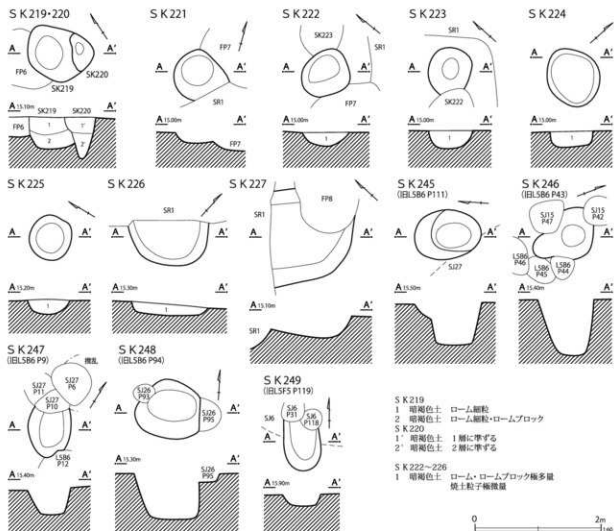
111、112は横帯文を持つ口縁部。堀之内2式。

第177号土壙出土遺物(113~120)

113は「J」字文。称名寺1式。114、115は刺突を持つ「J」字文。称名寺2式。116は縦位の沈線を持つ波状口縁。117は稲妻状の沈線、118は五本一対の並行沈線、いずれも堀之内1式。120は土製円盤。

第179号土壙出土遺物(121~136)

121、122は刺突を持つ。南三十稲場。123、124、126は沈線による「J」字文。称名寺1式。127~130は「J」字文と刺突を持つ。称名寺2式。131、132



第164図 縄文時代の土壙(7)

は緩やかな波状口縁、133は突起。いずれも堀之内1式。125は口縁、134は三角文。堀之内2式。135は緩やかな波状口縁と横帯文、136は格子目文。加曽利B2式。

第191号土壙出土遺物(137~144)

137~143はやや器肉が厚く沈線を主体とする。

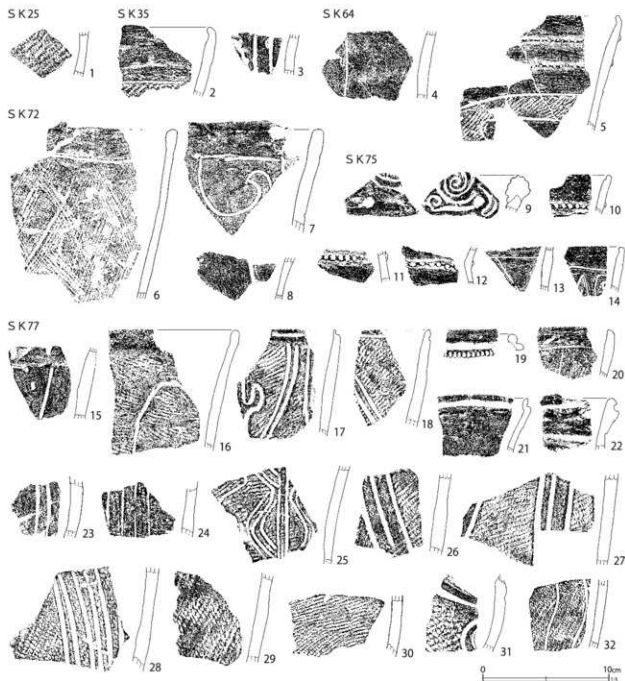
後期前半および堀之内1式。

第192号土壙出土遺物(145)

145は縦位の沈線。堀之内1式。

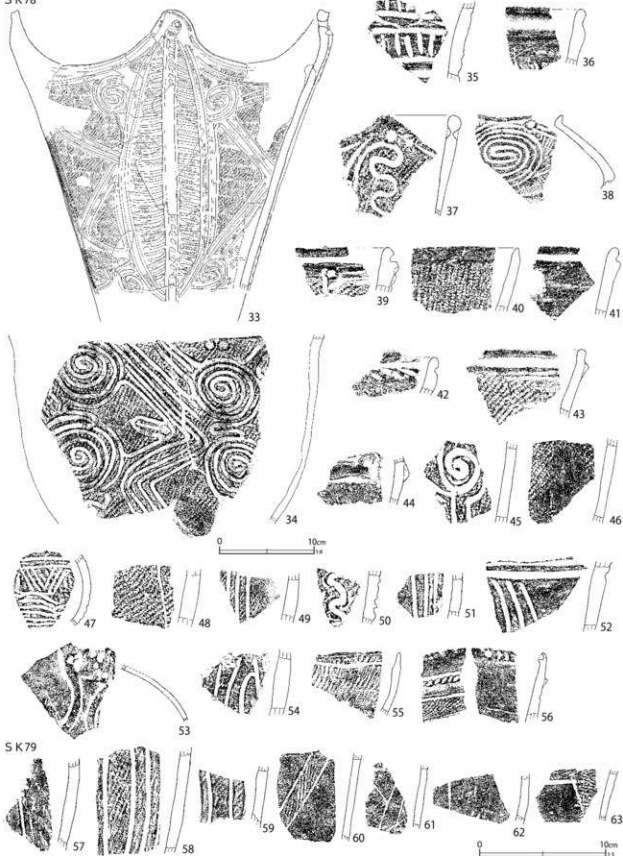
第202号土壙出土遺物(146, 147)

146は「J」字文と刺突。称名寺2式。147は深い沈線。

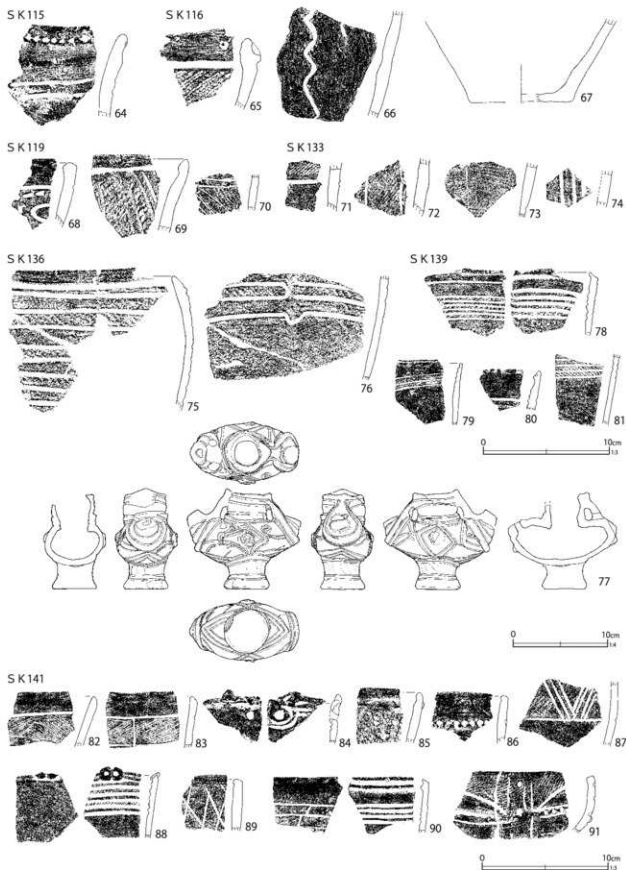


第165図 縄文時代の土壙出土遺物(1)

SK78

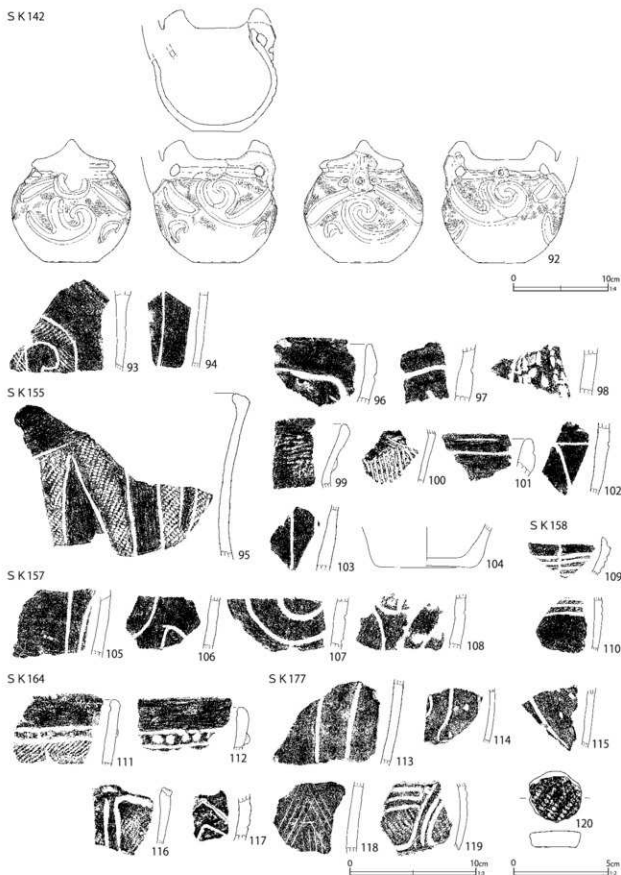


第166図 縄文時代の土壌出土遺物(2)

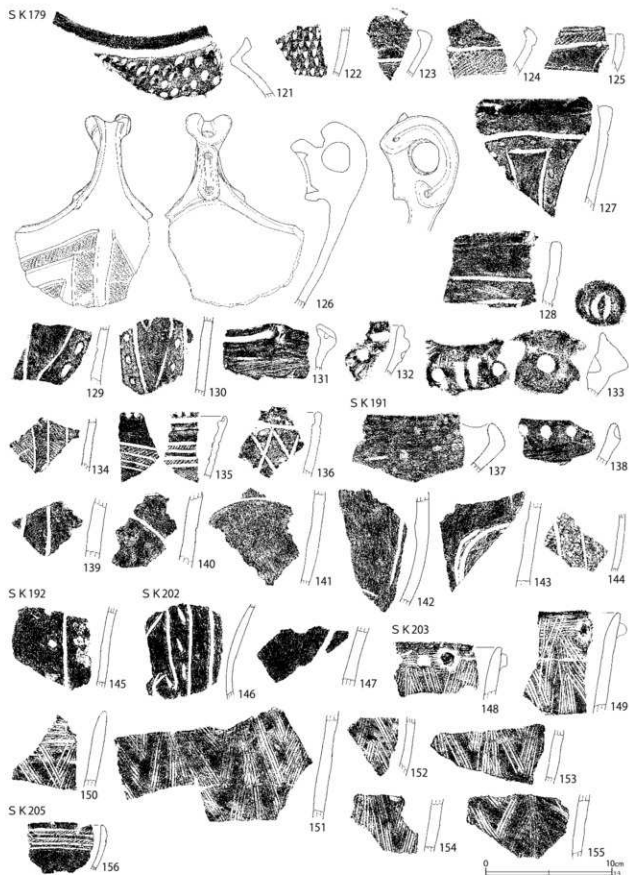


第167図 縄文時代の土器出土遺物(3)

S K 142

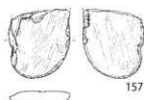


第168図 縄文時代の土壌出土遺物(4)



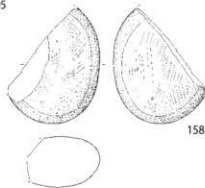
第169図 縄文時代の土器出土遺物(5)

SK79



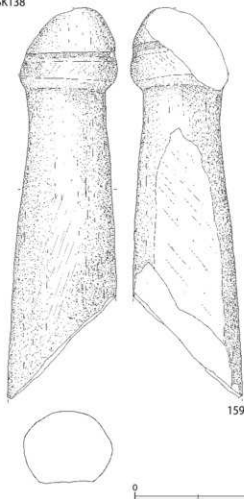
157

SK205



158

SK138



159

0 10cm 1:3

第170図 縄文時代の土壌出土遺物(6)

第203号土壌出土遺物(148~155)

148~155は貼付文及び集合沈線。諸磯c式。

第205号土壌出土遺物(156)

156は横帯文。加曾利B2式。

遺物から推定した土壌の時期を第40表に示した。縄文時代早期、中期の土壌は認められなかった。前期の土壌は、諸磯c式期のものが1基見られた。主体は後期である。称名寺式期では、土壌が多少見られる。調査区の北側に限定されている。土壌が最も多く構築される時期は、堀之内1式期である。継続する堀之内2式期では、分布位置の変化は見られないが数量は減少する。

加曾利B1式期ではさらに土壌数は減少し、続く加曾利B2式期では1基となる。

第40表 縄文時代の土壌時期一覧

番号	石器	土器	グリッド	時期
25		1	L5-C8~9	堀之内1
35		2	L5-D8	堀之内
64		2	L5-C8	堀之内2
72		3	L5-C7~8	称名寺
75		6	L5-G6	堀之内2
77		18	L5-G5	堀之内1
78		24	L5-G~H5~6	堀之内1
79	1	7	L5-G~H5~6	堀之内2
115		1	L5-E6	堀之内1
116		3	L5-E~F6	堀之内1
119		3	L5-F6	堀之内1
133		4	L5-F5	堀之内1
136		2	L5-F6	加曾利B1
138	1		K5-J7	—
139		5	L5-B6	加曾利B1
141		10	L5-D6	堀之内2
142	1	3	L5-A8	堀之内1
155		10	K5-J8	称名寺2
157		4	K5-J8	称名寺1
158		2	K5~L5-A9、J9	加曾利B1
164		2	K5-J8~9	堀之内2
177		8	L5-B9~10	堀之内1
179		16	L5-B10	称名寺1
191		8	L5-B8	堀之内1
192		1	L5-B9	堀之内1
202		2	L5-A7	称名寺2
203		8	L5-A7	諸磯c
205	1	1	K5-J7	加曾利B2

第41表 土壌出土石器観察表(第170、171図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
157	砥石	緑泥片岩	[5.0]	4.8	0.9	38.7	SK79 L5-G6 No377	68-10
158	磨石	閃緑岩	[9.1]	[7.3]	4.0	335.7	SK205	68-11
159	石棒	緑泥片岩	[30.8]	8.8	5.6	2427	SK138 K5-J7 No27	68-12
160	石皿	緑泥片岩	[43.0]	[17.1]	3.6	3500.0	SK142 L5-A8 No1	68-13

土壌出土石器について以下に記す。

第79号土壌出土石器(第157図)

157は砥石である。1/2程度を欠損している。

残存部分の両側縁は部分的に剥離痕や磨痕がみられる。側縁には部分的に小径または「く」字状の磨痕が見られる。

第138号土壌出土石器

(第170図)

159は石棒である。胴部は下半部に向けて徐々に太くなって楕円形に近くなっている。部分的に赤みを帯び被熱が想定される。

土壌の底面からかなり浮いた状態で出土した。石棒の周辺には礫が散在していた。

第142号土壌出土石器

(第171図)

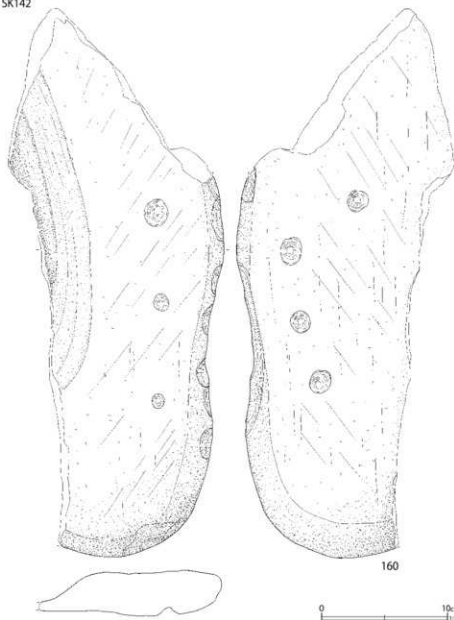
160は石皿である。全体の1/4を欠損する。皿部は摩耗により欠損する。緩やかに「U」字状に凹んでいる。

第205号土壌出土石器

(第170図)

158は磨石である。上端部が欠損する。円礫を利用している。表裏平坦部、周縁部も使用により摩耗し光沢が見られる。

SK142



第171図 縄文時代の土壌出土遺物(7)

(4) 集石土塙

調査区域内からは、集石土塙を1基検出した。

第172図に全体図、第173図に拡大図、第174図に遺構図と出土遺物を示した。

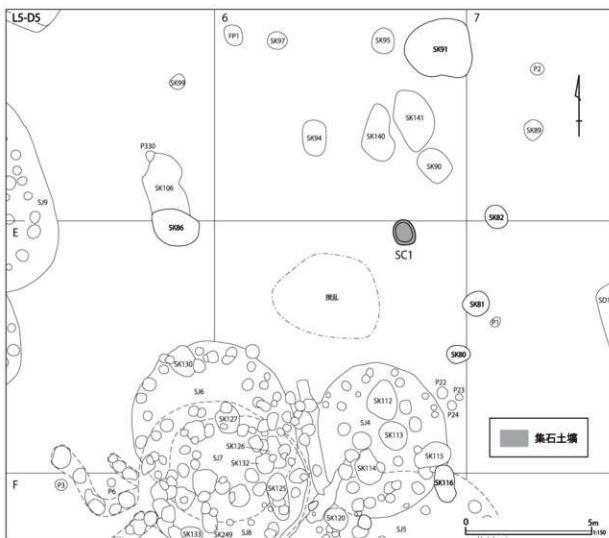
集石土塙はL 5-E 6 グリッドで検出した。規模は長軸1.0m、短軸0.9m、長軸方位はN-26°-Wである。覆土中からは礫を多数出土した。

集石土塙が機能していた当時の遺構の深さは、検出時よりもかなり深かったと考えられる。礫の大部分は集石土塙の底面から10cm程度浮いた状態で出土している。

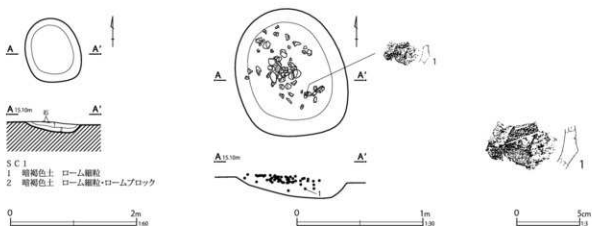
覆土中からは、第174図に示した鶴ガ島台式土器の胴部破片を1点検出した。細片であり、当該集石土塙への帰属関係は判断できなかった。



第172図 集石土塙(全体図)



第173図 第1号集石土墳位置図



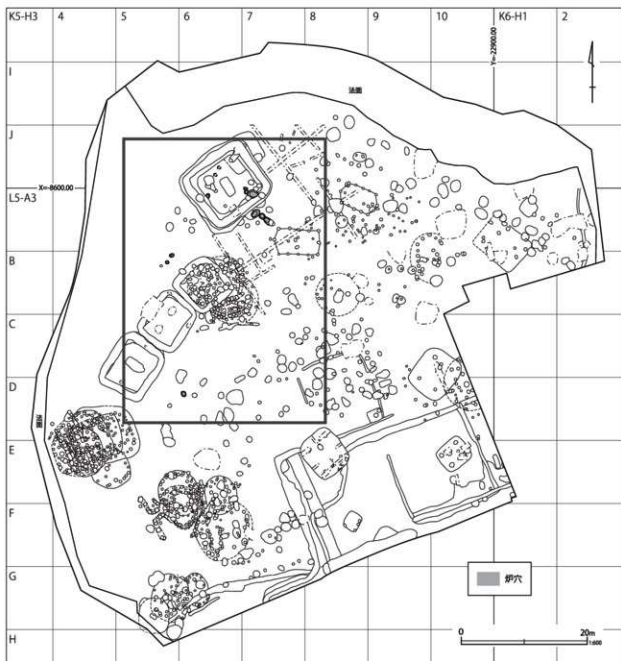
第174図 第1号集石土墳、出土遺物

(5) 炉穴

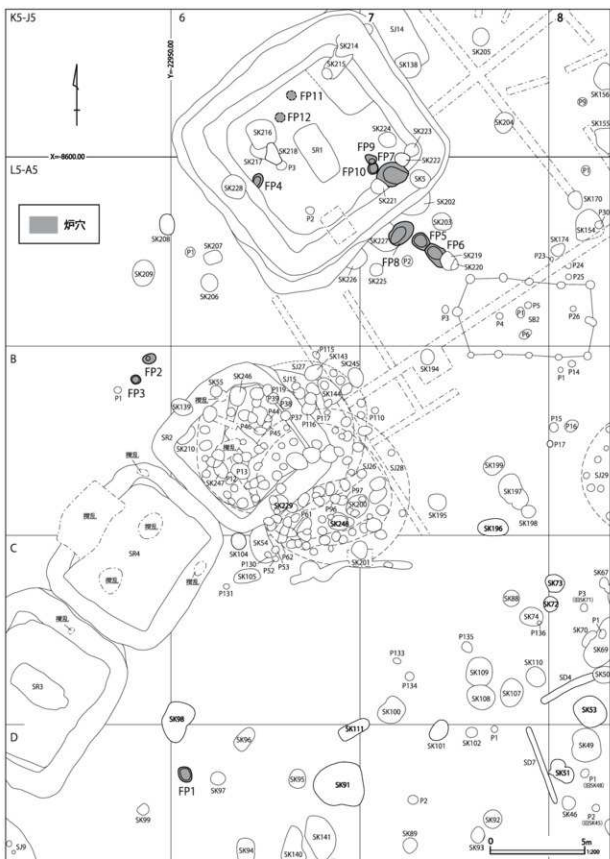
調査区域内からは、炉穴を12基検出した。遺物の出土はほとんどなかったが、類例や調査区域内での縄文土器の検出状況から、その時期を縄文時代早期と推定した。

第175図に全体図、第176図に拡大図、第177図に個別図、第42表に一覧を示した。

炉穴の分布は調査区の北西側に偏っており、第1号方形周溝墓の南東側溝周辺に多く見られた。他に、南西側溝周辺や第2号方形周溝墓の北西側、第3号方形周溝墓の東側などにもそれぞれ少数を検出した。第1号方形周溝墓の南東側については、残存しないものもあると想定できる。



第175図 炉穴(全体図)



第176图 炉穴(扩大图)

が穴の覆土は黒褐色から暗褐色で、地山ローム層との識別が比較的容易なものが主体であるが、ローム質で識別が困難なものも一部に見られた。

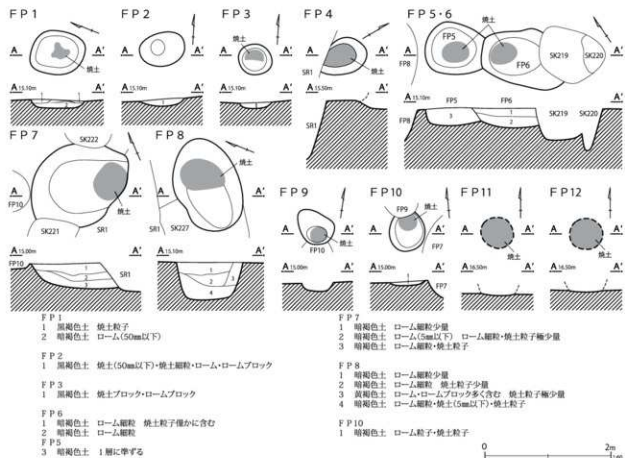
形態は円形から楕円形で、底面が被熱により赤

色を呈しているものが多かった。

覆土中から、図示可能な遺物は検出できなかった。縄文時代後期の人的活動によって擾乱を受け、遺存状態が良くなかったためと考えられる。

第42表 炉穴一覧表 (第177図)

番号	グリッド	平面形	長軸方位	長径 /cm	短径 /cm	深さ /cm	重複遺構		
							炉穴より古	炉穴より新	不明
1	L5-D6	楕円形	N-37° -W	90	71	10			
2	L5-B5	楕円形	N-70° -E	72	52	10			
3	L5-B5	円形	—	54	46	10			
4	L5-A6	楕円形	N-41° -E (62)	58	—	10		SR1	
5	L5-A7	楕円形	N-56° -W	92	80	23		FP6	
6	L5-A7	不明	N-56° -W	37	91	31	FP5	SK219	
7	L5-A7	不明	N-55° -W	140	(120)	36		SR1 SK221 SK222	
8	L5-A7	楕円形	N-49° -E	150	102	59		SK227	
9	K~L5-J7、A7	楕円形	N-57° -E	62	46	10			FP10
10	L5-A7	楕円形	N-14° -E (58)	57	5	5			FP9
11	K5-J6	円形	—	50	50	—			
12	K5-J6	円形	—	52	49	—			



第177図 炉穴

(6) グリッド出土土器

1 土器の大別

大木戸遺跡の包含層からは、多量の縄文土器が出土した。土器は早期から後期の土器群で構成されるが、後期を主体とする。

ここでは説明の都合上、それらの土器群を以下のように大別し、さらにそれぞれを細別して説明を加えていきたい。

第Ⅰ群土器…早期の土器群

第Ⅱ群土器…前期の土器群

第Ⅲ群土器…中期の土器群

第Ⅳ群土器…後期の土器群

2 第Ⅰ群土器

第Ⅰ群土器(第178～198図)

早期の土器群を一括する。

第1類土器(第178～185図)

早期初頭の燃糸文系土器群を一括する。

第1種(第178図1～9、第183図257～259)

口唇部及び口縁部に異方向の施文を行う土器群を一括する。縄文を施文するものと、燃糸文を施文するものがある。型式学的には井草式に比定される土器である。

a) 縄文を施文するもの(1～9)。口唇部が肥厚外反し、縄文を二段(2、3)から三段(6)に施文するものと、肥厚の緩い口唇部が外傾し、縄文を二段(1)から一段(4、5、7)に施文するものがある。施文原体は4、5が縄文L Rで、他は全てR Lである。1は口縁部文様帯の上部に無文部を設定し、縄文R Lを横位施文する。2、6は口唇部上端面の施文が強く、外端部の施文と合わせて面取り状の成形を成す。3は肥厚口唇部がやや強く外反する器形で、口唇部上端面への施文が、やや内端部にかかる位置に施文する。7は口唇直下に爪形状の刺突文が巡る。この刺突文は径の大きな半截竹管状工具で行われており、刺突文の先端に径の内面王痕が残る。5は口唇下の外傾部がややくぼみ、内湾気味に外傾する口唇外端部を無文

部にする。口唇上の施文は、上端部の一段のみである。4は口縁の外傾部に指頭王痕が残る、口唇部下から縄文L Rを縦位施文する。口唇部への施文は、上端部への一段のみである。9は口縁部文様帯から胴部文様帯にかけての破片である。8は胴部破片であるが、器壁が他と比べて薄く、赤褐色を呈し、胎土に長石を含む砂粒を多く含んでおり、燃糸文系土器群より古くなる可能性もある。しかし全体像が不明で原体がR Lであることから、ここでは燃糸文系土器群に分類しておく。1、3、9は口縁部文様帯が明らかであることから井草Ⅰ式に、他は井草Ⅱ式に比定されるものと思われる。口唇部に一段施文を行う4、5は井草Ⅱ式の終末、あるいは夏島式に含まれる可能性もある。

b) 燃糸文を施文するもの(257～259)。口縁部が内湾気味に立ち上がるもの(257、258)と、若干肥厚して外反するもの(259)がある。257は口唇部下に原体の横位側面王痕を施すもので、圧痕より上部の口唇部がやや薄くなり外反する。口唇部上には燃糸Rを一段施文しており、内面には粗い擦痕状の成形を施す。白色細砂粒を多く含み、赤褐色を呈する。258は口唇部外端部に燃糸Rを一段横位施文するもので、原体は胴部と同じものを使用しているものと思われ、内面には粗い擦痕状の成形を施す。白色細砂粒を多く含み、赤褐色を呈する。259は若干肥厚する口唇部の外端に、燃糸Rを一段横位施文するもので、淡黄褐色を呈し、細砂粒を少量含む。これらの土器群は、口唇部施文の型式学的特徴から井草Ⅱ式に比定されるが、井草Ⅱ式の終末、あるいは夏島式に含まれる可能性がある。

第2種(第178図10～第182図256)

丸頭状口唇部がやや肥厚外反するか、角頭状口唇部が若干肥厚して外傾する器形を呈し、胴部の上に縄文を施文する燃糸文系土器群を一括する。口縁部破片ではいわゆる夏島式から稲荷台式に比

定される土器群であるが、縄文施文の胴部破片や底部破片も含めてこの種に分類することとする。

a) 口縁部に原体の側面圧痕を施すもの(10、13)や指頭圧痕を残すもの(11、12)を一括する。10は丸頭状口唇部が外折する部位に縄文R L 原体の側面圧痕を一段横位施文するものである。側面圧痕の原体は胴部施文原体と同一のものとみられ、原体末端のほどけを処理した結節部分が圧痕に現れている。13はやや先細り状に肥厚する口唇部が緩く外反する器形を呈し、口唇部下に縄文単節R L 原体を一段横位施文する。胴部には側面圧痕文以下に縄文R L の縦走縄文を施文するものである。やや幅広い口唇部は無文である。両者とも白色細砂粒や長石などの砂粒を多めに含み、淡赤褐色を呈する。

11、12はやや先細り状の角頭状口唇部が外折する器形を呈し、外折部外面には指頭圧痕文が残っている。親指と人差し指で口縁部を摘み折り曲げる時に、外部に当たる親指の圧痕が残っているものと思われる。胴部にはかすかに縄文が見られるが、原体の判別は難しい。

b) 口唇部下から縄文を施文する、口縁部破片を一括する(14～83)。口唇部の形態には、あまり肥厚しない丸頭状や角頭状、肥厚する丸頭状や角頭状があり、口縁部が緩く外反する器形のものが多く、縄文を施文する部位は、口唇外端部直下から行うものが主体を占めるが、14、23のように口唇部下にやや無文部を空けて施文するものがある。しかし、これらについても一部に口唇部下から施文を行う箇所があることから、無文部が部分的であることが推測される。原体は単節R L 縄文が主体で、77～83の7点が単節L R 縄文である。

c) 縄文を施文する胴部破片を一括する(84～250)。縄文には、細密なものからやや粗く撚りの緩い無節状を呈する縄文まである。これらの胴部破片の中には、第1種aの井草式土器の胴部破片も若干含まれているものと思われるが、胴部破片

では厳密な分類が困難であるため、一括して捉えた。原体は大半が単節R L 縄文で、226～250が単節L R 縄文である。

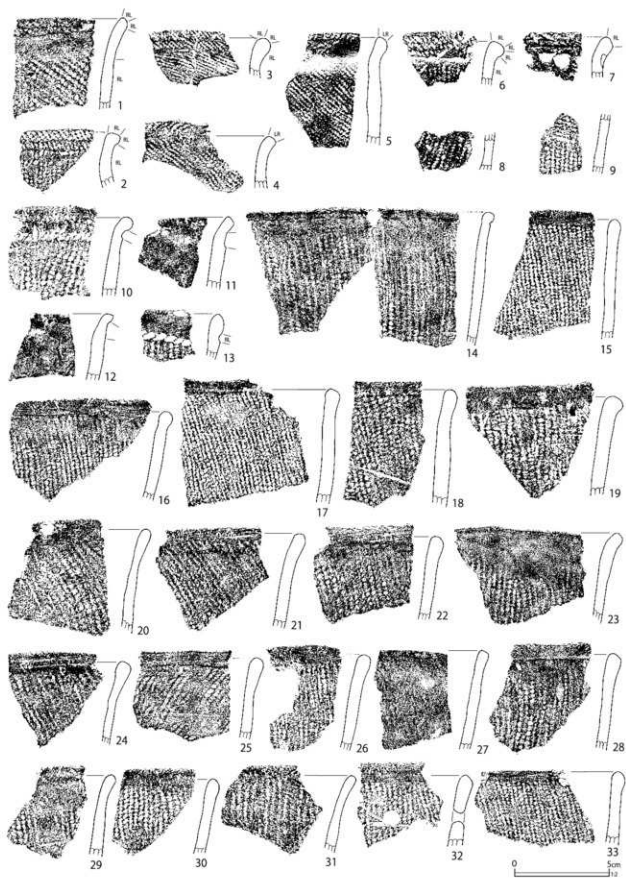
d) 底部破片を一括する(252～256)。口縁部の破片数に比して、明瞭な底部破片が少ないのは、底部の尖底度合が小さく丸底状に近い器形であることに起因するものと思われる。また、稲荷台式土器によく見られる同心円状の擦痕の付く底部破片は、出土していない。原体は全て単節R L 縄文である。

以上、第2種土器は口縁部形態や施文手法から、大半が夏島式に比定されるものと思われる。

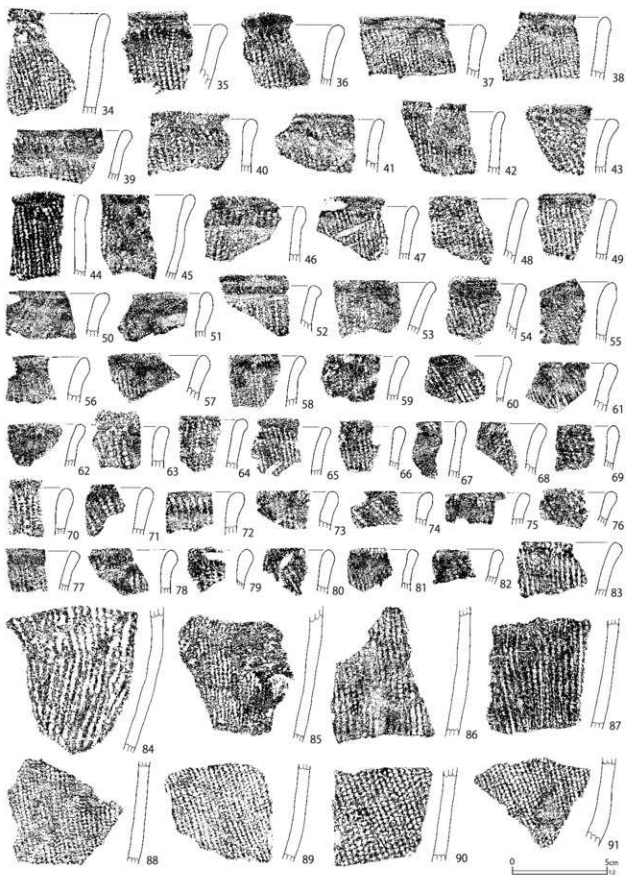
第3種(第183図260～185図443)

第2種と同様に、丸頭状口唇部がやや肥厚外反するか、角頭状口唇部が若干肥厚して外傾する器形を呈し、胴部のみに擦糸文を施文する擦糸文系土器群を一括する。口縁部破片ではいわゆる夏島式から稲荷台式に比定される土器群であるが、擦糸文を施文する胴部破片や底部破片も含めて、この種に分類する。

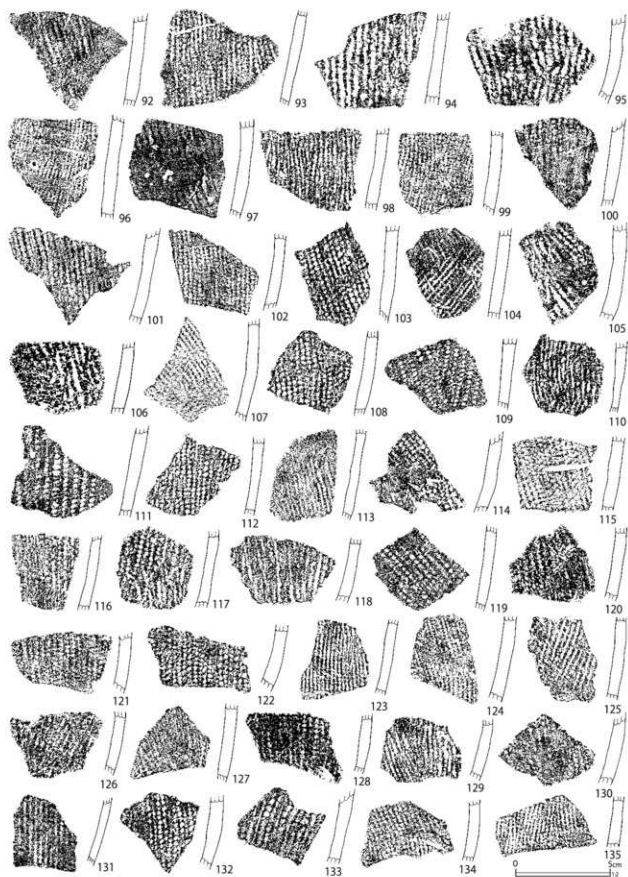
a) 角頭状の口唇部が外折、若しくは外反する器形を呈し、口唇部下に擦糸文原体の側面圧痕を一段巡らすもの(260、261、263)と、側面圧痕ではなく指頭圧痕文を巡らすもの(264)を一括する。260は角頭状口唇部直下に擦糸文原体の側面圧痕を一段横位施文するもので、側面圧痕部で口唇部が外折する。原体は細い擦糸文Rを密に巻いたもので、胴部の擦糸文と同一原体である。261は角頭状を呈する口唇部から、やや間隔を空けて擦糸文の原体の側面圧痕文を一段巡らすものである。263はやや肥厚する角頭状口唇部が外折し、その部位に胴部と同じ原体の側面圧痕を一段横位施文するものである。原体は擦糸文Rである。口唇部直下に大きめの補修孔が穿たれる。264は先細り状の角頭状口唇部が外折する器形で、外折部分の内外面に指頭圧痕が残される。外面側に親指、内面側に人差し指の圧痕が巡り、両指頭で口縁部を



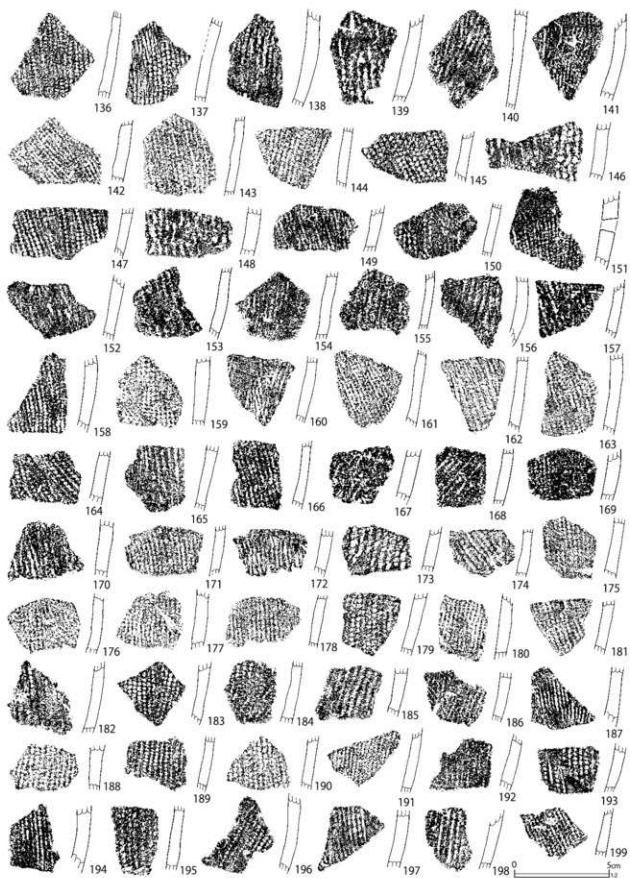
第178図 グリッド出土縄文早期土器(1)



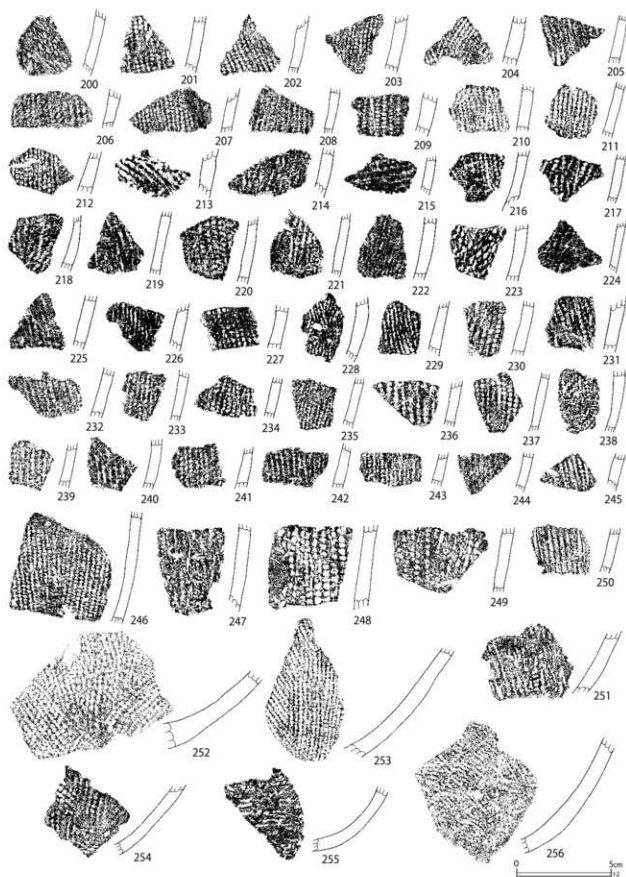
第179図 グリッド出土縄文早期土器(2)



第180図 グリッド出土縄文早期土器(3)



第181図 グリッド出土縄文早期土器(4)



第182図 グリッド出土縄文早期土器(5)

挟んで曲げているものと判断される。口唇部下は無文部を設け、燃糸文Rを施文する。

これらの土器群は第2種a類と同様に、本来指頭で摘まんで口縁部を曲げる成形が、原体の側面圧痕文を起点として口唇部を外折する成形へと変化したことを示しているものと思われる。

b) 口唇部下から燃糸文を施文する口縁部破片を(262、265～290)、原体不明の口縁部破片(291～293)を一括する。口唇部の形態には、あまり肥厚しない丸頭状や角頭状、肥厚する丸頭状や角頭状があり、口縁部が緩く外反する器形のものが多く、燃糸文は口唇部直下から比較的密に施文するものが多く、やや無文部を空けて施文するもの(268、269)や、やや間隔を空けて帯状の施文に見えるもの(270)もある。無文部に当たる部位はかすかに指頭圧痕が残っている。また、間隔が空いた燃糸文も、口唇部直下から施文を行い、施文のない部分に指頭圧痕が観察されるなど、いずれも無文部作出を意識しての行為ではないものと判断される。全体的に燃糸文は細く密に施文される傾向にある。原体不明の口縁部は、291が燃糸文の判別が不可能なもので293は器面剥落しており、292は264と同様な口縁部であるものと思われる。原体は大半が燃糸文Rであるが、287～290は燃糸文Lである。

c) 燃糸文を施文する胴部破片を一括する(294～437)。燃糸文には、細密なものから比較的節が大きく条間の空くものまでであるが、無文部を意識するような破片はない。第1種bの井草式土器の燃糸文土器の胴部破片も含まれているものと思われるが、識別不可能のため一括した。原体は大半が燃糸文Rであるが、428～437は燃糸文Lである。

d) 底部破片を一括する(438～442)。第2種dと同様に、口縁部の破片数に比して明瞭な底部破片が少ない。底部は大半が丸底気味の尖底であり、原体は全て燃糸文Rである。

以上、第2種土器は口縁部形態や施文手法から、大半が夏島式に比定されるものと思われる。

第1類土器群について

上述してきたように、第1類の燃糸文系土器群は、若干の第1種井草式と、主体となる第2、3種の夏島式土器で構成されている。総点数は677点であり、井草式相当は12点(1.8%)、夏島式相当は619点(91.4%)、不明46点(6.8%)の割合である。

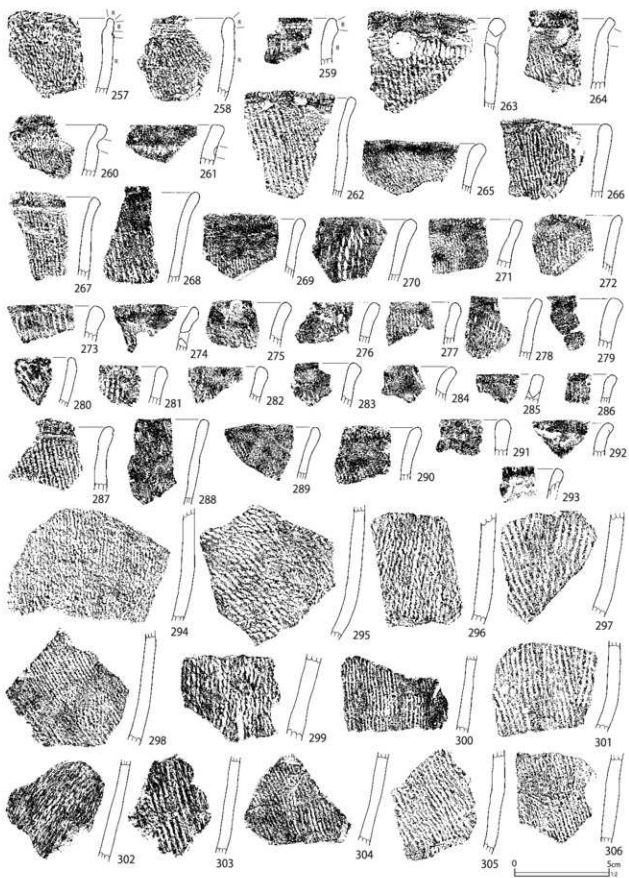
特に、第2・3種に分類した夏島式土器619点中、口縁部破片は108点(17.4%)、胴・底部は511点(82.6%)を占める。縄文施文は346点(55.9%)、燃糸文施文は273点(44.1%)で、縄文土器の方がやや数量が上回っている。夏島式に分類した土器群の中に、井草式の胴部破片が含まれる可能性もあるが、その分を考慮しても、縄文施文土器は割合がやや多いものの、燃糸文施文土器と拮抗している状況が窺える。この地域における、夏島式土器の特徴を表しているものと判断される。

次に、施文原体を比較すると、縄文施文土器の原体は、346点中、単節RLが334点(96.5%)、単節LRが12点(3.5%)である。また、燃糸文施文土器の原体は、273点中、燃糸Rが257点(94.1%)、燃糸Lが16点(5.9%)である。

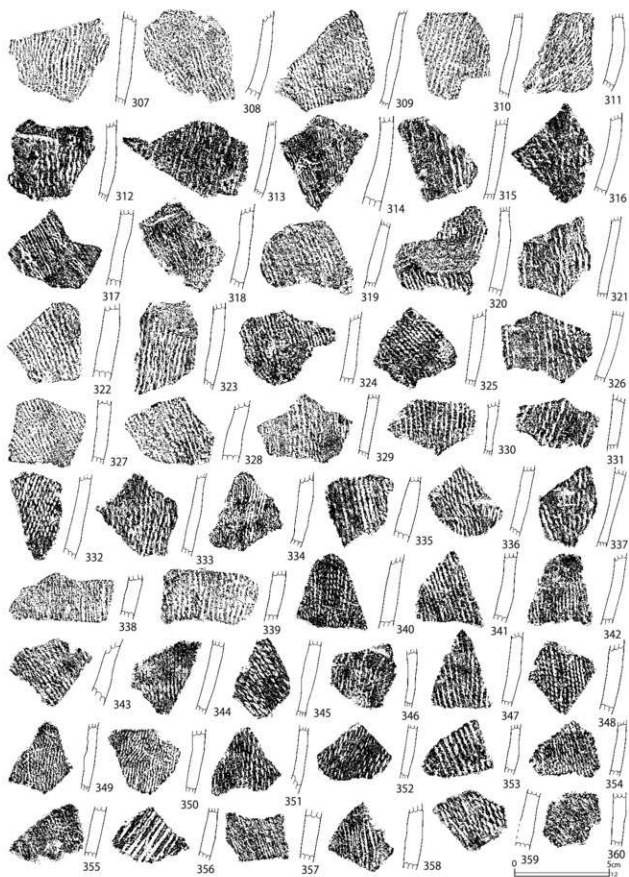
縄文ではRLが、燃糸文ではRが圧倒的な数を占めていることは明瞭である。二段の縄文原体RLが多いことからすれば、一般的には一段の燃糸文はLが主体を占めるものと想定される。

しかし、実際には、大木戸遺跡では燃糸文Rが主体を占めていた。縄文RLはLRに対して、燃糸文RはLに対してそれぞれ9割以上の割合で凌駕しており、それぞれの施文原体に偏りがあることが明らかになった。

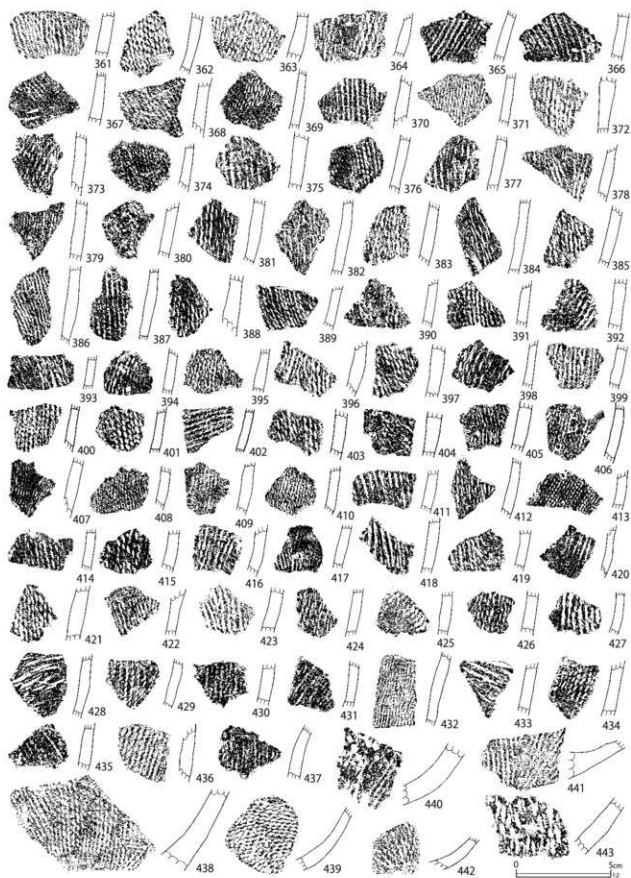
このことは、縄文ではRL、燃糸文ではRという最終的な捻り方向に拘っていたのか、縄文土器と燃糸文土器の作り手が異なっていたのかのいずれかであると考えることができよう。前者の場合、同一集団内で土器群を製作しているとするれば、かなり厳格な原体使用規制があったものと捉えられ、また、後者のように作り手が異なるとすれば、



第183図 グリッド出土縄文早期土器(6)



第184図 グリッド出土縄文早期土器(7)



第185図 グリッド出土縄文早期土器(8)

集落内で異なる土器製作者集団が存在することになり、二集団が統合する構成原理が窺える。

第2類土器(第186図1～20)

早期中葉の沈線文系土器群を一括する。1、7、8は太半沈線で併行沈線文を描き、沈線間に同種の施文具の刺突文を施文するものである。1は若干内湾しながら開く口縁部破片で、口唇部に刻みは施さない。赤褐色を呈する堅緻な土器であるが、内面に擦痕状の粗い整形を施している7、8も同様であり、内面の整形が特徴的である。

2、3、5～19は半截竹管や多截竹管を束ねたような工具による条線文を地文とし、内面に強い擦痕状の整形を施すものである。2は1と同様にやや内湾気味に開く口縁部に、条線で斜行文を描き、二列の刺突文列を垂下する構成をとる。内面整形、特に口唇部裏面は削り込むような強い整形を施す。3は口縁部破片であるが、重層の三角文状のモチーフを条線で描き、2と同様な粗い内面整形を施す。口唇部に刻みは施さない。5はやや外反する口縁部が開く器形を呈し、山形状か鋸歯状の条線文を描くもので、口唇部に刻みはない。9～20は特定のモチーフを描かずに、条線文をランダムに施文する。

4は角頭状の口唇部が直線的に開く器形で、口唇部に直交する刻みを施す。口縁部に縦位、その下部に横位の併行する細沈線を施文しており、内面にはナデ整形を施している。

6は先細り状の口唇部がやや外折する器形を呈し、口唇部に直交する丸棒状工具による押王状の刻みを施す。

20はやや厚みのある尖底部である。

以上、第2類土器は沈線文系土器群の中でも中位の様相を持ち、田戸下層式の新しい段階から、田戸上層式の古い段階にかけて位置付けられるものと思われる。条線文の土器は、前期末葉の土器群と類似する点もあるが、整形、胎土、焼成等異なるため、沈線文系土器群に位置付けて把握した

ものである。

第3類土器(第187図1～10)

早期後葉の条痕文系土器群の中で、野島式土器を一括する。胎土に繊維を含み、条痕整形を施す土器群である。

5、9は細隆起線の区画内に集合沈線文を施文する土器で、内外面とも明瞭な条痕整形を施す。

3は刻みを施す二本の細隆起線を垂下して文様帯を分割し、沈線区画内に集合沈線を充填施文する。明瞭な条痕整形を施す。

1、10は併行沈線の襷状区画内に沈線区画を施し、集合沈線を充填施文する。文様帯内の条痕は磨消している。

2、4、6～8は明瞭な条痕地文上に、沈線区画を施し、集合沈線を充填施文するものである。

第3類土器は全体的に野島式土器の中でも鶴ガ島台式土器に近い、新しい段階のものである。中でも5、9の細隆起線区画土器はやや古相を帯びる。

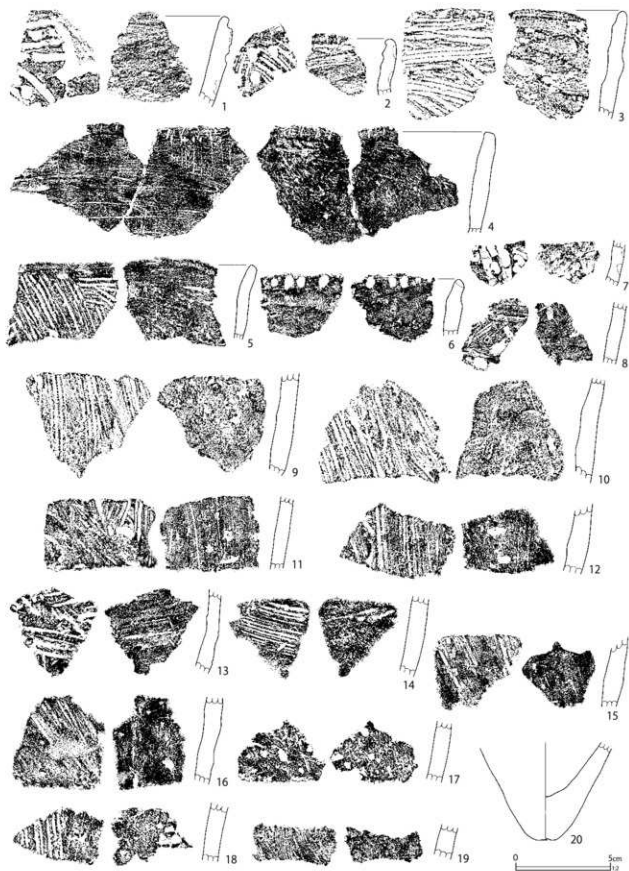
第4類土器(第188～190図)

早期後葉の条痕文系土器群の中で、鶴ガ島台式土器を一括する。器形に二段もしくは一段の括れを持ち、文様区画交点等に円形竹管の刺突文を施すものである。繊維を少量含み、条痕整形を施す土器群である。

第1種(第188図1～35)

文様区画文の要素に、細隆起線文を使用するものを一括する。文様帯の上端もしくは下端区画、文様帯の縦位区画の要素に細隆起線を使用するものが多く、細区画に使用するものは少ない。内削状の角頭状口唇部外端に刻みを施すものが多い。

口縁部破片では、文様帯の上端を細隆起線で区画するものがほとんどで、太沈線区画内に集合太沈線を充填施文するもの(1)、細沈線区画内に集合結節沈線を充填施文するもの(2、5、6、10、11、13)、細隆起線区画内に沈線文を施文するもの(14、15)などがある。緩い双頭波状口縁の波底部から



第186図 グリッド出土縄文早期土器(9)

刺突文を施した三本の細隆起線を垂下して、縦位区画を行うもの(2、4、10)が目立つ。また、区画文の描線は細沈線で行う場合が多い。

第2種(第189図36～第190図117)

沈線で文様の区画文を描く土器群を一括する。部分的な破片である場合、第1種の部分的な破片が含まれる可能性もあるが、破片内に細隆起線文が見られないものを一括した。

口縁部破片では、文様帯の上端区画を横位沈線で区画するもの(37、38、42～53)と、区画せず口唇部直下に直接区画文を施すもの(36、40、41)がある。文様は併行沈線で縦位区画、襷状区画を施し、集合結節沈線文を充填施文するものが大半を占めている。区画の交点には円形の刺突文を施している。文様帯の縦位区画文には細隆起線と同様に、刺突文を施す三本沈線を垂下して区画するもの(65、69、93)がある。

第4類土器は、第1種、第2種合わせて襷状区画文の構成が崩れていないものが多いものの、集合結節沈線文を充填施文するものが多いことから、鶴ガ島台式土器群の中でも中位の古さが想定される。

第5類土器(第191図1～11)

条痕文系土器群の中で、茅山下層式土器を一括

する。胎土に繊維をやや多く含み、器面の条痕整形が顕著で、一段の括れを持つ器形を呈するものが多い。

1～5は口唇部上から突起状の低隆帯を口縁部文様帯内に垂下する構成をとり、隆帯上には1は横位の刻みを、2、3は角状刺突列を垂下する。4は口唇部に刻みを施し、口縁部に刺突文列を施す。5は押引状の刺突文を施す隆帯を垂下する。

6は角頭状口唇部が開く器形を呈し、口唇上に刻みは施さない。内外面とも明瞭な条痕整形を施し、三本の単沈線による鋸歯状文を描いている。

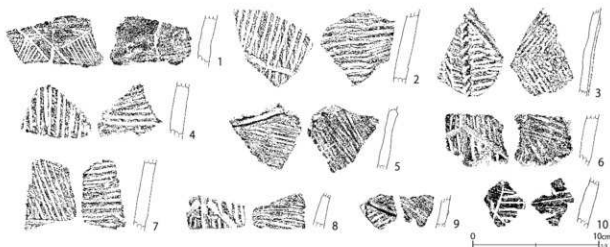
7～11は胴部の括れ部の破片で、7、10、11は隆帯状を呈する段帯部に刻みを施す。いずれも繊維を多めに含み、内外面の条痕整形が明瞭である。

以上、第5類土器は茅山下層式土器の中でも、新しい段階のものと判断される。

第6類土器(第191図12～33)

条痕文系土器群の中で、茅山上層式土器を一括する。第5類土器と同様に、胎土に繊維を多めに含み、内外面とも条痕整形を明瞭に施す。

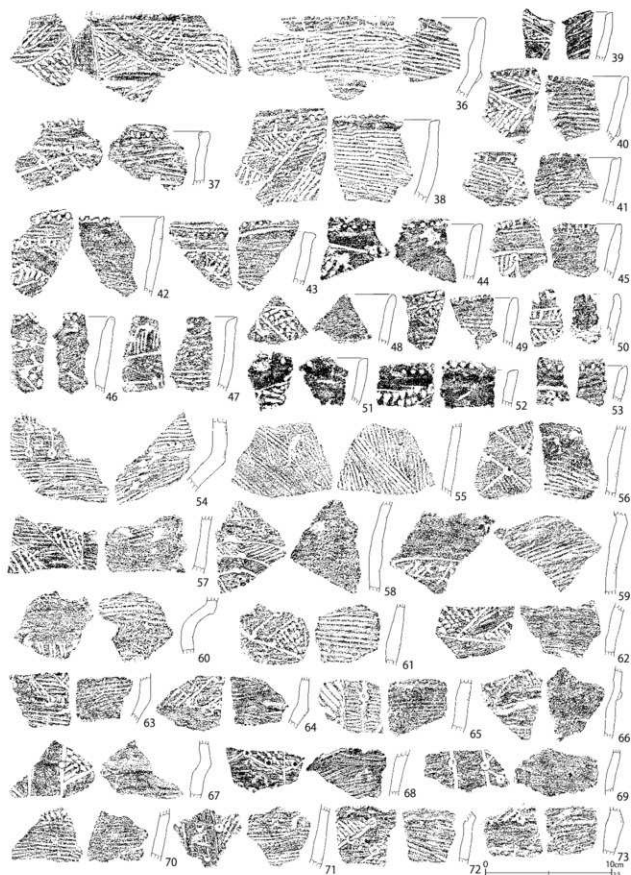
12～14は口縁部に植物の茎を潰したような工具による刺突文列を施文する。12は口縁部が直線的に開いて大きな波状縁を呈する口縁に沿って、二列の刺突文列を巡らすもので、口唇部上に刻みは



第187図 グリッド出土縄文早期土器(10)



第188図 グリッド出土縄文早期土器(11)



第189図 グリッド出土縄文早期土器(12)

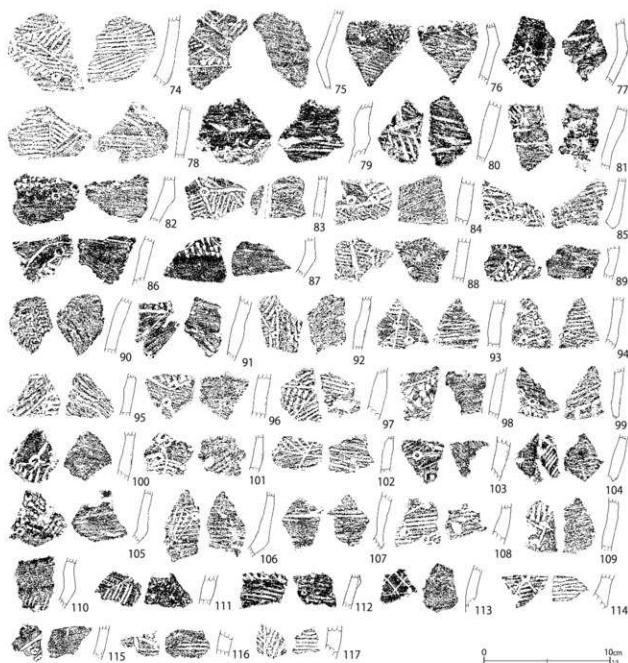
施されない。13はやや内湾気味に開く波状口縁を呈し、二列の刺突文列を施す。14は平縁を呈するものと思われ、角頭状口唇部上と口縁部に同一工具によると思われる「ハ」字状の刺突文列を巡らせている。

15、20は口縁部に粗い刺突文列を垂下する構成をとり、16～18は口唇部直下に刺突文を巡らすも

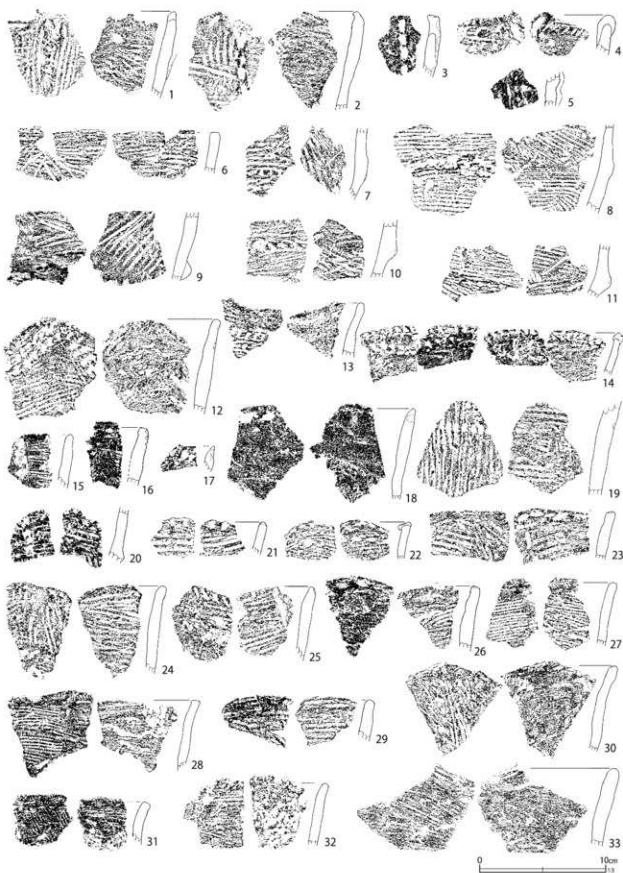
のである。16は半截状竹管の角状刺突文、17は二個一対の刺突文、18は凹形の深い刺突文を施す。

19は胴部の文様帯下端区画に角状刺突列を施文する。

21～33は無文の口縁部破片で、21～23、33は口唇部の刻みとして、口唇と併行する角状刺突列を施文する。24、25は口唇部外端面に斜位の刻みを



第190図 グリッド出土縄文早期土器(13)



第191図 グリッド出土縄文早期土器(14)

施している。26～29、31、32は口唇部に貝殻背圧痕を施文する。

第7類土器(第192図1～36)

茅山上層式以降の在地系土器群を一括する。

第1種(1、2)

茅山上層式以降の東海系土器である上ノ山式の影響を受けた在地系土器である。口縁部は折返し状の肥厚口縁を呈し、刻みを施す隆帯を巡らすものである。1は刻みを施す弧状の短い隆帯を貼付し、口唇部に刻みを施す。2は口縁部に一本の刻み隆帯を巡らし、口唇部に刻みを施す。

第2種(3～27)

茅山上層直後の在地系土器群で、下沼部式と呼

ばれる土器群である。口縁部は第1種と同様に折返し状を呈し、縦位の刺突文(3～7)、絡条体圧痕文(8～12)、貝殻腹縁文(13～17)、沈線文(18)、刺突文列(19～21)を施文するものや、無文のもの(22、23)もある。24～27は貝殻文を施文するものである。

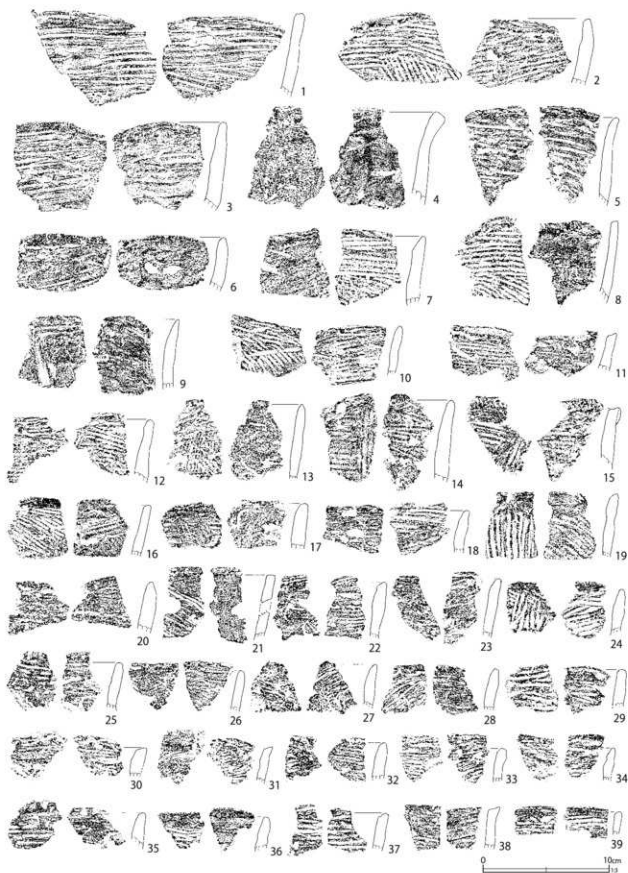
第3種(28～31)

打越式土器を一括する。28は口縁部に集合沈線を垂下し、貝殻鋸齒状文で受けている。29、30は貝殻文を施文するものである。31は刻みを施す隆起線で口縁部を区画し、区画内に貝殻腹縁文を施文するもので、神之木台式との中間的な様相を持つ。

第4種(32、33)



第192図 グリッド出土縄文早期土器(15)



第193図 グリッド出土縄文早期土器(16)